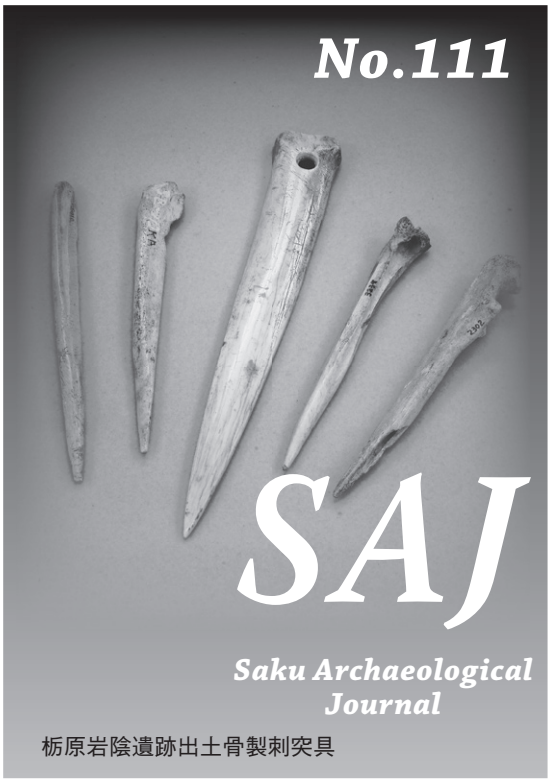


栃原岩陰遺跡出土骨製刺突具

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2012. 10. 26 佐久考古学会

■ 栃原岩陰遺跡特集号

★ 目　次 ★

栃原岩陰遺跡「下部」出土土器のＡＭＳ法による放射性炭素年代測定……藤森英二　2
栃原岩陰遺跡「下部」出土土器の炭素14年代について……小林謙一　7
栃原岩陰遺跡の小型剥片石器・特に黒曜石製石器について……藤森英二　8
栃原人骨の形態研究について…馬場悠男・茂原信生　10
栃原岩陰遺跡から出土した縄文時代早期人骨および動物骨の同位体分析……米田　穣　13
コラム　栃原岩陰遺跡の現状……16
古人骨および動物遺存体のアミノ酸窒素同位体比分析について……内藤裕一・力石嘉人・大河内直彦・米田穣　17
栃原岩陰遺跡の哺乳類遺体……利渉幾多郎　19
栃原岩陰遺跡出土土器の整理を通じて…井出浩正　22
戸沢先生と栃原岩陰遺跡　結びにかえて……24

栃原岩陰遺跡の今を見つめて

南佐久郡北相木村に位置する栃原岩陰遺跡は、1965年、本会会員でもあった輿水利雄、新村薫両氏によって発見された。

当初から縄文人骨の発見という成果があり、大きな話題を呼んだが、その後いくつかの悲劇に見舞わることになる。まずは1973年に、調査団の中心人物であった鈴木誠氏が死去。さらに考古遺物に精通していた小松虔氏が相次いで世を去った。これらの出来事が、正報告書未刊行の大きな要因であったのは否定できない。

しかし、調査団の思いは途絶えず、足掛け15年に及ぶ調査の後、特に西沢寿晃氏や藤田敬氏は、1992年の博物館の開館に尽力された。

そして私事で恐縮であるが、筆者は1996年に北相木村に就職。世間知らずのあまちゃんは、栃原岩陰遺跡の膨大な遺物の量に圧倒された。

それでも限られた時間と予算で、細々とではあるが整理作業を継続してきた。その成果は『シリーズ「遺跡を学ぶ」78　信州の縄文早期の世界　栃原岩陰遺跡』（新泉社）にまとめたが、本の性格上、細かなデータは提示していない部分もある。そこで本号では、これらを補完し、さらに新しい見解を加えることで、栃原岩陰遺跡研究の今をお伝えしたい。

まずは遺跡の内容を紹介すると同時に、2010年に行った土器付着物の年代測定の正式な報告を行う。あわせて、小林謙一氏にコメントを寄せてもらった。

その他考古遺物では、特に小型剥片石器について分析が進んでおり、黒曜石の原産地推定の紹介も含め簡単にまとめてみた。

栃原岩陰遺跡のまさに顔である人骨については、既に鈴木誠氏や西沢寿晃氏による報告もあるが、さらに今日的視点での分析を馬場悠男、茂原信生両氏にまとめて頂いた。

また人骨については理科学的な分析も行われており、既に英文での報告もあるが、今回は米田穣氏により、同位体分析と年代測定について、日本語で改めて紹介してもらっている。

さらに内藤裕一氏は、最新のアミノ酸窒素同位体比分析から当時の食料事情を検討している。

動物骨の出土量は尋常ではないが、これに立ち向かってくれたのが利渉幾多郎氏で、彼の努力の成果も記してもらった。

また肝心要の土器について、本会会員でもある井出浩正氏が、近年の整理作業から伺える傾向を紹介してくれた。

そして巻末には、今年亡くなった戸沢充則氏が、栃原岩陰遺跡によせて下さった言葉を載せた。これらを通して、栃原岩陰遺跡を再確認して頂ければ幸いである。

（藤森英二）

栃原岩陰遺跡「下部」出土土器のAMS法による放射性炭素年代測定

藤森英二
（協力：株式会社加速器分析研究所）

栃原岩陰遺跡について

まずは本特集号のはじめとして、今一度、栃原岩陰遺跡について説明をしておきたい。

長野県東部の南佐久郡付近には、八ヶ岳起源の泥流が広く分布し、この泥流が川の流れによって削られた浅い洞窟状地形（岩陰）が群在する。同郡北相木村を流れる千曲川支流の相木川両岸も例外ではなく、栃原岩陰遺跡はこの岩陰群に含まれる（利渉2001・亀井他2009）。標高はおよそ930m（図１）。

栃原岩陰遺跡には複数の岩陰が含まれるが（大参1984・藤森2002）、1965年の発見以降、信州大学医学部第二解剖学教室を中心とした調査団による足掛け14年に及ぶ発掘調査で、縄文時代を中心とした多量の遺物が出土した部分を「栃原岩陰部」と呼ぶ（図２・西沢1982・西沢・藤田1993等）。なかでも最も遺物量が多いのが栃原岩陰部のⅠ～Ⅳ区で、厚さ5.6mに及ぶ遺物包含層は、大きく３つの段階に区分出来る。

上部：発掘深度０～-100cm。出土土器から押型文の末期以降の包含層とされる。遺物の出土量は少ない。

中部：発掘深度-100～-380cm。特に-180～-340cm前後で遺物の量が極端に増加する。出土土器の中心は早期前半の押型文諸型式であり、時期もこれを当てる。

下部：発掘深度-380cm以下。中部でのピークの後、遺物量は一旦減じるが、－380cm以下で再び増加する。出土土器の中心が、今回問題とする表裏縄文土器群となる。

下部の土器群

この下部で出土した表裏縄文土器を中心とした一群の土器については、それが草創期末のものなのか早期初頭のものなのか、長く論争が続いていた（宮崎2008）。

筆者は、土器以外でも両者で遺物内容の違いが多々あることを重視する意味も含め、これを「草創期末」としていた。

しかし2009年にほぼ全てが北相木村に里帰りしたコンテナボックスおよそ60箱に及ぶ下部の土器は、非常にバリエーションに富んでおり、とても一口に「表裏

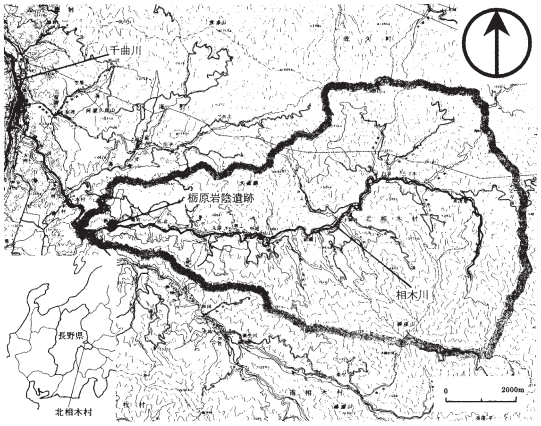
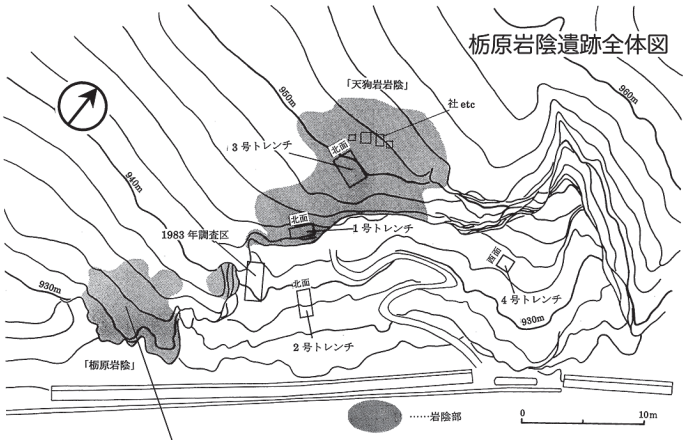
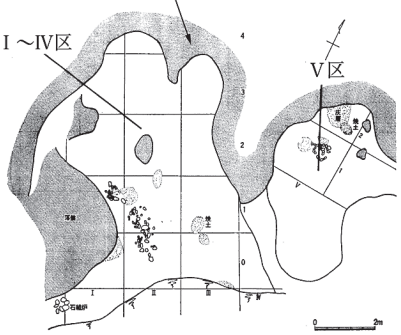


図１　栃原岩陰遺跡位置図



Ⅰ～4号トレンチは1999年の試掘調査によるもの。



「栃原岩陰部」拡大図

Ⅰ～Ⅳ区、及びⅤ区が、1965～1978年の調査箇所

図２　栃原岩陰遺跡平面概念図

縄文土器」として片付けられるものではない（本号の井出レポートを参照）。

そんな中、2010年、長野県の政策である「元気づくり支援金」において「栃原岩陰遺跡を地域で見直す事業」が採択された。これは住民向けのシンポジウム開催に合わせ、話題提供のため土器の年代測定も行うという内容であった。

こうして、謎の多い下部出土の土器について、待望の放射性炭素年代測定を行う運びとなったのである。

炭素年代測定資料

資料は文様があり、測定に耐え得る炭化物が付着している土器片で、出土レベル等の記録が残されているもの５点を筆者が抽出した。以下、各資料の特徴を記すが、まず訂正をしなければならない。今回この報告をまとめるにあたり、今一度土器資料と台帳との確認を行ったところ、これまで「Ⅱ－０区、-450cm」出土の資料として扱っていた№４の土器について（藤森2011）、実際は出土区、出土レベルとも不明の資料であることが明らかになった。誠に痛恨の極みであるが、後世に悪影響を残さぬよう、ここに訂正しておきたい。

■№１

-440cm出土の無節Ｒと思われる撚糸文土器。赤褐色で裏面口縁付近に炭化物が付着している。接合はしないが同一個体の資料があり（-455～-460cmおよび-460～-470cm出土）、それも加味すると、口唇部から裏面上部には、横方向の擦痕が見られる。図に示した口縁直下の孔は、意図的なものかどうかも含め不明である。

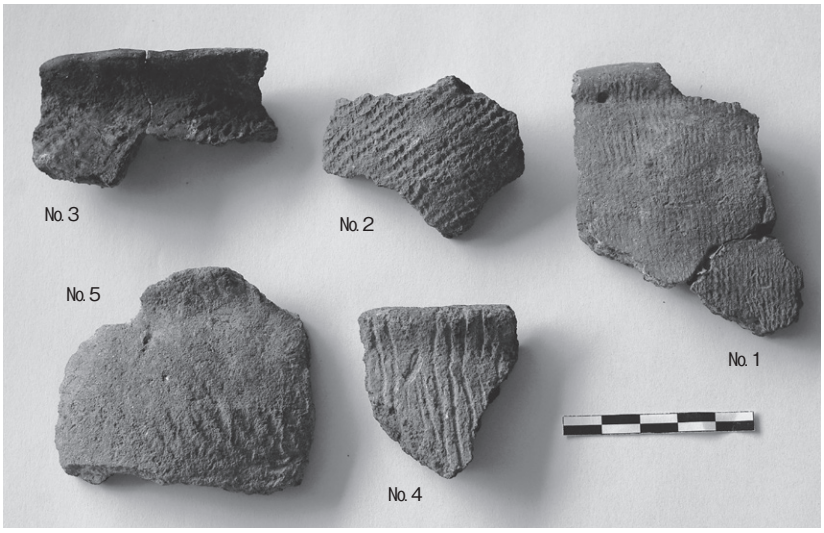


図３　測定土器土器写真

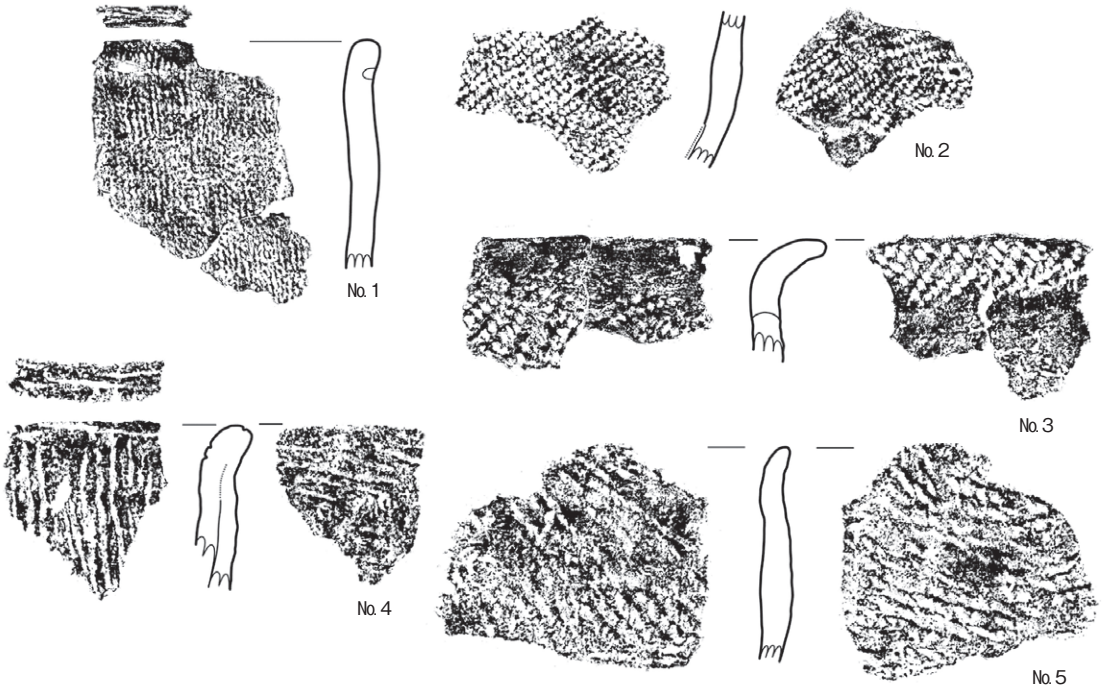


図４ 測定土器拓本図（S=1/2）

■№2

-530cm出土の表裏縄文土器。同下半部の破片であるが、表裏ともにLR縄文が施されている。裏面下部で施文がない箇所は、器面表層が剥がれていると思われる。炭化物は内面に見られた。

■№3

レベル-500～-510cm出土の表裏縄文土器。口縁部で、大きく反り返る。表裏面とも、LR縄文が横位に施文されているが、表面は口縁の反り返りから下、逆に裏面は口縁反り返りの部分のみの施文である。口唇部はやや波打つ。炭化物は口唇から口縁裏に付着。

また２つの破片からなるが、右側の破片には「採集-550？」と注記されている。このように、当遺跡では、接合資料についても記録されているレベルに幅がある場合も多い。

■№4

表裏撚糸文土器。前述のように出土層位は不明だが、同じコンテナボックスにあった土器は、ほとんどが-400～-500cm出土で、下部であることは確かであろう。胎土に黒雲母片を多く含む。断面では、２枚の粘度板が重ねられている様子が見て取れる。№1よりも間隔の広い無節Rと思われる撚糸文が、表面では縦位、裏面では横位に施文される。炭化物は内面口縁部付近に付着。

■№5

レベル-470cm出土の表裏縄文土器。雲母片を微量に含む。表面の残りが良くないが、表裏ともRL縄文の横位施文と思われる。また、口縁破片のようにも見えるが、やや不安定で、偽口縁の可能性もある。内面に広く炭化物が見られる。

尚、これら土器は、現在整理作業が行われており（本号・井出レポート参照）、今後接合資料が増える可能性は充分にある。

化学処理工程

分析は株式会社加速器分析研究所に依頼して行った。以下同社の報告をもとに、その方法と結果を示す。

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法

３MVタンデム加速器（NEC Pelletron9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

（１）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C　濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-100903	№1	層位：地表下-440cm	撚糸文土器片	AaA	-23.7±00.41	9,580±40	30.34±0.14
IAAA-100904	№2	層位：地表下-530cm	表裏縄文土器片	AaA	-23.53±0.44	9,610±40	30.24±0.14
IAAA-100905	№3	層位： 地表下-500～-510cm	表裏縄文土器片	AaA	-24.91±0.47	9,680±40	29.98±0.14
IAAA-100906	№4	不明	表裏撚糸文土器片	AaA	-26.51±0.44	9,460±40	30.81±0.15
IAAA-100907	№5	層位：地表下-470cm	表裏縄文土器片	AaA	-24.16±0.34	9,520±40	30.56±0.14

表１

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-100903	9,560±40	30.42±0.14	9,581±36	11082calBP-11058calBP（7.2%） 11037calBP-10988calBP（14.4%） 10980calBP-10927calBP（15.8%） 10882calBP-10786calBP（30.8%）	11105calBP-10745calBP（95.4%）
IAAA-100904	9,580±40	30.33±0.14	9,607±37	11105calBP-11066calBP（12.3%） 11025calBP-11005calBP（5.0%） 10963calBP-10861calBP（33.1%） 10854calBP-10793calBP（17.8%）	11150calBP-10771calBP（95.4%）
IAAA-100905	9,670±40	29.99±0.14	9,676±38	11189calBP-11090calBP（62.7%） 10917calBP-10902calBP（5.5%）	11207calBP-11069calBP（70.9%） 10954calBP-10866calBP（21.5%） 10846calBP-10806calBP（3.0%）
IAAA-100906	9,480±40	30.72±0.14	9,456±37	10742calBP-10654calBP（60.5%） 10619calBP-10605calBP（7.7%）	11056calBP-11040calBP（1.1%） 10991calBP-10983calBP（0.6%） 10786calBP-10578calBP（93.7%）
IAAA-100907	9,510±40	30.61±0.14	9,523±37	11065calBP-11025calBP（17.1%） 11005calBP-10963calBP（15.9%） 10861calBP-10854calBP（2.0%） 10793calBP-10715calBP（33.1%）	11080calBP-10933calBP（42.9%） 10879calBP-10687calBP（52.5%）

表2

下一桁を丸めない^{14}C 年代値である。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al.　2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey　2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

測定結果

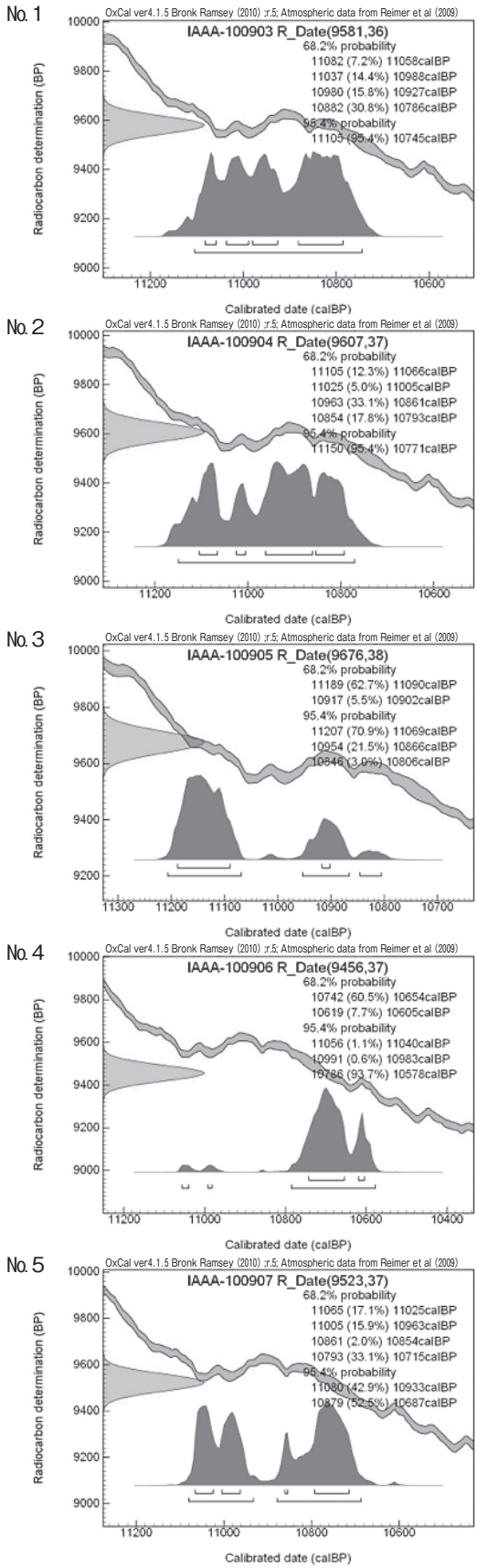
^{14}C 年代は、№１が9580±40yrBP、№２が9610±40yrBP、№３が9680±40yrBP、№４が9460±40yrBP、№５が9520±40yrBP である。

暦年較正年代は、１σで見ると№３が11189～10902 cal BP の間に２つの範囲、№４が10742～10605cal BP の間に２つの範囲で示され、他の３点はそれらと重なりながら中間の値を示している。２σでも年代差が示されているが、重なる範囲も大きい。

炭化物の付着は必ずしも十分でなく、土器片の内面と外面から採取した№３など、通常の炭化物よりも炭素含有率が低いものも見られた。

測定結果の意味するもの

これをみると、下部の土器の年代幅はおよそ11,000



参考　暦年較正年代グラフ

～10,700年前ということになる。

日本各地で縄文土器の年代測定を精力的に進める小林らによれば、草創期と早期の境は11,600～11,500年前となる（小林2007）。これにあわせて考えると、下部の土器は、やはり早期の始め頃となろうか。尚、栃原岩陰遺跡で押型文土器の年代測定は行っていないが、隣接する南相木村大師遺跡で出土した格子目文土器について例がある。詳しい報告はこれからであるが、^{14}C年代で9240±40yrBPという値が出ており（藤森・堤2009）、栃原岩陰遺跡下部の土器より若干新しい値であった。

今後、縄文時代草創期から早期の年代観を示す貴重な資料として、多くの研究者に論じてもらいたい。

参考文献

大参義一編　1984『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書―昭和58年度―』長野県北相木村教育委員会

小林謙一2007「縄文時代前半期の実年代」『研究報告』137集　国立歴史民俗博物館

西沢寿晃1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史考古資料編(1)　東信地区』

西沢寿晃・藤田敬1993『栃原岩陰遺跡』北相木村教育委員会

藤森英二2002『国史跡　栃原岩陰遺跡・天狗岩岩陰―保存整備事業に伴う発掘調査報告書―』北相木村教育委員会

藤森2011『遺跡を学ぶ078　信州の縄文早期の世界　栃原岩陰遺跡』　新泉社

藤森英二・堤隆2009『南相木村大師遺跡2009年発掘調査の概要』南相木村教育委員会

宮崎朝雄2008「尖底回転縄文系土器」『総覧縄文土器』小林達雄編アム・プロモーション

亀井翼他2009『人類誌集報2006･2007』「2007年度北相木村における岩陰地形分布調査」

利渉幾多郎　2001「ノッチの形成史から復元される古水文史―長野県千曲川上流，北相木川のノッチと段丘を例に」『第四紀』

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

（北相木村考古博物館）

栃原岩陰遺跡「下部」出土土器の炭素14年代について

小林謙一

1．測定値について

詳細は藤森英二氏の報告を参照されたいが、測定試料は長野県北相木村栃原岩陰遺跡下部出土の表裏縄紋土器付着炭化物５点である。№１は撚糸紋土器、№２以降は表裏縄紋土器である。

藤森氏が報告するように、㈱加速器分析研究所に委託して前処理から AMS 測定、較正年代の算出までおこなっている。委託機関は経験を積んだ信頼できる機関の一つであり、問題はないであろう。前処理に当たりアセトン洗浄をおこなっていないことは気になるが、藤森氏に確認したところ、バインダー処理など有機溶剤の塗布はおこなっていないと言うことなので、汚染を受けている可能性はないと考えられる（註１）。できれば、前処理及び二酸化炭素化燃焼時の試料の回収率を重量比で示してもらえると、より試料の状態がわかるので良い。炭素13の安定同位体比も AMS による測定値であるが、おおよそ-23.5‰以上-26.5‰程度までである。-23‰の数値はやや重たいが、AMS による同位体分別効果による補正のための測定であり誤差が大きく、試料自体の正確な δ^{13}C 値とは限らない。内陸部の岩陰遺跡ということを考慮すると、海洋リザーバー効果の影響は考えにくいであろう。測定値も9560～9680±40 ^{14}C BP の炭素14年代値でおおむねまとまっており、AMS 測定自体は安定して結果を出していると考えられる。

よって、以下には今回の下部出土撚糸紋土器・表裏縄紋土器がおおよそ同一の時期であるととらえた上で、現時点における草創期末から早期初頭の炭素14年代の測定例と比較し、年代的位置付けを試みる。

2．暦年較正年代

IntCal09による暦年較正年代を、ベイズ統計を用いた算出プログラム（今村2007）で計算すると以下のようになる。（%）は２σ（95.4%）での確率密度である。

№１　9155-8795calBC（95.4%）

№２　9195-8820calBC（95.4%）

№３　9255-9120calBC（70.7%）、9005-8915（21.6%）、8895-8855calBC（3.1%）

№４　9105-9090calBC（1.1%）、9040-9030calBC（0.8%）、8835-8630calBC（93.5%），

№５　9130-8990calBC（42.7%）、8930-8740calBC（52.7%）

3．他の測定値との比較

近隣の類似例をあげると以下の例がある。南相木村教育委員会が大師遺跡12号土坑出土格子目状押型文土器付着物を測定し、9240±40^{14}C BP の値が出ている（南相木村教育委員会2010）。IntCal09で算出すると、8590calBC（0.4%）、8570-8310calBC（94.9%）となる。長野県飯田市美女遺跡では SB14住居出土押型紋土器立野式土器内面付着物２点が9285±25および9310±30^{14}C BP、SK525土坑出土草創期葛原沢Ⅱ式土器外面付着物が11050±30^{14}C BP の結果である（遠部ほか2008）。新潟県入広瀬村黒姫洞窟の出土土器付着物および共伴炭化物試料の年代測定から、室谷下層併行の土器（10365±50^{14}C BP）→撚糸文土器（10060±60^{14}C BP、9850±40^{14}C BP、9720±40^{14}C BP）→沈線文土器（9305±25^{14}C BP）という推移が読み取れる（小林ほか2004）。岐阜県中津川市（旧坂下町）花ノ湖Ⅱ式の年代測定値が9755±50^{14}C BP（原ほか2008）である。東海地方についても遠部慎氏らが測定を進め、静岡県三の原遺跡多縄紋土器で10160±50、10110±80^{14}C BP、東大室クズレ遺跡の押型文土器の古い段階が8810±45、8715±45、9005±45^{14}C BP である（遠部ほか2012）。

4．年代的位置付け

前項であげた事例を含め、これまでに筆者らがおこなってきた炭素14年代測定の結果をもとにすると、縄紋時代草創期と早期前半の年代は以下のようになる（小林2007）。calBP 較正年代で1950年を起点として何年前かと数える。

草創期（無文、隆線文～多縄紋）15700～11600年前 cal BP

隆線文　15500年前～13200年前 cal BP

押圧縄紋　13000年前～12300年前 cal BP

多縄紋・無紋　12000～11600年前 cal BP

早期（撚糸紋～条痕紋）　11500～7000年前

撚糸紋系　11500～10500年前 cal BP

（稲荷台式）　11090～10690年前 cal BP

無紋・沈線文系　10450～（8500ころ）年前 cal BP

また、西日本の草創期から早期の年代研究を進めている遠部慎氏の成果（遠部2009）によると、草創期末の福岡県大原Ｄ遺跡出土無文土器が10480±30^{14}C BP、早期初頭の大分県二日市洞穴の二日市１ｂ式（第８文

化層）の測定値は9815±30～9930±25^{14}C BP（遠部2006）、大川式の測定値は9650±50^{14}C BPで、西日本・東海における草創期末から早期初頭の中に含まれることは動かず、草創期末の花ノ湖Ⅱ式より新しく押型文土器成立期より古いと位置づけられる。

以上を勘案し、小林の年代観に照らせば、栃原下部出土撚糸紋・表裏縄紋土器の年代的位置付けは、撚糸紋土器段階からを早期とすれば、早期初頭の年代に位置づけられると考える。

註１　藤森英二氏より土器の状態についてカビや炭酸カルシウムの付着、ニスや接着剤の極端な付着はなく、ほぼ全ての土器について、特有の光沢やテカリは認められず保存処理についても、問題ないとのコメントを得ている。

参考文献

今村峰雄2007「炭素14年代較正ソフトRHC3.2について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集

遠部慎2006「北・東部九州における縄文時代草創期末～早期前半の諸様相―大分県九重町二日市洞穴の年代測定―」『九州縄文時代早期研究ノート』第４号　九州縄文時代早期研究会

遠部慎2009「上黒岩遺跡の押型文土器の炭素14年代測定」『愛媛県上黒岩遺跡の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第154集

遠部慎・宮田佳樹・小林謙一2012「東海地方における縄文時代草創期から早期の土器の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第172集

小林謙一2007「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集

小林謙一・坂本稔・尾崎大真・新免歳靖2004「黒姫洞窟遺跡出土土器付着物の14C年代測定」『黒姫洞窟遺跡―第１期発掘調査報告―』新潟県・入広瀬村教育委員会　魚沼地域洞窟遺跡調査

遠部慎・宮田佳樹・小林謙一2008「飯田市美女遺跡の土器付着物の炭素14年代測定」『飯田市美術館研究紀要』18

原寛・遠部慎・宮田佳樹・村上昇2008「花ノ湖遺跡採集土器の炭素14年代測定」『古代文化』61巻２号

藤森英二2011『信州の縄文早期の世界　栃原岩陰遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ78　新泉社

南相木村教育委員会2010『南相木村大師遺跡2009年発掘調査の概要』

（中央大学文学部）

栃原岩陰遺跡の小型剥片石器特に黒曜石製石器について

藤森英二

栃原岩陰遺跡の整理作業から

学生時代、長和町の鷹山遺跡群黒曜石原産地調査に参加していた私は、就職してからもなんとか仲間に置いていかれないようにと必死だった。わずかな予算で組んだ栃原岩陰遺跡の石器整理作業には、その仲間たちが集ってくれた。特に野口淳、横山真の両氏は、その後の研究に大きなインパクトを残した。さらに2009年には、蛍光Ｘ線分析装置による黒曜石の原産地推定が明治大学古文化財研究所によって行われた。この実現には山科哲氏に多大な協力を頂いている。

ここでは彼らの努力に負いつつ、これまでの成果を紹介したい。

剥片石器の推移

栃原岩陰遺跡のⅠ～Ⅳ区では、上部・中部・下部の

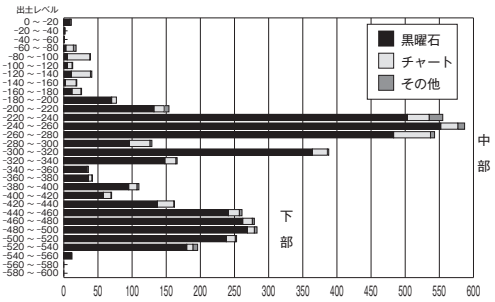


図1　小型石器石材の割合

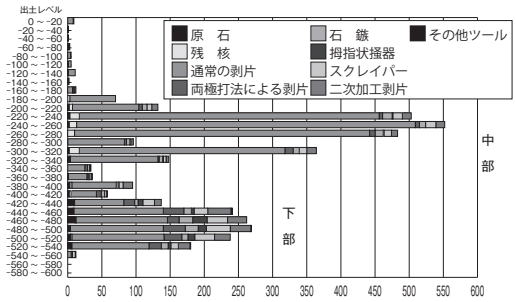


図２　黒曜石製石器種別の割合

３区分が可能なことは土器の頁で説明したが、剥片石器でもこの傾向が顕著に表れる。

小型剥片石器の出土数は4700点に及ぶが、残された記録から20㎝ごとの人工層位に区分出来たのがおよそ4500点（図１）。さらに最も量の多い黒曜石については器種別にまとめている（図２・但し分析途中のもの

もあり、今後若干の修正はあり得る)。気づく点を以下にまとめてみた。

・黒曜石が圧倒的な量だが、中部以降はチャートもやや増加する。
・下部では製品の割合が中部よりも多く、逆に中部では剥片が多くなっている。
・中部では残核が一定数見られる。
・拇指状剝器は下部に集中する。

さらにグラフでは見えない部分を補足すると、

・下部での原石とは、そのほとんどが小型板状の原石である。
・下部では、板状原石素材、両極打法による剥片素材の製品も多い。

黒曜石の産地

分析は明治大学古文化財研究所によって行われた。下部で50点、中部で100点を分析対象としている。分析結果をグラフ化したのが図３である（藤森2011)。

・下部では、西霧ヶ峰系が最多で、和田峠Ⅱ・鷹山系や男女倉系、麦草・冷山系が含まれる。
・中部では、全体の４分の３を西霧ヶ峰系が占めており、残りを和田峠、鷹山、男女倉の各系で分け合う。麦草・冷山系は判別されなかった。

このように、やはりここでも下部と中部とで異なる傾向を示す結果となった。

黒曜石原産地推定は何をもたらすか

縄文早期については、広域的な移動生活についての指摘がある（藤山2009・阿部1992)。筆者もかねてより、当該期での移動を繰り返す生活を予想している（藤森2010・2011)。

特に下部では、別地点で加工もしくは選別した剥片や小型板状原石を遺跡内に持ち込み、主に二次加工のみを行っていたようだ。一方で黒曜石原産地遺跡の一つである長和町鷹山遺跡群の星糞峠鞍部では、製品が極端に少なく、素材にならない原石や剥片が多い。さらに石器の背面構成や両極打法による剥片類の存在等も含め、両差は強い補完関係を示す（横山2000・及川2003)。このようなことから、この時期については黒曜石の直接的な入手とそれを持ち運びながら消費した生活を予測している。鷹山遺跡群原産地を含む可能性のある判別群が一定数見らることは、両者の直接的な繋がりを肯定する一材料である。

これに対し中部では、原石の持ち込みと剥片剥離以降の石器製作作業が予想される。加えて地元石材であるチャートが、絶対数で明らかに多くなる。さらに黒曜石が西霧ケ峰系に収斂されていると予想出来る点もあわせ、当該期では、一地点での活動期間の長期化や、

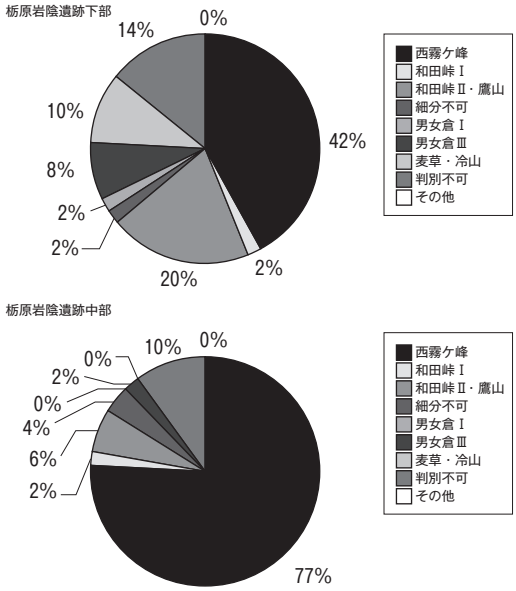


図3　層位別黒曜石原産地

移動地点の減少という変化が起ったと考えている。

異論もあろうが、貝製品の入手などとも合わせ、彼らの行動範囲を追求したい。

参考文献

藤森英二1996「栃原岩陰遺跡出土の拇指状掻器について」『佐久考古通信』№68

藤森英二1997「栃原岩陰遺跡の黒曜石製石器の素材について」『佐久考古通信』№70

藤森英二1998「栃原岩陰遺跡出土の石核から」『佐久考古通信』№72

藤森英二2010「内陸地域における貝製品の流通」『移動と流通の縄文社会史』雄山閣

藤森英二2011「長野県栃原岩陰遺跡出土黒曜石の蛍光Ｘ線分析装置による原産地推定結果と若干の考察」『環境史と人類』第４冊　明治大学学術フロンティア

藤山龍造2009「縄文時代初頭の石材消費と移動形態」『考古学研究』第56巻第２号

横山　真2000「縄文時代草創期後半における黒耀石製石器の生産形態―中部高地を例に―」『鷹山遺跡Ⅳ』長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団

阿部芳郎1992「縄文時代早期における植物質食料加工用石器の在り方と生産活動－磨石、石皿多産遺跡の性格と生産活動の構成について」『信濃』第44巻第９号

及川　穣2003「出現期石鏃の型式変遷と地域的展開―中部高地における黒耀石利用の視点から―『黒耀石文化研究』第２号　明治大学黒耀石研究センター

野口　淳・藤森英二2003「木次原遺跡２号住居址よりみる縄文前期の石器製作について」『木次原遺跡』北相木村教育委員会

（北相木村考古博物館）

栃原人骨の形態研究について

馬場悠男
茂原信生

はじめに　研究の経過

縄文時代早期に由来する栃原人骨は、長野県南佐久郡北相木村栃原遺跡で1960年代から1970年代に発掘されてから、信州大学医学部解剖学教室で保管され、部分的な研究が行われてきた。その間、香原志勢は、発掘と研究の中心的な位置を占めていたが、立教大学に転出したために、研究を継続することが困難になった。そこで、1985年には、香原と馬場が科研費を取得して研究を再開したが、人骨管理上の制約があり、大きな成果にはならなかった。

その後、2003年に、解剖学教室の森泉哲治教授の厚意によって栃原人骨が国立科学博物館に移管されてからは、馬場が指導していた大谷江里の基本的研究が加わり、さらに香原の総指揮のもと、茂原が主に担当し、馬場が協力して本格的研究がなされた。そして、香原志勢・茂原信生・西沢寿晃・藤田敬・大谷江里・馬場悠男の共著による「栃原岩陰遺跡（長野県佐久郡北相木村）出土の縄文時代早期人骨　―縄文時代早期人骨の再検討―」と題した研究論文が完成し、日本人類学会の機関誌「Anthropological Science 日本語版」119巻91～124ページ（2011年）に掲載された。形態研究の詳細や文献などはそちらを参照されたい。

なお、茂原が研究を担当することになったのは、茂原が京都大学霊長類研究所所長を定年退官したので、馬場が茂原を国立科学博物館人類研究部の客員研究員として招いたことがきっかけだった。その背景として、茂原と馬場は、獨協医科大学解剖学教室で、15年間、同僚として（茂原が２年先輩だが）互いに研鑽した歴史があった。さらに、およそ40年前から、茂原も馬場も香原から多くの指導を受け、香原を敬愛していたという事情があった。茂原の出身が長野県松代市ということもある。

現在、人骨と関連資料は、国立科学博物館「つくば地区」の資料棟に保管されている。

縄文時代早前期人骨の一般特徴

日本各地で人骨が数多く発見されている縄文時代中後晩期の人々は、弥生時代以降の本土日本人と比べると、一般に、頭はやや大きく、顔は上下に低く（短く）、眉間と鼻骨が隆起し、歯が小さい（図１）。また、身長は低いが、四肢は先端が長く、骨の筋肉付着部が良く発達している（図２）。このような特徴は、気候が暑く平原の多いアフリカに住んでいた人々が、数万年前にアジアに拡散してきて、温暖な気候の日本列島で採集狩猟生活に適応し、それまでの特徴をおおむねとどめて進化してきた結果と見なされている。

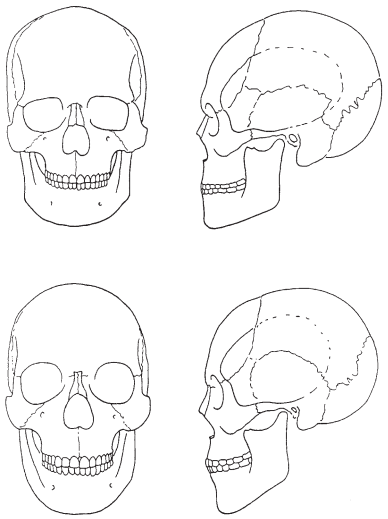


図1　縄文人頭骨（上）と弥生人頭骨（下）の比較
縄文人の顔面は、低く（短く）四角い。眼窩も低く角張っていて、眼窩上縁が直線的である。プロフィルでは、眉間が膨隆し、鼻根が凹み、鼻骨が隆起することが多い。歯は小さく毛抜き状の噛み合わせである。だから、口元が引きしまる。
弥生人の顔面は、高く（長く）楕円形。眼窩も高く、上縁が円い。プロフィルでは、眉間から鼻根そして鼻背への輪郭はなだらかである。歯は大きく、噛み合わせは、上顎歯が下顎歯にかぶさる鋏状のことが多い。そのため、やや出っ歯気味。

それに対し、弥生時代以降の本土日本人は、顔が上下に高く（長く）、平坦で、歯が大きく、身長の割に四肢の末端が短いなどの特徴を備えている（図１、２）。それは、３～１万年前にシベリアに住んでいたことがあり、そこで厳寒の気候に適応したために独特の顔や身体を持つようになった人々が、アジア大陸東部に拡散し、水田稲作農耕などの技術を持ち、弥生時代に日本列島に渡来してきて、縄文人の子孫と混血し、本土日本人になったため、と解釈されている。

縄文時代早前期人の特徴は、基本的に上に述べた縄文時代中後晩期人の特徴にほぼ一致する。しかし、顔がさらに低く（上下に短く）、特に下顎骨が小さい。また、身長が低く、四肢骨（特に上肢骨）は細いが、その割に筋肉付着部が発達するという特徴がある。そのために、縄文早前期人は華奢であると言われてきた。

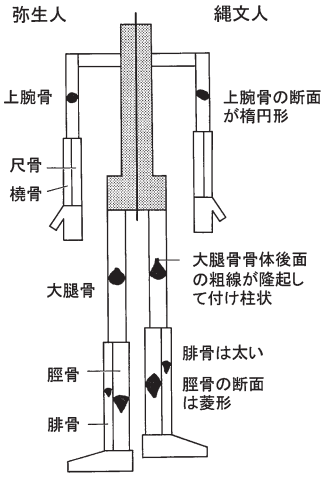


図2　縄文人（右）と弥生人（左）の四肢骨比較の模式的表現
縄文人は、弥生人に比べて身長は低いが、末端が相対的に長い傾向がある。つまり、腕と脚が短い割には、尺骨・橈骨、脛骨・腓骨は長めである。また、四肢骨の骨体断面は独特の形をしていて、筋肉付着部が発達している。

ただし、最近では、発掘例が多くなるにつれて、縄文早前期人の中には身長が高い集団もあることがわかっている。

栃原遺跡１号男性人骨

栃原遺跡では、成人８体（男女４体ずつ）と幼小児４体の人骨が発見されている。幼少児が多く、成人も老年が少ないことは、寿命が短かったことを示している。

全体傾向を比較検討する前に、保存のよい１号人骨の特徴を記し、縄文早前期人がどのような姿をして、どのように暮らしていたのかを推測も交えて紹介する。

１号人骨は、顔や骨盤の特徴から男性と推定され、骨の増殖など加齢性変化が少しあることから壮年と思われる。大腿骨と脛骨から推定された身長は162㎝であり、縄文中後晩期人の平均157～159㎝と比べても高い。四肢骨は細いが、下肢骨の筋肉付着部は良く発達している。

頭は大きく、幅広い。顔は上下に短く、特に下顎骨が小さいので、頭部全体としては頭に比べて顔が小さい少年のような印象だったかもしれない（図３）。鼻骨がかなり隆起しているので、鼻筋が通っていたはずだ。歯並びは良く、上下の切歯が磨り減って毛抜き状にぴったりと噛み合っているので、口元が引き締まっていただろう。したがって、かなり端整な顔立ちだったと想像できる。まちがっても、ごつい原始的なという印象ではない。

このような顔立ちは、私たちが、若いときに、信州大学で最初に栃原人骨を見て、まるで現代人のようだと思った印象ともある程度は一致している。もちろん、今となってみれば、見る目が未熟だったことにほかならない。

下顎骨は、小さくとも構造としては頑丈である。現代人の若者のように、ふにゃーっと伸びだした顎とは全く違う。横から見ると下顎角（エラの部分）で直角に曲がっている。これは、そこに着く咬筋がよく発達していたことを示している。また、下顎枝の筋突起が前方に張り出しているので、そこに着く側頭筋が効果的に機能していたことを示している。つまり、噛む力はすこぶる強かった。

歯は全体に激しく磨り減っているので、硬い粗末な食物を食べていたことがわかる。さらに、大臼歯は上下が噛み合わない特異な鞍状の磨り減り方をしているので、歯を「皮なめし」などの際に道具として酷使した可能性もある。虫歯や歯槽膿漏で何本かの奥歯が抜けているので、生前はかなり痛んだことだろう。特に下顎右第３大臼歯は、極度に磨耗して歯髄が露出し、歯根に膿疱ができ、歯がぐらついて内側に傾き、さらに歯の外側面が上顎大臼歯と噛み合って大きく磨り減っている。徹底的に酷使されたようで、当時の厳しい生活状態が推測できる。

後頭部の下面には、頸の筋肉が付く部分があるが、その範囲は狭い。従って、頸の筋肉およびその続きの背筋は細かったことがわかる。なお、下顎骨が小さいことも頸が細かったことを示している。肩甲骨、鎖骨、上腕骨、尺骨、橈骨はいずれも華奢で細いので、上半身の筋肉は強力ではなかったはずだ。ただし、腱や靱帯の付着部はざらついているので、筋肉をよく使っていたと思われる。つまり、強い筋力を必要とするようなことはないが、さまざまな作業で上半身をよく動かしていたといえよう。この点は、縄文時代中後晩期の人々の太く頑丈な上肢骨と対照的である。

大腿骨、脛骨、腓骨など下半身の骨は、上半身の骨ほど細くなく、筋肉付着部も発達している。特に膝を伸ばす大腿四頭筋が着く大腿骨の粗線は、あたかも骨体後面に縦に割り箸を貼り付けたように突出していて、典型的な「付け柱」を形成している（図２）。つまり、膝を伸ばす力が強く、またそのような運動や作業を活発に行っていたことを示している。

脛骨の骨体は現代人のような三角柱ではなく、菱形断面の四角柱であり、筋肉が骨体を前後方向に曲げる力に抵抗できる構造と解釈されている（図２）。腓骨は太く、筋肉付着部が発達しているので、足の左右の傾きをコントロールしたり、指先で踏みしめたりすることに適していて、荒れた地面での歩行・走行が巧みだったと思われる。大腿骨に対して脛骨の長さが相対的に長い傾向があるので、スネがすんなり伸びていた

と思われる。つまり、古風な言い方をすると、彼はおおいに山野を跋渉していたことだろう。

足首の関節を見ると、独特な関節面の拡大や圧痕の発達があるので、常習的に蹲踞（しゃがむ）していたことがわかる。これは、椅子や畳のない縄文時代では、作業をするにせよ休むにせよ、当然のことと言える。

以上の特徴は、移動性採集狩猟生活に対する適応であると判断され、この個体だけでなく、縄文時代早前期の人々に共通する特徴と見なされる。ただし、身長に関しては、この個体は高く、一般的にも変異が大きい。

図3　縄文晩期人頭骨（左：愛知県吉胡貝塚）と縄文早期人頭骨（中：長野県栃原、右：埼玉県妙音寺洞穴）の比較
それぞれ、縄文人骨の特徴をよく表していて、さらに、一般的に、縄文中後晩期人は顔が大きく、縄文早前期人は顔が小さいという対比がわかる。栃原人と妙音寺洞穴人はよく似ている。横棒の長さは5cm。

縄文時代早期人骨の特徴の再確認

これまで、縄文時代早期あるいは早前期の人骨の特徴として挙げられていた項目を以下のように要約した。
①頭骨が華奢である。
②顔面が低い（上下に短い）。
③左右の眼窩上縁は直線的に連なる。
④下顎骨は長さが短く、下顎枝が低く、筋突起が前方に張り出す。
⑤下肢骨と比べて上肢骨が華奢である。
⑥大腿骨は粗線の発達がよく、いわゆる柱状（付け柱）大腿骨である。
⑦早期人は必ずしも低身長ではない。
⑧下顎歯には特殊な磨耗がある。

栃原人骨は、１号男性人骨以外の人骨もこれらの特徴を備えているので、典型的な縄文早期人骨であると言えよう。ただし、これらの特徴の中には縄文中後晩期人骨の特徴と共通するものも多く、縄文早期人骨の独自の特徴と言えるのは、以下の４項目である。
②顔面が低い。
④下顎骨は長さが短く、下顎枝が低く、筋突起が前方に張り出す。
⑤下肢骨と比べて上肢骨が華奢である。
⑧下顎歯には特殊な磨耗がある。

これらの特徴の意味するところは以下のように解釈できる。特徴②と④は、顔面（特に下顎骨）の咀嚼機能はかなりよく発達していたが、上半身が華奢で、頸は細く、体重も少なかったことの影響でサイズが小さかったと見なすのが妥当であろう。

特徴⑤は、男性では明確に認められるが、女性では認められない。つまり、縄文早前期に比べて縄文中後晩期では、特に男性において上肢骨が太く頑丈である。ということは、同じ縄文時代でも、早前期から中後晩期になると生業形態が変わって、男性に対して上半身の作業負荷が大きくなったという可能性がある。もっとも、早前期人骨は山間部で発見されることが多く、中後晩期人骨は海岸近くで発見されることが多いので、環境の違いによるという解釈も提唱されている。

特徴⑧は、さまざまな解釈はあっても具体的にはわからないことが多いので、考古学的あるいは民族学的な事例と合わせて検討する必要があろう。

おわりに　謝辞

栃原人骨は、縄文時代早期の貴重な人骨資料である。国立科学博物館で慎重に保管されるとともに、北相木村考古博物館とも協力して、研究あるいは教育における活用が図られるべきだろう。

これまで、信州大学の鈴木誠教授をはじめとする多くの皆様の善意と努力によって、栃原人骨が発掘され、保管され、研究されたことに、心から感謝をいたします。

（馬場悠男：国立科学博物館名誉研究員）
（茂原信生：京都大学名誉教授）

栃原岩陰遺跡から出土した縄文時代早期人骨および動物骨の同位体分析

米田　穣

はじめに

縄文人は狩猟、採集、漁撈を主たる生業としており、周辺環境の資源を最大限活用する適応戦略を発展させたと考えられる。我々は古人骨の化学成分に基づいた縄文時代の適応戦略の多様性について検討してきたが（米田2012他）、古人骨の大部分は沿岸部に立地する貝塚遺跡から出土したものに偏っている問題がある。日本列島では旧石器時代から数多くの内陸遺跡が存在しており、縄文人も草創期から内陸で沿岸とは異なる資源を活用した生業形態を有していたと考えられる。しかし内陸遺跡では保存状態の良好な人骨が少ないための、その食生態については部分的にしか報告されていない。本稿では、Yoneda et al.（2002）で報告した長野県北相木村栃原岩陰遺跡出土の縄文時代早期人骨の炭素・窒素安定同位体比からより詳細な食生態を検討するために、同じく栃原岩陰遺跡から出土した哺乳動物における炭素・窒素安定同位体比を分析した。両者を比較検討することで、日本列島内陸部における縄文人の適応戦略について考察する。

資料と方法

栃原岩陰遺跡出土人骨および動物骨は、信州大学医学部解剖学教室の保管されていた資料から長管骨を中心にサンプリングした。栃原岩陰遺跡から総重量231kgにのぼる大量の哺乳動物骨が回収されているが、頭蓋骨や長管骨の大部分が破砕されていることから、哺乳類の多くは縄文人が持ち込んだ食料残渣であると考えられる（宮尾ら1980）。大型哺乳類ではシカが最も重要であり、ついでイノシシ、ニホンザルが量的に多い。また中小型哺乳類ではムササビ、ノウサギ、テン、アカネズミ、リスが多い。本研究では、西沢寿一の協力によって種同定された動物資料群から形態学的研究に影響が少ない部位を選定し、11種57点から分析試料を採取した。人骨資料については成人骨から選択し、KA1号、KA8号、K A8号、KA8号、K A8号、KA10号の肋骨片等を分析に供した（Yoneda et al. 2002）。

およそ0.5～１ｇの骨片を採取し、表面に付着した土壌などの汚れをブラシで除去した後に、水酸化ナトリウムと塩酸で土壌有機物と骨無機成分を除去した。残った骨の有機分画を90℃でゼラチン化して、可溶成分をガラスフィルタでろ過したものを凍結乾燥して、同位体分析に供した。炭素・窒素安定同位体比は元素分析計と同位体比質量分析計を連動させた装置（EA-IRMS）で、錫カップに包んだ約250μg のゼラチンを測定することで炭素と窒素の安定同位体比を測定した。あわせて、炭素および窒素の含有量を測定し、両者のモル数比（C/N 比）からゼラチンが続成作用の影響を受けていないコラーゲンであるかどうかを判定する。

結果

栃原岩陰遺跡から出土した動物骨のうち、分析に必要量のゼラチンが抽出された54点について炭素・窒素の含有量（重量％）および安定同位体比を測定した結果を、Yoneda et al.（2002）で報告した人骨のデータとあわせて表１に示す。今回分析した動物骨では、コラーゲンの保存状態の指標となる C/N 比はいずれも現生哺乳類が示す値の範囲内であり（2.9～3.6；DeNiro 1985）、人骨を含めると63点中60点（95.2％）という非常に高い確率で保存状態の良好なコラーゲンを回収することができた。

動物種ごとに炭素・窒素同位体比の特徴を検討するために、図１に炭素・窒素同位体比の散布図を示す。現在の食性から比較的肉食性が強いと考えられるキツネ、アナグマ、テンは比較的窒素同位体比も炭素同位体比も高い傾向をしめす。一方、草食と考えられるニホンジカ、イノシシ、カモシカ、ニホンザルを含む大型草食哺乳類や、ノウサギ、リス、ムササビの小型草食哺乳類は、炭素同位体比にはバラツキがあるものの、肉食哺乳類よりも明らかに窒素同位体比が低いことが示された（Mann-Whitney U 検定で P ＝2.34×

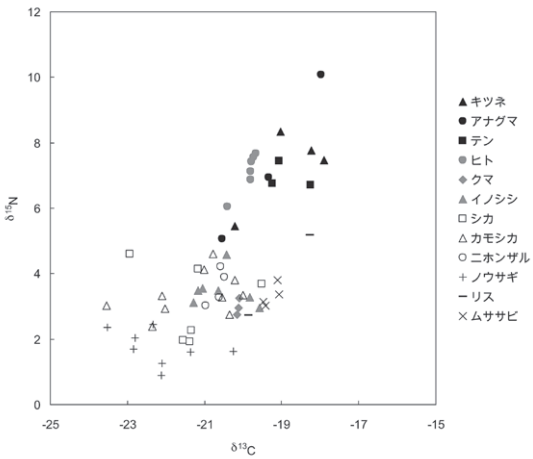


図１　動物種による炭素・窒素同位体比の比較

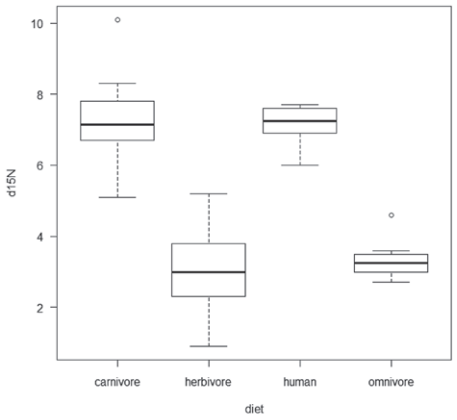


図２　ボックスプロット（最大値、第１四分位点、第２四分位点、最小値と２標準偏差での外れ値を示す）による食性による窒素同位体比の比較。

10－６）。窒素同位体比で草食哺乳類の平均値（3.0±1.0‰）と肉食哺乳類の平均値（7.2±1.4‰）を比較すると、その差は食物連鎖における濃縮効果（約3.5‰；Minagawa and Wada 1984）に近似している。そのため、栃原岩陰遺跡から出土した動物骨は比較的単純な同一の生態系に由来する動物群である可能性が指摘できる。

雑食性であるツキノワグマとイノシシは比較的低い窒素同位体比の平均値（3.4±0.5‰）を示しており、その平均値は草食動物のそれと有意差（P＝0.30）がないが、肉食動物のそれとは有意に異なる（P＝0.0018）。このことは、ツキノワグマとイノシシは雑食性ではあるもののそのタンパク質の大部分は植物から得ていることを示唆している。一方、雑食性であるヒトの窒素同位体比の平均値（7.1±0.6‰）は肉食動物と近似しており、U検定でも有意差は認められないが（P＝0.96）、草食哺乳類の平均値よりは有意に高い値を示している（P＝0.00011）。栃原岩陰遺跡から出土した動物骨との比較から、ヒトの同位体比は草食哺乳類よりも明らかに肉食哺乳類に類似していることが示された（図２）。

考察

本研究では、同じ遺跡から出土した古人骨と食料残渣と考えられる哺乳類の遺存体を用いて、縄文時代早期の遺跡周辺の生態系における縄文人の生態学的なニッチを推定した。哺乳類の同位体比からは、窒素同位体比で草食動物と肉食動物の差違が認められたが、ヒトの窒素同位体比は肉食動物のそれと近似することが示された。遺跡からは少量ではあるが炭化したムク、ナラ、トチ、オニグルミの植物質に加え、多量のカワシンジュガイやサケ属の椎骨を含む魚骨などの内水面資源の利用を示唆する遺物も得られている（藤森2011）。本研究ではそれらの炭素・窒素同位体比を直接測定していないので、その重要性を直接的に議論することはできないが、植物質が多ければ草食動物に近い値を示すことが期待され、内水面資源では陸域よりも高い窒素同位体比を有するので、淡水の魚貝類を多く利用した場合、陸上の哺乳類とは同位体の特徴が大きくことなることが期待される。今回行った人骨と動物骨の比較からは、ヒトは肉食動物と比べてやや炭素同位体比が低い傾向があるが窒素同位体比は近似しており、陸上哺乳類を主なタンパク源としていたと考えて矛盾がない。ヒトが肉食動物よりもやや炭素同位体比が低い傾向があるのは、陸上の草食動物に加えて内水面の魚貝類を利用したためかもしれないが、魚貝類の寄与はかなり限定的であったと考えられる。すなわち、栃原岩陰遺跡に居住した縄文時代早期人はシカ、イノシシをはじめとする陸上草食哺乳類を主たるタンパク質源にしていた可能性が高いと考えられる。

栃原岩陰遺跡から出土した資料については、我々の報告した人骨６個体に加えて（Yoneda et al. 2002）、木炭３点（西沢1978）、土器付着炭化物５点（藤森2011）について放射性炭素年代が報告されている。それら14点の未較正年代について、Intcal04を用いて較正年代を推定したところ（Reimer et al. 2004）、出土地点によって出土レベルと年代の関係の多少の前後はみられるものの、栃原岩陰遺跡全体は縄文時代早期の堆積を良い状況で保存していたことが示された（図３）。一連の年代データをまとめると開始年代は11,328～11,000 calBP（１σ）、終了年代は8966～8644 calBPと推定され、2000年以上の人類活動の痕跡が残されていると推定される。グリーンランド氷床の酸素同位体比と比較すると（NGRIP；North Greenland Ice Core Project Members, 2004）、ヤンガードライアス寒冷化イベントが終了した直後の完新世が現在と当程度に温暖化した直後の2000年間に相当しており、完新世の日本列島におけるヒトの適応形態の最初期を示す重要なデータであるといえる。

ただし、今回分析した人骨が主に縄文時代早期前半にあたる「中部」に由来するのに対し、カワシンジュガイや魚骨、炭化種子が「中部」から早期初頭の「下部」に多く見られることから、同じ遺跡にあっても生業や食生態に時代差があった可能性は考慮する必要がある。また、中部高地において定住的な大型集落が展開する縄人骨の分析から推定された食生態は温暖期にある程度適応した段階のものである可能性がある。縄文時代中期には食生態における植物の重要性が指摘されており（藤森1970）、今回推定された早期集団の肉食中心の

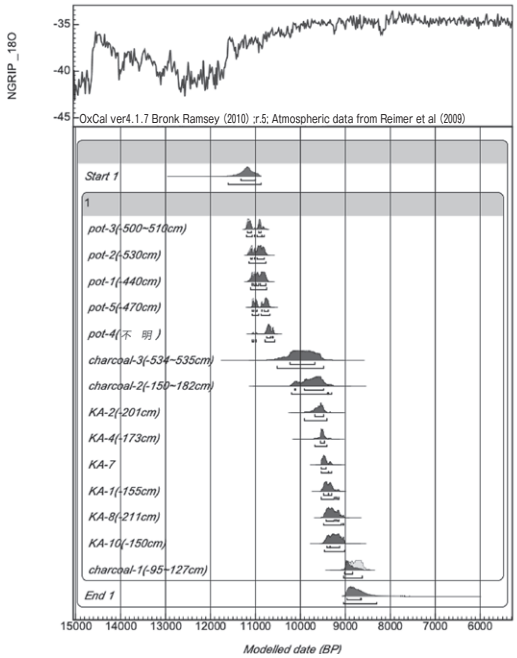


図３　栃原岩陰遺跡で報告された放射線炭素年代の較正年代。OxCAL4.1 を用いて計算・作図した（BronkRamsey,2009）。

食生態から劇的な変化をとげている可能性がある。内陸に適応した縄文人がどのように生業を変化させたのかを時代をおって検討することは、完新世におけるヒトの進化と適応を考察する上でも極めて重要である。

謝辞

本研究は香原志勢先生と西沢寿晃先生のご助力がなければ実施できなかった。また、藤森英二氏には様々な情報や追加試料で便宜を図って頂き、貴重な執筆の機会も頂いた。深く感謝申し上げる。

引用文献

Bronk Ramsey(2009). Baysian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51, 337-360.

DeNiro, M.J. Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. Nature 317, 806-809.

藤森栄一　(1970).「縄文農耕」学生社

藤森英二　(2011).「信州の縄文早期の世界　栃原岩陰遺跡」新泉社.

Minagawa, M. And E. Wada (1984). Stepwise enrichment of 15N along food chains: further evidence and the relation between δ15N and animal age. Geochimica et Cosmochimica Acta 48, 1135-1140.

North Greenland Ice Core Project members (2004). High-resolution record of Northern Hemispher climate extending into the last interglacial. Nature 431, 147-151.

種	%C	%N	C／N	δ^{13}C	δ^{15}N
ツキノワグマ	43.4	15.3	3.3	-20.2	2.7
ツキノワグマ	43.1	15.7	3.2	-20.1	3.2
ツキノワグマ	43.8	15.9	3.2	-20.1	3.0
ニホンジカ	43.8	16.2	3.2	-21.3	2.3
ニホンジカ	43.3	15.7	3.2	-21.6	2.0
ニホンジカ	45.1	15.7	3.4	-19.5	3.7
ニホンジカ	45.1	16.6	3.2	-21.4	1.9
ニホンジカ	42.7	15.1	3.3	-21.2	4.1
ニホンジカ	44.2	15.4	3.4	-22.9	4.6
カモシカ	45.6	16.3	3.3	-21.0	4.1
カモシカ	45.5	15.9	3.3	-23.5	3.0
カモシカ	44.8	16.2	3.2	-22.3	2.4
カモシカ	44.9	16.0	3.3	-22.1	3.3
カモシカ	45	16.1	3.3	-22.0	2.9
カモシカ	45.8	16.5	3.2	-20.5	3.3
カモシカ	45.4	16.5	3.2	-20.8	4.6
カモシカ	46.3	16.1	3.3	-20.4	2.8
カモシカ	44.1	15.9	3.2	-20.2	3.8
カモシカ	43.4	15.5	3.3	-20.0	3.4
ニホンザル	43	15.1	3.3	-20.6	3.3
ニホンザル	44.3	15.9	3.2	-20.6	4.2
ニホンザル	43	15.4	3.3	-20.5	3.9
ニホンザル	43.5	15.1	3.4	-21.0	3.0
キツネ	43.1	15.6	3.2	-18.2	7.8
キツネ	44.4	15.9	3.3	-20.2	5.5
キツネ	43.3	15.7	3.2	-17.9	7.5
キツネ	42.7	15.1	3.3	-19.0	8.3
アナグマ	44.6	15.5	3.3	-18.0	10.1
アナグマ	44.5	15.8	3.3	-19.3	6.9
アナグマ	45.2	15.3	3.4	-20.5	5.1
イノシシ	43.3	15.8	3.2	-21.2	3.5
イノシシ	43.1	15.6	3.2	-20.6	3.5
イノシシ	45.8	16.6	3.2	-19.8	3.3
イノシシ	45.2	15.8	3.3	-20.4	4.6
イノシシ	44.1	15.9	3.2	-21.3	3.1
イノシシ	28.7	9.2	3.6	-19.6	3.0
イノシシ	42.7	14.1	3.5	-21.0	3.6
ノウサギ	43.7	14.6	3.5	-22.3	2.5
ノウサギ	42.5	14.8	3.4	-23.5	2.4
ノウサギ	43.6	14.1	3.6	-21.4	1.6
ノウサギ	42.2	14.2	3.5	-22.1	0.9
ノウサギ	44.5	15.1	3.4	-22.1	1.2
ノウサギ	46.5	15.9	3.4	-22.8	1.7
ノウサギ	44.7	15.5	3.4	-22.8	2.0
ノウサギ	45.2	15.6	3.4	-20.2	1.6
テン	42.3	13.8	3.6	-19.2	6.7
テン	42.3	14.6	3.4	-18.2	6.7
テン	42.5	14.9	3.3	-19.1	7.4
リス	41.8	14.1	3.4	-18.3	5.2
リス	40.4	13.6	3.5	-19.9	2.7
ムササビ	44.3	15.3	3.4	-19.1	3.8
ムササビ	43.4	15.1	3.4	-19.4	3.0
ムササビ	43.6	14.8	3.4	-19.1	3.4
ムササビ	44.7	15.5	3.4	-19.5	3.1
ヒト（KA-1）	43.1	15.1	3.3	-19.7	7.7
ヒト（KA-2）	44.9	16.2	3.2	-20.4	6.0
ヒト（KA-4）	45.1	15.8	3.3	-19.7	7.6
ヒト（KA-7）	46.2	16.2	3.3	-19.8	7.1
ヒト（KA-8）	46.0	16.7	3.2	-19.8	6.9
ヒト（KA-10）	45.3	16.5	3.2	-19.8	7.4

宮尾嶽雄・西沢寿晃・鈴木茂忠　(1980). 早期縄文時代長野県栃原岩蔭遺跡出土の哺乳動物　第１報　出土哺乳動物相.　哺乳動物学雑誌　８, 181-188.
西沢寿晃　(1978). 栃原岩蔭遺跡出土人骨―その埋葬と形質について―.　『論文集　中部高地の考古学』長野県考古学会,　pp.94-104.
Reimer, P. J. et al. (2009). Intcal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 yeats cal BP. Radiocarbon, 51(4), 1111-1150.
Yoneda M., H. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002). Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara Rackshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 33, 549.557.
米田穣　(2012). 縄文時代における環境と食生態の関係：円筒土器文化とブラキストン線. 季刊考古学 118, 91-95.

（東京大学総合研究博物館）

コラム　栃原岩陰遺跡の現状

本号では栃原岩陰遺跡出土遺物の最新情報を紹介しているが、国史跡に指定されている遺跡現地はどうなっているだろうか。

実は現地は、現在も見学可能である。山間の洞窟遺跡ではあるが、生活道路のすぐ脇に存在し、車で気軽に訪ねることが出来るのだ。

佐久を南北に貫く国道141号線。小海町付近では狭い谷間となるが、小海駅側の交差点「小海大橋」を東に折れ、千曲川を渡りトンネルを抜ける。そのまま相木川沿いの県道124号線を行く。この道の両脇には、八ヶ岳起源の泥流が厚く堆積しており、木々と織りなすコントラストも美しい。特に秋の紅葉は格別である。５分程で北相木村に入るとすぐ、栃原岩陰遺跡に到着する。看板もあるので見過ごすことはないだろう。

遺跡には説明板と立ち入り制限の鎖が設置してあるが、内部は十分見学可能である。まず驚くのは、意外に狭いその面積であろう。さらに泥流の壁や天井の危うさも実感出来る。この場所に、１万年以上昔に暮らした人々の苦労が偲ばれる。

県道のすぐ脇に位置する栃原岩陰遺跡

さらに川沿いに車を進めると、５分程で北相木考古博物館に着く。ここは展示のほとんどが栃原岩陰遺跡関連という博物館で、本号で紹介した遺物の多くを見学可能である。未見の方は、ぜひ訪ねてほしい。

問い合わせ先　電話 0267-77-2111
URL http://vill.kitaaiki.nagano.jp/
（担当：藤森）

博物館の展示・縄文早期人の生活

博物館の展示・岩陰の再現と各種遺物

古人骨および動物遺存体のアミノ酸窒素同位体比分析について

内藤裕一・力石嘉人・大河内直彦・米田穣

はじめに

近年、人骨の安定同位体比を利用した先史人の食性復元が、海外は勿論のこと日本国内でも非常に盛んになっている。この手法は、古人骨に残存するコラーゲンタンパクを構成する元素の由来、すなわち体組織に同化された食資源の組成を推定することで、生前の食事内容を復元するという、化学的手法である。安定同位体比は基準となる標準物質に対して試料の安定同位体の比率（炭素なら13C/12C 比、窒素なら15N/14N 比）がどれくらいずれているかを、千分率（‰）を用いて示す。この方法論を用いた先史日本人に関する初期の研究では、海獣狩猟や漁撈に特化した生業をもつ北海道の集団と本州の集団との間で明確な同位体比の違いが観られ、また本州の集団の中でも海産物への依存度に違いが見られた（南川2001）。このように、人骨の安定同位体比は先史人の食生活に有用な知見をもたらしてきたが、これまでの研究は主に沿岸部の遺跡を対象にしており、人骨・動物遺存体などの出土が散発な本州内陸部の縄文人集団については研究が少ない。

その数少ない例の一つに、本特集号でも紹介されている米田らの研究がある（Yoneda et al.，2002）。この研究では、縄文時代早期に属する長野県栃原岩陰遺跡から出土した古人骨についてコラーゲンの炭素・窒素安定同位体比分析を実施し、当時の人々が陸上の食物に強く依存していたことが明らかにされた。

本稿では、従来のコラーゲンタンパクの分析から一歩進んだ最新の分析技術を応用し、当時の人々の食資源の内容をさらに詳細に復元した結果を紹介したい。その技術とは、タンパク質を構成する個々のアミノ酸について窒素同位体比を分析するものである。この手法は海洋や陸上の生態学研究で積極的に応用されてきた。生物体に含まれるグルタミン酸とフェニルアラニンの２種類のアミノ酸の窒素同位体比を用いて、食物網の構造、もう少し言うと「食う、食われる」の関係を明らかにできることが分かってきた（Chikaraishi et al.，2009；大河内・力石2011）。この手法は、グルタミン酸ではエサと捕食者との間で窒素同位体比が大きく上昇するのに対し、フェニルアラニンではほとんど上昇が見られない現象に基づいている（図１）。人体組織についてこの分析を実施すれば、人間を生態系構造の中に位置づけることができるのである。例えば、筆者らは既にこの手法を北海道の縄文時代人骨に応用しており、遺存体に含まれる２種類のアミノ酸の窒素同位体比から当時の遺跡周辺の生態系構造を復元し、さらには古人骨の海産物摂取量を推定できることを示した（大河内ら2011；Naito et al.，2010）。ちなみに、一般的な食資源に含まれる窒素は大部分がタンパク質に由来するため、窒素同位体比分析は食資源のタンパク質源としての重要性を推定していることになる。本稿で対象とする栃原岩陰遺跡からは、豊富な陸上動物骨だけでなく、近くの河川で採取されたと思われる淡水性のカワシンジュガイも出土している（藤森2011）。このような多様な食資源を利用していた栃原人の食生活とは、具体的にはどのようなものだったのだろうか？　淡水性の貝や、遺跡に残存しにくい植物質食料は食料として果たして重要だったのだろうか？

古人骨と動物遺存体のアミノ酸窒素同位体比

測定された考古資料のグルタミン酸とフェニルアラニンの窒素同位体比を図２に示す。一見して分かるように、淡水性のカワシンジュガイはフェニルアラニンの窒素同位体比が陸上動物と大きく異なっている。これはカワシンジュガイの利用する窒素源が、陸上動物が利用する窒素源と異なることを表している。これを念頭に置きつつ人骨の値をみると、測定された４個体ともに明らかに陸上の生態系に属している。すなわち、

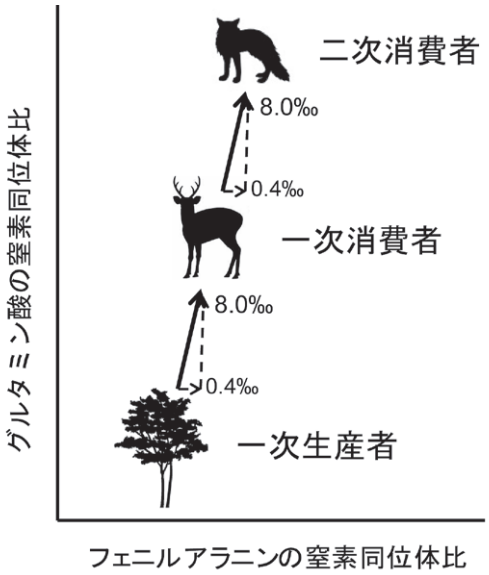


図１　生態系構造と生物のアミノ酸窒素同位体比

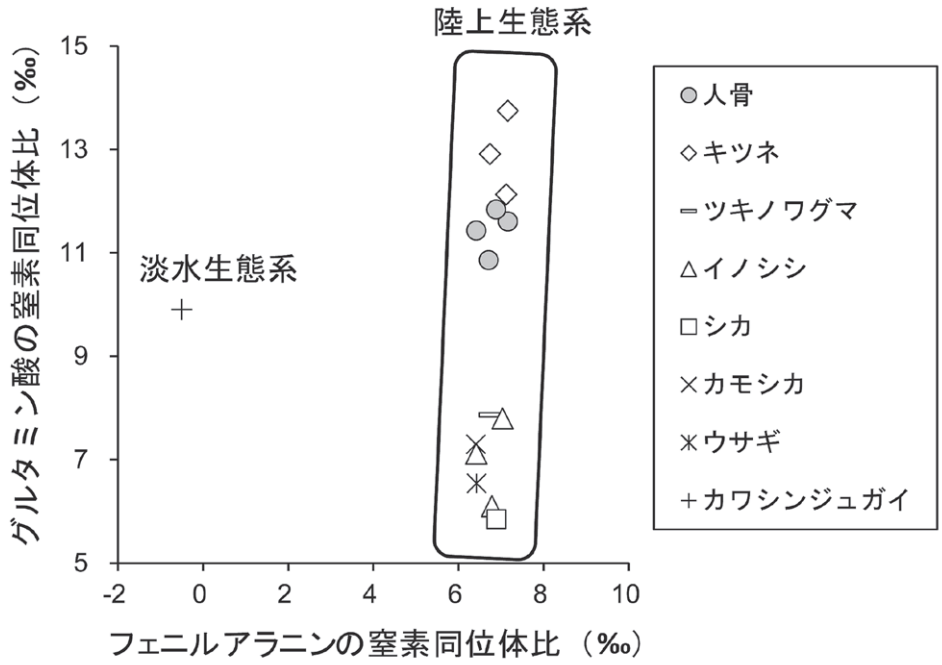


図２　古人骨・動物遺存体のアミノ酸窒素同位体比

彼（彼女）らは陸上の食資源に強く依存していたことが明白である。このことは、遺跡から陸上動物の骨が大量に出土している事実や、先行研究であるコラーゲンタンパクの安定同位体比分析の結果と一致する。

しかし、陸上動物と同じく大量に出土したカワシンジュガイが人々の食資源として重要ではなかったという結果は、陸上資源が当時の人々にとっていかに食生活の中心であったかを物語るとともに、食料の内容に関して、出土した遺物の量から受ける印象と体内に吸収された食資源の比率には隔たりがあることを示唆している。

それでは、陸上生態系の中では、動物は食資源としてどの程度重要であったのだろうか？図２を再び見ると、人骨の値はシカやイノシシといった草食性の強い動物よりは、肉食性のより強いキツネの値に近いことが分かる。つまり、この人々は比較的キツネに近い雑食性を有していたことをこの結果は示している。ただ、キツネと比べると若干草食性の動物の方に値が寄っているということは、植物質食料もそれなりに寄与していたようだ。もう少し定量的に述べると、タンパク源として動物質食料が５～７割ほどを占めていたことが、人骨・動物骨のアミノ酸の窒素同位体比から推定できる。

以上の考察から、分析された人骨の主は基本的に陸上の食資源である「山の幸」に依存しており、動物質の寄与が比較的大きかったこと、また「川の幸」であるカワシンジュガイはほとんど寄与していなかったことが示された。この遺跡からはサケ属の椎骨も出土しており（藤森2011）、「海の幸」であるサケやサクラマスといった遡河性の魚種も当時の人々の食事メニューに載っていた可能性もある。魚骨については今後の分析が望まれるが、先述した人骨の陸上生態系への強い依存を考慮すれば、「海の幸」の寄与はあったとしても限定的であっただろう。

安定同位体比分析は先史人の食性に関して客観的・定量的な視点を提供する上でこの上なく強力なツールである。しかし、陸獣の中ではどの動物種が重要であったのか、といった具体的な食事メニューを復元できるほどの解像度は、少なくとも現時点ではもたない。今後は動物考古学や植物考古学といった分野との連携を深め、補完的・相乗的に先史人の食生活の実態に迫ることが益々重要になると考えられる。

引用文献

南川雅男：国立歴史民俗博物館研究報告，86，333(2001).
M. Yoneda et al.: Radiocarbon, 44(2), 549(2002).
Y. Chikaraishi et al.: Limnol Oceanogr: Methods 7, 740(2009)
大河内直彦・力石嘉人：　科学，81，201(2011)
大河内直彦・他：科学81，1116(2011)
Y. I. Naito et al.: Am J Phys Anthropol, 143, 31(2010)
藤森英二：信州の縄文早期の世界―栃原岩陰遺跡　（２011）

（内藤裕一：ドイツ・テュービンゲン大学）

栃原岩陰遺跡の哺乳類遺体

利渉幾多郎

哺乳類遺体の研究

1965年の本遺跡発見以降1978年までに15回行われた発掘調査で出土した哺乳類遺体は、宮尾ほか（1980）などにまとめられている。宮尾ほか（1980）では、本遺跡から出土した哺乳類遺体の総重量は231kgであり、それまでに分類された哺乳類遺体については、食虫目ではジネズミ（*Crocidura dsinezumi*）、モグラ（*Mogera wogura*）、霊長目ではニホンザル（*Mucaca fuscata*）、兎目ではノウサギ（*Lepus brachyurus*）、齧歯目ではリス（*Sciurus lis*）、ムササビ（*Petaurista leucogenys*）、ヤチネズミ（*Eothenomys andersoni*）、カゲネズミ（*Eothenomys kageus*）、ハタネズミ（*Microtus montebelli*）、アカネズミ（*Apodemus speciosus*）、ヒメネズミ（*Apodemus argenteus*）、食肉目ではツキノワグマ（*Selenarctos thibetanus*）、オオカミ（*Canis lupus*）、タヌキ（*Nyctereutes procyonoides*）、キツネ（*Vulpes vulpes*）、テン（*Martes melampus*）、イタチ（*Mustela sibirica itatsi*）、アナグマ（*Meles meles anakuma*）、カワウソ（*Lutra lutra*）、偶蹄目ではイノシシ（*Sus scrofa leucomystax*）、ニホンジカ（*Cervus nippon*）、カモシカ（*Capricornis crispus crispus*）の６目22種を報告している。

宮尾ほか（1984）は1983年に発掘調査が行われた区画から出土した自然遺物について報告し、その中で出土した哺乳類遺体については食虫目のヒミズ、霊長目のニホンザル、食肉目のツキノワグマ、オオカミ、アナグマ、偶蹄目のイノシシ、シカ、カモシカの４目８種を報告している。

哺乳類遺体の整理作業

Risho and Excavation group of the Tochibara rock shelter site（2003）は現在北相木村考古博物館に保管されている哺乳類遺体について整理作業を行い、それまでに同定した5133点の標本の予察的研究として、動物種や部位、出土レベルをまとめ、その層位的変化を明らかにした。

その後の哺乳類遺体の整理作業継続の結果、現在北相木村考古博物館に保管されている哺乳類遺体の総重量は約218kgであり、その出土レベル毎の分布が明らかになった（表１）。また整理作業の結果、これまでに同定できた標本は7327点で、重量の合計は約44.8kgであり、現時点で少なくとも霊長目１種、兎目１種、齧歯目３種、食肉目９種、偶蹄目３種の哺乳類遺体が含まれていた（表１）。その他の標本のほとんどは破損した骨片のため、種類の同定は困難であるが、このように哺乳類遺体の標本数が多い縄文時代草創期から早期にかけての遺跡として重要であることがわかる。出土した哺乳類遺体の概要を目ごとにまとめると次のようになる。

霊長目

霊長目に分類した標本は750点あり（うち８点は同定が不確実）、これらはすべてニホンザル（*Mucaca fuscata*）と同定した。標本数では全体の約10％を占め、哺乳類17種の中で３番目に多い。主にⅠ区～Ⅳ区の-200cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-280～--340cmと-440～--540cmから特に多く出土している。

兎目

兎目に分類した標本は558点あり、これらはすべてノウサギ（*Lepus brachyurus*）と同定した。標本数では全体の約7.6％を占め、哺乳類17種の中で４番目に多い。主にⅠ区～Ⅳ区の-240cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-420～--560cmから特に多く出土している。Ⅴ区からは遊離歯が１点出土しているのみである。

齧歯目

齧歯目に分類した標本は196点あり、標本数では全体の約2.7％である。これらのうち、ニホンリス（*Sciurus lis*）50点、ムササビ（*Petaurista leucogenys*）141点、アカネズミ（*Apodemus speciosus*）１点が種レベルまで同定でき、目レベルまで同定できたものは４点あった。これらの標本はすべてⅠ区～Ⅳ区から出土し、Ⅴ区からは出土していない。

ニホンリスは-220cm以下のレベルから出土しているものの、その多くは-360cm以下、特に-440～--540cmから出土している。標本の多くは頭骨や下顎骨および遊離歯で四肢骨は10点のみである。

ムササビは-360cm以下、特に-440～--540cmから出土している。様々な部位が出土し、四肢骨の割合が多い。

アカネズミは-400cmのレベルから切歯と大臼歯の植立した右下顎骨が１点出土したのみである。

齧歯目（科、属、種は不明）とした標本は４点のうち３点が切歯で、１点は寛骨であり、いずれもⅠ区～Ⅳ区の-380cm以下のレベルから出土している。

宮尾ほか（1980）で報告されているその他の齧歯目の標本については、現在北相木村考古博物館に保管さ

れていることを確認することができなかった。今後とも整理作業を継続させ、貴重な標本の保管に努めていきたい。また周辺地域で発掘調査が行われたノンコ岩では小型哺乳類遺体の出土数が多いことから（那須ほか，2011）、当時の発掘調査では小型哺乳類遺体の採取に適切な0.5㎜程度の細かなフルイによる水洗作業（河村，1992）を行っていなかったため、本遺跡から出土した小型哺乳類遺体の割合や種類数が少ないことも推察される。

食肉目

食肉目に分類した標本は872点あり（うち37点は同定が不確実）、標本数では全体の約12％を占める。これらのうち、ツキノワグマ（*Ursus thibetanus*）529点、キツネ（*Vulpes vulpes*）52点、タヌキ（*Nyctereutes procyonoides*）16点、イヌ（*Canis familiaris*）６点、オオカミ（*Canis lupus*）２点、テン（*Martes melampus*）192点、イタチ（*Mustela itatsi*）１点、アナグマ（*Meles meles*）55点、カワウソ（*Lutra lutra*）19点が種レベルで同定できた。

ツキノワグマの標本は529点あり（うち19点は同定が不確実）、食肉目の中で最も多く、哺乳類17種の中でも５番目に多く、主にⅠ区～Ⅳ区の-200cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-260～-360cmと-400～-540cmから特に多く出土している。

キツネの標本は52点あり（うち３点は同定が不確実）、主にⅠ区～Ⅳ区の-240cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-380～-540cmから特に多く出土している。

タヌキの標本は16点あり、主にⅠ区～Ⅳ区の-240cm以下のレベルから分散して出土している。様々な部位が出土しているが、椎骨と四肢骨の割合が多い。

イヌの標本は６点あり（うち２点は同定が不確実）、Ⅰ区～Ⅳ区の-340～-520cmから出土している。部位は環椎と軸椎および尺骨のみで、現在の中～大型犬と同じ程度の大きさの標本である。なお、宮尾ほか（1987）で報告されている左上顎犬歯の標本は確認できていない。

オオカミの標本は２点あり、Ⅰ区～Ⅳ区の-100～-150cmから出土した右下顎第一大臼歯とⅠ区～Ⅳ区の-400cmから出土した踵骨のみである。これらの標本については宮尾ほか（1984）で報告されているが、宮尾ほか（1984）で報告されている残りの歯の標本７点については確認できていない。

テンの標本は192点あり（うち１点は同定が不確実）、主にⅠ区～Ⅳ区の-220cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-260～-320cmと-440～-540cmから特に多く出土している。

イタチの標本は出土区画とレベルが不明の左下顎骨が１点のみである。

アナグマの標本は55点あり（うち１点は同定が不確実）、Ⅰ区～Ⅳ区の-220cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-440～-540cmから特に多く出土している。

カワウソの標本は19点あり（うち11点は同定が不確実）、Ⅰ区～Ⅳ区の-220cmのレベルから左下顎骨が１点出土している他はすべて-420～-540cmから様々な部位が出土している。

偶蹄目

偶蹄目に分類した標本は4951点あり（うち157点は同定が不確実）、標本数では全体の約68％を占める。これらのうち、イノシシ（*Sus scrofa*）1095点、ニホンジカ（*Cervus nippon*）3552点、カモシカ（*Capricornis crispus*）304点が種レベルで同定できた。

イノシシの標本は1095点あり（うち40点は同定が不確実）、哺乳類17種の中で２番目に多く、主にⅠ区～Ⅳ区の-140cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-220～-340cmと-380～-540cmから特に多く出土している。

ニホンジカの標本は3552点あり（うち93点は同定が不確実）、哺乳類17種の中で最も多く、標本数の約48％を占める。主にⅠ区～Ⅳ区の-140cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-220～-340cmと-360～-560cmから特に多く出土している。

カモシカの標本は304点あり（うち24点は同定が不確実）、主にⅠ区～Ⅳ区の-180cm以下のレベルから様々な部位が出土し、-280～-540cmから分散して出土している。

哺乳類の構成をみると、食虫目や翼手目など小型哺乳類の出土がなく、齧歯類の種類も少ないのは、前述したように発掘調査の方法によるものと考えられる。そのほか日本では絶滅したオオカミとカワウソを除けば、現在栃原岩陰遺跡周辺に生息する哺乳類と構成は同じであり、当時も現在と似たような山間部の森林の環境であったことが考えられる。

一方、遺跡から出土した当時の狩猟対象であった哺乳類としてその出土数をみると、ニホンジカ、イノシシが桁違いで多く、そうしたより体の大きな哺乳類が狩猟対象の中心であったことが考えられる。

哺乳類遺体の整理作業を通して

哺乳類遺体の整理作業を通して感じたことは、その種類数や標本数、そして膨大な量である。哺乳類遺体以外の遺物も大量であり、遺跡の時代を考慮するとなお貴重な存在であると感じるとともに、今後の様々な研究や学際的な研究によって当時の人の生活が復元されると思うと作業が楽しく感じられた。実際の作業は地味で労力も膨大であるため単調な作業が続くこともあったが、北相木村での多くの方々との出会いがあり、そして協力や配慮をいただくことで、整理作業を続け

一段落させることができた。

整理作業の中で出土した骨片を観察していると解体痕を見つけることがある。その痕跡の方向や数、骨片の動物種や部位そして形状等を考えながら痕跡が残された状況を再現していると、ふと自分が縄文人と同じ動作をしているのだろうと気がつく。当時の狩猟や解体の風景を想像し、また当時の気候や地形といった環境も考えることで、あたかもその場に自分もいるような感覚を持つと同時に、縄文人のその時の気持ちを少し推測できたかもしれない。そうしてまた標本の山に目を向けると、その一つ一つが断片的ではあっても確かな証拠を残していると思うようになり、整理作業の後の研究の積み重ねによって当時の人の暮らしがより詳細に明らかになっていくことを待ち遠しく感じるようになった。

文献

河村善也（1992）小型哺乳類化石標本の採集と保管．哺乳類科学31, 91-113.

宮尾嶽雄・西沢寿晃・鈴木茂忠（1980）早期縄文時代長野県栃原岩蔭遺跡出土の哺乳動物，第１報出土哺乳動物相．哺乳動物学雑誌，８，５, 181-188.

宮尾嶽雄・相見満・西沢寿晃（1984）動植物遺存体．栃原岩陰遺跡発掘調査報告書―昭和58年度―．43-60.

宮尾嶽雄・西沢寿晃・花村　肇・子安和弘（1984）早期縄文時代長野県栃原岩蔭遺跡出土の哺乳動物，第７報オオカミの骨と歯．成長，23, ２, 40－56.

宮尾嶽雄・西沢寿晃・花村肇（1987）早期縄文時代長野県栃原岩蔭遺跡出土の哺乳動物，第６報イヌおよび中・小型食肉類．長野県考古学会誌，53, 24－38.

那須浩郎・利渉幾多郎・中川良平（2011）ノンコ岩１岩陰遺跡2008年度フローテーションの概要および微小動植物遺体の分析結果．人類誌集報2008・2009，首都大学東京考古学報告，13, 27-39.

Risho, I. and Excavation Group of the Tochibara Rock Shelter Site（2003）Stratigraphic Distribution of Early Holocene Mammals from the Tochibara Rock Shelter Site, Kita-aiki, Nagano Prefecture, Central Japan. Jour. Geosci., Osaka City Univ., 46 , 93-114.

（名古屋市立向陽高等学校）

表１　種類の同定ができた哺乳類遺体の調査区画・レベル別標本数と出土標本の総重量

区画→	Ⅰ－Ⅳ												
種類(和名・学名)　出土レベル(cm)→	0～	-100～	-120～	-140～	-160～	-180～	-200～	-220～	-240～	-260～	-280～	-300～	-320～
霊長目　Order Primates													
ニホンザル　*Macaca fuscata*	－	－	－	－	－	－	4	9	13＋1？	23	53	52	45＋1？
兎目　Order Lagomorpha													
ノウサギ　*Lepus brachyurus*	－	－	－	－	－	－	－	－	2	3	4	3	－
齧歯目　Order Rodentia													
ニホンリス　*Sciurus lis*	－	－	－	－	－	－	－	1	2	2	－	－	1
ムササビ　*Petaurista leucogenys*	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
アカネズミ　*Apodemus speciosus*	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
齧歯目(科･属･種不明)　Rodentia,fam.,gen.etsp.indet.	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
食肉目　Order Carnivora													
ツキノワグマ　*Ursus thibetanus*	－	1	－	1	－	－	1	3	1	7	7	12	12
キツネ　*Vulpes vulpes*	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	2＋1？	－	1
タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－
イヌ　*Canis familiaris*	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
オオカミ　*Canis lupus*	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
テン　*Martes melampus*	－	－	－	－	－	－	－	2	－	8	4	11	1
イタチ　*Mustela itatsi*	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
アナグマ　*Meles meles*	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
カワウソ　*Lutra lutra*	－	－	－	－	－	－	－	1？	－	－	－	－	－
偶蹄目　Order Artiodactyla													
イノシシ　*Sus scrofa*	2	－	－	1	4	2	19	47＋1？	38＋1？	34＋2？	19＋2？	44＋1？	17＋4？
ニホンジカ　*Cervus nippon*	8＋3？	8＋1？	－	19	5＋1？	3＋1？	27＋3？	105＋2？	94＋3？	97＋5？	83＋4？	161＋4？	115＋5？
カモシカ　*Capricornis crispus*	1	1	－	－	－	2	1＋1？	3	5	3＋2？	10＋3？	12＋2？	7＋1？
同定標本の重量(g)	57.6	120.0	－	195.6	74.6	54.9	392.4	1788.6	1332.4	1623.9	1235.6	2181.8	1452.4
出土標本の総重量(g)	253.8	136.7	16.8	313.2	218.7	326.4	1696.9	6326.0	6410.6	9282.1	5925.9	8967.3	7792.7

Ⅰ－Ⅳ														Ⅴ	区画・レベル不明	合計
-340～	-360～	-380～	-400～	-420～	-440～	-460～	-480～	-500～	-520～	-540～	-560～	-580～	不明			
24	24	35	21＋1？	25＋1？	60＋1？	79	56＋2？	88	66	8	－	－	12	12	33＋1？	742＋8？
1	2	5	7	18	38	66	82	97	53	15	－	－	6	1	155	558
1	－	－	－	－	5	4	13	5	8	1	1	－	2	－	4	50
－	2	－	2	4	30	18	37	25	12	2	－	－	5		4	141
－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1
－	－	1	－	－	1	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	4
7＋1？	2＋1？	10＋1？	26	40＋3？	77	57＋1？	88＋3？	89＋4？	29	5	－	－	14	11＋2？	10＋3？	510＋19？
－	－	2	2	3	3	4	14＋1？	4	4	－	－	－	1＋1？	2	5	49＋3？
－	2	1	－	－	1	2	1	1	2	－	－	－	1	1	2	16
1？	－	－	－	－	1	－	2	1＋1？	－	－	－	－	－	－	－	4＋2？
－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2
1	1	－	3	4＋1？	10	14	44	30	28	1	1	－	12	10	6	191＋1？
－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1
2	1	1	2	3	11	9	6＋1？	9	5	－	－	－	－	－	4	54＋1？
－	－	－	－	1？	2＋2？	2＋3？	2	－	1？	－	－	－	－	－	2＋3？	8＋11？
33	12＋1？	95＋2？	42＋1？	67＋1？	117＋3？	117＋3？	69＋2？	77＋2？	51＋3？	32＋5？	1	－	19＋1？	29＋2？	67＋3？	1055＋40？
58	85＋4？	263＋3？	170＋2？	223＋1？	337＋5？	335＋7？	289＋3？	290＋3？	167＋9？	82＋7？	7＋1？	1	37＋4？	205＋3？	185＋9？	3459＋93？
9	9	45	8	19＋1？	18＋3？	18＋2？	34＋2？	26＋4？	18＋1？	5	－	－	8	8＋2？	10	280＋24？
1021.0	1064.6	2539.7	1559.2	2089.1	3567.8	3577.2	5316.2	4639.2	2343.4	918.9	41.1	35.2	664.7	2388.5	2512.5	44792.6
5154.3	6110.5	8724.3	5561.8	8551.0	11476.0	11289.7	16996.9	16183.9	7331.6	1525.1	142.7	35.2	732.2	26974.1	43725.6	218119.1

栃原岩陰遺跡出土土器の再整理を通じて
―これまでの経緯と今後の展望―

井出浩正

はじめに

本稿に与えられた役目は、筆者らが2007年から関わっている栃原岩陰遺跡出土土器の再整理を概略することである。整理作業はなお現在も進行中であり、今後更なる知見が得られることが予想されるため、主にこれまでの経緯と今後の展望を中心に触れてみたい。

栃原岩陰遺跡との関わり

いうまでもなく、栃原岩陰遺跡は佐久地方のみならず、県内屈指の洞穴・岩陰遺跡のひとつである。特に内陸遺跡にあって、骨角器や人骨、動物遺存体などの有機遺物が良好な状態で検出される稀有な例として、まさに「山国の貝塚」である。

佐久出身の筆者が、この資料に触れることとなったのは、北相木村坂上遺跡出土土器の見学の折に、藤森英二氏のご厚意によって、北相木村考古博物館（以下考古博物館と略記）の収蔵庫に眠る栃原岩陰遺跡出土資料を拝見したのがきっかけである。その頃既に、骨角器や動物遺存体、石器などは再整理が始まっていたものの、土器の本格的な再整理はさまざまな理由から未着手の状態にあった。その後、藤森氏の尽力により、土器の整理作業が実現段階に入ったことを聞きつけ、筆者も再整理作業の一人として参加することとなった。

再整理のはじまり

土器の再整理作業は2007年春から始まり、2007～2010年と2012年のこれまで５ヵ年にわたって継続的に実施されてきた。合宿は例年２月下旬～３月中旬の２～３日間程度。合宿先は考古博物館近くの民宿である。

再整理作業は、拓本と断面実測、そして基本データと観察所見の入力を中心に行っている。対象となる土器のほとんどは、既に水洗が終わった状態であり、一点ごとにチャック付きポリ袋に入れられた状態でコンテナ箱に収められているものもある。ポリ袋の中には土器の出土地区、出土層位、出土年月日、土器の型式名称等が記されたカードが同封されており、土器とカードの基本情報が対応する。一方、土器そのものに註記が施されたものは僅かである。そのため、再整理においては、カードと土器の対応関係が損なわれないよう、註記が無い土器には、便宜上の註記番号を付し、同様にカードに番号を記し、土器の対応関係が確認できるように処置したうえで、拓本や図化作業に着手した。

再整理の対象となったのは、Ⅰ区～Ⅳ区出土の土器とⅤ区出土の土器である。主に2007～2009年の整理作業においてⅤ区の出土土器を、2010からはⅠ区～Ⅳ区の出土土器を対象として進めている。これらの土器は、『長野県史』や『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書―昭和58年度―』などで扱われた資料も含まれてはいるものの、掲載対象外の土器を多く含む。特にⅤ区出土の土器は小破片であり、これまでデータ化が進んでいない資料であった。またⅠ区～Ⅳ区からの出土土器に関しては、2008年以降、に考古博物館に移管された資料が該当し、既報告分も含め、それらの全容を把握する必要があるものであった。

こうしたさまざまな経緯を経て、現在、再整理作業の対象となっている土器は、コンテナ箱約20箱分余り存在する。

再整理を通じて

５ヵ年の作業を経て、これまでにⅠ区～Ⅴ区に及ぶ約500点近くの土器の整理が進んでいる。ここでは、整理作業からの所見を着手順にⅤ区とⅠ区～Ⅳ区に分けて触れてみたい。

（１）Ⅴ区の概略

Ⅴ区に関する記載は、『長野県史』における西沢寿晃氏の記載や小松虔氏らの論考中に散見される。

Ⅴ区は栃原岩陰遺跡の当初の発掘調査区であったⅠ～Ⅳ区の東側の岩陰部分を調査するために追加設定された調査区である。1974年～1978年にわたって発掘調査が行われている。Ⅰ区～Ⅳ区と連続する地表であるが、Ⅴ区の地表面はⅠ区～Ⅳ区よりも175㎝高いと報告されており、約２ｍの堆積土（遺物包含層）が確認されている。表土から-200㎝付近からは石組炉と焼土が一箇所ずつ検出されており、それらの周辺には数箇所の灰層も確認されていることがわかる。その後発掘は「細かい岩の堆積が多くなり、遺物の出土もとぎれ、第Ⅰ区～第Ⅳ区の地域に崩落もしない」という理由から-240㎝で中止されていると報告されている。

Ⅴ区からの出土遺物は、土器、石器、人骨（KA-10号）などがある。土器は「押型文土器（主に楕円、山形文の順で格子目文は消失する）に縄文、撚糸文が共伴する。条痕、無文土器の比が多く、茅山式土器の類例もみられる」とあり、堆積は「上層に及び、やや新期に移行する様相もうかがえるが現在の調査段階では明言

できない」との指摘がある。また、小松氏はⅠ～Ⅳ区の下層においては格子目文を有する押型文土器が出土した一方で、Ⅰ区～Ⅳ区より高い位置に立地するⅤ区においては格子目文が未検出であったことを根拠に、押型文土器が格子目文から山形文、楕円文へと推移することを予測していたようである。

（２）Ⅴ区の再整理から

Ⅴ区出土土器の整理作業では、これまでに132点の土器を確認している。作業の途中ではあるが、これまでの経緯を踏まえ所見としてまとめておきたい。

132点の大別は押型文35点、条痕文37点、縄文24（表裏縄文１点含む）点、撚糸文７点、沈線文９点、無文17、不明３点である。Ⅰ区～Ⅳ区では少数であった条痕文および無文土器の割合が比較的高いといえる。また、土器の検出された深さから土器の垂直分布を鑑みると、押型文の出土位置は、縄文、撚糸文、条痕文、無文に比べるとより深い地点から出土している傾向にある。これらは既に小松氏が指摘しているが、再整理によっても追認することができた。また、押型文のうち格子目文も確認されなかった。

（３）Ⅰ区～Ⅳ区の再整理から

2010年から新たにⅠ区～Ⅳ区出土土器の整理作業が開始された。Ⅰ区からは表裏縄文、押型文、撚糸文、縄文、無文土器など、早期前半の土器群が多数検出されているほか、「相木式土器」が検出されている。特に表裏縄文から撚糸文に至るさまざまな文様のバリエーションが混在することが特徴である。

これまでのところ、表裏縄文は単節、無節、多段などの種類が認められ、単節においてはLRが主体を占める。また、表裏とも同一の施文具を用いている傾向が高いが、回転方向においては外面と内面が一致しないケースも認められ、施文の際の縄の動き方の違いに由来することが想定される。口縁部破片においては、口唇部から口縁部にかけて連続的に施文される事例が多いことや、また刺突や粘土粒の貼り付け、原体圧痕などの装飾的要素が確認された。

粘土紐の接合面に縄文が施された事例が顕著であったことも付け加えておきたい。この点に関しては、「接合方法は擬口縁様をなすものが多く、（中略）中にはその擬口縁に縄文の施された例もある」と西沢氏が指摘しているが、整理を進める中で追認することができた。現状では「輪積単位縄文施文」と便宜上呼称することで共通認識としているが、他の遺跡の事例を参照し、いずれ的確な用語で示してゆきたいと考える。栃原岩陰遺跡の出土土器の主要部分を占める当該区域の土器を総括するうえで、一点一点丁寧にデータを積み重ねる必要がある。

今後の課題と展望

過去５年間の再整理においては、既存する報告資料の再確認からスタートした。Ⅴ区のように、データの補強の必要がある箇所については基礎データの蓄積を進めている。Ⅰ区～Ⅳ区のように、すでに先学によって部分的に成果が公開されている箇所については、記載内容の確認をしつつ、総括的な成果報告に向けた作業を進めている。今後はこうした経過を踏まえつつ、栃原岩陰遺跡全体を総括する報告書の基礎データの蓄積をさらに進めてゆく必要がある。

おわりに

発掘調査が各地で盛んに行われていた頃は、調査現場ではさまざまな大学の考古学生が入り混じって調査を行っていたものだと、先輩方から懐かしむように伺うことがある。ただ、近年は、かつてのような学生どうしの交流や情報交換の場が少なくなったかもしれないとも。

しかしながら、栃原岩陰遺跡の再整理作業においては、今もなお、大学や学年が異なる学生達が合同で合宿をしながら一緒に参加できる場を提供して頂いている。これは、北相木村教育委員会の協力と考古博物館の藤森英二氏の多大なるご尽力に他ならない。末筆ではあるが、この場を借りて深く感謝申し上げるとともに、栃原岩陰遺跡の研究が更に発展するべく、今後もメンバーの一員として加わってゆきたいと思う。

最後に、これまで土器の再整理に携わった人員を以下に挙げて本稿の結びとさせて頂きたい。

【参加者】岩井聖吾（2009・2010・2012）、新海達也（2007）、鈴木健太（2008）、鈴木達也（2012）、中門亮太（2008・2012）、長谷川陽（2007）、服部智至（2012）、平原信崇（2009・2010・2012）、井出浩正（2007・2008・2009・2012）

※敬称略・五十音順。名前の後の括弧内は参加年を示す。なお、参考文献は割愛した。

（東京国立博物館調査研究課）

2012年３月の整理作業風景

戸沢先生と栃原岩陰遺跡　結びにかえて

2010年９月、私の勤める北相木村教育委員会で、本号で取り上げた栃原岩陰遺跡に関するイベントとして「地域発元気づくり支援事業　栃原岩陰遺跡シンポジウム2010　ここまで分かった栃原岩陰遺跡」を開催した。

当日は大雨。人の出足は悪いだろう、参加者はせいぜい30名位か、というのが正直な予想であった。しかし時間が迫るにつて会場は人で埋め尽くされ、最終的には120名程が集まった。120という数字は、大きなイベントになれた場所ではなんてことはないだろうが、人口800人程度の村では、これは事件とも言えた。

この時、恩師である戸沢充則先生に講師をお願いした。お声がけをした当初は「その時期に元気だったら」という条件付きだったが、会期が近づくと、「おい、遺跡の資料を送ってくれ」という感じで、きっと来て下さると確信した。その講演会の時渡して頂いた先生直筆の原稿を、今、見直している。

講演の冒頭、先生が実は栃原岩陰遺跡の発見者である輿水利雄氏と遠い親戚関係にあり、遺跡の本格的な調査の前後、氏の案内で遺跡を訪れていたことを明かされた。その時から「信州の洞穴遺跡の里」という印象を持たれたという。

熱弁を振るう戸沢先生。参加者は魅了された。

120名の参加をみたシンポジウム。パネラー陣も豪華。

また先生は、栃原岩陰遺跡が「欠かすことのできない、縄文時代の歴史の宝」であり、さらに「世界遺産、仮称日本中部高地の縄文文化を構成する、重要な柱」であると、集まった人々の前で熱弁された。まことに先生らしい、夢と希望に溢れた言葉で、私は目頭が熱くなった。

2012年４月、戸沢先生が亡くなったという知らせを聞いたのは、その職場だった。今改めてこのシンポジウムを振り返り、先生の言葉を噛み締めている。

本号は異例の大増頁となったが、戸沢先生が遺して下さった思いに少しでも近づこうとした結果とも言える。佐久考古学会の活動をいつも褒めてくれた先生に、感謝の思いを込めて。そして、遺された私たちが地域考古学の灯をともし続ける決意を持って、本号の結びとしたい。（藤森英二）

♪　編集後記　♪

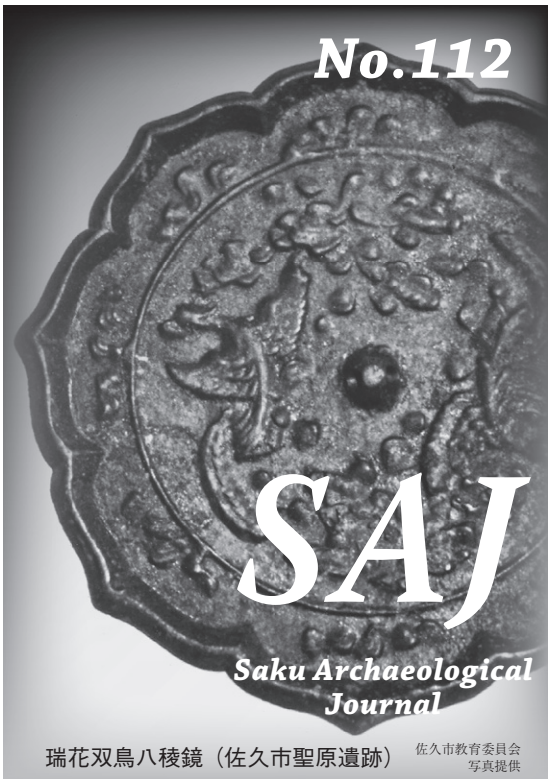
反則とも言える頁数で、半ば強引にやらせて頂いた『栃原岩陰遺跡特集号』。特集にあたり玉稿をよせて頂いた方々に、深い感謝を申し上げます。同時に、ここには名前を出せませんでしたが、これまでの整理作業に参加してくれた方々、皆さんがいなかったら、遺跡はまだまだ闇の中でした。本当にありがとうございます。未だ報告書のない当遺跡ですが、これからも皆様のお力をお借りして励みたいと思います。ということで、赤字覚悟の本号ですが、今後の学会運営のためにも、大いに、宣伝して下さいね。（藤森）

佐久考古通信　No.111

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
櫻　井　秀　雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2012年10月26日
発行者　藤　沢　平　治
編集者　藤　森　英　二
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク



瑞花双鳥八稜鏡（佐久市聖原遺跡）　佐久市教育委員会写真提供

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2014. 3. 25　佐久考古学会

■ 特集：古代佐久の金属製品

今回は、奈良・平安時代を中心とした佐久の金属製品を紹介する。

金属製品とはいっても、しばしば出土する一般の鉄製農具・工具などは除外し、蕨手刀、鏡、鉄鐸、鉄製焼印、銅印、梵鐘、三寅剣、火熨斗など、特殊な金属製品を紹介することにした。

桐原会員には、７世紀後半から８世紀に作られ、東日本に多く分布するという蕨手刀についての論考を、特別寄稿いただいた。長野県で発見されている蕨手刀は17あり、東山道沿いに分布するのが特徴であるという。御牧ヶ原の梵鐘、三寅剣などは、きわめて希少な文物といえるが、どのような理由でこの地方に残ったのだろうか。

蕨手刀の周辺

桐原　健

1

７世紀後半から８世紀に作られた蕨手刀は西に薄く東に厚い分布を示している。西国の蕨手刀は正倉院蔵の１点と島根・徳島・熊本・鹿児島出土の各１点で正倉院のそれは方頭立鼓柄の大刀と同じ櫃内に収納されていて黒作横刀と記されている。これらの黒作大刀は恵美押勝の乱に際し出蔵していることで実戦用の刀剣であることがわかる。(1) 両刃造りの反りがない短寸の石井昌国が云う第Ⅲ式で、点数が少ないがゴキブリ１匹を見つけたら最低10匹（100匹？）は隠れているとする説に従って西日本にはこの型式が広がっており、編年については型式学の面から鮴切先で刃長が長く柄身ともに反りの強い東北・北海道のⅠ式に先行する。

西日本と東北･北海道の中間にある東海道(11口)･東山道(34口)の内容は大まかに云って古墳からは両刃･短寸で単環単脚の足金物を付けたⅢ式が、古墳以外の遺構や出土遺構不明の中にはⅠ式や群馬・吉岡町出土の全長71.6㎝を計る毛抜形透しのある刀が存在する。

長野県で発見されている17口のうち、古墳出土６、単独出土４(うち２口は大石下出土)、全長60㎝をこえる刀は大林例、大門峠出土の刀は鋒両刃、源田谷地と古見立の足金物は單環單脚、かく見ると先行する時期にあって東海道は末端の常陸まで、東山道は毛野の国までが畿内型、後半に入ると東国型が中間地域に浸透していることがわかる。そして佐原眞の説 (2) に基づけば中間地域は刀剣を墳墓に副葬する辺鄙の地域に属している。

2

畿内の雲雀山や高山などの山寄せ古墳群では半数以上が出土品なしで存する古墳でも金環か刀子・鉄鏃の１・２点と葬送用の平瓶や長頸瓶、それに比べれば刀剣、帯金具が出土している東国の葬法は厚葬と云える。しかし古墳築造時の副葬品と比べれば遥かに少ない。

殊にも７・８世紀築造墳墓の石室規模は畿内のそれと等しく副葬品も亦寡少である。例としては岡谷・大久保Ｂ遺跡の火葬墳墓２基や平成16年調査の松本・鍬形原古墳が挙げられる。

3

長野県内の蕨手刀を集成して出土地域内にルート東山道の通過していることが目につく。

伊那谷からは３口があるが１口は明治年間の発見で、

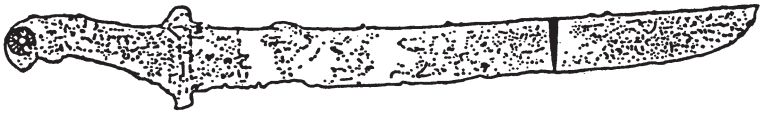


図１　英田地畑古墳出土の蕨手刀（『臼田町誌』より）

高遠町付近、２口は栗岩英治報文による。

共に現品はない。栗岩は飯伊の古墳地帯から５口の出土を述べているが仔細はわからない。松本平では栗岩が埴原古墳出土を報じている。筆者は鋒両刃の短寸刀を実見した記憶があるが蕨手刀ではなかった。諏訪から佐久へ抜けるところの立科・桐蔭寮上と赤沼平からも出土しているが、現物はない。善光寺平では長野・朝陽の北長池十二から出土している。

地表下１尺２寸、10坪ほどの範囲から炭や焼土、灰が多量にありその下から水差形の須恵器や多くの土師器皿が出土、それに混じって蕨手刀があった。栗岩は宅址としているが性格不明の遺構である。蕨手刀はⅢ式の短寸刀、足金物は双脚である[3]（第１表）。

となると、蕨手刀は信濃内の諏訪と佐久、殊にも佐久に多い刀剣であることがわかる。これは７・８世紀の立鼓柄刀でも云えることで諏訪では茅野・矢ケ崎の１口[4]しか知られていないが佐久には蕨手刀と共伴している２口や双脚の足金物が複数発見されている。即ち佐久には畿内・律令政府作の刀剣を所持する集団が存在していた。

4

７世紀後半、科野の国造制国造の地域は10分割され、うち７郡には旧国造の金刺、他田氏が郡司となっているが佐久郡司は仁寿３(853）年史料によると大坂氏がなっている。[5] 太田亮の『姓氏家系大辞典』によれば和邇（のち春日）氏40支族のうちにあって大和国葛上郡大坂郷（大坂山口神、大坂山口神社）を本貫とする。和邇氏は大王家と深い婚姻関係にあり早くから山背の地を抑えて東山・北陸に勢力を伸張させている。和邇部（丸部）の分布を見るに東山は美濃で止っている[6]が大和政権の東国経営を考えれば当然に信濃までは及んでいる。入信の時期は支族の活動時期が推古朝以後７世紀代と推測している。

佐久への進出は大和政権の東国経営と直接に係っているとみたい。信濃は畿内と東国の緩衝地域で両端には神坂・碓氷の２峠があり東国毛野と直接する碓氷は軍事的に重要である。その麓集落に当る佐久平に大和政権直属の氏族を配置したとする想像は許されはしないか。碓氷も神坂も大坂（巨坂）と呼ばれている。大磐石を立てて大型石室を作っている三河田大塚や板石による小石室内蔵の平根・内山の古墳群を構築した集団を大坂の地名を冠した軍事的氏族としたい気分がある。

ここで思われるのは佐久平の枢要な地点に６世紀中葉から11世紀に亙る長土呂・聖原遺跡出土金属器のあり方で、[7] 長野・南宮や松本の南栗・北栗・三の宮遺跡と比較しての印象は刀子・鉄鏃が異常に多いこと、これと同じ状況は西近津遺跡でも窺われている。

佐久平の東縁には大小７つの谷が口を空けている。旧南佐久の滑津川の谷には山寄せか小円墳の内山・長峯、平賀の姥石、月崎の古墳群があっていずれも小型箱形の石室を蔵しており、長峯６号墳から双脚足金物と鍬形鐺の付された刃長80㎝の大刀が出土している。[8]

谷口には273軒の住居址が調査されている樋村遺跡がありうち７世紀の住居址が33軒ある。出土金属器中には鉄鏃、刀子が在るに違いない。

滑津川より南に雨川の谷があり、11㎞溯れば田口峠で群馬県に通ずる。谷口には臼田、幸神古墳群15基と英田地畑古墳、千曲川の左岸には蛇塚古墳が築かれている。

英田地畑古墳は平夷されてしまって石室のみ残存、長さ2.1、幅1.1mの方形でこれに形ばかりの羨道が付いている。人骨１体と蕨手刀（図１）、全長46㎝の直刀、双脚足金物２点、鉄鏃10、三輪玉１、須恵と土師の坏各１点が出土している。[9]

蛇塚古墳は径10、高さ2.5mの円墳、長さ4.8、巾2.8mの箱形玄室で羨道長は1.9m。火葬骨１体と蕨手刀、直刀、鉄鏃が出土。直刀には双脚の足金物と鞘尻が付いている。

幸神古墳群は山寄せと径10m程の円墳で内部主体は小型箱形の石室、副葬品は直刀、短寸刀、刀子、鉄鏃、金環、切子玉、勾玉、須恵器で４号墳からは双脚足金物が出土している。[10]

雨川よりもう一つ南の抜井川の谷には武蔵・秩父までの武州街道が走っている。溯れば碓氷や入山、内山峠で松井田、安中、富岡に通ずる聖原・西近津・樋村遺跡と相通ずるものがある。東国への最前線に配された集団には戦斗的色彩が濃い。

佐原は東国では蕨手刀を墳墓に副葬したから出土点数は多いのだと云っている。刀剣副葬は辺鄙の陋習だとも受け取れかねない。佐原の推察には興趣を覚えるし先学による考察もある。考古学的考察と目に見えない部分についての推察の硲に蕨手刀はあるようだ。

註１　石井昌国『蕨手刀』 1966　桐原健「蕨手刀雑考」長野県考古学会誌　84・85　1998
註２　佐原眞「銅鐸と武器形青銅祭器」『三世紀の考古学』所収　1981
註３　桐原健「蕨手刀の祖型と性格」信濃28－４　1976
註４　宮坂光昭「茅野市矢ケ崎発見の太刀」長野県考古学会誌７　1969
註５　井原今朝男氏の教示による　福島正樹「信濃史料・長野県史と信濃の古代史」長野県立歴史館研究紀要18　2012
註６　岸俊男「古代豪族」『世界考古学大系３』所収　1959
註７　佐久市教育委員会『聖原』 2002
註８　佐久市教育委員会『長峯古墳群』 1988
註９　竹内恒「蕨手刀を出土した南佐久郡臼田町英田地畑古墳」信濃18－４　1966
註10　臼田町教育委員会『幸神古墳群』 1996

表１　信濃に現存する蕨手刀一覧

地域	出土地	刀剣	形状	出土状態	備考
諏訪	原村・八ツ手	蕨手刀	柄長 13.5、刃長 23.5cm 平造り	単出、土手中より発見	明治６年発見
	茅野・矢ケ崎	立鼓柄刀	柄長 12.5、刃長 41.0cm 方頭、双脚足金物２、付着	単出、偶然の発見	昭和 17 年発見
	諏訪・湖南・中塚	蕨手刀	柄長 12.0、刃長 34.5cm 切刃造り	円墳？より発掘されたという	
	諏訪・湖南・荒神山	蕨手刀	柄長 14.0、刃長 39.0cm 平造り 鵐目部位欠失	山寄せ古墳より出土 鉄鏃（飛燕形）和鏡伴出	和鏡は追葬
	岡谷・小坂・大林	蕨手刀	柄長 10.5、刃長 46.5cm 平造り	円墳出土といわれる 古墳という証拠は確かでない	付近より骨蔵器出土
小県	長和・大門峠	蕨手刀	柄長 12.8、刃長 36.3cm 鋒両刃	単出、出土状態は不明確	昭和 30 年発見 茅野、北山との郡境
	東御・禰津・古見立	蕨手刀	柄長 10.5、刃長 32.0cm、平造り 單環單脚の足金物２ケ	径 25 ｍの円墳より出土 横穴式石室、鉄鏃、刀子伴出	明治 25 年発見
佐久	小諸・北大井・源太谷地	蕨手刀	柄長 14.0、刃長 31.5cm、平造り 單環單脚の足金物２ケ	大石下より出土伴出遺物なし	源太谷地古墳群中にあり
	佐久・内山・長峯６号墳	太刀	茎部長 13.0、刃長 87.3cm双脚足金物２、鍬形鞘尻装着	山寄せ古墳 石室は小型箱形	
	臼田・法印塚・蛇塚	蕨手刀		径 10、高さ 0.8 ｍの円墳 石室は小型箱形	
	臼田・法印塚・蛇塚	直刀	方頭、双脚足金物鞘尻装着	径 10、高さ 0.8 ｍの円墳 石室は小型箱形	
	臼田・法印塚・英田地畑古墳	蕨手刀	柄長 12.0、刃長 36.5cm 双脚足金物２ケ装着	石室は小型箱形 短寸刀、三輪玉 須恵、土師器皿伴出	
水内	長野・朝陽・北長池	蕨手刀	柄長 12.5、刃長 38.5cm 山形双脚	遺構の性格不明	

海獣葡萄鏡

佐久地方において古代の青銅鏡は、３点ある。

佐久市の芝宮遺跡群は田切り地形の台地上に展開する大集落遺跡であるが、このうち遺跡を横断する大溝から海獣葡萄鏡が出土した。海獣葡萄鏡とは隋から唐時代の中国で発達したもので、背面の内・外区に葡萄唐草文を、内区に海獣を配していることからその名がある。

海獣はシシ、ヒョウなどの動物の特徴を持つ想像上の獣で、おそらく霊獣をあらわしたものといわれる。奈良県の高松塚古墳から出土したことでも有名な鏡である。日本には７世紀頃に伝来し、舶載品の他、国内でも生産も始まるようになる。

出土した大溝は７世紀後半以降の所産と考えられている。本例は溝の埋土中層からの出土であり、直径6.2㎝をはかる。表面の腐食が進み、文様は不明瞭である。鈕は獣が伏せたように見え、外区には菱草らしいものが見え、内区には４つの海獣らしいものが配される。

国内で大量生産された小型品であるが、完形品としては県内では唯一のものである。平安時代後期にこの大溝に廃棄されたものとみられている。　（桜井秀雄）

八稜鏡

八稜鏡とは鏡の周縁が８つに区切られ、菱花形をなすものである。背面には鳳凰などの鳥文や瑞花などの草花文を配する。

藤原道長が栄華を極めた平安時代10世紀末から11世紀初頭に流行した日本製の鏡である。

佐久市長土呂の聖原遺跡からは八稜鏡が出土している。11世紀前・中葉の竪穴住居跡から出土したもので、直径9.0㎝、厚さ0.45㎝をはかる。八稜鏡は鳥や花の様相からいくつかの種類にわかれるが、聖原遺跡のものは瑞花双鳥鏡である。

八稜鏡は、佐久穂町上畑の勝見沢からもみつかっている。これは昭和15年頃に採集されたものである。

地主が日向斜面の土手を崩していた際に焼土が現れ、土師器を伴う川原石の炉らしきものがみつかり、そこから鏡が出てきたという。瑞花鳳凰鏡である。

県内での八稜鏡の出土は約36遺跡・約46点を数える。鉄鐸とともに諏訪信仰との関連性を指摘する意見もある。　（桜井秀雄）

鉄鐸

鉄鐸とは、現在でも諏訪大社上社の神宝などに伝世しており、「御宝鈴」「佐奈伎鈴」などと呼ばれる神との契りを交わす誓約の鈴である。佐久においては４点が出土している。

小諸市御影新田の中原遺跡群では７世紀後半の竪穴住居跡から鉄鐸が出土している。県内では最古、唯一の古墳時代の出土例である。本体と舌がみられ、ともに鉄板をまるめ、本体は円錐形に、舌は棒状にそれぞれ形成される。長さ7.2㎝、直径の最大径3.2㎝をはかる。鐸本体に懸架のための加工はなく、舌を縛った紐でともに吊り下げたものと報告者はみている。

佐久市（旧臼田町）田口の幸神古墳群は12基の古墳が現存しているが、このうち幸神２号古墳から鉄鐸が出土している。長さ９㎝、直径１～1.5㎝の内部に縦0.6㎝、横0.9㎝の鉄の棒状舌がある。この古墳は７世紀後半の築造であるが、平安時代まで追葬が行われていたと考えられる。

同じく田口地区の宮東遺跡でも平成４年調査により10世紀初頭頃の竪穴住居跡から鉄鐸が出土した。住居跡中央の北側寄りの床面直上から出土したものである。

そして近年の発掘調査により南相木村大師遺跡からも鉄鐸の出土がみられた。10世紀の竪穴住居跡から発見されたものであり、長さ8.8㎝、直径1.8㎝をはかる。

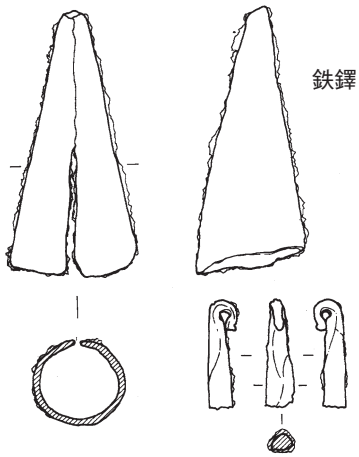
県内での発見例は約27遺跡、約110点を数える。なかには数点から十数点がまとまって出土する事例もあるが佐久においてはいずれも１点の出土である。また南佐久郡に多いのも興味深い。諏訪信仰との関連性を指摘する論もあり、また南相木村で発見されたことからすれば、あわせて交通路との関係で考えていく必要もあるのかもしれない。　（桜井秀雄）

焼印

古墳時代に大陸から移入された馬は奈良時代に入ると軍事用の騎馬や交通用の駅馬などに需要が高まり、馬の飼育と管理が重要視された。信濃国は16の御牧が置かれ貢馬は80匹を数えた。ともに全国最多の数である。佐久郡には望月牧、塩野牧、長倉牧という３つの牧が置かれた。牧の管理には馬を熟知した特殊技術が必要で、渡来系の人々の関与が想定される。望月の牧の比定地である旧浅科村には、渡来系とみられる八幡神社境内の高良社などもある。

海獣葡萄鏡　芝宮遺跡群（佐久市）

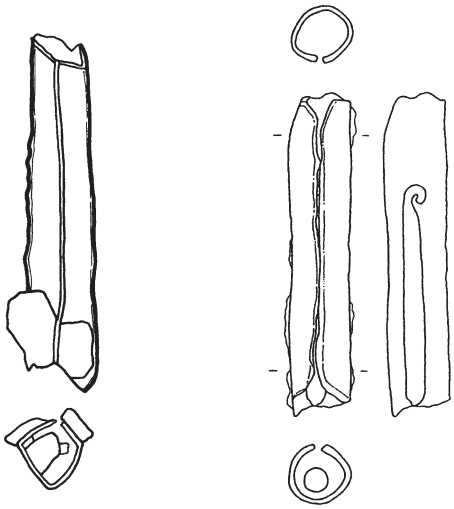
八稜鏡　聖原遺跡（佐久市）



鉄鐸　中原遺跡群
（小諸市）

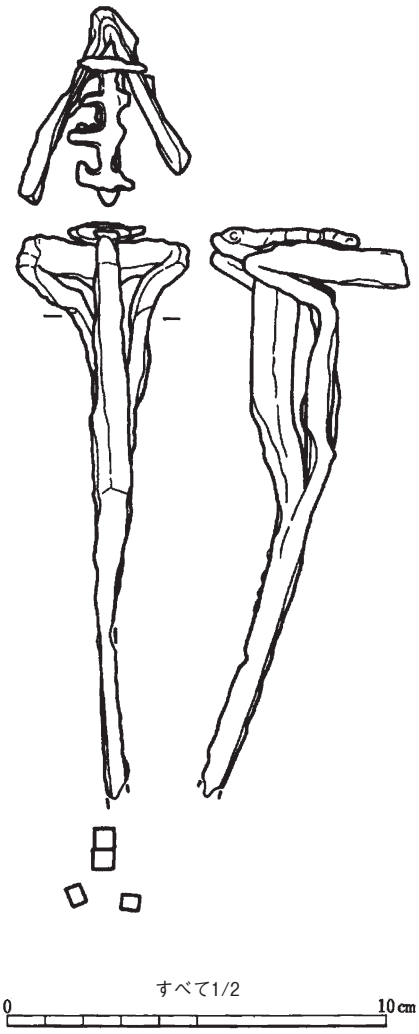
鉄鐸　幸神２号墳
（佐久市）

鉄鐸　大師遺跡
（南相木村）



佐久地方出土の金属製品

鉄製焼印　「金」　聖原遺跡（佐久市）



馬に関する考古遺物としては、佐久市長土呂の聖原遺跡で９世紀前半の住居跡から「金」と記された、馬に押す鉄の焼印が出土している。これは「金」という人物の所有馬を表す印であり、ここから「金」某という渡来系の人物の存在が浮かび上がってこよう。古代佐久の地に馬の飼育・管理に携わっていた渡来系の人物がいたことを示す注目できる発見である。最大長15.3㎝、厚さ5.2㎝、重さ68.0ｇをはかる。

なお、聖原遺跡からほど近い佐久市栗毛坂遺跡群からも同じく焼印状鉄製品が出土している。ただしこちらはＦ字状の印面となるものである。　（桜井秀雄）

銅印

現在、佐久地方で発見された銅印は２点。いずれも私印である。

１点は、明和３年（1766年）に佐久市臼田の個人宅で発見された伝世品で、方3.1㎝を測り、紐は有孔の菩紐で、印面には「物部楮丸」とある。時代は10世紀頃のものと見られる。

もう１点は、佐久市長土呂の西近津遺跡群の発掘調査時に、竪穴住居跡から廃棄されたような状況で出土した。方3.3㎝を測り、紐は有孔の菩紐で、印面には「鉾子私印」とある。印面に赤い顔料が残っており文書に朱印していたのであろうか。時代は９世紀頃のものと見られる。

ところで、どこでも誰でも簡単に印鑑が手に入るようになった現代社会においても、あえて書類に押印を求めるのは、その行為自体に文書が当人の意志に基づいて作成された事を証する意味合いがあるからである。

もちろん、文書内容の担保には自署するだけで充分なのだが、それに加えて自前の印、できれば印鑑登録を行った実印を押す事で、より強固な証拠になり得る。

古代における私印の用途は様々であろうが、例えば「鉾子私印」については赤い顔料が残っている事、また、出土した西近津遺跡群の周辺は古代の役所である佐久郡衙があった場所とされる事などから、役所に勤務していた「鉾子」なる人物が職務で公文書を作成した際、それを証する為に、この銅印を使用していた姿が思い浮かんでくる。　（高橋陽一）

梵鐘

佐久地域には、２つの古い梵鐘がある。

１つはかつて信濃最古とも言われてきたもので、小海町松原湖畔にある、通称「野ざらしの鐘」（国重要文化財）である。弘安２年（1279）の銘がある。もともとは佐久市落合の慈壽寺にあったが、延徳元年（1489）に武田信玄が佐久地域に乱入し、焼き払った慈壽寺から松原神社に寄進したとされる。

一方、昭和初年には、御牧ヶ原台地の佐久市蓬田から、鉄製の梵鐘が発見されていた。戦後になり、実見した梵鐘の研究家で坪井清足氏の父である坪井良平氏によると、銘はないものの、その型式から「野ざらしの鐘」よりも古く、平安前期のものであると考えられるという。

比較的小形の鉄鐘で、総高43.4㎝、竜頭高7.5㎝、肩以下の高さ34.4㎝、口径31.5㎝、撞座中心の高さが11.3㎝である。

竜頭は撞座と直行する古い特徴がみられ、周囲は袈裟襷を設けて４区分されている。乳は、半球上のものが３段３列に配される。撞座は表裏２箇所、大形で簡素な六葉素弁をなす。底部の駒の爪は、小さい。

やはり昭和52年には国重文化財に指定された。現在は佐久市個人宅で保管されている。

いずれの資料も、佐久の古代・中世を考えるのに欠かせないものと言えよう。　（藤森英二）

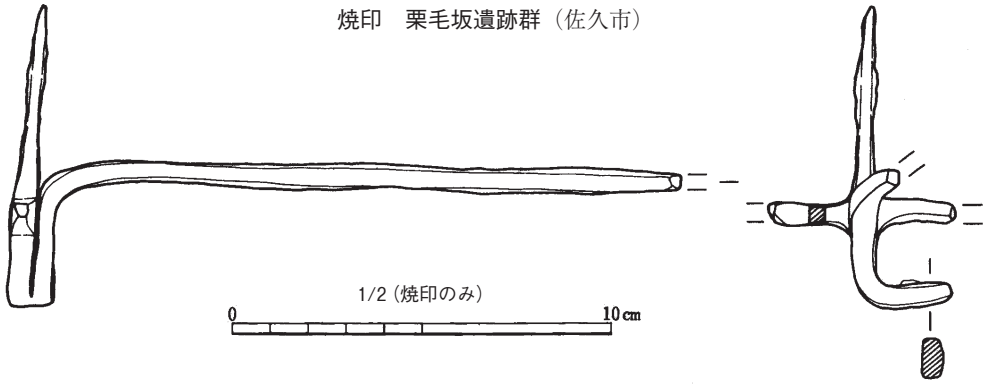
三寅剣

代々、小海町の松原諏訪神社神官である畠山家には、峯の部分に「三寅剣」と銘が刻まれた小刀が伝えられてきた。刃渡り25.4㎝、重さ151.72ｇのやや内にそっている。大正13年には「奈良時代の刀子（小刀）」と鑑定され、昭和13年には、国宝・重要美術品等調査委員の香取秀真氏がこれを見出している。ところが香取氏の死去や太平洋戦争の混乱で、この剣のことも忘れ去られようとしていた。

しかし平成５年、南佐久群誌考古編の指導に来ていた奈良大学の水野正好氏によって、再び取り上げられることになる。水野氏は大正13年の研ぎで見え辛くなっていた金糸・銀糸を見逃すことなく、日本でもまれに見る象嵌剣であることを確認する。

この三寅剣には、鉄製の刀身に金・銀による象嵌が施してある。国内での象嵌剣は他にも十数点が確認されているが、金・銀をどちらも使用しているのは本剣のみのという。象嵌された模様は、仏界の四天王（うちはっきり残っているのは剣の下にある多聞天と持国天、北斗七星などの星座、９文字の梵字真言で、三寅剣の名は棟に銀象嵌ではっきりと記されている。

焼印　栗毛坂遺跡群（佐久市）



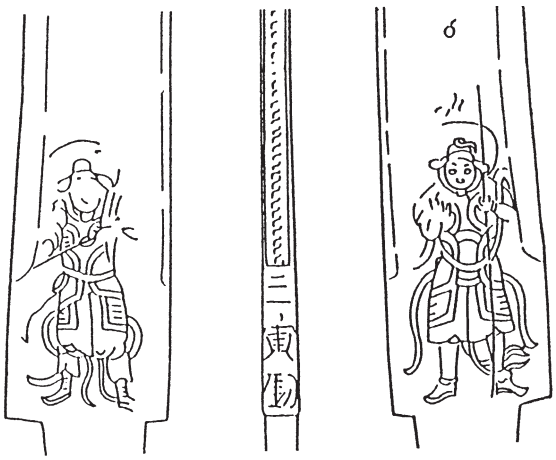
銅印印影　物部楮丸

銅印印影　鉾子私印
西近津遺跡群（佐久市）

鉾子私印
（長野県立歴史館写真提供）

御牧ケ原の鉄製梵鐘

これらの文様や字体は、飛鳥・奈良時代の特徴を示しており、その内容も仏教や道教の思想の現れで、邪気を祓う護身の剣と言えよう。



三寅剣の象嵌

この剣がなぜ松原の畠山氏に伝わっていたのか、明確な理由は分かっていない。足利氏の重臣であった伴野氏が郷社である松原に納めた、三重塔を造ったとされる源頼朝の家臣畠山重忠が持ち込んだ、信玄の正室である三條夫人が護身用として都から持参し寄進した、といった諸説がある。いずれも松原諏訪神社と所縁のある有力者を、その由来に挙げている。

現在もこの剣は畠山家にあるが、精巧なレプリカが松原神社にほど近い小海町観光案内所（キャリフールセンター）に展示されている。　（藤森英二）

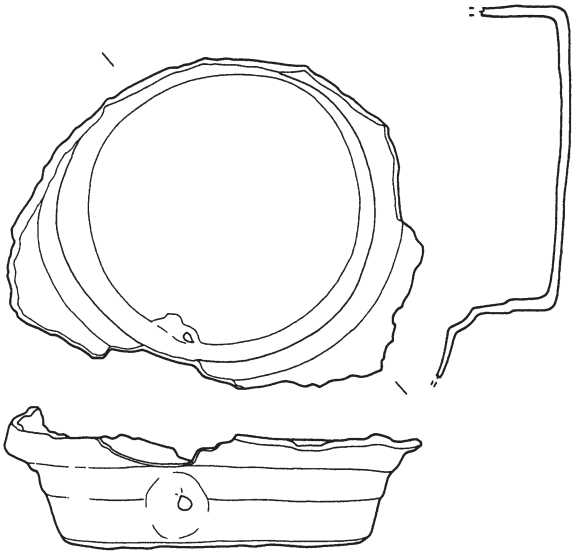
火熨斗（ひのし）

銅製の火熨斗が御代田町川原田遺跡の10世紀初頭とみられる平安時代住居から発掘されている。底径８㎝ほどである。

火熨斗は、古代のいわばアイロンであるが、国内でも当該期のものは20例を超えず、県内ではこれ１例のみで、希少性の高い非日常的用具といえる。

川原田の集落は、「大平寺」の墨書土器の出土にもあるように、古代寺院と結びついて成立している可能性が高く、その非日常性も頷ける。

こうした銅の火熨斗は、その希少性から半島の製品であることも考えられたが、東京国立文化財研究所（当時）平尾良光氏の蛍光Ｘ線分析により、純銅製というより銅と鉛とヒ素が加えられたもので、日本産の鉛を使用していることが明らかになった。



川原田遺跡の火熨斗（1/2）

大師遺跡発掘調査報告書〈平安時代編〉刊行！

鉄鐸などの出土した南相木村大師遺跡の発掘調査報告書〈平安時代編〉が、2013年３月南相木村教育委員会より刊行された。

土器では、灰釉陶器などのほか、甲斐型の坏・甕などもみられ他地域との交流の様子も明らかになった。

ここでは、10世紀初めの平安時代の住居４軒が発掘され、カマド内の土の水洗選別によって、イネ、キビ、アワ、オオムギ、コムギなど栽培種の穀物と、果実であるモモとが得られた。

◆Ａ４／上製本／カバー装丁／48頁／1200円
◆南相木村教育委員会にて頒布
◆電話　0267-78-2433

♪　編集後記　♪

膨大な発掘調査報告書が本棚からあふれ出ている。その収納にお困りの方ばかりではないだろうか。今では古書店も引き取ってはくれず、さりとて捨てるにはしのびない。家族からも非難続出である。家が本の重さで傾いたという例も聞いた。

本をバラして、ＰＤＦ化（自炊）する方もいるという。膨大な手間もかかる。「長野県遺跡リポジトリ」という便利なＷｅｂサイトがあり、主要な発掘調査報告書のPDFがダウンロードできる。

長野県遺跡リポジトリ http://rar.nagano.nii.ac.jp/

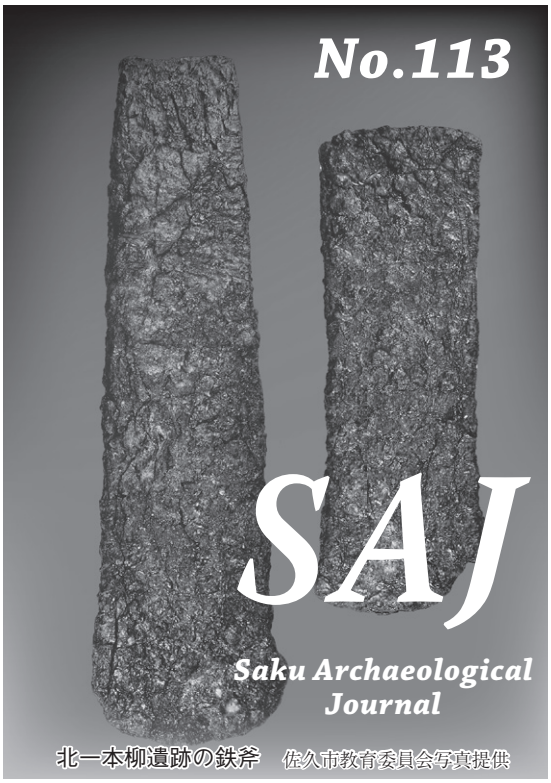
（つつみ）

佐久考古通信　No.112

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2014年３月25日
発行者　藤　沢　平　治
編集者　堤　　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク



北一本柳遺跡の鉄斧　佐久市教育委員会写真提供

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2014. 8. 28　佐久考古学会

■ 特集：北一本柳遺跡の韓半島南部産の板状鉄斧をめぐって

紀元前２世紀末～４世紀にかけて韓半島南部の三韓の一つ弁辰（弁韓）の状況を記した魏志東夷伝の“弁辰”条に「国出鉄、韓濊倭皆従取之；（訳）（弁辰）国は鉄を出す。韓･濊･倭は皆従い之を取る」とある。「市場での売買では鉄が交換されており、それは中国での金銭使用のようであった。」とも記される。佐久市北一本柳遺跡出土の板状鉄斧は、三国志記載の弁辰から弥生時代後期の佐久にもたらされた可能性が強い。

これをめぐって、本号では森泉かよ子・冨沢一明・小山岳夫会員と高久健二氏、石川日出志氏の５人が検証する。

佐久地域北部で最大級の環濠集落を有する北一本柳遺跡

小山　岳夫

遺跡は、佐久盆地の湯川沿いに展開する岩村田遺跡群の西端にある。この地域には弥生中期後半栗林期の竪穴住居址が今までに279軒発見された巨大集落址が存する西一本柳・北西の久保・五里田遺跡が連なっており、北一本柳遺跡はその東に接する。

北一本柳遺跡には栗林期の遺構がなく、集落が営まれた主な時代は古墳時代に接近した弥生後期後半である。部分的な調査しかなされていないため詳細は不明であるが、佐久地域北部で最大級と目される環濠集落の存在が推定されている。北一本柳遺跡の環濠集落から西側に50m離れた場所にあたる西一本柳遺跡でもほぼ同時期の大きな環濠集落が営まれていたことがわかっており、この地域では、古墳時代前夜に佐久地域北部の中でも大きな環濠集落が併存あるいは連続して営まれたことが判明している。

今回､焦点を当てる北一本柳遺跡出土の「板状鉄斧」は、弥生時代後期後半佐久地域北部で最も大きな環濠集落内に建造された竪穴住居の中でも最大級の大きさをもつＨ33号住居址から発見された。以下に、その発見の状況、時期・年代、佐久地域の弥生鉄器の出土状況、韓半島の類例、来歴などを探ってその意味付けを試みる。

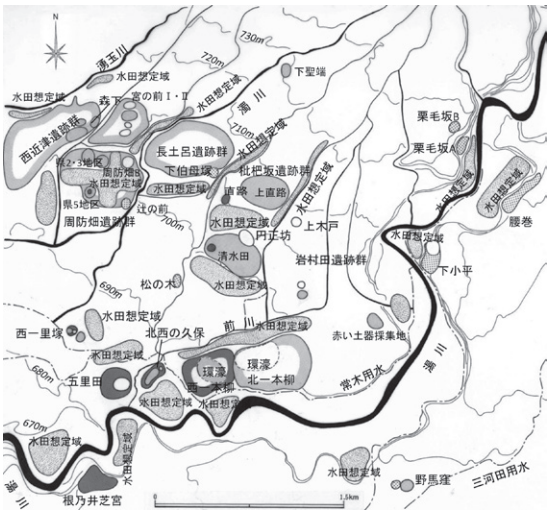


図1　佐久地域北部 弥生後期遺跡分布図

板状鉄斧を出土した北一本柳遺跡Ⅲと H33号住居の概要

森泉かよ子

遺跡の概要

北一本柳遺跡は、佐久市北部の岩村田にあり、東西に蛇行して流れる湯川の左岸、北の台地上にある。

浅間山南麓の田切地形末端にあたり、南は湯川により浸食をうけ断崖となっている。

この一帯は昭和43年から東一本柳遺跡、46年東一本柳古墳、47年に北一本柳遺跡Ⅰの発掘調査が行われ佐久の発掘調査が最初に行われた所である。

西隣にある西一本柳遺跡は現在ⅩⅧ次まで調査がなされ、弥生中期から中世まで連綿と遺構がみられる佐久でも有数の遺跡である。

北一本遺跡Ⅲは平成18年から４年間にわたって原東１号線の道路開設に伴う発掘調査がなされ、弥生後期・古墳後期・中世の遺構が検出されている。竪穴住居址は弥生時代後期48棟、古墳後期11棟、中世57棟、掘立柱建物址は古墳後期１棟、中世９棟、土坑は弥生後期が７基、中世303基で井戸址を両時代にふくむ。溝は弥生後期11本あり、７本が環濠とみられる。その内環濠のM16・M17・M20は切りあいをもち、新しい順にM17→M16→M20となり、M16はM20を埋めて、新たに南北方向の環濠を掘っている。

また東側ではM26がM27を切って新たな深い環濠をもうけている。部分的で推測の域をでないものの、M16と関連し、細長くなったH61号住居、またはより方形化したH56号住居等を囲んでいる。東西165mを測り、16棟の住居址が重複せずに同時期の土器を出土している。このうち２棟が焼失家屋で、H51号住居とH56号住居である。環濠のM16は最大幅310cm、深さ165cm、M26は最大幅260cm、深さ117cmを測る。

H51号住居は長軸残長で821cm、短軸長545cm、推定で864cmを測る長方形の住居址である。ここから出土した炭化豆はＡＤ121-ＡＤ238という年代を放射性炭素年代測定の暦年較正年代をえている。

H56号住居の壺から出土した炭化米は、ＡＤ126-ＡＤ248という年代であり、ほぼ近い値であることから、これらの住居址は２世紀前半中頃から、３世紀中頃といえる。

H56号住居の炭化米が入っていた壺は、赤色塗彩され、胴上部は球胴化し、胴下位に稜線をもつ。少し反って底部に至るものである。また大形の壺は口縁が短く強く外反し、頸部の文様が櫛描簾状文と赤色塗彩の帯びをほどこしている。小山編年の弥生後期箱清水後半にあたる土器群である。高杯の低脚化は見られるが小型の器台・高杯は出土していない。H33号住居は、H51・H56号住居より西のブロックにあり、床下には古い住居プランがあって、拡張がなされたことが窺える。この住居は南が区域外であり、北側の1/3を調査したのみで、全長はわかっていないが、短軸長747cmを測り、本遺跡北一本柳遺跡Ⅲでは最大規模とみられる。

鉄斧は北西隅の壁の窪みに２本重なって出土している。

鉄斧は長いものが長さ18.6cm、幅4.6cm、厚さ1.0cm、407ｇ、短いものが長さ13.2cm、幅4.6cm、厚さ1.0cm、196ｇを測る。

土器の杯類は赤色塗彩され口縁が内湾する。炉に使用された壺胴下部は外稜をもたずに内湾気味に底部に窄まる。土器は良好なものはないが小山編年弥生後期箱清水後半とみられる。

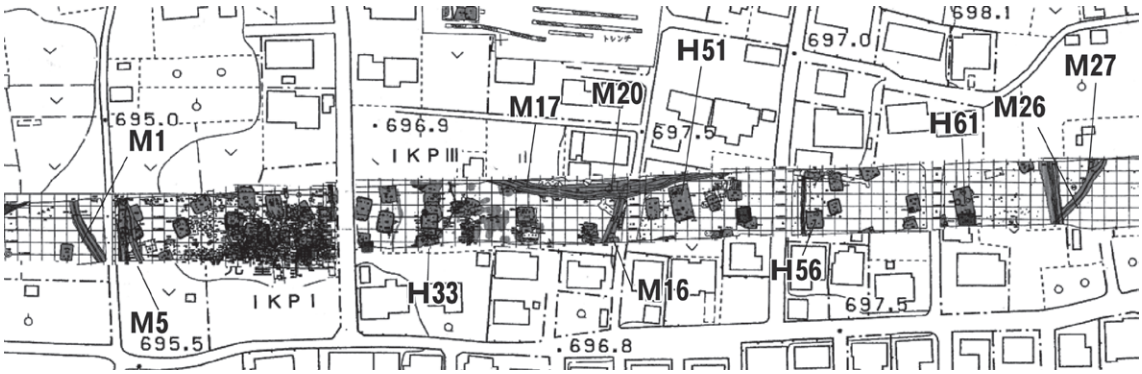


図１　北一本柳遺跡Ⅲ　全体図（1:2,000）

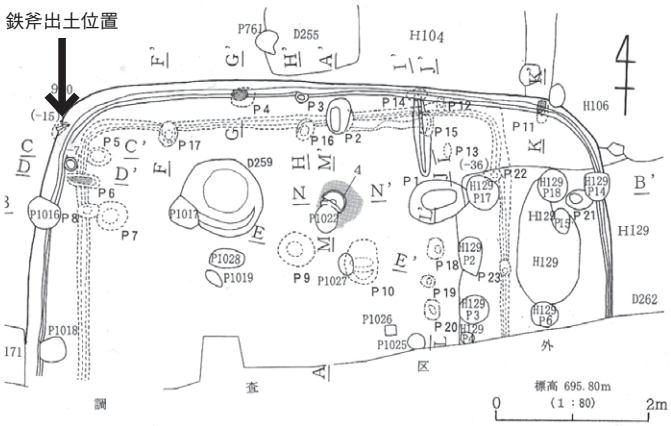


図２　H33号住居

写真Ⅰ　H33号住居　西より

写真２　H33号住居　鉄斧出土状況

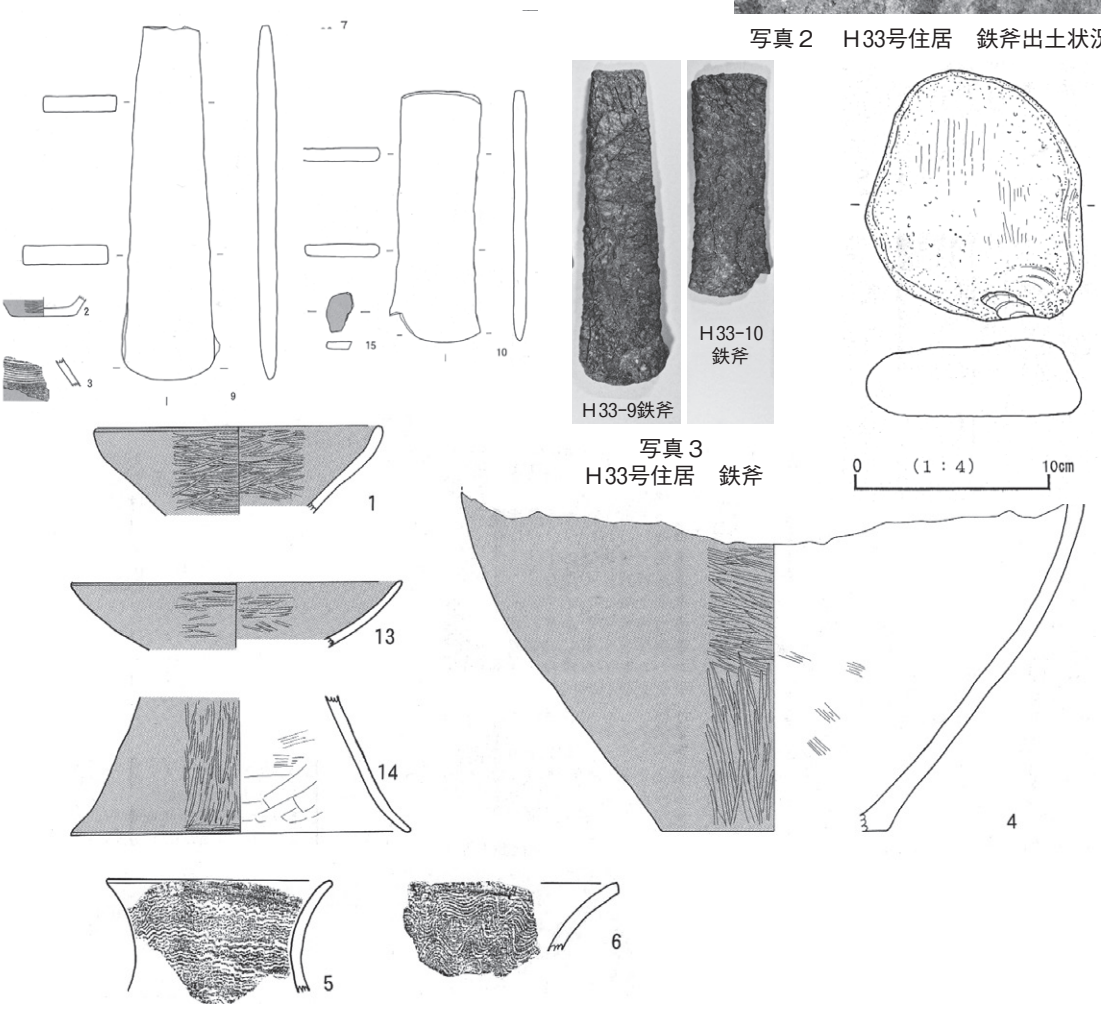


写真３
H33号住居　鉄斧

図３　北一本柳遺跡Ⅲ　H33号住居出土遺物

佐久地域における弥生時代の出土金属製品について

冨沢　一明

佐久地域は上信越自動車道の建設工事を皮切りに、長野新幹線、幹線道路網の整備、今また中部横断道の建設など1990年代から大型開発が20年近く続き、大規模発掘が続いた。結果、膨大な考古学資料が蓄積され、現在も整理作業が進められている。

今回、すでに報告となった資料を中心に、いまだ未整理であった佐久地域の弥生時代の金属製品について集成した。対象時期は弥生時代と古墳時代前期前半頃までの資料とし、当該期の遺構より出土したものをまとめた。ただし、報告書内で他時期の混入と記載されている資料は除外し、「混入の可能性」とあるものは務めて掲載した。また時期については報告書に記載のあるものはそれを転記した。

集成結果は掲載表の通りである。鉄製品と銅製品が同一遺構から出土している場合もあるが、集計すると鉄製品が出土した遺跡は32遺跡、遺構数は68遺構でいずれの遺跡も住居址出土が多い。銅製品については11遺跡で14遺構から出土している。こちらも住居跡が多い。これら遺跡の立地は明らかに偏りが見られ、いわゆる田切台地末端から湯川の河岸段丘上に立地する長土呂・岩村田地域の遺跡が圧倒的に多く、出土地の核を形成している。その他の遺跡としては後家山遺跡を中心とする滑津川流域と分布は散漫となるが野沢平に出土地点が見られる。

出土品の種類としては、鉄製品が剣・鉄鏃・鉄斧・鎌・刀子・釧等があり、特に北一本柳遺跡Ⅲ出土の鉄斧は舶載品と考えられており、また、後家山遺跡出土の螺旋形鉄釧は太さの異なる釧を重ねて使用しており注目される出土例となっている。銅製品については鏡・釧・鏃の三種類で、釧の出土量は目を見張るものがある。破片出土も計数としたが上直路遺跡の21点や五里田遺跡７点は一遺跡の出土量としては異例と言えよう。また、耕作中の発見であるが社宮司遺跡の多鈕無文鏡は東日本出土唯一のものである。

金属製品出土遺構の時期については弥生中期からと考えられるが、詳細に見ると中期とした遺跡や遺構は不時発見であったり、遺構覆土からの出土等の例が多い。また、五里田遺跡の鉄剣と鉄釧についても、中期栗林期の集落と後期箱清水期の墓域が重なっており、遺構の深さも浅い事から重複や混入の可能性が捨てきれない。このように見ていくと佐久地域における金属製品の確実な導入は後期の吉田段階と考えた方が現段階ではよいのではないだろうか。ただ、後期段階でも金属製品保有の集落・集団は限定されていたことが今回の集成表からは垣間見れる。

雑駁なまとまりとなったが、集成表を第一の成果として現段階のまとめとしたい。

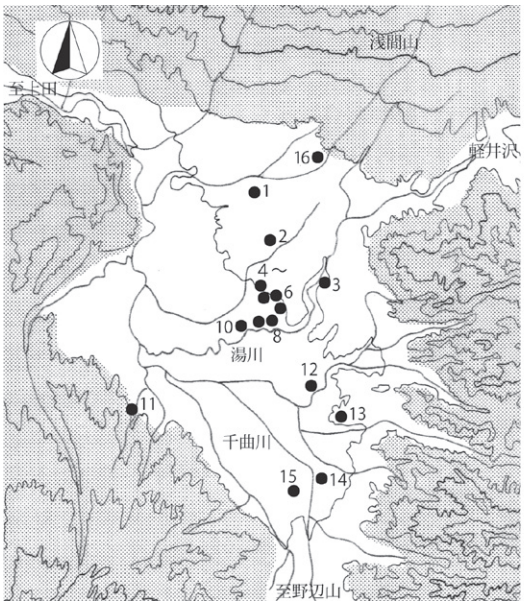


図１　佐久地域　金属製品出土遺跡位置図

図2　五里田遺跡の鉄剣
（報告書より転載）

出土鉄製品一覧表

遺跡名	遺構名	品名	数量	時期	備考	報告書
社宮司遺跡	土器埋納	鉄斧	1	弥生中期？		
久禰添遺跡	H27号住居跡	棒状鉄製品	3	弥生後期	混入の可能性	佐久市97集
榛名平遺跡	IH13号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期末		佐久市84集
後家山遺跡	H4号住居址	鉄鏃	3	弥生後期		佐久市121集
		不明	4	弥生後期		
	H36号住居跡	不明	1	弥生後期		
	H51号住居址	剣先	1	弥生後期		
		不明	2	弥生後期		
	H52号住居址	刀子	1	弥生後期	混入の可能性	
	H55号住居跡	錐？	1	弥生後期		
		鉄鏃	2	弥生後期		
		不明	1	弥生後期		
	H65号住居址	角釘	1	弥生後期		
	1号木棺墓	螺旋形鉄釧	2	弥生後期		
東久保遺跡	H1号住居跡	鉄鏃？	1	弥生後期		
	H2号住居跡	鉄板	2	弥生後期		
		鉄鏃	4	弥生後期		
	H3号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期		
深堀遺跡Ⅳ	H9号住居址	刀子	2	古墳前期後葉		佐久市102集
西一里塚遺跡群	SM14号円形周溝	鉄剣	1	弥生後期	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	SM07木棺墓	螺旋形鉄釧	1	弥生後期		
	SB09号住居	鏨状鉄製品	1	弥生後期		
北一本柳遺跡Ⅲ	H1号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期後葉		佐久市175集
	H3号住居跡	楔	1	弥生後期後葉		
	H21号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期後葉		
	H33号住居跡	鉄斧	2	弥生後期後葉		
	H51号住居址	剣	1	弥生後期後葉		
	H69号住居跡	鉄軸	2	弥生後期後葉		
	M20号溝状遺構	鉄軸	1	弥生後期		
		鉄鏃	1	弥生後期		
北一本柳遺跡Ⅱ	H2号住居跡	不明鉄	1	弥生後期		佐久市年報14
西一本柳遺跡Ⅷ	M6号溝状遺構	鎌	1	弥生中期		佐久市109集
		釘？	1	弥生中期		
西一本柳遺跡Ⅹ	H11号住居址	不明	1	弥生中期		佐久市127集
	H43号住居址	刀子	1	弥生中期	混入の可能性	
西一本柳遺跡ⅩⅢ	H9号住居址	鉄鏃	1	弥生後期前半	判断保留	佐久市139集
西一本柳遺跡ⅩⅧ	H20号住居址	刀子	1	弥生後期末		佐久市190集
	H22号住居跡	不明品	1	弥生中期		
北西の久保遺跡１次	Y60号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期		佐久市
	Y48号住居跡	鉄軸	1	弥生後期		
	Y14号住居跡	角釘	1	弥生中期	混入の可能性	
五里田遺跡	H1号住居跡	鉄剣	1	弥生中期		佐久市74集
	H2号住居跡	鉄剣	1	弥生中期		
	H5号住居址	鉄釧	8	弥生中期		
上直路遺跡	Y2号住居址	鉄釧	1	弥生後期		佐久市年報６
直路遺跡Ⅲ	SM2号周溝墓	刀子	2	弥生後期		佐久市110集
清水田遺跡Ⅱ	H2号住居跡	刀子	1	弥生後期		佐久市110集
		鉄鏃	1	弥生後期		
	H4号住居址	鉄鏃	1	弥生後期		
円正坊遺跡Ⅵ	H25号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期の古い段階	年報15	佐久市年報15
	H31号住居跡	不明鉄	1	弥生後期の新しい様相		
	H36号住居跡	不明鉄	1	弥生後期の古い段階		
円正坊遺跡Ⅷ	H28号住居址	刀子	1	弥生後期Ⅱ		佐久市185集
	H37号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期Ⅱ		
		鉄剣	1	弥生後期Ⅱ		
	H39号住居跡	針？	1	弥生後期Ⅰ		
松ノ木遺跡Ⅲ	H12号住居跡	鉄鏃	1	古墳前期		佐久市223集
若宮遺跡Ⅳ	H3号住居跡	鉄軸	1	弥生後期		佐久市198集
宮の前遺跡Ⅰ	H27号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期		佐久市198集
	H84号住居址	鉄鏃	1	弥生後期		
		鉄軸	1	弥生後期		
	OT17号周溝墓	螺旋形鉄釧	1	弥生後期		
大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ	H1号住居跡	鉄製品	1	後期後半	検出面	佐久市156集
周防畑遺跡群	26号住居跡	鉄鎌	1	弥生後期	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	52号住居跡	刀子	1	弥生後期		
	53号住居跡	刀子	1	弥生後期		
	77号住居跡	刀子	1	弥生後期		
近津遺跡群	SB5009号住居跡	刀子？	1	古墳前期前半	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	SB7004号住居跡	鉄棒	1	古墳前期前半		

出土鉄製品一覧表№.２

遺跡名	遺構名	品名	数量	時期	備考	報告書
下小平遺跡	Y1号住居跡	不明	4	弥生後期		佐久市
		鉄鏃？	1	弥生後期		
	Y4号住居跡	鉄鏃	2	弥生後期		
	Y5号住居跡	鉄鏃	1	弥生後期		
腰巻遺跡	H5号住居址	鉄片	1	古墳前期中葉	上信越自動車道	長野県埋蔵文化財センター
藤塚遺跡Ⅲ	H3号住居跡	鉄斧	1	古墳前期中葉	カクラン内	佐久市26集
和田原遺跡	H4号住居址	鉄鏃	1	古墳初頭		小諸市13集
		鉄片	1	古墳初頭		
竹花遺跡	SB13号住居跡	鉄軸	1	古墳前期		小諸市17集
	SB72号住居跡	Ｕ字鉄製品	1	古墳前期		
下荒田遺跡	Y3号住居跡	刀子	1	弥生後期		御代田町

出土銅製品一覧表

遺跡名	遺構名	品名	数量	時期	備考	報告書
社宮司遺跡	土器埋納	多鈕無文鏡	1	弥生中期？	耕作中に発見	
離山遺跡	土器棺墓の可能性	銅釧	4	弥生後期？	昭和２年道路工事で発見	南佐久郡の考古学的調査
北一本柳遺跡Ⅱ	H2号住居跡	銅釧	1	弥生後期		佐久市年報14
	D1号土抗	銅釧	1	弥生後期		
北西の久保遺跡2次	Y87号住居址	銅釧	1	弥生後期前半		
五里田遺跡	2号円形周溝墓	銅釧	7	弥生後期		佐久市74集
上直路遺跡	Y1号住居跡	銅釧	21	弥生後期	破片含む	佐久市年報６
下伯母塚遺跡	H8号住居跡	銅鏃	1	弥生後期		佐久市110集
清水田遺跡Ⅱ	H2号住居跡	銅釧	5	弥生後期		佐久市110集
円正坊遺跡Ⅵ	H31号住居跡	銅鏃	1	弥生後期の新しい様相		佐久市年報15
円正坊遺跡Ⅷ	H25号住居跡	銅釧	2	弥生後期Ⅲ古		佐久市185集
	H39号住居跡	銅釧	1	弥生後期Ⅰ		
周防畑遺跡群	21号住居跡	銅鏃	1	弥生後期	中部横断道	長野県埋蔵文化財センター
	5067号土抗	銅釧	3	弥生後期		

西一里塚遺跡群ＳＭ14号円形周溝墓出土鉄剣

西一里塚遺跡 SM07木棺墓出土鉄釧

後家山遺跡１号木棺墓出土鉄釧

宮の前遺跡Ⅰ OT1号周溝墓出土鉄釧

図３　佐久地方出土の金属製品（報告書より）

佐久地域後期弥生土器の編年と北一本柳遺跡の年代

小山　岳夫

1　はじめに

過去に佐久地域の後期弥生土器編年を行った[(1)]が、15年を経過し、空白の後期初頭はじめ良好な新資料が続出した。ここでは旧稿を補足するとともに、北一本柳遺跡後期弥生集落の年代について考察する。

2　新資料による後期編年の整理

後期Ⅰ期＝吉田期前半は従前該当資料がなかったが、西一本柳・円正坊遺跡で良好な資料が出た。直路遺跡１住出土土器を栗林式土器最終末とすると、壺は受口が多く、胴部最大径の上昇と最大径比率の縮小に伴う形態のスリム化が目立つ。栗林式の特徴である懸垂文と頸部縄文地文によるヘラ描沈線及び胴部施文が消失、頸部に文様が収斂されて櫛描文優位となる。前代からの直線あるいは簾状と波状文を組み合わせて頸部を多段に周回する文様と鋭利な工具で鋭く刻まれる鋸歯文が継承され、ヘラ描スリットによるＴ字文が出現する。赤彩品は少ない。甕は口縁部が直立気味で球胴に膨らむものと口縁～胴部が弓状に反り胴部上位に最大径を有する肩の張る２系統が代表的で、口縁部はいずれも前代から始まった伸長化が顕著となる。文様は櫛描文のみで以下の時期も不変である。口縁端部に櫛描波状文が巡るものが多く、その下は頸部の櫛描等間隔止め簾状文の直上まで無文で、胴部は櫛描波状文が多段に施される。高坏は鍔状の口縁部をもつものが増加し、前代よりも大きくなる。

後期Ⅱ期＝吉田期後半　後期Ⅰ期の壺の腰高の形態から胴部最大径が若干下降し、安定した形になる。文様は口縁端部への施文がみられなくなり、頸部のみに施される。Ⅰ期以来のヘラ描スリットのＴ字文、櫛描横羽状文帯の上部に櫛描波状文・下部に鋭利なヘラ描鋸歯文を加飾するもの、直線か簾状文と波状文を組み合わせて頸部を多段に周回するものがある。頸部に鋭利なヘラ描沈線の矢羽状文や櫛描横羽状文が現れる。赤彩は漸増するが少ない。甕形態は前代の２系統を継承するが、いずれも胴部の張りが緩くなる。口縁部の波状文充填が定着し、口縁・胴部は波状文か横羽状文、頸部は２連止め簾状文が多い。高坏はⅠ期よりも大きくなる。ここまで、「コ」の字重ね文の台付甕が残存する。

後期Ⅲ期古＝箱清水期前半　胴部下半に稜をもつ壺が出現し、赤彩が顕著となる。前代から鋭利なヘラ描鋸歯文・矢羽根状文とヘラ描スリットのＴ字文は継承され、斜格子文・１単位の櫛描スリットのＴ字文が加わる。甕の形態・文様はⅠ期以来の２系統を継承、高坏は大型化が達成される。周防畑Ｂ遺跡の坏下部に稜をもつ高坏は佐久地域では稀有な例である。

後期Ⅲ期新＝箱清水期前半　胴部下半に稜をもつ壺が定着し、甕は２系統の形態差がなくなり口縁から胴部が弓状に反る形態に統一される。文様は壺においては１単位の櫛描スリットのＴ字文と矢羽根状文、甕は頸部に簾状文、口縁・胴部には波状文か横羽状文が施される。壺の矢羽状文、甕の横羽状文は古墳前期Ⅱ期まで残存する。これは長野盆地、上田盆地にはない佐久地域固有の現象である。中部横断道建設関連発掘調査の西近津遺跡に充実した資料がある。

後期Ⅳ期古＝箱清水期後半　壺胴部幅の拡張に伴い、口縁から胴部への反りが強くなり全体的に肥った形態となる。壺に比べ甕の胴部幅の拡張は少なくⅢ期新からの大きな変化はないが、胴部最大径が中位から下位に下がる形態の甕も見られる。壺文様は、Ｔ字文の櫛描スリット２単位構成のものが加わり、その上位に簾状文帯を加えるものや下位に２条の波状文帯を加えるものなどＴ字文単体で飾る壺は減る。高坏はⅢ期新よりも低脚化する。

後期Ⅳ期新＝箱清水期後半は、従前はⅤ期として下小平遺跡出土品を充てていたが、小型高坏などが共伴するため、今回古墳初頭に繰り下げ、新たに西一本柳遺跡環濠・住居址資料を用いⅣ期新とした。壺・甕ともにⅣ期古よりも口縁・胴部の横幅が拡張し球胴化が進む。壺は受口状の口縁部も目立つようになり、受口端部外面には波状文が施される。頸部文様は櫛描スリット２単位のＴ字文が定着し、簾状文・波状文が単独で施されるものや、Ｔ字文に付加される例がみられる。Ⅳ期古・新のヘラ描矢羽状文については、未確認であるが、古墳前期Ⅰ期の中平・田中島遺跡において壺の頸部文様での使用が確認されているため、Ⅳ期にも存在していた可能性が高い。高坏は低脚と小型化が顕著である。

古墳前期Ⅰ期古は、弥生土器色が色濃く残る段階で弥生後期Ⅳ期新との形態差、文様差は少ないが、甕は前代よりも胴部幅が拡張し、肥った形態を示すものが多くなる。在来の低脚化した高坏に加え、欠山系の高坏や東海系の器台、Ｓ字甕Ａ・Ｂ類などが少量加わる。辻の前遺跡９住194.195のヘラケズリが施された土器は畿内系であろうか。佐久地域では出土量が少ない北陸系土器が出土している軽井沢町県遺跡出土資料も弥生系甕の特徴からこの段階と考える。

古墳前期Ⅰ期新は、前代同様欠山系の高坏やＳ字甕Ｂ類などが在地の壺・甕ともに出土する。弥生系土器は

前代よりもさらに壺・甕は頸部屈曲がきつくなり球胴化が進行する。佐久地域ではこの段階でハケ調整の甕は少なく、在地の弥生系の文様が色濃く残るが、波状文よりも横羽状文を多用する傾向がみられるのは、ハケ調整を強く意識しているようにも思える。

古墳前期Ⅱ期は図示しないが、小型高坏・器台と共に小型丸底壺・鉢が加わり、畿内系の影響も看取されるようになる。弥生系土器は壺・甕ともに頸部が「く」の字状に屈曲し完全に球胴化したものがみられるようになる。

3　他地域との併行関係

吉田～箱清水式土器は、他地域の土器との共存が少なく併行関係をたどることは難しいが、その前段階の栗林式土器は北陸～南関東の土器と共存し畿内の第Ⅲ～Ⅳ様式まで併行することが判かりつつある[(2)]。また、後段階の古墳時代初頭は列島規模で土器が動く時代であるため、他地域との併行関係がつかみ易く、佐久地域の古墳前期Ⅰ期新の土器は、畿内の纏向Ⅲ式[(3)]（庄内式の末か布留式の最古段階）に併行する。よって吉田～箱清水式土器の他地域との併行関係は、前後の時代の土器から推察することができ、吉田期は畿内Ⅴ様式、箱清水期は第Ⅴ様式～庄内式に概ね併行すると考えられる。

4　北一本柳遺跡後期弥生住居址のＡＭＳ法による高精度Ｃ14年代測定結果

板状鉄斧出土の北一本柳33住は、年代測定していないが、同時期と見られる同遺跡56・61住炭化物の暦年較正結果は、56住イネ胚乳が137calAD～223calAD、61住マメ類種子が130calAD～214calAD・クリの炭化材が83calAD～209calADであった。

5　小結

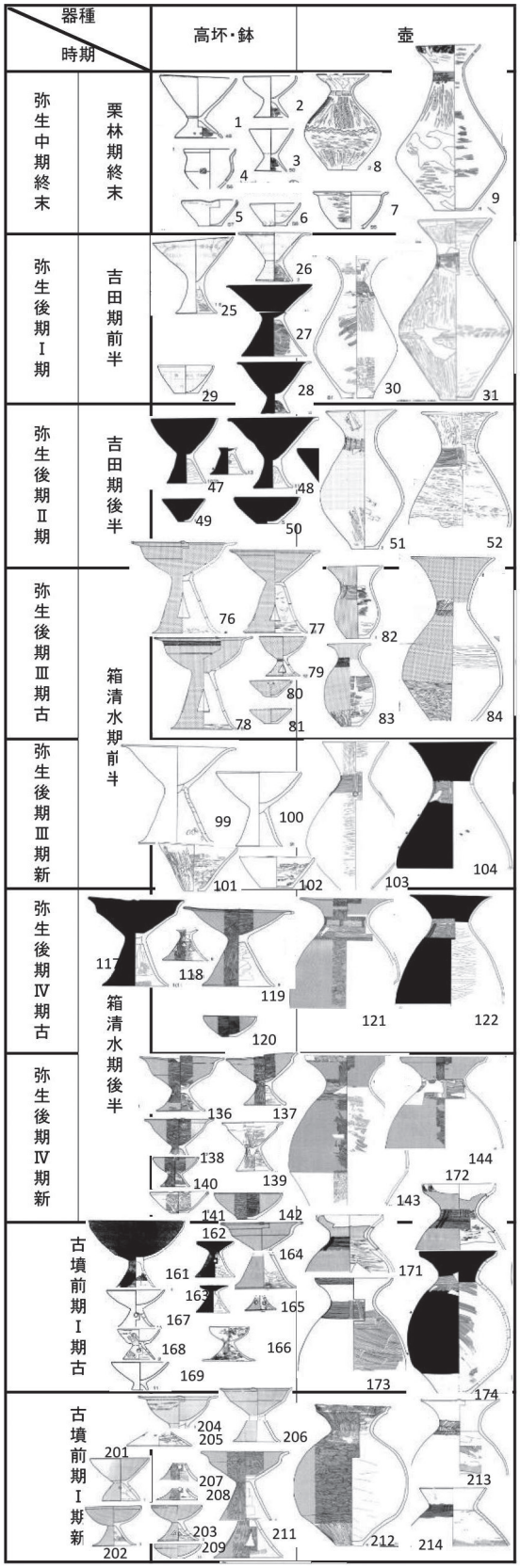
佐久地域の後期弥生土器を６時期に編年した。弥生後期が紀元前後から西暦250年頃と仮定すると単純割で１時期40年程度になる。現段階で峻別はできないものの、同時期内での住居址に重複や接しすぎている例もあることから各時期２小期以上の変遷はあるだろう。北一本柳遺跡については、西暦２世紀頃から３世紀前葉頃まで構えられた佐久地域最大の集落で、魏志倭人伝中の邪馬台国の時代と重なる部分もある。

(1)小山岳夫　1999 『99シンポジウム長野県の弥生土器編年』

(2)石川日出志　2013 「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『柳沢遺跡』

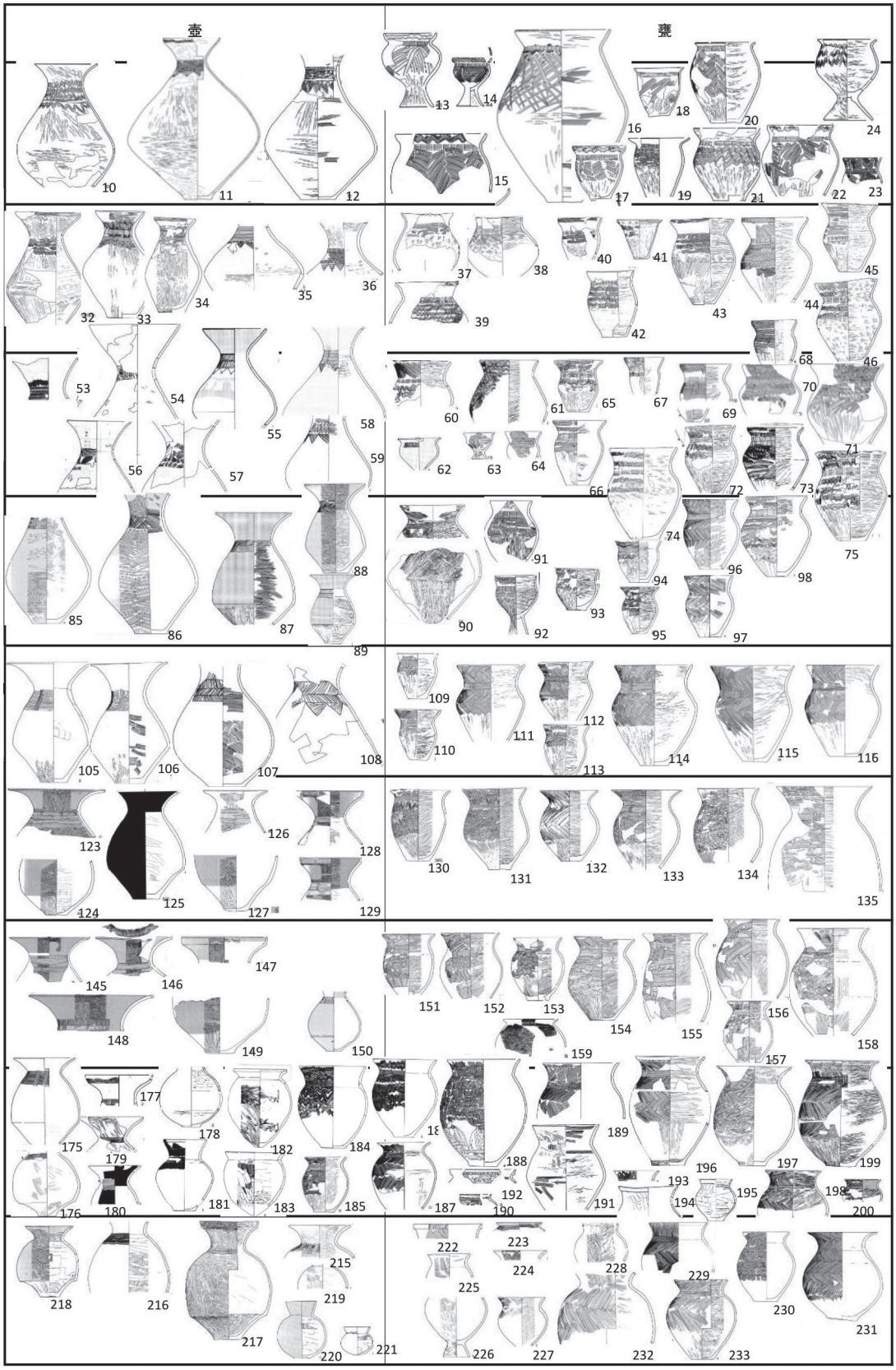
(3)冨沢一明　2004 「長野県　東信地域の古墳時代前期土器要素と外来系土器について」『専修考古学』第10号

図１　佐久地域後期弥生土器編年図



壺

甕



朝鮮半島南部地域における板状鉄斧
―嶺南地域を中心に―

高久　健二

１．はじめに

長野県佐久市北一本柳遺跡Ｈ33号住居址から２点の板状鉄斧が出土した。１点はほぼ完形品であり、両側縁は基部から刃部へと直線状に広がり、刃部は弧状を呈している。横断面は長方形を呈し、縦断面は基部から身部へと厚くなり、刃部は両刃になっている。全長18.6cm、刃部幅4.6cm、厚さ1.0cmである（図1-1）。板状鉄斧は全長13cm以下・刃部幅４cm以下の小型、全長13～22cm・刃部幅４～７cmの中型、全長23～32cm・刃部幅５～10cmの大型、全長30cm以上・刃部幅10cm以上の超大型に分けられるが〔金度憲2004〕、これは中型に属する。もう１点は刃部の一部が欠損しているが、前者よりも小型であり、やや薄い。身部の両側縁がほぼ平行であり、刃部付近が広がっている。残存長13.2cm、最大幅4.6cmであり、中型と推定される（図1-2）。板状鉄斧は朝鮮半島でもとくに東南部の嶺南地域で集中的に出土している。Ｈ33号住居址の年代は弥生時代後期と推定されていることからみて、原三国時代後期の板状鉄斧と関連するものと考えられる。以下では、嶺南地域における板状鉄斧の様相を整理し、北一本柳遺跡出土の板状鉄斧の類例について考察してみる。

２．板状鉄斧の出現

近年、板状鉄斧が普及する以前の小型短冊形鉄斧の出土例が増えている。初期鉄器時代後半（前２世紀前半）の慶山市林堂洞ＦⅡ-33号墳（木棺墓）では、勒島式の粘土帯土器とともに短冊形鉄斧（全長7.4cm）が出土している（図1-4）〔嶺南文化財研究院1999〕。原三国時代初頭（前２世紀後葉～前１世紀前葉）の大邱市八達洞57号墳（木棺墓）では、組合式牛角形把手付壺や黒色磨研長頸壺などとともに、鋳造鉄斧、鉄短剣、鉄矛、鉄鑿、鉄鉈、短冊形鉄斧（全長7.3cm）が出土している（図1-5）〔嶺南文化財研究院2000〕。同様な短冊形鉄斧は近年、慶州市北吐里６号墳、慶州市下邱里Ｄ地区４・11・15号墳でも出土している。これらの小型短冊形鉄斧は刃部が片刃のものが多いことからみて、扁平片刃石斧と同様な機能をもつものと考えられる〔金度憲2004〕。したがって、板状鉄斧とは機能が異なるが、板状鉄斧の普及以前に存在した最初の板状の鍛造鉄斧として注目される。これと同じ小型短冊形鉄斧は佐久市社宮司遺跡でも出土している（図1-3）。多鈕鏡片が共伴している点も半島の場合と時期的な矛盾はなく、注目される資料である。

３．板状鉄斧の変遷

前２世紀後葉～前１世紀前葉になると、嶺南地域で板状鉄斧が出現する。慶州市朝陽洞５号墳（積石木棺墓）では、黒色磨研組合式牛角形把手付壺や巾着袋形壺などとともに、鉄戈、鉄短剣、環頭刀子、鉄矛、鋳造鉄斧、板状鉄斧、鉄鎌などの鉄器類が副葬されていた〔鄭聖喜ほか2003〕。板状鉄斧は両側縁が基部から刃部へと直線的に広がり、横断面形は長方形を呈し、刃部は両刃である。全長14.7cm、刃部幅5.5cm、厚さ1.5cmで、中型に属するが小さい（図1-6）。

前１世紀中葉～後葉になると、嶺南地域で鍛造鉄器が普及し、板状鉄斧の副葬も急速に増加する。昌原市茶戸里１号墳（木棺墓）では板状鉄斧15点が副葬されていたが、そのうち３点は木柄に装着された状態で出土しており、縦斧と鍬の両方に使用されていたことが明らかとなった〔宋義政ほか2012〕。板状鉄斧の形態は、両側縁が基部から刃部へとゆるやかな弧線を呈しつつ幅が広がり、刃部は弧状を呈している。厚さは0.7～0.9cmと薄く、横断面は長方形を呈し、刃部は両刃になっている。全長21.2～27.6cm、刃部幅は6.6～8.4cmであり、中・大型が主体である（図1-7）。

後１世紀後葉の慶州市舎羅里130号墳（木棺墓）では、木棺内に板状鉄斧61枚が７列に敷き並べられていた〔朴升圭ほか2001〕。形態的には茶戸里１号墳のものと大きな違いはないが、厚さは0.8～1.7cmとやや厚いものが多い。全長23.9～28.0cm、刃部幅6.1～7.5cmであり、大型が主体を占める（図1-8）。

後２世紀前半の朝陽洞60号墳は小型木槨墓であり、装身具類、鉄製武器類・農工具類、轡、土器類が副葬されていた。板状鉄斧は８点が出土したが、形態はやや幅が狭く、刃部が広がるもので、それ以前のものとは異なっている。全長22.4～25.8cm、幅4.1～5.5cm、厚さ1.7～2.5cmの中・大型である（図1-9）。

後２世紀後葉になると、嶺南地域で大型木槨墓が出現し、板状鉄斧の様相も変化する。金海市良洞里（東）162号墳は大型木槨墓であり、後漢鏡や小型仿製鏡などとともに、大量の鉄製武器類・農工具類が副葬されていた〔林孝澤ほか2000〕。板状鉄斧は被葬者を取り囲む四隅に10点１束にまとめられて置かれていた。その形態は身部の両側縁が平行で、刃部が広がり、幅が狭く厚みがあるもので、棒状鉄斧や柱状鉄斧ともよば

れるものである〔孫明助2012〕。全長25.5～29.3cmの大型である（図1-10）。同時期の蔚山市下垈44号墳も大型木槨墓であり、槨内から棒状の板状鉄斧10点が並べられた状態で出土している〔李在賢ほか1997〕。全長27.8～30.6cm、刃部幅3.9～4.5cm、身部幅2.8～3.1cm、厚さ1.5～1.9cmの大型である（図1-11）。これら棒状の板状鉄斧は朝陽洞60号墳出土の板状鉄斧の系譜上にあり、後２世紀後葉～３世紀初頭の限定された時期にみられ、10点を単位として大型木槨墓に副葬されていたことがわかる〔宋桂鉉1995〕。

後３世紀前葉～中葉になると、木槨墓はさらに大型化し、板状鉄斧は再び幅広のものが副葬されるようになるとともに、大型が主体を占めるようになる。下垈２号墳は大型木槨墓であり、装身具類、鉄製武器類・農工具類、土器類が副葬されていた。板状鉄斧10点が出土し、形態は両側縁が基部から刃部へと直線的にゆるやかに広がり、刃部は扇形に広がる。全長27.5cm、刃部幅6.2cm、厚さ0.9cmの大型である（図1-12）。良洞里（東）280号墳も大型木槨墓であり、板状鉄斧10点が被葬者の頭部側に並べられていた。形態は身部の両側縁が平行で、刃部が広がり、横断面は幅が広い長方形を呈する。全長25.8～26.9cmの大型である（図1-13）。良洞里（東）235号墳も大型木槨墓であり、板状鉄斧30点が被葬者の頭部側に３列に置かれていた。形態は良洞里（東）280号墳のものよりさらに幅が広くなり、刃部も薄く、鉄斧としての機能を失った、いわゆる板状鉄斧形鉄器とよばれるものに変化している（全長30.2cm）（図1-14）。板状鉄斧形鉄器の用途については、貨幣価値をもつ鉄素材説〔東潮2006〕、貨幣説〔宋桂鉉1995〕、僻邪具･宝器などの非実用品説〔村

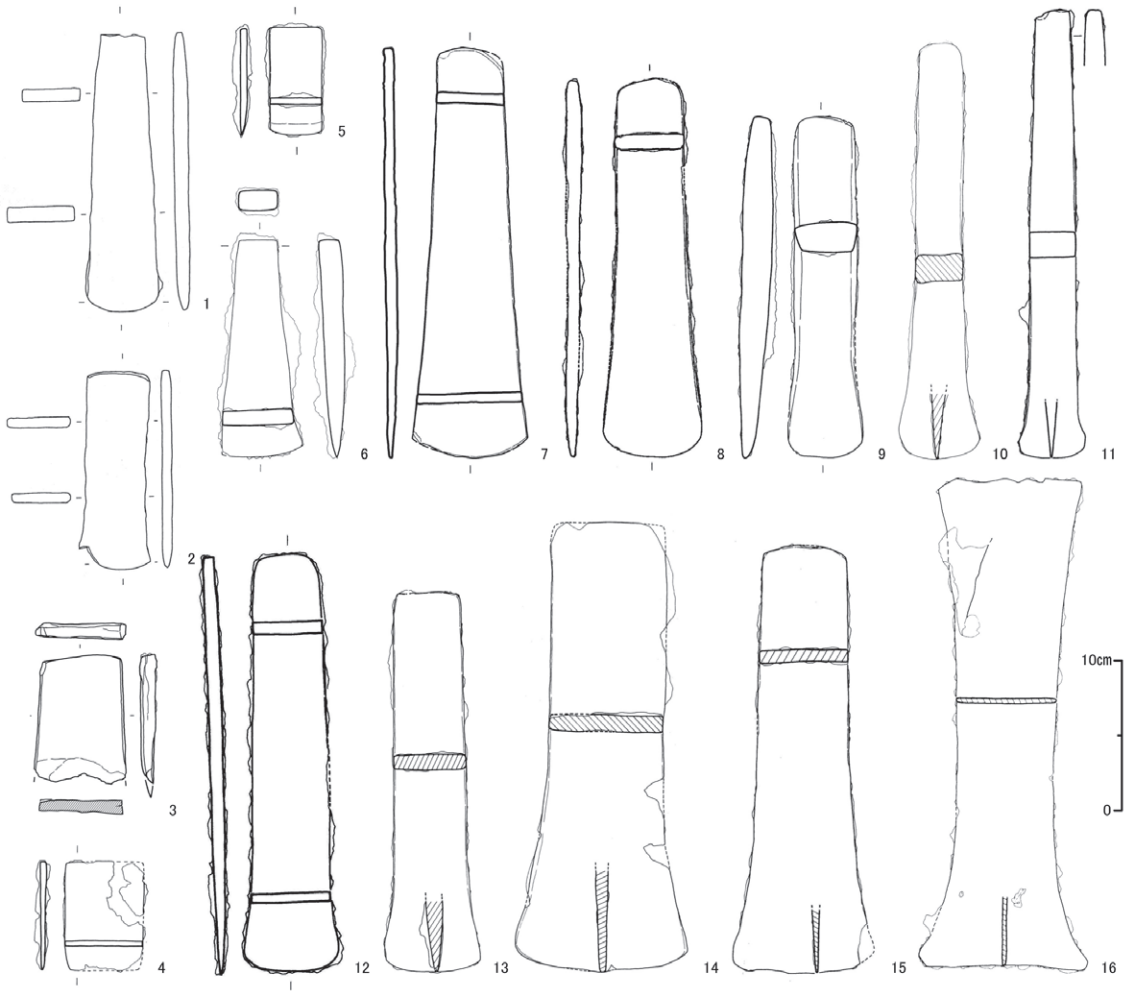


図１　板状鉄斧・板状鉄斧形鉄器・鉄鋌

1･2.北一本柳遺跡H33号住居址　3.社宮司遺跡　4.林堂洞FⅡ-33号墳　5.八達洞57号墳　6.朝陽洞5号墳　7.茶戸里1号墳
8.舎羅里130号墳　9.朝陽洞60号墳　10.良洞里（東）162号墳　11.下垈44号墳　12.下垈2号墳　13.良洞里（東）280号墳
14.良洞里（東）235号墳　15.大成洞29号墳　16.大成洞3号墳

上2007〕などがある。

後３世紀後葉の金海市大成洞29号墳では、被葬者の頭部側に合計91点の板状鉄斧が敷き並べられていたと推定され、その形態はやはり刃部が薄くなった板状鉄斧形鉄器であった〔申敬澈ほか2000ｂ〕。全長25.7～32.1㎝、身部幅5.8～7.5㎝、厚さ0.5～1.1㎝であり、大型品が主体を占める（図1-15）。さらに、後４世紀中葉の釜山市福泉洞38号墳からは板状鉄斧形鉄器20点が出土したが、その形態は刃部幅が大きく広がり、全体の厚さが同一で薄い〔宋桂鉉ほか1997〕。全長36.4㎝の超大型であり、板状鉄斧形鉄器から鉄鋌への過渡期的な形態を示している。次の４世紀後葉の大成洞３号墳では、基部幅が広くなった典型的な鉄鋌（全長32.5㎝、中央部幅6.6㎝、厚さ0.4㎝）が副葬されており（図1-16）、ほぼ４世紀中葉頃を境に板状鉄斧形鉄器から鉄鋌へと変化したことがわかる〔申敬澈ほか2000ａ〕。

４．結語

最後に北一本柳遺跡出土の板状鉄斧の類例について検討してみる。２点の板状鉄斧うち、身部の両側縁が基部から刃部へと広がるもの（図1-1）については、両側縁が平行で刃部が広がるものより古い特徴を有している。すなわち類例としては、茶戸里１号墳や舎羅里130号墳があげられるが、時期差が大きい。後２世紀後葉は板状鉄斧の空白期であるため、不明確であるが、後３世紀前葉～中葉の下垈２号墳や良洞里（東）280号墳のように刃部が広がるものが出現する直前段階に該当するものと推定される。つぎに身部の両側縁が平行で、刃部が広がるもの（図1-2）については、良洞里（東）280号墳のように、板状鉄斧形鉄器になる直前段階のものと類似する。したがって、北一本柳遺跡の板状鉄斧は、いずれも後200年を前後する時期のものと推定され、『三国志』魏書・東夷伝に記された「弁辰の鉄」を象徴的に示す鉄製品といえるだろう。

参考文献

東潮2006『倭と加耶の国際環境』吉川弘文館

金度憲2004「고대의 판상철부에 대한 검토 －영남지역 분묘 출토품을 중심으로－（古代の板状鉄斧に対する検討－嶺南地域墳墓出土品を中心に－）」『韓國考古学報』53

申敬澈ほか2000ａ『金海大成洞古墳群Ⅰ』研究叢書第４輯，慶星大學校博物館

申敬澈ほか2000ｂ『金海大成洞古墳群Ⅱ』研究叢書第７輯，慶星大學校博物館

宋義政ほか2012『昌原　茶戸里　１～７次　發掘調査　綜合報告書』古蹟調査報告　第41冊，國立中央博物館

宋桂鉉1995「洛東江下流域의　古代　鐵生産（洛東江下流域の古代鉄生産）」『加耶諸國의　鐵（加耶諸国の鉄）』加耶研究叢書１，仁濟大學校　加耶文化研究所

宋桂鉉ほか1997『東萊福泉洞古墳群　－第５次　發掘調査　99～109號墓－』研究叢書第12冊，釜山廣域市立博物館

孫明助2012『韓國　古代　鐵器文化　研究』진인진（チニンジン）

鄭聖喜ほか2003『慶州　朝陽洞　遺蹟Ⅱ』學術調査報告　第13冊，國立慶州博物館

朴升圭ほか2001『慶州舎羅里遺跡Ⅱ　－木棺墓，住居址－』學術調査報告　第32冊，嶺南文化財研究院

村上恭通2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店

李在賢ほか1997『蔚山下垈遺蹟　－古墳Ⅰ』研究叢書　第20集，釜山大學校博物館

柳渭男2009「삼한시대 영남지역 출토 주조철부와 판상철부 연구（三韓時代嶺南地域出土鋳造鉄斧と板状鉄斧研究）」『嶺南考古學』第51號

林孝澤ほか2000『金海良洞里古墳文化』學術叢書７，東義大學校博物館

嶺南文化財研究院1999『慶山林堂洞遺跡Ⅰ　－Ｆ，Ｈ地區　및　土城（Ｆ，Ｈ地区および土城）－』學術調査報告　第18冊，嶺南文化財研究院・韓國土地公社

嶺南文化財研究院2000『大邱八達洞遺蹟Ⅰ』學術調査報告　第20冊，嶺南文化財研究院

小山岳夫論考（Ｐ８、Ｐ９）　挿図土器遺跡一覧

編年図No1～24直路１住、25.37.39西一本柳Ⅲ116住、26.31西一本柳Ⅲ７住、27.28.44西一本柳Ⅹ27住、29.32.35.36.38西一本柳Ⅲ41住、33.34西一本柳Ⅸ４方形墓、47～50.63.64.69～71円正坊Ⅷ23住、51.58.66.67北西の久保66住、52～54.57.60.65西一本柳Ⅲ60住、55.73北西の久保56住、56.74.75西一本柳Ⅲ117住、59.61北西の久保123住、62.68北西の久保79住、76～81.83.89.90.95周防畑Ｂ２周、82.87.92周防畑Ｂ１周、84.91.94周防畑B13住、85.88.93.96周防畑520住、86周防畑523住、97.98周防畑801住、99～103.105～116上直路１住、104円正坊Ⅷ30住、117.122.125.130.131円正坊Ⅷ36住、118.119.121.123.124.126.133.134北一本柳Ⅲ６住、120.128.129.132.135北一本柳Ⅲ51住、136.137.139～141.143～145.151～153.155.157～160西一本柳Ⅲ12溝、146.147西一本柳Ⅲ46住、148.149.154.156西一本柳Ⅲ37住、150西一本柳ⅩⅤ11住、161～163根乃井大塚、164.165.179下小平２住、168.171.172下小平３住、198～200下小平４住、167～168.193～195辻の前９住、169.177.187～191辻の前14住、178.192辻の前13住、166.196.197池畑２住、174.176円正坊Ⅷ１方形墓、173.175.186下伯母塚３住、181～185県１住、201～203.220～225中平・田中島１方形墓、215中平・田中島２方形墓、207.208.211.217.226.232近津SX5002住、210.212.218.219.227.233近津SB4002住

弥生時代後期・佐久市北一本柳遺跡出土鉄斧の歴史的意義

石川日出志

はじめに

弥生時代中期に長野県北部域を中心に分布する石戈類を1980年代から追跡している。中野市柳沢遺跡で出土した銅戈との関係もあり、2011年11月１日（火）に佐久市埋蔵文化財センターを訪れ、同市北裏遺跡と西一本柳遺跡出土の石戈を観察した。初見の北裏例は新たに実測し、西一本柳例は以前の図を修正した。その際に、調査中の周防畑遺跡群宮ノ前遺跡も見学する機会を得たのに加えて、森泉かよ子・冨澤一明両氏から佐久平の弥生時代後期の遺跡群について解説して頂き、その威容にあらためて感嘆した。夕方遅く実測を終えて帰る間際に、北一本柳遺跡の発掘調査報告書を閲覧し、２点の板状鉄斧に目が留まった。大形住居跡（H33号）のコーナーの壁に、あたかも壁龕（niche）のような窪みを設け、そこに鉄斧２点を重ね置く、特異な状況が詳しく報じられていた。しかも朝鮮半島南部製品の形態的特徴を備えている（図1-1・2：森泉2010）。数日後、高久健二氏に図面をお送りし、半島製品とみてよい旨ご教示頂いた。

本稿では、この２点の板状鉄斧をめぐる歴史的な意義を考えてみたい。

１．朝鮮半島系板状鉄斧の類例

北一本柳遺跡H33号住居跡で出土した２点の鉄斧に伴った土器群は、箱清水式土器後半期に属すから、おおむねＡＤ２世紀後半を前後する年代を目安値としてよい。高久氏が、本誌掲載論考で２点の鉄斧をＡＤ200年前後に位置づけることと大きな齟齬はない。

本資料との関連でまず注目すべき実例は、新潟県三条市経塚山遺跡第３号住居跡で出土した板状鉄斧である（図1-3：金子1999）。長さ13.9㎝・最大幅3.6㎝・最大厚1.2㎝を測り、断面形で明らかなように、４側面がつくる稜が明瞭に角張る。かつて村上恭通氏に情報提供し、本例も朝鮮半島製品と考えるのが適切であるとのご教示を得ている。本誌高久論文図1-6の朝陽洞５号墳例と比べると、最大厚が経塚山例では中央にあるが、朝陽洞例は頭部という違いはあるものの、平面形や稜の明瞭な点はよく似る。身幅に比べて肉厚である点も、日本列島各地にみられる板状鉄斧との顕著な違いといえよう。

経塚山遺跡は、新潟平野の東縁をなす東山丘陵上の標高60～85mに立地する高地性集落で、弥生時代後期後半（Ｖ期後半）に限定できる。北陸の法仏式の系譜をひく土器群が伴っている。法仏式系土器は長野盆地でも箱清水式土器に伴うから、北一本柳遺跡例とほぼ同時期と判断してよい。

ところが、長野県北部と新潟県中越地域に朝鮮半島製板状鉄斧が検出されているにもかかわらず、現状では、北陸や北近畿・山陰というその想定される搬入経路上の地域に類例を見出すことはできない。したがって、この２遺跡３例を著しく例外的な存在とみてしまいそうだが、そうではない。

２．長野県内の弥生時代後期の朝鮮半島系金属器

北一本柳遺跡の鉄斧２例以外にも、千曲川流域には朝鮮半島系文物が数例みられる。まず第一に、本誌№108（2011年）で再検討結果が特集された佐久市社宮司遺跡の多鈕無文鏡片は明らかに朝鮮半島製品の再加工品であるが、筆者は中期後半の栗林期に帰属するとみる。弥生時代後期後半の実例としては、下高井郡木島平村根塚遺跡で出土した渦巻飾付鉄剣（２号鉄剣：図1-7：木島平村2002）を筆頭に挙げるべきであろう。渦巻飾は加耶（狗邪韓国）地域一帯に特有であることから、彼地の製品とみられる。長さ74㎝という長剣であることも、半島製品とみる有力な根拠とし得る。しかし、把の軸が剣身から若干屈折する点と、剣身側で枝部（渦巻飾）が派生する特徴は、東日本に特徴的な鹿角製把頭と共通する。把部と渦巻飾の両者を統一的に理解するために、豊島直博氏は特注品の可能性を指摘する（豊島2003）。なお、２号および全長56㎝の１号、全長47.4㎝の３号の３点の鉄剣の金属的調査を実施した大澤正己・影山英明両氏は、いずれも高温還元の炒鋼法が採用されているとして朝鮮半島製とみなす（大澤・影山2002，大澤2002）。

上田市上田原遺跡Ｉ区第40号土坑出土の鉄矛（図1-6：清水1996）も朝鮮半島製品とみられる。共伴土器はないが、全長26.6㎝のうち身部長が14.4㎝と短身であるから、弥生時代後期併行とみてよい。さらに、長野市浅川端遺跡の青銅製馬形帯鉤（図1-4：清水・風間2005，風間2006）も、７世紀後半の土器を伴うが、その特徴は明らかに朝鮮半島南部製品で、弥生時代後期後半併行期に帰属する。

すなわち、長野県内では、木島平村・長野市・上田市・佐久市と千曲川流域一帯に点々と朝鮮半島南部で

製作された鉄器と青銅器の出土例があり、いずれも弥生時代後期後半であることは重要である。

３．朝鮮半島系文物が流入する経緯

根塚遺跡２号鉄剣が特注品であるとすると、東日本に伝統的な把形態を指定できるのは当然東日本地域であり、発注者は東日本内ということになる。渦巻飾をもつ鉄製品は、いまだ日本列島内では他に実例が発見されていないことも、特注品の可能性を考えるのに大きな力となる。もちろん、こうした朝鮮半島南部の製品が千曲川流域にもたらされるには、〔朝鮮半島南部←→北部九州←→山陰←→北近畿←→北陸←→千曲川流域〕という広域間の情報と物資の流れが整備されていることが必要条件となる。そしてこうした広域連携は、中野市柳沢遺跡の青銅器群や栗林式土器の形成をみれば弥生時代中期段階にも認めることができるが、なお不安定で、後期前半にも存在したかは明確ではない。むしろ、弥生時代後期後半に急速に整備されたと考えるのが妥当であろう。

図1-5は、長野盆地の北隣にある高田平野の西縁部の丘陵上に位置する高地性集落・上越市裏山遺跡で出土した鉄製鋤鍬先である。大形の鉄板の両側縁を折り曲げて刃先とする簡便なつくりである。かつて北部九州の弥生時代後期に特徴的と考えられてきたが、近年は鳥取県青谷上寺地遺跡や妻木晩田遺跡など山陰地域でも類例が増えている。それでも北陸では石川県塚崎遺跡などわずかしか検出例がなく、裏山遺跡で６点も出土したことは注目される。この遺跡も、箱清水式と併行する法仏式土器の段階に属す。しかしそれ以上に広域連携を明瞭に示すのは、鉄剣および墳墓における鉄剣を主とする武器の副葬習俗の広域普及である。

鉄剣は、佐久市でも五里田遺跡Ｈ１・２号住居跡、北一本柳遺跡ⅢＨ51号住居跡、円正坊遺跡ⅧＨ37号住居跡、西一里塚遺跡群ＳＭ14号円形周溝墓で検出例がある。関東地方でも群馬県有馬遺跡や新保田中村前遺跡などの礫床木棺墓や、埼玉県観音寺遺跡などの方形周溝墓の主体部や周溝内埋葬などの副葬品として検出されている。長野県内や関東地方の分布状況をみると、千曲川流域から群馬県方面、そこからさらに南関東や東関東方面へと分布が形成されたと考えられる。

そして千曲川流域への流入経路を考えると、直接の流入もとは高田平野であり、さらに北陸、北近畿、山陰と、日本海沿岸部を西にたどっていくことができる。ざっくり言ってしまえば、そもそも、墳墓に鉄剣を主とする鉄製武器を副葬する習俗は朝鮮半島南部に顕著なもの。これが弥生時代後期後半に、中国地方から北陸へと分布を拡大しており、その延長線上に千曲川流域や関東の鉄剣副葬習俗の普及があるとみられる。もちろん、鉄製武器でも鉄刀の副葬は中国漢代の習俗が朝鮮半島経由で日本列島にも広まり、鉄剣副葬習俗に重なり、概して鉄剣よりも鉄刀が上位層に副葬される傾向がある。このように鉄製武器副葬は、弥生時代後期後半に日本海側を中心として、東北地方を除く弥生文化圏内に広まった習俗であることに注目したい（図２：林2002）。

４．弥生時代後期後半という時代と本資料

長野県北部：箱清水期≒北陸：法仏期は、それ以外にもいくつもの注目すべき事象が認められる。北陸では、社会的緊張に対応する集落である高地性集落が、福井県域から新潟県域北部まで広範囲に構築されている。長野県内でも、北陸と連動する高地性集落として中野市がまん淵遺跡が営まれている。また、後期前半にいったんは見られなくなった環濠集落がふたたび現れ、中期後半には見られなかった居住域を包囲する環濠も篠ノ井遺跡群で確認できる。篠ノ井遺跡群が後期後半に大規模化するのと歩調を合わせるかのように、佐久平では集落の飛躍的拡大が認められる。北一本柳遺跡は西一本柳遺跡と約50mの間をおいて隣接し、北一本柳遺跡は小山岳夫氏によると東西370m・南北200mほどを環濠が全周するという。北一本柳遺跡は佐久平の弥生後期集落群のなかでも中心的な位置を占める環濠集落である可能性が高い。朝鮮半島系板状鉄斧２点を出土したＨ33号住居跡は、環濠集落の中央からやや南西寄りの位置にある。竪穴住居跡の北端だけが検出されたが、短軸長が7.47mを測るので、本遺跡で検出された竪穴住居跡で長軸長・短軸長ともつかめる住居規模を参考にすると、Ｈ33号住居跡の長軸は12～14mにも及ぶと復元でき、本遺跡で最大規模となる。板状鉄斧が、竪穴住居跡の埋土ではなく、コーナーの壁面に穿たれた壁龕状施設に２点重ねられており、何らかの意図のもとに置かれたとみてよい。このように、飛躍的に拡大した集落群、そのなかの中核的集落、そのなかで最大規模の竪穴住居跡で、特異な状態で出土したことに、直ちにその意味は読み取れないとしても、重要な意味があるとみるべきである。

弥生時代後期後半という段階は、中国地方では岡山県楯築墳丘墓や島根県西谷３号墓など突如際立った規模の墳丘墓が出現し、そこには木槨という大陸に由来する埋葬施設も採用されている。西谷３号墓には、吉備の特殊壺・特殊器台だけでなく、北近畿や北陸系統の土器もみられ、葬送儀礼に遠隔地の首長層も参画したことが推測されるように、遠隔地の有力首長層が相互に連携を図る状況が読み取れる。ちょうどその時期に、朝鮮半島から大量の鉄素材が日本列島にもたらされ、各種の鉄製品も流通する。それまでの弥生社会と

は質的に異なる広域に亙る物資と情報の交換が本格化し、それに立脚して遠隔地間の政治的連携が生まれ始めたのである。

佐久市北一本柳遺跡の２点の板状鉄斧は、単に佐久平に朝鮮半島系文物が確認されたことを意味する訳ではない。大陸とも連携するこのように整備された広範な物資と情報の交換体制が、単に西日本だけではなく、北陸からさらに長野県域や関東までも及ぶ時代状況を、明確に物語る重要資料だと考える。

【補記】図１・２は図1-6以外は本文中に掲示した参考文献から引用した。図1-6は上田市立信濃国分寺資料館所蔵資料で、寺前直人氏の原図を石川がトレースした。

【参考文献】

東　潮　2003「韓と倭の馬形帯鉤」『橿原考古学研究所論集』第14巻，pp.193-215

大澤正己・影山英明　2002「根塚遺跡出土弥生時代後期鉄剣の金属学的調査」『根塚遺跡』木島平村教育委員会，pp.112-133

大澤正己　2002「根塚遺跡Ｋ区出土鉄剣の金属学的調査」『根塚遺跡』木島平村教育委員会，pp.134-139

風間栄一　2006「馬形帯鉤の分類と系列把握―日本出土の馬形帯鉤をめぐって―」

金子正典　1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』新潟県三条市教育委員会

木島平村教育委員会　2002『根塚遺跡―墳丘墓とその出土品を中心にして―』

小池義人ほか　2000『裏山遺跡』新潟県教育委員会

林　大智　2002「石川県における鉄器の導入と社会の変化」『平成13年度環日本海交流史研究集会　鉄器の導入と社会の変化』pp.42-55，㈶石川県埋蔵文化財センター

清水　彰　1996『上田原遺跡・塚原古墳群・下之条条里水田遺跡』上田市教育委員会

清水竜太・風間栄一　2005「長野市浅川端遺跡出土の馬形帯鉤」『考古学雑誌』89-2，pp.76-87

杉山和徳　2014「東日本における鉄器の流通と社会の変革」『記念シンポジウム資料集　久ケ原・弥生町期の現在』pp.149-176，西相模考古学研究会

豊島直博　2003「弥生時代の鹿角製鉄剣」『東国史論』18，pp.3-26

野島　永　2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書，広島大学大学院文学研究科地表圏システム学講座

森泉かよ子　2010『西一本柳遺跡XIV・北一本柳遺跡Ⅲ・東大門先遺跡Ⅱ・西八日町遺跡Ⅲ・西八日町遺跡Ⅶ』佐久市埋蔵文化財調査報告書第175集

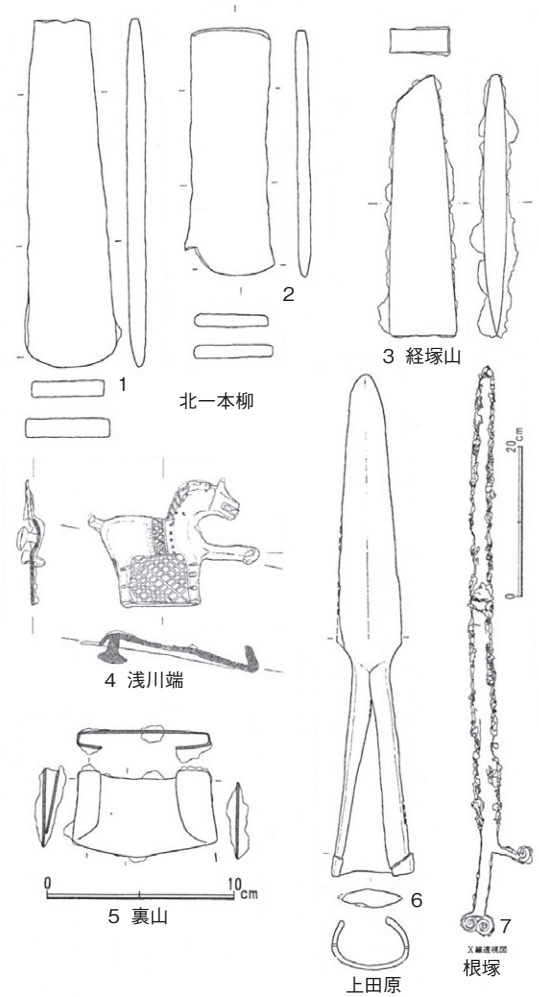


図１　関係資料

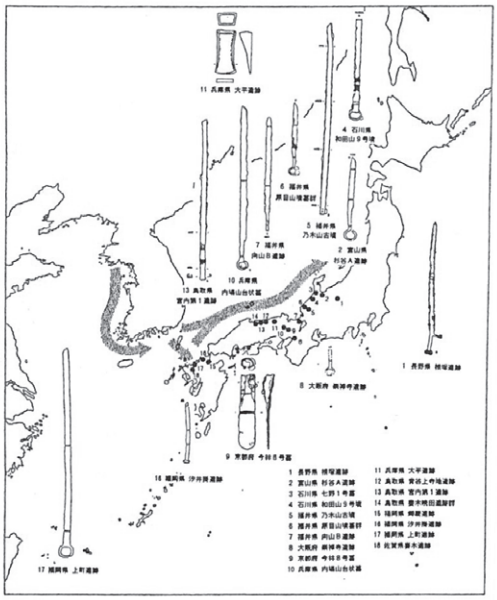


図２　弥生後期後半・末の主な舶載鉄器
（林2002）

佐久の弥生時代研究を創世した神津猛と藤森栄一

昭和11（1936）年戦前から佐久志賀の実業家神津猛は、岩村田駅近くで掘削された竪穴住居の断面から出土した朱塗りの赤い土器や刷毛目・波文の土器などを「岩村田の弥生遺跡」と題して郷土雑誌『信濃』に紹介した。同年諏訪の考古学者藤森栄一は信濃の弥生土器の体系化を図った論文を『考古学』に発表、岩村田出土の弥生土器は、弥生末期の「箱清水式」よりも一段階古く位置づけ「岩村田式」とした。「岩村田式」はその後神村透により「箱清水式」と同一として解消され、未だ復活していない。

しかし、昭和初期に２人の研究者が注目した佐久地方の赤い土器群とその文化の魅力は、現代の研究者の心を捉え、今回、およそ80年の歳月を隔てて再評価され始めている。（小山）

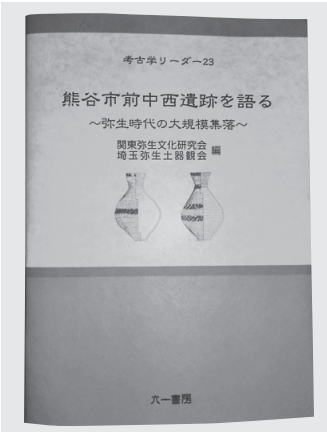
神津猛
（1882～1946）

藤森栄一
（1911～1973）

『熊谷市前中西遺跡を語る ～弥生時代の大規模集落～』刊行！

埼玉県熊谷市で1996年から継続的に発掘調査されている前中西遺跡は、想定集落域30ha という弥生時代中期後半の東日本屈指の大規模集落址である。これをめぐって平成25年９月25日明治大学リバティタワーにおいてシンポジウムが開催され、その成果をまとめた単行本が最近発刊された。

前中西遺跡では、北武蔵固有の縄文系土器「北島式」「前中西」式土器とともに栗林式土器や榎田型磨製石斧、当土器文化圏特有の墓制「礫床木棺墓」が見つかっており、当時の信州との強い地域間交流があったと見られる。関東の玄関口佐久平で弥生時代を研究しているとの理由から、不肖小山岳夫もこの本の執筆に加わらせていただいた。信州の弥生時代研究者も必読の書としてここに紹介する。



◆Ａ５／並製本／カバー装丁／290頁／3600円＋税
◆頒布問合せ　六一書房　ＴＥＬ03-5213-6161　ＦＡＸ03-5213-6160

♪　編集後記　♪

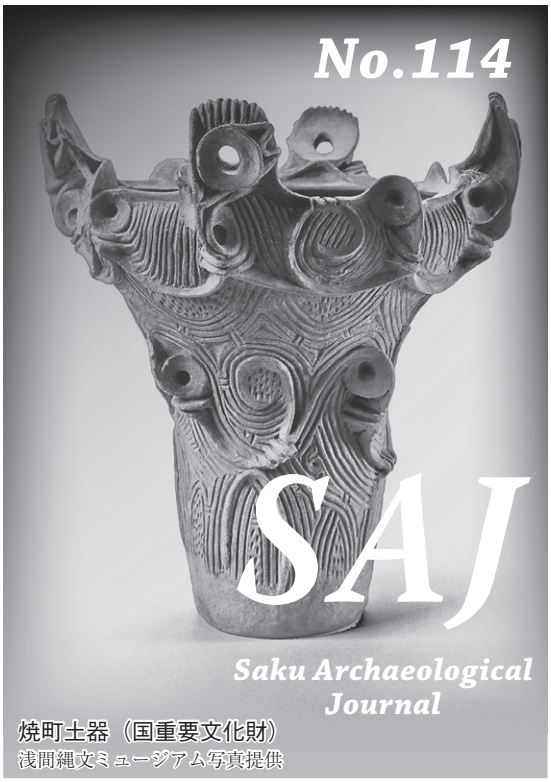
30年近く前、佐久市出土の「西一里塚遺跡の外来系土器」を持って、その出自がどこかを探るため関東の弥生研究者を訪ね歩いていたことがある。結局、よくわからずじまいであったが、検討の経過を文章にまとめて長野県考古学会誌に掲載した。その際にお世話になった一人が、当時埼玉県富士見市勤務の小出輝雄さんである。長い間、考古学をさぼっていた私は昨年、久しぶりに小出さんと再会した。当時のことを覚えていて下さり、前段で紹介した前中西シンポへの参加を勧めるとともに執筆の機会も与えてくれた。若き日の流離は、無駄でなかった。（小山）

佐久考古通信　No.113

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜　井　秀　雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2014年８月28日
発行者　桜　井　秀　雄
編集者　小　山　岳　夫
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク



焼町土器（国重要文化財）
浅間縄文ミュージアム写真提供

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2016. 3. 3　　佐久考古学会

■ 特集：佐久の縄文時代

今回は、佐久の縄文時代を特集し、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と時期を追って、特色ある縄文遺跡や遺物などについて論じていただいた。

筆者はいずれも佐久考古学会の会員で、各時期に詳しい藤森英二、桜井秀雄、綿田弘実、中沢道彦各氏に執筆していただいた。

★ 目　次 ★

佐久の縄文時代……1
佐久の縄文草創期・早期……藤森英二　2
佐久の縄文前期……藤森英二　4
佐久の縄文中期……桜井秀雄　6
佐久の縄文後期……綿田弘実　8
佐久の縄文晩期……中沢道彦　10

佐久の縄文時代

■ 縄文草創期

縄文時代の幕開けを告げる縄文草創期の遺跡は全国的にも多くないが、佐久地方も例外でなく、数は少ない。そうしたなかで、川上村の立石Ａ遺跡では、尖頭器・有茎尖頭器・掻器・微隆起線土器などが確認されており、良好な草創期資料として注目される。

■ 縄文早期

早期の遺跡で最も注目すべきは、国内でも著名な北相木村の栃原岩陰遺跡であろう。表裏縄文系土器や早期前半の押型文系土器とともに、12体の人骨、10万点を超すであろう獣骨、釣針・縫い針などの骨角器や、海棲のタカラガイやツノガイを加工した装飾品なども出土した。遺跡の年代は約11,000年前から9,500年前と考えられる。

■ 縄文前期

前期初頭では浅間山南麓、御代田町塚田遺跡や下弥堂遺跡から「塚田式」と命名された尖底土器とともに、集落が検出され、定住化の様子をうかがうことができる。また、小海町の中原遺跡では、イノシシの獣面のついた諸磯ｂ式土器とともに、15軒の住居が確認され重要な集落遺跡として位置付けられる。

■ 縄文中期

中期では、川上村の標高約1,300mの全国的最高地点にあるのが国史跡大深山遺跡で史跡公園として整備されている。小諸市寺ノ浦遺跡は、昭和８年に国史跡に指定され、小諸市教育委員会によって遺跡整備調査が継続中である。浅間山麓では、御代田町川原田遺跡の焼町土器を中心とした遺物群が国重要文化財に指定となり、浅間縄文ミュージアムに常設展示される。また、小諸市郷土遺跡では、中期後葉～後期初頭の107軒の住居跡が調査され、佐久地方最大の集落のひとつである。

■ 縄文後期

後期では、佐久市（旧望月町）の平石遺跡で良好な敷石住居が検出されている。また、湯川水系の軽井沢町茂沢南石堂遺跡や御代田町宮平遺跡でも後期の良好な資料が確認される。浅間山麓では、小諸市三田原・岩下遺跡、御代田町滝沢遺跡などがある。

■ 縄文晩期

晩期を代表する遺跡として広く知られているのは、「氷式」の名の冠される小諸市氷遺跡であろう。小諸市石神遺跡もまたよく知られた遺跡で、顔面付注口土器や遮光器土偶などが見られるほか、抜歯の痕跡があり身長161cmほどと推定される壮年男子の葬られた墓が確認されている。

佐久の縄文草創期・早期

藤森　英二

1　草創期の石器

縄文時代の始まりに位置する草創期、さらに縄文文化の確立期とされる早期、それぞれ年代にすると、草創期が約15,000～11,000年前、早期が約11,000～6,000年前となる。

群馬県境に近い佐久市八風山遺跡や下茂内遺跡では、産出するガラス質黒色安山岩を使った、長さ10㎝を超す大型の石槍を作っていたことが、発掘調査により判明している。また、黒曜石産地に近い佐久穂町の池の平遺跡では黒曜石を、さらに川上村馬場平遺跡では地元石材であるチャートを使って石槍を作っていた。

このように、佐久地域では石材の産地付近で石槍の製作をしていた遺跡が存在している。

また、千曲川右岸の水田地帯に位置する佐久市の井上遺跡からは、長さ約10㎝の細粒砂岩でできた局部磨製石斧と呼ばれる石器が発見されている。

これらについては、旧石器時代と縄文時代の境に位置する、神子柴系石器群に含まれる可能性がある。

その他にも草創期の石器として、佐久地域の各地からは有茎尖頭器という石器が散見されている。これは神子柴型の石槍よりも小型で、柄に装着する部分に舌状の茎を有したもので、確実に土器を伴う段階の石器である。御代田町の川原田遺跡や、佐久市鶉ヲネ遺跡、北相木村木次原地籍などで発見されたものが該当する。

なお、この石器が弓矢として用いた鏃であるかどうかは意見が割れている。縄文時代の狩りは、ひとつには弓矢の使用によって特徴づけられるが、その出現期の石器として重要な資料であろう。

このように佐久地域では、注目すべき遺跡や遺物が見られるのである。

2　佐久の古い土器

一方で、確実な縄文時代の指標として、土器の出土もある。現在のところ、佐久で最も古いと思われる土器は、川上村立石Ａ遺跡や、御代田町東荒神遺跡の微隆起線土器である。草創期の前半に位置づけられる。

時代が下って草創期の中頃では、佐久市寺畑遺跡や御代田町根岸遺跡で爪形文土器が出土している。

しかしいずれも少量の土器片に過ぎず、住居址などの発見もない。人口も極めて少ない時期だったと言えるだろう。

3　増える早期の遺跡

早期には気候が温暖となり、縄文時代的な要素が増えてくる。たとえば東京湾周辺では、漁撈具や貝塚が出現し本格的な水産資源の利用が始まったとされる。また、各地の遺跡から出土する植物加工具や土器の量が増加し、人々がより多様な食料資源を利用し始めた時期でもある。さらに竪穴住居の構築も一般的となり、これまでより規模が大きく、ムラと呼びうるような遺跡も増加する。

佐久地域でも各所に遺跡が見られるようになる。浅間山南麓の御代田町塩野西遺跡群でも散布地が多く、なかでも塚田遺跡では、鵜ヶ島台式と呼ばれる見事な砲弾形の土器などが出土した。

佐久市臼田の片貝川沿いでは小規模ながら遺跡が集中し、八ヶ岳東麓に彼らの生活の跡が点々と残されている。やはり八ヶ岳東麓の佐久穂町後平遺跡でも、住居址が報告されている。

蓼科山麓では佐久市望月の金塚・浄永坊の各遺跡で多量の遺物が出土しており、同じく新水Ｂ遺跡では４軒の竪穴住居址も見つかっている。

ただし、これらの住居址を見ても形に明確な規則性は見えづらく、炉も家の外に設けているなど、一時的な居住地であることをうかがわせており、いまだ通年居住が果たされていないとも思われる。

4　日本を代表する岩陰遺跡

佐久の早期の遺跡の中でも特に注目すべきは、北相木村の栃原岩陰遺跡であろう。

千曲川の支流である相木川の右岸にできた小さな洞窟状地形に残された遺跡で、1965年の発見以来、驚くべき成果があがっている。

時代的には、早期はじめの表裏縄文系土器から、早期前半の押型文系土器の時期が中心であり、多量の土器、石器の他、12体の人骨、10万点を超すであろう獣骨、さらに釣針、縫い針をはじめとした骨角器や、海棲のタカラガイやツノガイを加工した装飾品なども出土している。岩陰内の特殊な条件が、これら有機質遺物を保存したと思われる。 このような通常では発見されない遺物を分析することにより、縄文人の生活をより明確に描き出す材料となっている。

なお、放射性炭素年代測定によれば、古い土器で約11,000年前、人骨の一部は約9,500年前と判明している。

3頁の図の出典：図１「下茂内遺跡発掘調査報告書」、図２・５～８ 北相木村教育委員会写真提供、図３・４ 浅間縄文ミュージアム写真提供

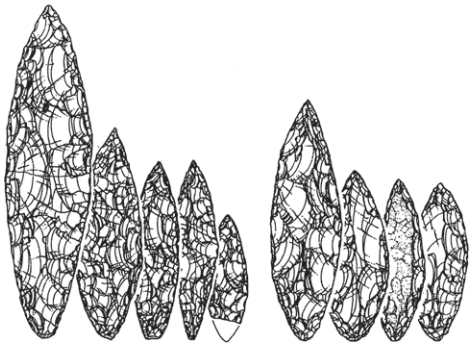


図１　下茂内遺跡の石槍

図２　木次原遺跡の有茎尖頭器

図３　東荒神遺跡の佐久地域最古の土器（草創期）

図４　塚田遺跡の鵜ヶ島台式土器（早期）

図５　栃原岩陰遺跡

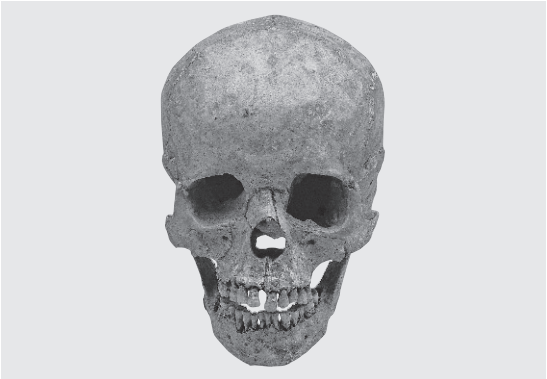


図６　栃原岩陰遺跡の縄文早期男性頭骨（複製）

図７　栃原岩陰遺跡の骨角器

図８　栃原岩陰遺跡の貝製装身具

佐久の縄文前期

藤森　英二

1　縄文海進の頃

縄文前期（約7,000～5,500年前）は、全国的に見て縄文文化の大きく進展する時期と言われている。

その背景には気候の温暖化もあったようだ。今から約6,000年前、平均気温が現在より約２℃高い、クライマチック・オプティマム（気温最適期）といわれる温暖期が訪れた。地上では氷河が溶け出し海面が上昇。現在は海のない埼玉や群馬県にまで海岸線が延びていた。所謂、縄文海進である。このような環境の中、佐久地域でも遺跡数が増えていくようである。

2　繊維の入った土器

前期前半、佐久地域でも独自の土器が見られるようになる。大きくは関東地方に多い羽状縄文系土器と呼ばれるグループに含まれ、縄文の施文が互い違いの方向になされるのが特徴である。同時に、このグループの土器は粘土の中に植物を多く練り込んでいて、繊維土器とも呼ばれている。

その中でも、千曲川上流域である佐久から小県の東信地域では、砲弾形をした独特の器形の土器があり、ほかの地域とは一線を画していることから、塚田式、中道式と呼ばれる（図１）。

一方で、南信地域に分布する東海地方の流れを汲む薄手土器は木島式と呼ばれ、佐久を含む東信では、上記の羽状縄文系土器のなかに少数混ざるといった状況である。あたかも、今に続く東北信と中南信の地域差の萌芽を見るようだ。

またこの頃には、これまで以上に大規模な集落跡が残されるようになる。佐久地域に隣接する諏訪郡原村の阿久遺跡では、大規模な環状集石群や馬蹄形集落が確認されている。

現在のところ、佐久地域でここまで大きな規模の遺跡は報告されていないが、浅間山南麓、御代田町塩野西遺跡群の塚田遺跡や下御堂遺跡では、10軒を超す住居址も見つかっており、一定のムラが築かれたことがわかる。また八ヶ岳東麓の佐久穂町後平遺跡や同じく小海町小原遺跡、千曲川右岸の北相木村木次原遺跡（図２）などで住居址が見つかっているなど、各地に人々の居住址が残されている。

3　諸磯期の集落

前期の後半になると、土器の胎土から繊維が消え、諸磯式と呼ばれる土器が関東から中部地方に分布するようになる。

佐久地域では佐久市榛名平遺跡や、御代田町塩野西遺跡群で、ある程度の遺物出土があるものの、佐久市芦内岩陰や北相木村栃原岩陰遺跡などの岩陰遺跡を含み、各地で点々と遺物が分布している程度と思われていた。

ところがここにきて、小海町と南相木村で調査、報告された遺跡が注目を浴びている。

八ヶ岳の東麓の台地上にある小海町中原遺跡では、昭和62年～平成５年に学術調査としてほぼ全域が発掘調査され、縄文時代前期後半の諸磯ｂ式期を中心とした、長径9.2mの大型のものを含む15軒の竪穴住居址や、200基を超える土坑が発見されている。

遺物も多種多様で、イノシシの顔といわれる150個近い獣面突起や、黒曜石とチャートの豊富な石器、少数であるが、近畿地方の北白川下層式系の土器などもみられる。中でも、復元された高さ約60㎝の深鉢は、口縁の四方にやや簡略化されたが獣面突起があり、大きさや残存度など、見事な逸品と言える。

さらに平成21・22年に調査された南相木村大師遺跡でも、部分的な調査ながら、ほぼ同時期の住居址が８軒確認されており、やはり長径６．６ｍのやや大型の住居址が含まれている（図３）。

また、土坑に逆位で埋められていた諸磯ｂ式の靴形口縁を持つ深鉢は実に精巧な作りで、これもまた逸品と言える（図４・５）。この調査でも多量の土器、石器の出土があるが、今後、佐久の前期土器編年を考える中でも、重要な遺跡と言えるだろう。

4　黒曜石とチャート

旧石器時代以降、長野県産の黒曜石が各地に運ばれ石器の材料とされているが、縄文前期前半期ではその利用率が高まるようになる。そして中原や大師遺跡と重なる諸磯ｂ式の時期には、その動きがさらに活発化し、峠を越えた群馬県の遺跡でも大型の黒曜石原石が発見されている。

中原、大師の両遺跡でも、やはり多量の黒曜石が出土しているが、同時にこの地域で採集出来るチャートを使った見事な石匙も数が多い。両石材を使った石器組成は、実に興味深いものがある。

これは、隣接する八ヶ岳西南麓に豊かな中期縄文文化が花開く直前であり、佐久地域のみならず、縄文時代の動向を考える上で、きわめて重要な遺跡と言えるだろう。

図１　下弥堂、塚田遺跡の尖底土器「塚田式」（前期初頭）　浅間縄文ミュージアム写真提供

図２　木次原遺跡の住居址（前期初頭）

図３　大師遺跡の大型竪穴住居（諸磯期）

図４　大師遺跡の諸磯ｂ式深鉢

図５　大師遺跡の諸磯ｂ式深鉢出土状況

図３～５：南相木村教育委員会写真提供

佐久の縄文中期

桜井　秀雄

1　代表的な遺跡

中期は、最も遺跡数が増加してくる時期である。その中でも佐久では、八ヶ岳西南麓では遺跡数が激減してくる中期後葉以降にその最盛期を迎える。しかも後期初頭もしくは前葉まで継続する遺跡が多いことが特徴である。

国史跡大深山遺跡（川上村）は、標高約1,300mという全国的にも最高地点に位置する縄文中期遺跡であり、縄文中期の住居跡51軒が検出され史跡公園として整備されている。昭和８年に国史跡に指定された寺ノ浦遺跡（小諸市）は、佐久の縄文中期遺跡研究の出発点といえる遺跡である。なお、平成26年から小諸市教委が整備に向けた内容確認調査を開始している。川原田遺跡（御代田町）は、中期中葉から後葉にかけての集落跡であり、46軒の中期住居跡が調査された。焼町土器が浅間山麓を中心とした土器型式であることを決定づけた遺跡であり、出土品は平成11年に国重要文化財に指定された。

この他、中期後葉～後期初頭の107軒の住居跡が調査され、佐久地方最大の集落跡となった郷土遺跡（小諸市）や戦前からその存在が知られ、現在も浅間縄文ミュージアムにより継続的な学術発掘が行われている宮平遺跡（御代田町）、70軒を超える中期住居跡が調査された寄山遺跡群（佐久市）、3,498点もの打製石斧が発見された大奈良遺跡（佐久市）などが特徴的な遺跡としてあげられる。

2　「石の文化」～敷石住居跡～

中期後葉に出現した床面に扁平な石を敷いた「敷石住居跡」は、中期末から後期前葉には一般的なありかたとなる。そして、Ｐ８・Ｐ９で綿田氏が解説されるように、後期には、三田原遺跡群・岩下遺跡（小諸市）など佐久では特筆できる敷石住居跡の事例がみられるようになる。こうした敷石住居跡の他にも、佐久は、後述する石棒や後期に盛行する石棺墓や配石遺構等も含めた「石の文化」といってもよいかもしれないような特質が見られる。

3　佐久の地域色豊かな土器

佐久の中期土器は、大深山遺跡などの南佐久郡南部では八ヶ岳西南麓系の土器が主体を占め、その他は概ね関東系の土器が主体を占めている。そうした中で、短期間ながら地域色豊かな土器が出現する時期がある。

後沖式土器　後沖遺跡（佐久市）を標識とするもので、斜行沈線文が特徴である。中期中葉前半（勝坂Ⅰ～Ⅱ式期）に佐久地方を中心に東北信から中信に分布している。

焼町土器　中期中葉後半（勝坂Ⅲ・Ⅳ式期）に出現するもので、メガネ状の把手と曲隆線、刺突などを文様にもつ独創的な造形の土器群である。土器の名称は塩尻市の焼町遺跡に由来するが、川原田遺跡の発掘調査により、浅間山麓の佐久から群馬地域が分布の中心であることが判明した。

郷土式土器　郷土遺跡を標識とする鱗状の短沈線文が特徴的な中期後葉（加曽利Ⅱ～Ⅲ式期）の土器群である。これも佐久から群馬地域に主体があり、分布は浅間山頂から半径約25kmの範囲にほぼおさまる。贄田明氏はこの鱗状短沈線が焼町土器の曲線に通じるのではないかと指摘する（長野県立歴史館2012『縄文土器展』図録）。私も同感であり、焼町土器と郷土式土器との間には時間的に空隙があるものの、「曲線」は佐久の中期土器の特徴であるといってよいであろう。

釣手土器　中部高地の特徴ある土器に釣手土器がある。佐久でも宮平遺跡や大深山遺跡などに人面付きの優品がみられる。ランプ説が有力であるが、宮平遺跡の通称「あくびちゃん」には外面胴下半部にススが付着し火にかけられた形跡がある。

4　石棒と土偶

日本一の大石棒　佐久穂町の田圃の傍らに立つ北沢の大石棒は、全長223cmという日本一の大きさを誇る。それに次ぐ大きさを有するのが佐久市入沢の月夜平遺跡から発見された全長152cmの石棒である。佐久は大形石棒が多い地域といってもよいかもしれない。また小海町穴沢遺跡で中期初頭の土坑から出土した石棒は全国でも最古級の所産である。

意外と少ない土偶　土偶といえば、茅野市の国宝２件（「縄文のビーナス」と「仮面の女神」）や昨年、重要文化財の新指定を受けた富士見町坂上遺跡出土の土偶が発見される八ヶ岳西南麓が注目されるが、それに比べると佐久での出土は意外と少ない。現在までに縄文時代の全時期を通して約200点の出土をみるが、このうち67点を数える郷土遺跡での出土を除くとその僅少さがわかる。男性のシンボルを象る石棒に全国１位・２位を占める大形品がみられ、一方で女性を象る土偶が少ないのは興味深い。

７頁図版出典：図１左桜井秀雄撮影、図１右・図３・図５浅間縄文ミュージアム写真提供、図４・図６『大深山遺跡発掘調査報告書』、実測図は各報告書より転載。

図１　寺ノ浦遺跡（左）と川原田遺跡（右）

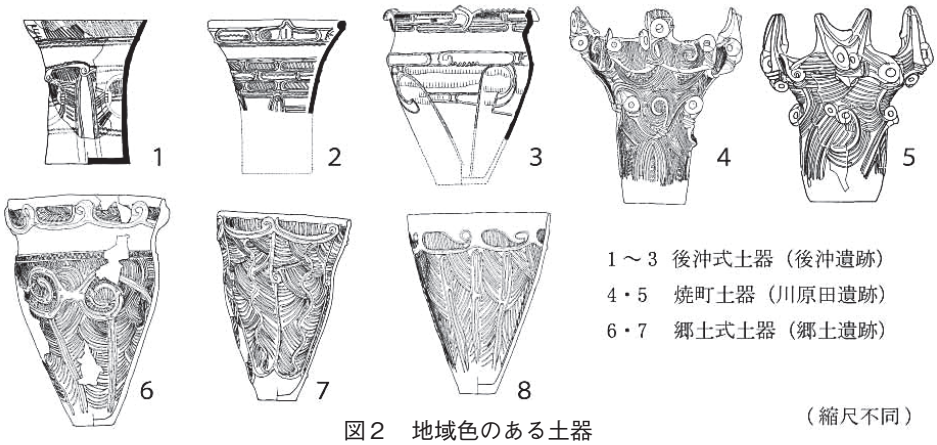


図２　地域色のある土器

図３　宮平遺跡の釣手土器

図４　大深山遺跡の釣手土器

図５　北沢の大石棒

図６　発掘当時の大深山遺跡の竪穴住居

佐久の縄文後期

綿田　弘実

1　代表的な遺跡

『長野県史考古資料編』遺跡地名表（1981）によれば、県内で時期がわかる縄文時代遺跡は5,850に上る。時期が重複する遺跡も時期ごとに計数すると、中期3,158、後期904箇所で、約3.5分の１に減少する。佐久地域は中期441、後期206箇所を数え、県内各地域の中で減少率は最低、遺跡数は最多を示す。

既調査遺跡から代表例を取り上げる（所在市町村名は報告書刊行時）。時期は初頭：称名寺式、前葉：堀之内１・２式、中葉：加曽利Ｂ１・２式、後葉：加曽利Ｂ３・曽谷式、末葉：安行１・２式並行期とする。

北佐久郡域には小諸市郷土遺跡（初頭､以下「遺跡」を略す）、三田原・岩下（初頭・前葉）、久保田（前葉）、御代田町西荒神・下大宮（初頭）、滝沢（初頭・前葉）、宮平（後期全体）、軽井沢町茂沢南石堂（初頭～中葉）、佐久市西片ケ上・鶉ヲネ（初頭）、望月町平石（初頭・前葉）、浦谷Ｂ（前葉～末葉）、浅科村海戸田Ａ（初頭）がある。南佐久郡域には臼田町大奈良（初頭）、佐久町宮の本（前葉）・後平（末葉）、八千穂村封地（初頭～中葉）、南牧村野辺山高原の中ノ沢（末葉）がある。

概観すると、浅間山南麓に後期前半を主体とする既調査遺跡が集中している。一見初頭の遺跡が多いが、郷土以外はほぼ初頭後半期に属す。

2　集落と住居

約100軒の中期住居跡が検出された、環状集落と推定される郷土は、後期初頭前半期に終焉する。住居が減少した中期末葉に柄鏡形敷石住居が現れ、後期に継続する。初頭後半期から前葉には敷石住居を主体に構成される集落が展開し、注目される事例が多い。初頭には、主体部と張出部の連結部には埋甕の他、軽石製の石鉢を埋設する地域的特徴がある。三田原７住（図１－２）は張出部側壁に軽石積みの壁面を構築し、側面に安山岩の石段で出入口を設ける。

岩下では南向き斜面を掘削した径約25mの円形平坦面の山側に、堀之内２式期の敷石住居３軒が並ぶ（図１－１）。中央の13住は大形で建て替えが繰り返され、両側の15・16住は普通サイズである。平坦面掘削部に接する３軒の出入口部間には帯状の配石が形成され、石棺墓・土坑墓が群在する。13住は核家屋と考えられ、前面に配石・墓域が付随する、この時期に特徴的な配置を示す。久保田Ｊ13住（図１－４）は柄鏡形礫堤住居といわれ、長軸13mの大形である。

前葉以降の集落の姿を石神から窺うと、土器１型式につき、比較的隣接する２・３軒の住居が１・２地点に散在する状況が推定される。掘立柱建物跡は佐久地方では存在が明らかではない。

後期に特徴的な墓として、前葉後半から中葉の石棺墓が石神・茂沢南石堂にある。長野県に特徴的な甕被葬は、この２遺跡の他、久保田・平石に見られる。

3　地域的土器と特徴的な遺物

称名寺式終末期には、同式を構成する関沢類型を継承した「茂沢類型」（図２－１～５）が現れる。頚部が屈曲した深鉢で、口縁部に４単位の突起があり、間に沈線を施す。体上部を沈線で横位区画し、突起下から頚部に環状突起を伴う貼付文を配す。体下部には斜行線でつながるＪ字状意匠を磨消縄文で描く。堀之内１式期にはこれが変化した鉢形土器が県内で主体を占め、同２式期には「体部屈曲鉢」が伴う。

堀之内２式中段階後半に「石神類型」の祖型が現れ、新段階前半に確立する（図２－６・７）。器形には体下部がやや膨らむものと、湾曲がない深鉢の二者があり、薄手・小形の精製土器である。口端部に上面８字状の小突起が３・４単位付き、口縁部に横線帯が廻る。突起下からＳ字状文が鎖状に垂下し、体部で横・斜位に展開して結紐状意匠を構成する。

茂沢類型・石神類型とも、浅間山を廻る中期郷土式の分布域で生成していることが注意される。

中ノ沢式土器の指標とされる図２－９は近年、百瀬長秀氏により、加曽利Ｂ３・曽谷式並行の羽状沈線文土器「上ノ段式」に続いて、安行１・２式に並行する隆帯文土器「中ノ沢Ｋ式」第２段階に編成された。後平Ｊ４住は同式の一括資料である。

特徴的な遺物には軽石製品があり、先に触れた石鉢とミニチュア石皿・鉢などがある。骨角器が乏しい長野県で、石神Ｊ１住出土のハマグリ製貝刃、牙鏃、鹿角鏃、骨針・ヘアピンと貝類は貴重な資料である。

【参考文献】（五十音順、報告書は省略）

佐野隆2009「中部地方の縄文後期集落」『月刊考古学ジャーナル』584
鈴木徳雄1999「称名寺式関沢類型の後裔」『縄文土器論集』、2012「堀之内式土器研究の諸問題」『第25回縄文セミナー縄文後期土器研究の現状と課題』
山本暉久2002『敷石住居址の研究』
綿田弘実2002「東信の縄文文化」『三内丸山遺跡と信濃の縄文文化』上田市立信濃国分寺資料館

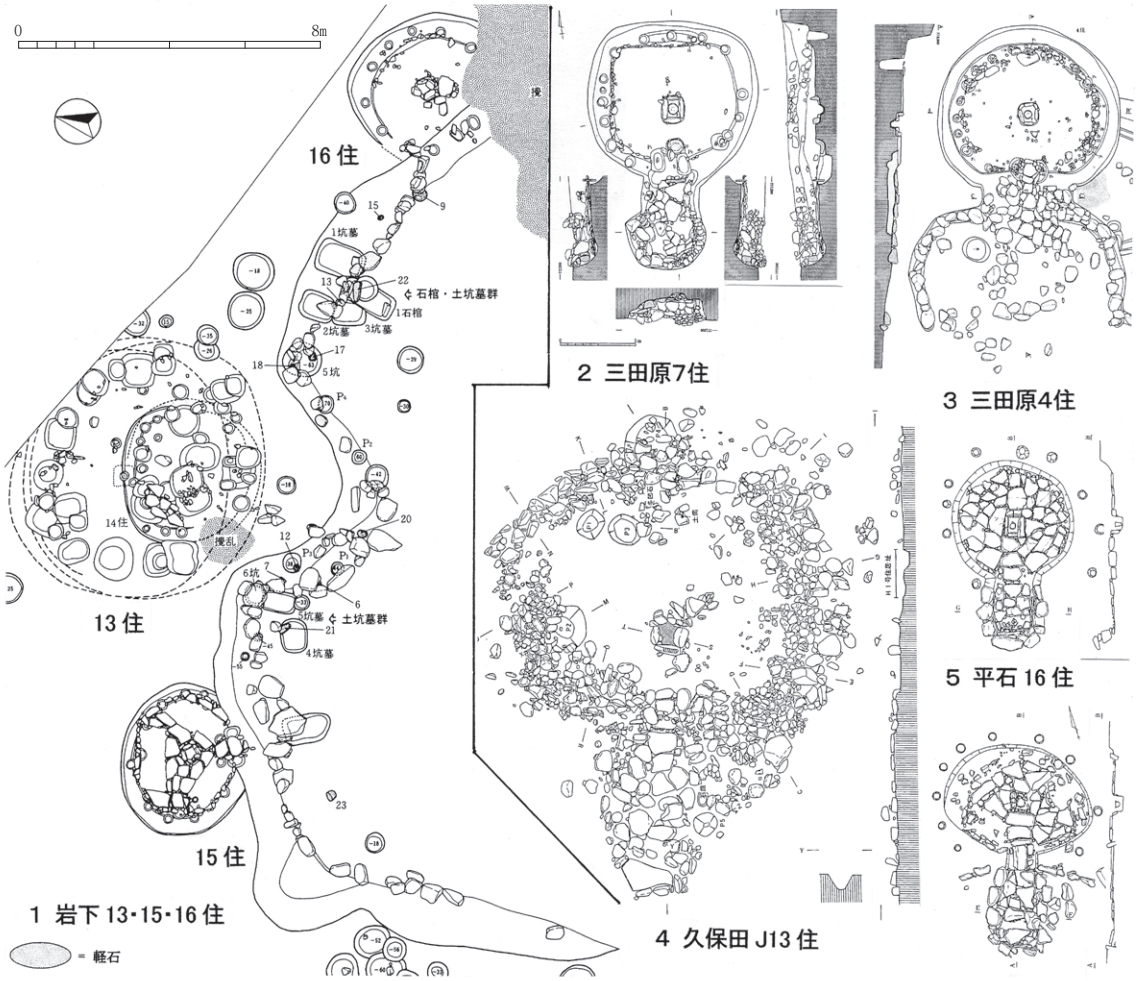


図１　縄文後期の敷石住居跡（1/200）

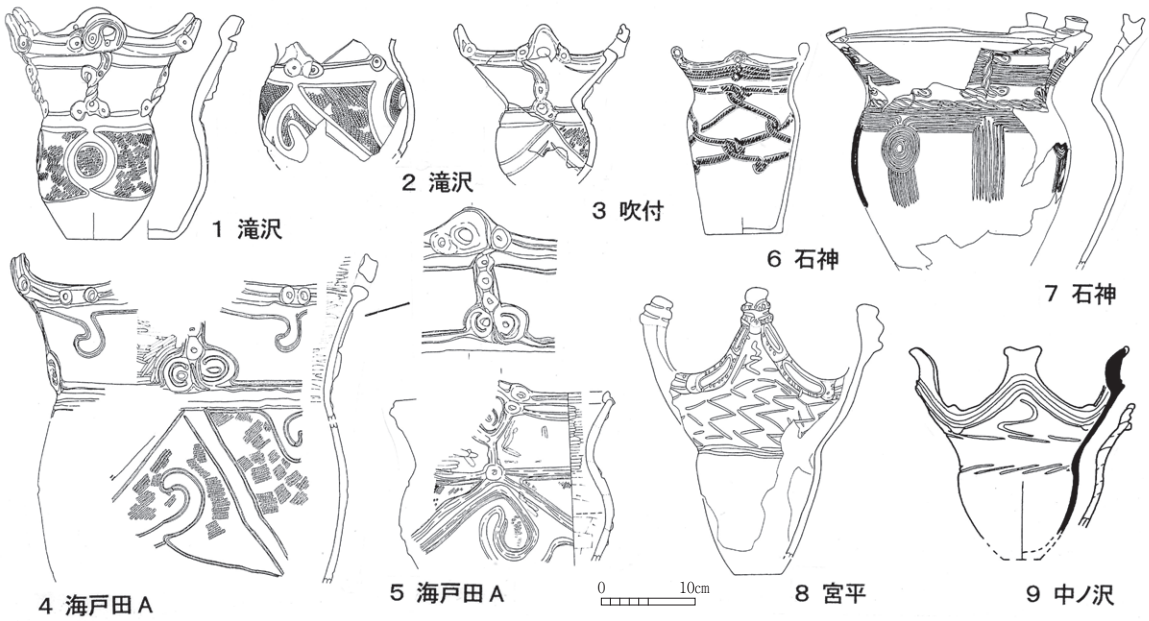


図２　縄文後期土器（1/8）　茂沢類型（１～５）、石神類型（６・７）、中ノ沢Ｋ式（８・９）

佐久の縄文晩期

中沢　道彦

佐久地方の縄文時代晩期（以下、縄文晩期）は土器型式で晩期初頭（未命名）、佐野Ⅰａ式、Ⅰｂ式、佐野Ⅱ式古・中・新段階、氷Ⅰ式古・中・新段階、弥生時代前期（以下、弥生前期）は氷Ⅱ式と編年される。今日では氷Ⅱ式を弥生前期と扱うが、1980年代初頭まで氷Ⅱ式を縄文最終末と扱われた経緯もあり、取り扱う。推定年代で晩期は3,000～2,400年前、弥生前期は2,400～2,200年前が見込まれる。佐久地方の放射性炭素年代測定値では氷遺跡出土の氷Ⅰ式土器付着炭化物で2,442±37年BP、2,461±31年BP、東五里田遺跡の氷Ⅱ式期土坑内出土炭化物の2,360±30年BP、東大門先遺跡の氷Ⅱ式期土坑内出土マメ科種子の2,430±25年BPがある（表１：他に下信濃石遺跡例も掲載）。

縄文晩期は縄文前中期に比べ、寒冷な気候と考えられる。長野県大町市唐花見泥炭地の花粉分析では晩期初頭と考えられる3,070±60年BPの測定値を境に冷涼なモミ属、トウヒ属、ツガ属などの花粉が増加する（阪口1989）。一方、弥生前期では縄文晩期に比べ、緩やかな温暖化が進むという。日本海沿岸遺跡の縄文晩期～弥生前期の遺跡形成の堆積から推定する説がある（甲元2005・鈴木2007）。

佐久地方を代表する遺跡として小諸市石神遺跡、氷遺跡、佐久市浦谷Ｂ遺跡、東五里田遺跡、東大門先遺跡、下信濃石遺跡、仲田遺跡、瀧ノ下遺跡、立科町下屋敷遺跡、御代田町戻場遺跡、小海町天狗岩岩陰遺跡、南牧村矢出川南遺跡などがある。

石神遺跡は縄文浅間山麓の南傾斜面に立地する。標高800m前後。八幡一郎『北佐久郡の考古学的調査』（八幡1925）で出土資料が取り扱われている他、『信濃史料』編纂の過程で石神遺跡採集資料の「粗大な工字文」を検討した永峯光一は、晩期前葉～中葉の時間幅で検討し、後の佐野Ⅱ式の設定につなげた（永峯1955、1956）。1991年には小諸市教育委員会により約20,000㎡の範囲が調査されている。

氷遺跡は千曲川左岸段丘上に立地。標高600m程度。1955年に永峯光一らにより調査が行われ、浮線網状文の精製土器、細密条痕の甕・深鉢をもって氷Ⅰ式、「三角連繋文」（変形工字文）の精製土器及びそれに伴う土器群をもって氷Ⅱ式が設定された（永峯1965）。中部高地の土器編年研究で石神遺跡及び氷遺跡が果たした役割は大きい。

今日では弥生前期と扱われる氷Ⅱ式は型式内容に不明な部分が多かったが、最近の佐久地域の東五里田遺跡、仲田遺跡、下信濃石遺跡出土土器などで資料が蓄積されている。

立科町古町遺跡群下屋敷遺跡は1973年に学術調査が行われ、晩期前半の集石遺構が検出、また岩版出土で著名である。

住居址について良好な事例が少ないが、佐野Ⅰａ式期の石神遺跡Ｊ24号住居は中央に石囲炉、西側に無文土器の埋甕、壁柱穴をもつ（図１）。同時期の同遺跡Ｊ27号住居も石囲炉や壁柱穴をもつ。いずれも住居の掘り込みが浅い。佐野Ⅰａ～Ⅰｂ式期の石神遺跡Ｊ28号住居、佐野Ⅰｂ～Ⅱ式の石神遺跡Ｊ15号住居も中央に石囲炉や壁柱穴をもつ。掘り込みが浅い。石神遺跡において、佐野Ⅰａ～Ⅱ式期の住居は掘り込みが浅く、中央に石囲炉があり、壁柱穴をもつ特徴が指摘できる。また、縄文晩期は掘立柱建物使用も推定されるが、石神遺跡第７～９・11号掘立建物跡は時期が晩期と考えられる。

墓址では、石神遺跡第５号土坑墓（図２）で壮年男子、仰臥屈葬の成人人骨が検出された。推定身長161㎝、頭骨では左右の上顎側切歯・県歯、下顎犬歯の抜歯が認められている。

遺跡の継続と立地について、石神遺跡は早期末から晩期中葉佐野Ⅱ式まで継続する長期継続型の遺跡だが、千曲川対岸の氷遺跡は晩期末氷Ⅰ式～弥生前期氷Ⅱ式が主体である。中部高地では晩期後葉浮線文土器群～弥生前期の遺跡の集落は微高地に集落域、湿地に廃棄域が分離される傾向にある点が指摘されている。氷遺跡はその時期の資料が斜面から多く出土し、その事例だ（図３）。同遺跡の集落域は不明だが、段丘上の平坦面が予想される。晩期後葉で何らかの遺跡立地選択の変化があったのだろう。

晩期の遺物として土偶や耳飾など、当時の何らかの社会制度や精神を反映されたものと考えられる。石神遺跡採集の晩期中葉の遮光器形土偶は東北からの影響が予想される（図４）。一方、同遺跡Ｊ32号住居出土の晩期前葉の土偶は、顔面表現や板状の形状地域の伝統をひく（図５）。首の装飾、背面の対向する三叉文は土器や土版にある装飾や文様。ただし股部の細沈線のパンツ状の文様は同時期の東北の土偶の影響だろう。また同遺跡採集の晩期前葉の顔面付注口土器は土偶の顔面表現を土器にもつ（図６）。氷遺跡では氷Ⅰ式に伴う黥面土偶の出土が知られている。１次調査で７点、２次調査で４点、３次調査で１点出土する。黥面土偶は文字通り、顔面の入墨を表現したものと考えられている。

表１　佐久の縄文時代晩期～弥生時代前期の放射性炭素年代

市町村名	遺跡名	土器型式	対象物	測定値	補正値	較正年代	測定機関コード
小諸市	氷遺跡	氷Ⅰ式	土器付着炭化物	2,442±37		calBC758-calBC408	NUTA2-2798
		氷Ⅰ式	土器付着炭化物	2,461±31		calBC760-calBC412	NUTA2-2799
		氷Ⅰ～Ⅱ式	土器付着炭化物	2,407±33		calBC537-calBC408	NUTA2-2800
佐久市	東五里田遺跡	氷Ⅱ式	D7号土坑炭化物	2,360±30	2,370±40		IAAA-31970
佐久市	下信濃石遺跡	氷Ⅱ式	土器付着炭化物	2,400±30	2,390±30		IAAA-50942
佐久市	下信濃石遺跡	氷Ⅱ式	土器付着炭化物	2,440±30	2,400±40		IAAA-50943
佐久市	東大門先遺跡	氷Ⅱ式	D7号土坑マメ科種子	2,430±25	2,429±23	calBC551-calBC405 (0.788) calBC744-calBC688 (0.174)	PLD14365

※測定値・補正値は、年 BP を示す

図１　石神遺跡Ｊ-24号住居

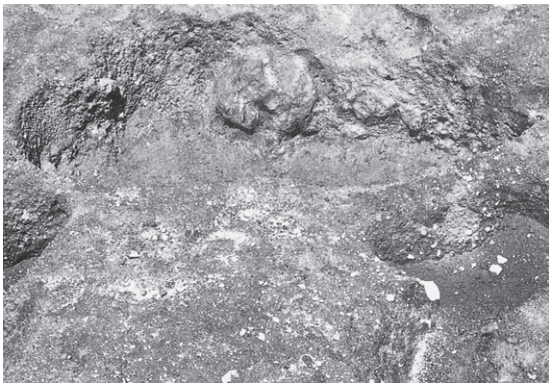


図２　石神遺跡５号土坑墓

図３　氷遺跡発掘風景

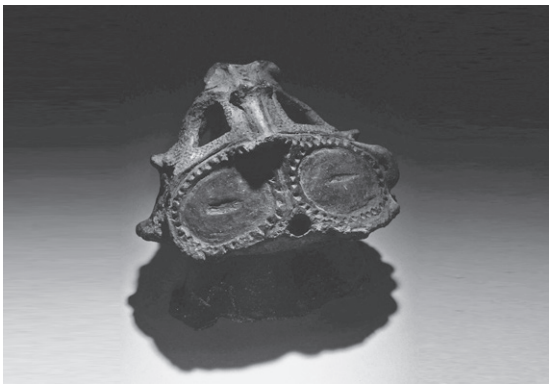


図４　石神遺跡の遮光器土偶

図５　石神遺跡の板状土偶

図６　石神遺跡の注口土器

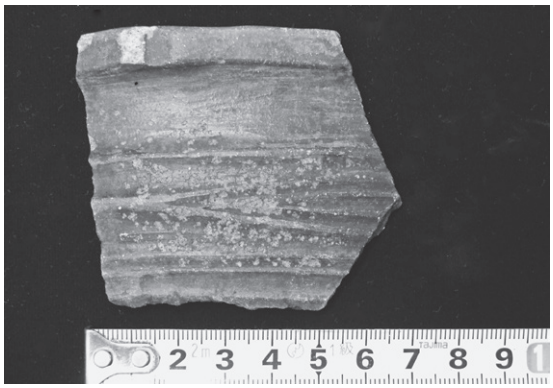


図７　氷Ⅰ式土器

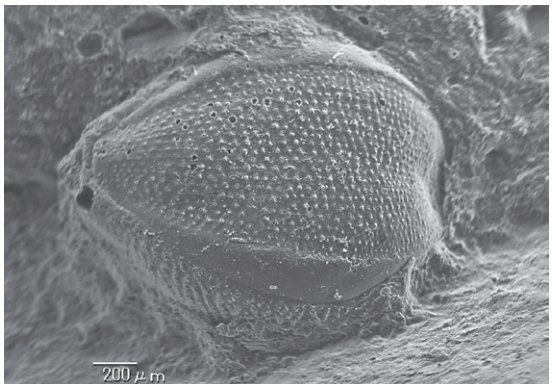


図８　アワ圧痕電子顕微鏡写真

土製耳飾は縄文後期中葉～晩期前葉で特に用いられた装飾品。石神遺跡の調査で100点近く出土している。大中小など幾つかサイズがある。装着のために耳朶に穴を開けることになるが、耳朶の穴の大きさと耳飾の大きさが対応したのであろう。

狩猟、漁撈、採集など、生業活動の窺う資料について、天狗岩岩陰遺跡では晩期の狩猟集団儀器と考えられる骨製品が出土するが、狩猟活動において岩陰が利用されたのであろう。石神遺跡では晩期前葉～中葉の６棟の住居がまとまる12×８ｍの範囲で、大半が佐久市八風山産安山岩の石鏃791点と多量の剥片が出土している。791点の多くが晩期前葉～中葉とすると、この時期に石鏃を多量に製作、保有した石神遺跡の性格が見えてくる。

晩期後葉～弥生前期の氷遺跡では動物遺存体でシカ、イノシシが出土するが、氷Ⅰ式土器の圧痕をシリコン樹脂で型取りし、走査型電子顕微鏡で観察するレプリカ法で調査すると、大陸系穀物であるアワ、キビが検出された（図７・８）。西日本では晩期後半突帯文土器期にイネの水田栽培、アワ、キビの畠栽培が伝播するが、西日本、東海経由で佐久にも従来の生業に加え、アワ・キビ栽培が導入されたのであろう。氷遺跡の場合、畠は集落域周辺の段丘上にあったと推定される。中部高地では晩期前～中葉に比べ、晩期後葉浮線文土器群の時期に石器組成で打製石斧の比率が増加する。アワ・キビの畠栽培を導入するにあたり、縄文の伝統的な土掘り具である打製石斧を耕起具として採用したのだろう。東大門先遺跡では弥生前期氷Ⅱ式期の土坑でアズキ亜属のマメ類種子などが719点出土した。最近、中部高地の縄文前中期のマメ類利用が注目されているが、縄文で伝統的に管理、利用されたマメ類が大陸由来の畠作に組み込まれたのだろう。

また氷遺跡出土の氷Ⅰ式土器群は器種組成で浅鉢が３割だが、氷Ⅰ式新段階では浅鉢が１割程度と激減する。中部高地ではアワ、キビ栽培導入と土器組成で大型壺の出現との相関性が指摘されている。土器組成の変化という形で生業の変化が反映されたのであろう。

本内容については、科研基盤（Ｂ）（課題番号25284154代表者　会田進）の成果の一部を含む。

※図は、１・２・３・５は各報告書より転載、４・６は『佐久の古代遺産図鑑』より転載、７・８は中沢が撮影したものである。

♪　編集後記　♪

尖石遺跡や井戸尻遺跡、縄文のビーナスや仮面の女神など、華々しい遺跡や遺物に恵まれた八ケ岳西南麓に比べると、佐久の縄文時代はあまり目立たないが、この地域独自の縄文文化が花開いている。

すでに四半世紀前になってしまうが、浅間山麓の川原田遺跡の中期縄文集落の発掘は、自分自身の考古調査歴で恐縮だが大変思い出深いものがある。出土した焼町土器が国重文となり、浅間縄文ミュージアムを立ち上げることができたことも幸せな経験だった。

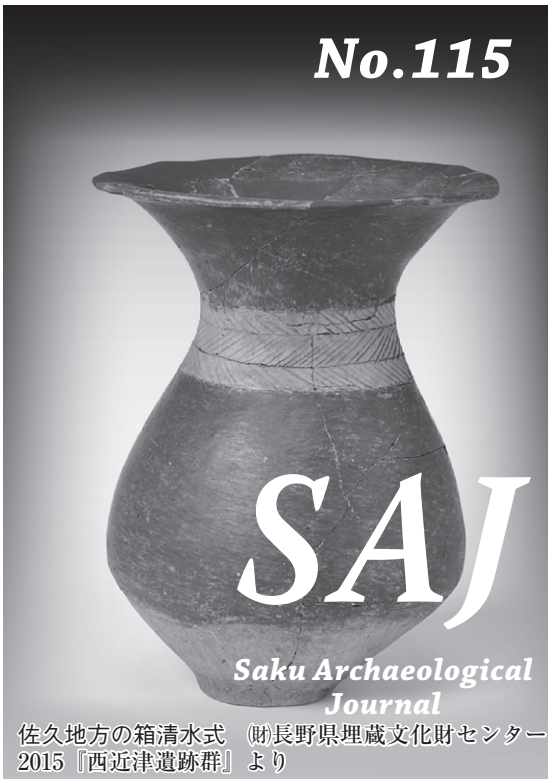
千曲川上流の中期大深山遺跡から、より下流の晩期氷遺跡まで、佐久の縄文時代の概要について本特集号をご覧いただければ幸いである。　（つつみ）

佐久考古通信　№114

発行所　佐久考古学会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜井秀雄方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2016年３月３日
発行者　桜井秀雄
編集者　堤　隆
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク



佐久地方の箱清水式　(財)長野県埋蔵文化財センター
2015『西近津遺跡群』より

佐久考古通信

■ 遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌 ■

2016. 6. 18　　佐久考古学会

特集：佐久の弥生後期 ―広域交流の始まり―

紀元２世紀頃、古墳時代が近づくと朝鮮半島起源と目される鉄剣やガラス製品等の威信財や鉄素材が中央高地、関東などに普及する。

本号では弥生後期の佐久を含む長野や群馬にこれらの財が多いことに注目した。また、茨城県の鈴木氏には、弥生時代に遠方から佐久の地へ足を運んだ旅人の役割について追求していただいた。

★　目　　次　★

箱清水と樽への文物の往来……小山岳夫　1
くろがねの腕輪と碧い玉……平林大樹　2
ウェスト・バイ・サウスウェスト……鈴木素行　6
偶感・弥生土偶……桐原　健　10

箱清水と樽への文物の往来

小山岳夫

弥生時代後期後半の長野県千曲川流域は箱清水土器様式圏、群馬県は樽式土器様式圏と括ることができる。両土器様式圏は共に弥生中期の栗林式土器を遡源とし中部高地型櫛描文を共有する兄弟様式で、墓に鉄剣、螺旋状鉄釧、銅釧、ガラス玉等多くの威信財を持つことでも共通する。

長野県の北信から東信上田地域、群馬県の北部（渋川市周辺）は北陸系土器が多くみつかる地域でもあり、威信財が日本海側からもたらされた証拠のひとつとなっている。威信財は群馬県北部から荒川を南下して東京湾沿岸へもたらされたと考える意見も多いが、平林大樹は帯金幅等の相違から東京湾沿岸と長野・群馬で出土する鉄釧は生産地が異なることを指摘する。とはいえ日本海から太平洋側へ連なる威信財伝播の基幹ルートの中間点にあたる箱清水・樽土器様式圏が、東日本の弥生時代後期社会の鉄などの普及に重要な役割を果たしていた可能性は高い。

一方で、長野県佐久地域、群馬県南西部の甘楽・富岡地域、吉ケ谷式土器様式圏の埼玉県比企・入間地域など北信、群馬県北部よりも南側に連なる地域は、北陸系土器は稀有で威信財を保有する地域である。これらの地域では、北信や東京湾沿岸などにもたらされた威信財のみを交換財として選択しており、北陸系土器を伴う人々は到来しなかった(あるいはさせなかった)ようだ。

今までは、有馬遺跡や小八木志志貝戸遺跡など群馬県だけでみつかっていた人形土器が、近年佐久市西一里塚遺跡で発見され、千曲川流域での存在が確認された。鉄剣や鉄釧を副葬した墓域と近接して出土している点で有馬遺跡と共通し、威信財と人形土器は一体をなす可能性が高まった。

設楽博己は人形土器の両手を振り上げる仕草を墓に寄り来る邪悪なものを防ぐ行為と見る。また、古代中国の『周礼』に登場する墓に入って戈を振り悪霊を退散させる儀式を司った方相氏の影響を想定する。

威信財やその素材の到来元と考えられる日本海側の北方には朝鮮半島・中国大陸、西方には九州がある。半島・大陸の葬送儀礼などの思想・風習が、弥生時代の長野・群馬へ直接的であれ間接的であれ、伝わって来たとしても不思議でない。

くろがねの腕輪と碧い玉

平林　大樹

はじめに

標題に示した「くろがねの腕輪」と「碧い玉」とは、弥生時代後期の中部高地や関東地域に偏在が認められる器物である鉄釧とガラス小玉を指す。とりわけ前者については、該期における信濃への豊富な鉄器の流入を物語る資料としてくり返し言及がなされてきた。近年では、新出資料の増加とともに、歴史的評価をすすめるうえで不可欠な、資料そのものの詳細な観察に基づく実証的な研究も進展しつつある。

以上の認識を踏まえて、本稿では、鉄釧を中心に現在の研究状況を概観し、若干の私見を述べたい。

1．鉄釧の分析視角

研究史　鉄釧に関する論考の多くは、出土遺跡の報告書のなかにおいて、付帯する論考というかたちで言及、検討がされることが多い（岩本1997等）。こうした中で、総合的な検討は、藤岡孝司による分析が嚆矢といえる（藤岡1995）。その後、出土事例の増加にともない、牛山英昭による、精緻な実測図の提示（牛山1996・1998）や、付着物の検討など、あらたな分析視角が付加され、多様な分類案も提示されてきた。岩本崇の論考は、こうした論点を明瞭に整理しており、現在における研究の到達点と評価しうる（岩本2002）。

近年では、土屋亮介が、製作技法に着目した分析を精力的にすすめており、注目される（土屋2009）。また、墳墓での供伴事例が多い銅釧との関係や巻き上げ段数や幅の違いと流通のあり方に着目した研究も多い（野澤2002・北條2005等）。

鉄釧の分類　上述のとおり、細部に分類の違いはあるものの、分類案において共通して提示される属性は以下のとおりである。

①線の幅

②鉄線（鉄帯）の巻き上げ段数

③断面形状

従前の研究を整理するならば、線幅は４㎜程を境界として幅の狭いものと、広いものとに大別しうる。また、巻き上げ段数が数段以上にわたる個体を「螺旋状」、１～２段程度の個体を「帯状」ないし「単環状」とする名称が周知されている。

筆者がこの中で、規定的な属性と認識しているのは①・②である。とりわけ①の線幅は、これまでの研究で、地域的な偏在が明らかになっており、論を先取りすれば、幅の狭い鉄釧が長野県域の北部（以下、長野地域）に集中することが判明している。

ただし、鉄釧は、構造上、端部に近いほど線幅を減じており、計測者によって、計測位置に差異が生じている可能性がある。こうした点を確認するため、主要な出土事例について、各個体における線幅の最大値と最小値、平均値の分布を図１に示した。計測値は、筆者が資料調査を実施し、あらためて計測した値と実測図から読み取った数値を併用する。こうしてみると、漸移的な部分はあるが、平均４～５㎜を境に、細型と太型に区分でき、従前の分類案の妥当性が検証された。

以上の結果を踏まえ、本稿では、次章以降に行う分析の前提として、以下の大別分類案を提示する。

Ａ類　線幅最大値か平均値が６㎜に満たないもの

Ｂ類　線幅平均値が６㎜を超えるもの

これまでの検討結果からＡ類についてはすべて螺旋状であり、問題はないが、Ｂ類については、図に示すように、10㎜を超える一群が存在しており、線幅と段数からさらなる細別分類が可能である。

いずれにせよ、本稿での目的に照らすならば、上記の分類でひとまず所定の目的は達成しうる。

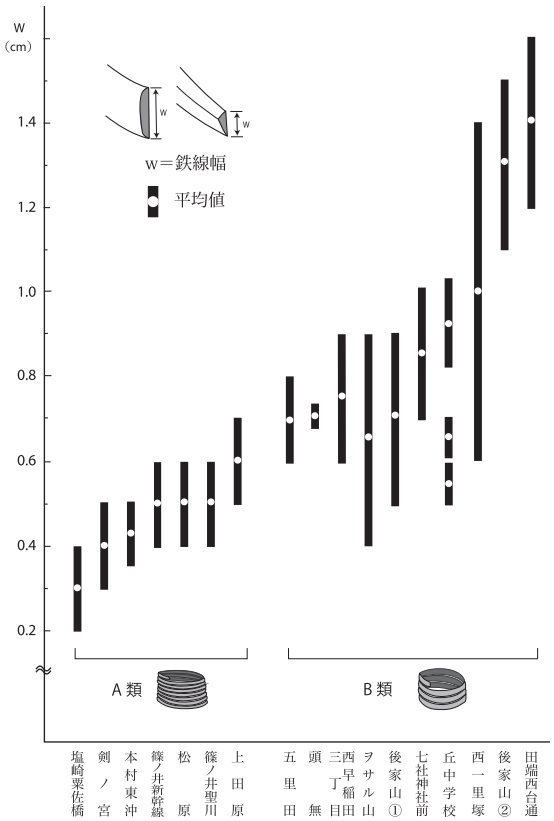


図１　鉄釧の鉄線幅

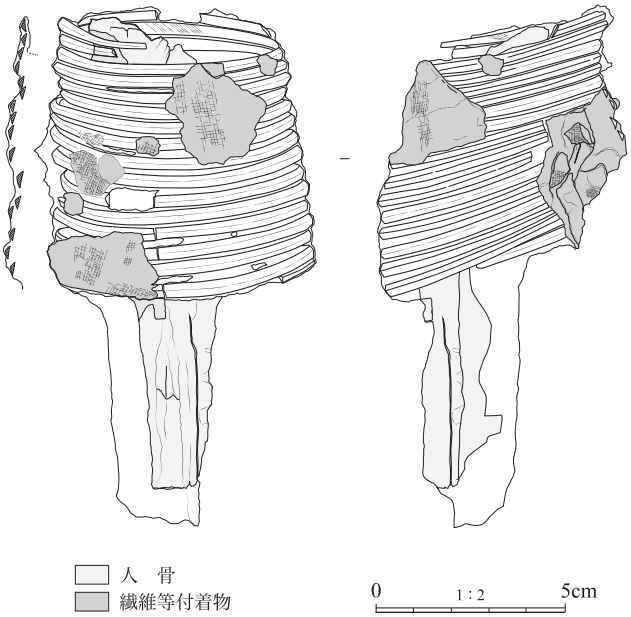


図２　塩崎遺跡群粟佐橋地点出土鉄釧実測図

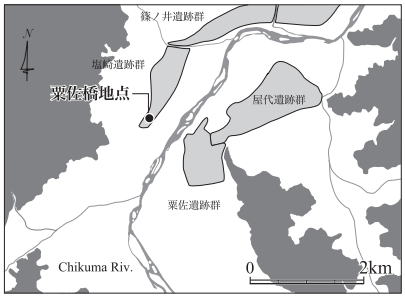


図３　出土地点の位置

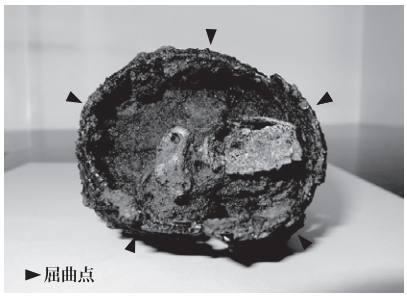


写真１　屈曲点の位置（端部側より撮影）

鉄釧の製作手順　ここでは、従前の研究成果と筆者の観察結果をもとに、想定しうる製作手順を以下に列記する。

工程①　長条鉄素材の用意
工程②　稜線の作出
工程③　鉄線の巻き上げ
工程④　細部・先端部の整形・調整

工程①については、後述する塩崎遺跡群粟佐橋地点出土例では、総延長が３ｍに及ぶ。弥生時代においては、長条鉄素材の用意そのものが、当時としては、高度な技術であったと考えられる。佐久市後家山遺跡出土例の科学分析の結果によれば、同例は炭素の含有量が少ない極軟鋼であるという。他の事例においても、同程度の軟度であったことが確かであれば、整然とした巻き上げも納得がいく。

工程②は、鍛打と研磨によって、断面形状を三角形に成形し、稜線を作出する工程である。この稜線が、とりわけ幅が狭い個体にみられる点は注目に値しよう。筆者は金属工学に明るいわけではなく、軽々に論ずることは避けたいが、単に意匠状の作出によるものではなく、螺旋の巻き上げ時に金属疲労による破断を防止するための措置として解釈するのが妥当とみる。この立場に立って、当該工程に位置づけたものである。

工程③は、鉄線を折り曲げ、単環ないしは螺旋を作出する工程である。明瞭の度合いに差はあるものの、ほとんどの螺旋状鉄釧では屈曲点が確認できる。さらに、いずれの個体も外径にかかわらず、屈曲の単位が３㎝前後である点は注目できる。

東京都西早稲田三丁目遺跡出土例（岩本1997）では折り曲げ痕が極めて明瞭であり、多角形と呼称しても差し支えない形状を呈している。３㎝という値は、軟質な長条形の鉄素材を折り曲げるにあたり、円形を損ねず、整然と多段の螺旋を巻き上げるのにもっとも都合のよい長さであったと想定される。

ただし、熱間鍛造と冷間鍛造のどちらの手法で形成されたのかは不明である。先述の通り、極軟鋼であれば、後者による巻き上げも不可能ではない。鉄釧の多くが内径６㎝前後を測り、成人女性・男性は脱着が困難である。幼年時からの装着が想定されるが、折り曲げに木型などが用いられたのであろうか。

２．塩崎遺跡群粟佐橋地点の鉄釧

ここで、Ａ類の良好な出土例である長野市塩崎遺跡群粟佐橋地点出土例を提示し、観察所見を提示しておきたい（図２・図３）。同例は、ほぼ完形の鉄釧で、２基が並列する木棺墓から出土した。環内には人骨も残存しており、良好な遺存状態にある。各部位の名称については、出土位置を正位置と措定し、図化をすすめた。ここでは便宜的に、左右の方向は実測図の上面にむかって右、左を示し、鉄線の段番号については基部側より第１段、第２段…と呼び分ける。

出土状況　木棺痕跡をもつ土壙隅において棺床の直上で出土し、釧内部には桃、尺骨が残存していた。頭骸骨をはじめとする他の遺存人骨との位置関係からみて、右手首に着装されていたことは間違いない。人骨が遺存した状態での鉄釧の出土例は本例が唯一であり、

位置等から装着状況を実証できる重要な資料といえる。

外　形　総段数は16段を数える。基部から端部に進むに従い、序々に径を減じており、裁頭円錐形をなす。上面は第15段と第16段の一部が欠損しているものの、端部側の先端部分は残存している。数カ所の破断が認められるが、概して遺存状況は良好である。螺旋の断面形状は楕円形をなすが、これは土圧による影響を受けた結果であり、もともとは正円に近い形状であったものと推察される。

螺旋の構造　鉄線は基部から端部に向かって左巻きをなし、螺旋を形成する。鉄線相互の間隔は0.1cm～0.2cm程を測り、一部には重複する箇所も確認できる。

鉄線の形状　鉄線は先端部では線幅0.2cm、線厚0.1cm前後、基部付近では同幅0.4cm、同厚0.2cm前後を測る。基部から先端部に向かうに従い、漸移的に細くなっており、先端部は尖頭状に仕上げられている。本例については銹膨れにより稜線が判然としないものの、破断面の肉眼観察およびX線写真の判読結果から三角形と判断した。

鉄線の折り曲げ　基部側の側面を観察すると、数ヶ所に鉄線が屈曲する箇所が認められる（写真１）。屈曲点は、一巻きにつきおおよそ５～６箇所、おおむね３cm前後の間隔で認められる。さきに述べたように、土圧によって断面形状が変形しており、この屈曲点も変形過程において偶発的に生じた可能性も否定できない。ただ、屈曲点は下面においても一定の間隔で確認でき、上方からの土圧の影響を想定した場合、変形の方向として不自然である。この点を考慮するならば、本例に関しては、ひとまず土圧による変形の可能性を低く見積もることができる。

付着繊維　外面上面の中央右上から左下隅にかけて３cm前後、下面においては破断部を中心に繊維の付着が認められる。とくにこちらについては二重に重なっている箇所がある。繊維痕の細部を観察すると、糸の直径は0.03～0.04cmを測り、撚りはＳ撚りの可能性がある。現状では、繊維同定を果たし得ていない。この繊維については①被葬者の衣服、②遺骸の緊縛布、③単独埋納時の包装布（袋）、④鉄釧の保護のための織布といった解釈を想定しうるが、本例については、装着状態での出土であることや、繊維が外面にのみ付着していることから、①ないしは②であることは確実である。また、第16段の内面にも、わずかながら繊維痕跡が確認できる。これは岩本崇が指摘する「繊維圧痕Ａ」に該当する（岩本2002）。

岩本は、墳墓出土資料からしか確認できず、出土地域も南関東に限定されると述べているが、この指摘が確かであれば、中部高地において初の事例となる。

３．鉄釧の分布と流通

図４に、Ａ類とＢ類の分布を示した。この図からただちにわかるのは、両者における排他的な分布のありかたである。中部高地と関東に偏在することは従前の研究の中でくり返し指摘されてきた事象であり、長野地域においてＡ類が偏在する事実をここでも追認することができた。

こうした分布の偏在には、下記の解釈が成り立つ。

①中部高地で２種類の鉄釧が作り分けられ、関東地域に「流通」した。

②関東地域で２種類の鉄釧が作り分けられ、中部高地に流通した。

③両者がそれぞれの地域で生産された。

分布論の原則から考えれば、③がもっとも妥当性が高く、明らかに形態の異なる二者は、中部高地と関東各々の地域で生産していたと考えるのが自然であろう。

一部の事例を除き、長野地域に主たる分布が限定されるＡ類については、地域生産が確実視でき、地理的な位置関係と北陸系土器の出土を考え合わせれば、日本海ルートを経由して鉄素材を入手している可能性を高く見積もることができる。

当時稀少であった鉄製品を惜しみなく副葬する当地の習俗は、豊富な鉄の流入を示す証左といえよう。

一方、Ｂ類については、広範に分布している点を考慮すれば、東京湾沿岸の遺跡に製作地があり、そこから遠隔地に再分配されたという、高次の理論を提示することも可能である。なお、同じ箱清水式文化圏である佐久地域で、Ｂ類に出土が限られる点は興味深い。関東地域に接する地理的環境を勘案すれば、同地域から流入されたとみるべきであろうか。

いずれの仮説も、究極的には、製作工房の発見という偶発的状況に遭遇しない限り、さらなる検証は難しいが、こうした鉄釧の分布状況の分析からは、在地における生産・消費を基盤としながら、一部、広域的な流通を複線的に行い得ていた地域社会の姿を読み取ることができる。

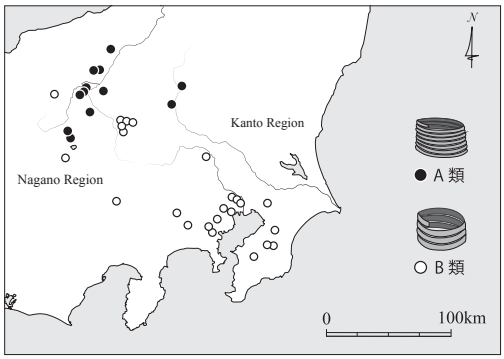


図４　鉄釧の分布

４．ガラス玉と屋内墓

筆者はかつて、床面から265点を超えるガラス玉が出土した長野市長野女子高校校庭遺跡16号住居跡（図４）について、長野市榎田遺跡と中野市牛出古窯遺跡における住居跡内からの玉類や人骨の出土例を類例として示し、出土遺構に対する出土点数の特殊性から竪穴住居跡が墓として利用され、ガラス小玉が被葬者の装身具として副葬された可能性を提示した（飯島他2014）。

こうした住居内に埋葬される事例に関して、鈴木素行は、住居跡内に墓坑の痕跡が確認できるものを「屋内土壙墓」、痕跡は認められないが、炭化物や鉄剣、ガラス玉など出土から、埋葬の可能性を認めうる事例を「屋内墓」とする説を提示した（鈴木2008）。

長野女子高校校庭遺跡の事例は、炭化物の出土こそ確認できなかったものの、ガラス玉は、住居跡の西側、床面直上からまとまって出土している。こうした状況は、提示された後者の概念に合致しており、「屋内墓」の一例と解することができる。

千曲川流域では、鉄釧やガラス玉を副葬にもつ円形周溝墓が、「赤い土器のクニ」と形容される地域社会の墓制として定見を得てきた。上述の想定が確かであれば、これまで、混入や祭祀に関わる事例として等閑に付されてきた事例も「屋内墓」の可能性が生じてくる。

これらは、該期の信濃における墓制の評価に関わる論点であり、状況証拠の積み重ねという点は論拠として脆弱である。慎重な検討と類例の検索が重要となろう。

結　語―分布論のケーススタディ―

最後に、方法論的な観点から、二つの器物がもつ可能性について言及しておきたい。小杉康は、「分布論は体系化されていない」との批判を受けるかたちで、「遺跡間での広がりを問題とするものとしての分布論を構想すべき」としている（小杉2011）。分布図における空白域の取り扱いなど留意すべき問題は内包されているが、分布のあり方の比較は、現状では、生産や流通を考える有効な手法である。地形的な制約をもつ中部高地と、相互往来が容易な関東諸地域に出土する二つの器物は、考古学的方法である分布論の体系化をすすめる上で、良好なケーススタディと評価しうる。

以上、新たな知見のほとんどない本稿の不備を今後の課題として、筆を擱くことにしたい。

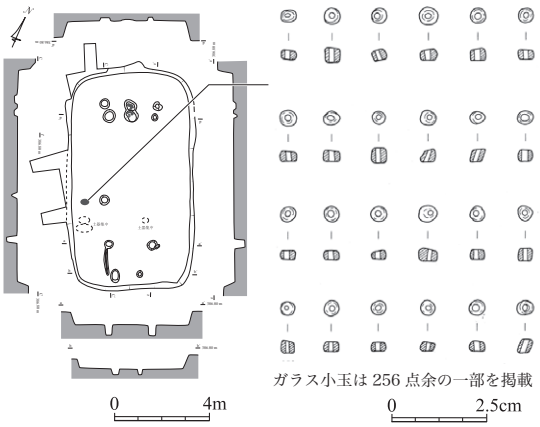


図５　長野市長野女子高校校庭遺跡16号住居跡

謝　辞

本稿は、筆者が長野市埋蔵文化財センター在職時に、塩崎遺跡群粟佐橋地点出土例を実測する機会に恵まれたことに端を発する。同例の重要性こそ認識していたものの、新たな論点や属性を見出せなかったため、論考として提示する機会もなく、忘却しかけていたが、このたび、小山岳夫氏に執筆を勧めていただいた。

また、塩崎遺跡群粟佐橋地点出土例の提示にあたっては、長野市埋蔵文化財センターの飯島哲也氏に、ご高配を賜った。文末であるが記して両者に感謝の意を申し上げたい。なお、同資料は、現在、長野市立博物館の常設展示室で展示されている。

参考文献

飯島哲也他　2014 『長野女子高校校庭遺跡』長野市の埋蔵文化財第134集、長野市教育委員会。
岩本　崇　1997 「西早稲田３丁目遺跡出土の鉄釧」『西早稲田３丁目遺跡』、西早稲田３丁目遺跡調査会。
岩本　崇　2002 「東日本における弥生時代鉄釧の製作背景」『古代文化』第54巻第５号、古代学協会。
牛山英昭　1996 「弥生時代鉄釧の一例」『考古学雑誌』第81巻第２号、日本考古学会。
牛山英昭　1998 「七社神社前遺跡出土の鉄釧」『七社神社前遺跡Ⅱ』、北区教育委員会。
小杉　康　2011 「第４章空間をよむ」『はじめて学ぶ考古学』有斐閣アルマ、有斐閣。
鈴木素行　2008 「屋内土壙墓」からの展望―弥生時代後期「十王台式」の埋葬を考えながら―」『地域と文化の考古学Ⅱ』、明治大学考古学研究室。
土屋了介　2009 「螺旋状鉄釧の基礎的研究―形態と数量的要素を中心に―」『日々の考古学』２　、東海大学考古学研究室。
野澤誠一　2002 「鉄釧・銅釧からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第８号、長野県立歴史館。
藤岡孝司　1995 「螺旋状鉄釧小考―東日本における腕輪の意味」『研究紀要』16、千葉県文化財センター。
北條芳隆　2005 「螺旋状鉄釧と帯状鉄釧」『待兼山論集―都出比呂志先生退任記念―』、大阪大学考古学研究室。

図版出典

図１・３・４：筆者作成　図２：長野市教育委員会所蔵資料を筆者実測、トレース　図５：飯島他2014より転載、一部改変　写真１　筆者撮影

ウェスト・バイ・サウスウェスト

鈴木素行

1.「十王台式」の故地

関東地方を南北で区分すれば北関東、東西で区分すれば東関東、太平洋に面して茨城県がある。弥生時代の後期後半、その茨城県の北部地域に「十王台式」と呼ばれる土器群が成立した。胴上部に縦区画された櫛描波状文と、胴下部に付加条第２種の羽状縄文を表徴とする型式である。同じく「十王台式」であっても、久慈川流域以北と那珂川流域以南とでは、土器群に異なる属性が見出せる。特に「十王台式３・４期」には、胴上部櫛描文の区画文が分別の指標となる。久慈川流域の「小祝式」は、縦区画が２条で横区画が直状文と連弧文を、那珂川流域の「武田式」は、縦区画が３条で横区画が波状文を、それぞれ典型とする（図１）。底面の痕跡は、「小祝式」が砂粒を付着させたままの砂痕や調整痕であるのに対して、「武田式」は布目痕。「小祝式」の胎土には、多賀山地の地質を反映して金雲母（風化した黒雲母）が多量に含まれることも、製作地域の識別に有効である。

長野県佐久市西一本柳遺跡（上原2005）のＨ１号住居址から、「箱清水式」に伴い「十王台式」が出土した（図5-1）。煮沸具に使用された中・小型壺形土器で、胴上部櫛描文の部分的な破片である。縦区画が２条であること、胎土に多量の金雲母を含むことから、久慈川流域で製作された「十王台式」と判断された。この破片には時期を細別する表徴を欠くものの、「十王台式」と「樽式」の並行関係から「十王台式２期」もしくは「３期」、「箱清水式」の細別（小山1999）も参考にすれば「十王台式３期」の「小祝式糠塚段階」ではなかったかと推測している。

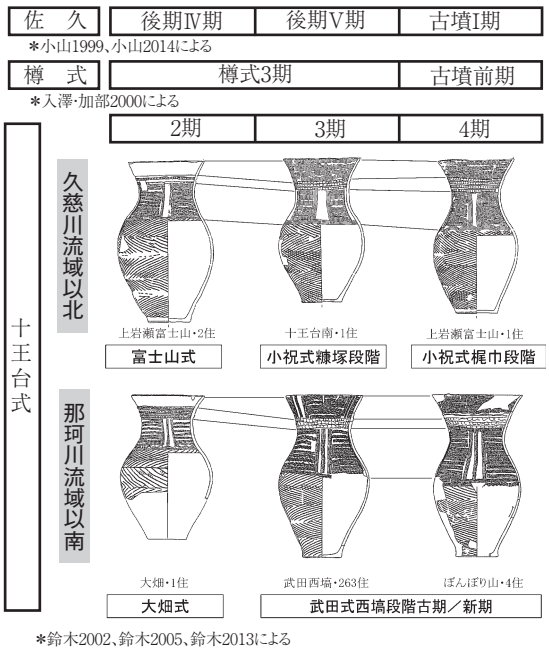
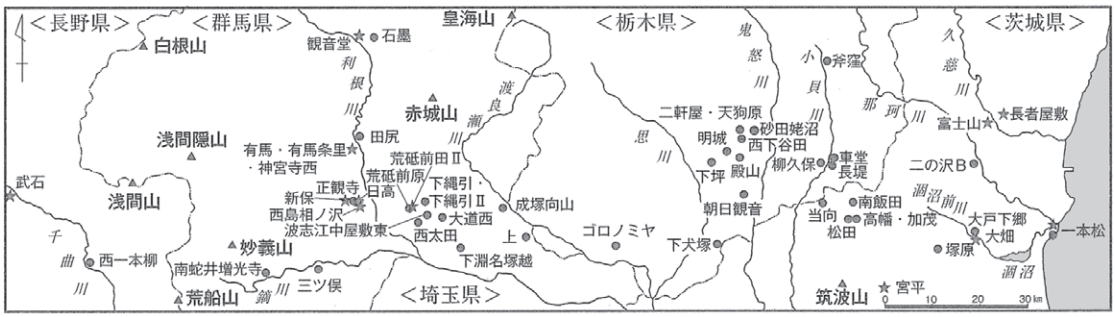


図１　「十王台式」の細別と並行関係

2.「十王台式」から「箱清水式」への経路

他地域への「十王台式」の分布を概観すると、南方向の茨城県南部から千葉県域へは、「香取の海」とも呼ばれた古鬼怒湾の沿岸に遺跡が広く拡散するのに対して、西方向の栃木・群馬県域へは、あたかも蟻の行列のように、遺跡が連なることに気付く（図２）。これは、「樽式」を目的地に「十王台式」が辿った経路ではなかろうか。久慈川流域からは、那珂川を渡り十万原遺跡群（二の沢Ｂ遺跡他）を経て、大戸遺跡群（大畑・大戸下郷遺跡他）に至る。ここが南方向と西方向の分岐点。西方向へは、八溝山地の南端を越えて「二軒屋式」の地域に入る。栃木県の宇都宮市周辺から、筑波山を東に眺めつつ、思川沿いを南下して小山市周



★:巴形銅器、渦形石製品出土遺跡

（2016.5.5改訂）

図２　西南西に進路を取る「十王台式」の分布

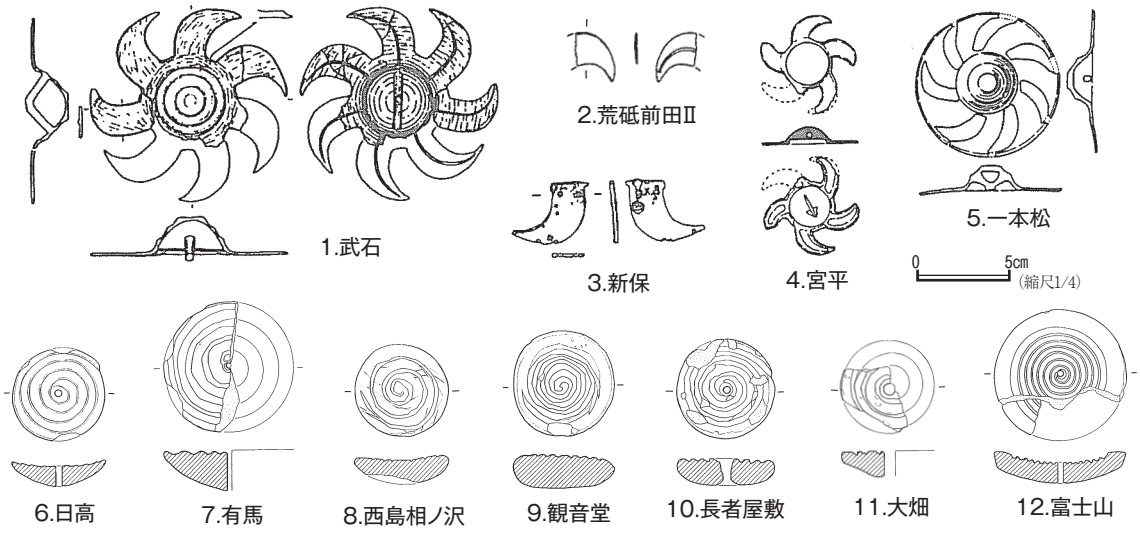


図３　巴形銅器（１～５）と渦形石製品（６～12）

辺へ。ここからは、思川と渡良瀬川を渡り、赤城山を望みつつ、ひたすら西方向へ進む。そして、「十王台２・３期」には利根川右岸の、「４・５期」には主に左岸の「樽式」の地域へと到達した。その一部が鏑川を遡り碓氷峠を越えて、浅間山南麓の「箱清水式」を訪れることになったのであろう。これは、全体として西南西方向に、250km近くの距離を移動したことになる。

３．地域間交渉の痕跡

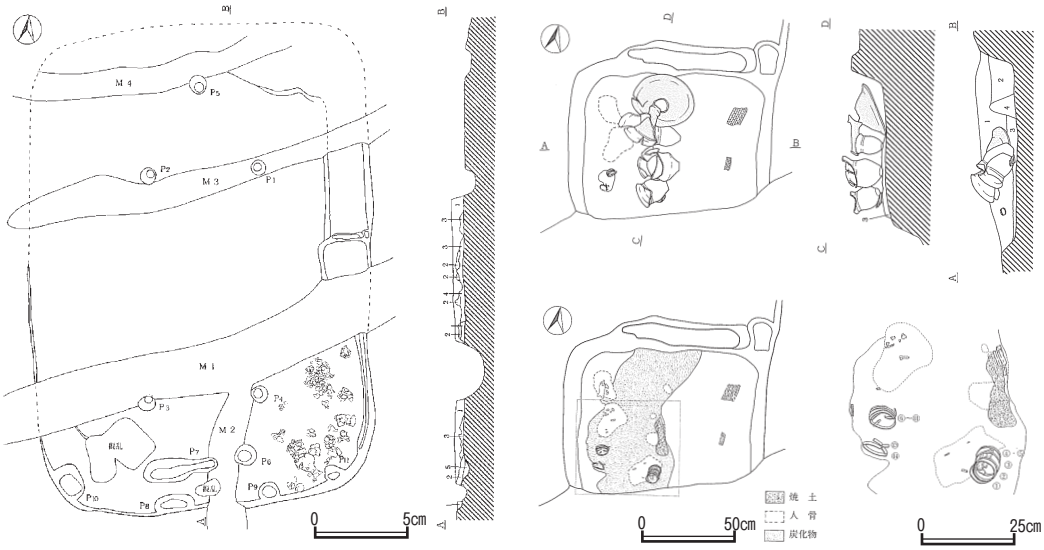
土器の他に、「箱清水式」「樽式」の地域と「十王台式」の地域との交渉を物語る遺物には、巴形銅器と渦形石製品がある（鈴木2011）。

巴形銅器（図3-1～5）は、長野県上田市武石遺跡とともに、群馬県の高崎市新保遺跡と前橋市荒砥前田Ⅱ遺跡、茨城県の大洗町一本松遺跡と石岡市宮平遺跡の５点が、東日本の分布地域を形成している。流通の経路は、「箱清水式」から「十王台式」への復路に相当しよう。但し、その出土地は久慈川流域でなく、一本松遺跡が北浦の、宮平遺跡が霞ヶ浦の「香取の海」への窓口となる位置にあることから、南方向の交渉のために、それぞれの地域に贈与されたのではないかと想像している。一本松遺跡の巴形銅器は、鋳造時のバリを残したままの未成品であり、本来の用途とは別に、威信財として機能した。

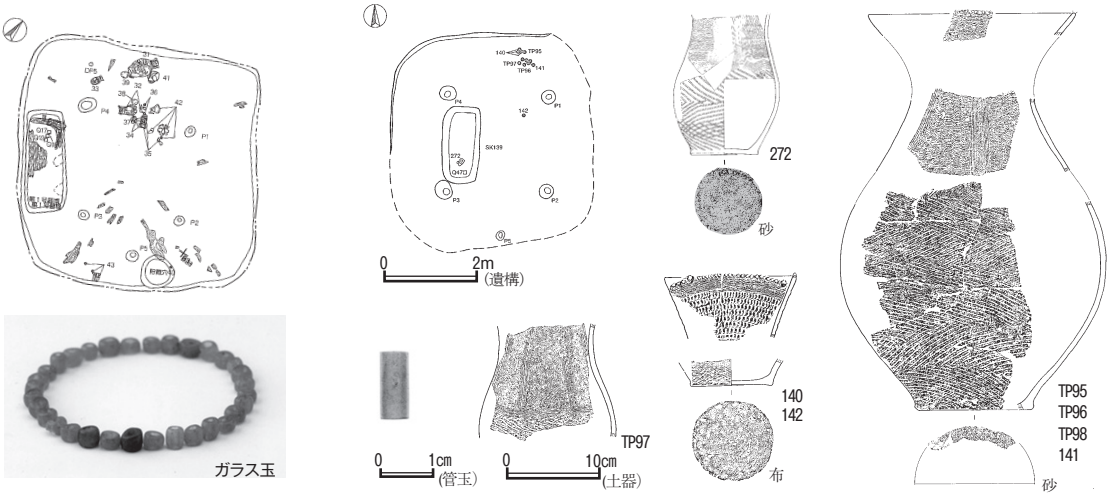
渦形石製品（図3-6～12）は、「樽式」と「十王台式」にのみ伴い、群馬県域で４点、茨城県域で３点が出土している。この石製品は、イモガイを横切りにした螺塔部を模倣して製作されたものであり、日高遺跡が原型に最も近い。穿孔した螺塔部は、琉球列島の海域に生息するイモガイの貝殻を素材としたヨコ型貝輪の製作工程中に見られる。このヨコ型貝輪は、北海道の伊達市有珠モシリ遺跡（大島2003）から出土しており、日本海を北上する海路で運ばれたと推定されている。その途上にあたる北陸地方から「箱清水式」へと、ヨコ型貝輪の未成品がもたらされていたことを想定する。これもまた、本来の用途とは別に、威信財として機能した。「箱清水式」は、本物を保有していたが故に、模倣品を製作することはなかったと考える。特殊な条件下で保存されたイモガイが、長野県域で検出される将来を待ちたい。

４．「屋内土壙墓」と「屋内墓」

「十王台式」には、幼小児を埋葬した土器棺は検出されても、成人の埋葬施設が捉えられないでいた。方形周溝墓は採用されていない。ところが、「十王台式５期」になると、成人の埋葬施設と認め得る遺構が出現する。茨城町大戸下郷遺跡（図4-2）と水戸市二の沢Ｂ遺跡（同３）であり、ともに竪穴建物の床面に土壙が掘り込まれていた。通常の住居跡と異なるのは竪穴内に炉址が検出されないこと。床面が軟弱なことも、長期の居住に否定的な現象となろうか。土壙は、成人の伸展葬が可能な規模で、副葬品の玉類が検出されている。竪穴壁際の床面に据え置かれていたらしい複数個体の土器が出土し、竪穴及び土壙の覆土中には、炭化材や焼土など火事の痕跡が認められた。これを住居跡と見るならば、５m前後という長軸は、玉類など威信財を所有した被葬者の地位に不釣り合いな規模に映るが、埋葬のために別個に構築された建物と捉えるならば相当の施設ではなかろうか。これを「屋内土壙墓」と呼ぶことにした（鈴木2008）。埋葬のため住居とは別に、墓壙に付随した施設を構築するという点において、方形周溝墓とは同義であったと考える。



1. 長野県佐久市上直路遺跡（林1998）



2.茨城県茨城町大戸下郷遺跡（近藤2004）

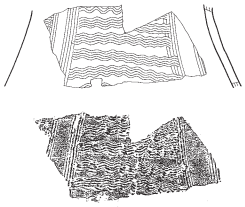
3.茨城県水戸市二の沢B遺跡（江幡ほか2003）

図４　「箱清水式」と「十王台式」の「屋内土壙墓」

この類例となり得る唯一の事例が、佐久市上直路遺跡（林1998）の第１号住居址であった。長軸10m前後と竪穴の規模は異なるが、壁際の床面に土壙墓が掘り込まれており、炉址が検出されず、多数の土器が据え置かれていたこと、さらに竪穴と土壙の覆土中に火事の痕跡を残すことも共通している。副葬品に銅釧があり、おそらくは緑青の抗菌力が装着部の前腕骨を保存させた。人骨の検出が埋葬施設と確定させるとともに、その観察の所見により、火事は、遺骸の腐敗が進行して骨化した後のことと位置付けられた事例である。

上直路遺跡第１号住居址の「箱清水式」は、「後期Ⅲ期」であり、「十王台式５期」の「屋内土壙墓」とは同時期でも相前後する時期でもない。同じような埋葬施設を構築することには共通する条件があったことを予想していたが、長野市長野女子高校校庭遺跡の16号住居跡では、火事の痕跡がある住居跡の床面から265点ものガラス玉が出土し、人骨も検出された中野市牛出古窯遺跡や長野市榎田遺跡を含めて、住居を埋葬施設に転化したと考えられる事例を知ることができた（柳生ほか2014）。これは「十王台式」に推定した「屋内墓」そのものであり、彼我の地域に「屋内土壙墓」を成立させた共通の基盤ということになるのであろう。

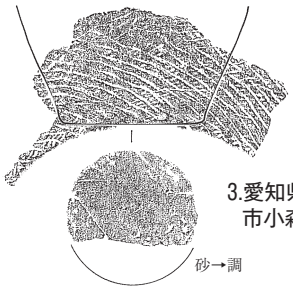
「十王台式」の「屋内土壙墓」の副葬品は専ら玉類であり、「屋内墓」と推定する一本松遺跡の第Ⅰ調査区第53号住居址には、件の巴形銅器が検出されている。方形周溝墓の副葬品には稀でない鉄剣や鉄鏃などの武具が欠落すること、これを「十王台式」の大きな特徴として捉えておきたい。



1.長野県佐久市西一本柳遺跡

2.千葉県市原市南中台遺跡

0　10cm（縮尺1/4）



3.愛知県岩倉市小森遺跡

図５　遠距離を移動した十王台式土器

５．鉄器と織布の交換と流通

茨城県域においても弥生時代後期になると、工具や農具の石器群が極端に少なくなる。遺物としてはほとんど検出されなくても、工具の鉄器化と、これを用いた木器の生産を考えるべきなのであろう。「十王台式５期」に至るまで僅かながらも石斧が残るのは、鉄器の供給が安定したものではなかったことによるのであり、鉄器の入手は、他地域との交渉に頼らざるを得なかった。「箱清水式」「樽式」へと向かった「十王台式」の動機も、ここにあったに違いない。ただ、「十王台式」の交渉は、西方向への一途とは限らないことから、検出された個々の鉄器について「箱清水式」「樽式」との交渉とは断定できないだけである。長野・群馬県域から検出される鉄器は、茨城県域とは比較にならない質量を示している。佐久においても、北一本柳遺跡の板状鉄斧をはじめとして、剣・鏃・釧・斧・鎌・刀子などの種類が見られる（冨沢2014）。このうち「十王台式」が目的としたのは、剣・鏃・釧の威信財ではなく、斧・鎌・刀子の生存財であった。巴形銅器や渦形石製品は、これに付随してもたらされることになったのであろう。

贈与であり、その返礼という形であったとしても、鉄器との交換財として準備されたのは、おそらく織布であった。「十王台式」には、少なからず土製紡錘車が伴う。織布の軽量は、陸路の長距離を運搬するのにも適している。道中に携帯した炊事具の土器が訪れた地域に残されることもあった。しかしなによりも、交渉の地域である「箱清水式」「樽式」に届けたのは、流通に伴う利潤ではなかったかと想像を巡らしている。

６．東山道の行先

茨城県南部を経て千葉県の東京湾沿岸域にある市原市南中台遺跡まで到達した「十王台式」は、那珂川流域の「武田式」であった（図5-2）。これも煮沸具の中・小型壺形土器で、櫛描文は、縦区画が３条、横区画が波状文、胎土に金雲母は認められない。現在のところ、経路が推定できる南方向の終着点である。

一方、遥か遠く愛知県の岩倉市小森遺跡に、「十王台式」が知られている（鈴木正博1988）。20区から出土した底部破片（図5-3）と、19区の胴部破片３点は同一のものらしく（早野2002）、やはりこれも煮沸具の中・小型壺形土器が１個体である。底面は一部に砂痕を残した調整痕で、胎土には金雲母を多量に含む。付加条第２種の軸縄の圧痕が明瞭なのも、久慈川流域で製作された「十王台式」の特徴を示している。時期を細別する表徴を欠くが、「十王台式３期」の「小祝式糠塚段階」あたりという印象であった。小森遺跡からは、「箱清水式」の甕・壺・高坏形土器の複数個体が出土している。長野県域へと進入した「十王台式」と故地が一致し、時期も符号することから、この「十王台式」は、陸路を「箱清水式」に同行したものなのであろう。「箱清水式」の交渉も、北陸地方との一途ではなかった。北方向は、金属器とともにイモガイ製品、さらには翡翠への進路であり、南西方向は、金属器の中に巴形銅器が加わることになる進路であった。

東山道と呼ばれることになる陸路沿いの遺跡で「十王台式」が出土したら、連絡をいただきたい。高速道路を利用し、当時の経路をなぞるようにして駆け着けたいと思う。

謝辞　資料の観察でお世話をいただいた黒沢　浩氏・須藤隆司氏・村木　誠氏、執筆をお誘いいただいた小山岳夫氏に感謝いたします。

参考文献　冨沢一明 2014「佐久地域における弥生時代の出土金属製品について」『佐久考古通信』113、4-6頁／早野浩二 2002「愛知県岩倉市小森遺跡の再評価」『考古学フォーラム』15、29-48頁／柳生俊樹ほか 2014『浅川扇状地遺跡群　長野女子高校校庭遺跡』長野市教育委員会

＊本稿は、鈴木素行 2008「「屋内土壙墓」からの眺望」『地域と文化の考古学』Ⅱ、443-458頁／2011「富士山のイモガイ」『茨城県考古学協会誌』第23号、17-38頁／2012「「十王台式」、西へ（上）」『茨城県考古学協会誌』第24号、45-63頁 等から抜粋して加筆構成した。参考文献と各事例の詳細については、これらを参照されたい。

偶感・弥生土偶

桐原　健

人面意匠の遺物には心惹かれるものがあり殊に資料の少ない弥生にあっては尚更である。

佐久・西一里塚の人形土器が報ぜられたのは平成22年で以来早くも６年が過ぎた。土器は破砕の状態での発見で頭部の出土は平成16、左腕は17年、胴部の破片は整理作業中に見つかっている。報告書によるとこの他に顔面部の破片２点が出土している。

人形土器は高さ28㎝、正面に人面を作出。瓢形の上胴部には左腕が付す。右腕は欠損しているがおそらくは両手を延ばすポーズをとるかと思われる。頭部は中実、顔面・胴部は中空、胸部に開孔がある。顔面表現は面長、耳朶は大きい匙状で右耳朶に穿孔、鼻筋通り鼻梁高し、口蓋裂表現、頭部を含め全身に赤色塗布。

顔面破片は右半分で頭部は中空、後頭部に開口部がある。耳朶に２ヶの穿孔、黥面表現なし、全面塗彩。

佐久平を流れて千曲川に注ぐ湯川の左岸には弥生中期末の大集落が形成されているが後期に入るとそのうちの西一里塚地籍は墓域となっている。中部横断道による調査域の西縁は墓域の西縁でもあって数条の溝が南北に走っており、２点の人形土器は北半１・２区の溝50ｍの範囲内より出土している。

調査域の北半からは竪穴住居３軒、方形周溝墓３、円形周溝墓15、木棺墓２、土器棺墓６基が検出されている。小判形の竪穴住居は円形周溝墓を切っているかに見えるが新旧関係は把めていない。出土土器は中期後半とされる。方形周溝墓は中期後半から後期にかけて、円形周溝墓は後期。木棺墓、土器棺墓も後期とされる。

墓域の南限を画す溝（SD15）の上層に５基の土器棺墓が設けられていて、11点の壺が図示されている。多くは口頸を欠くが推定器高50から60㎝の大形品で朝顔形の口縁と無花果形の胴部が特徴を為す。頸部には櫛描きの直線・波状・丁字状、線描きによる羽状文が繞る[1]。以上は佐久平弥生後期のⅢ期古・新に当り長野地区の箱清水Ⅱ期２に相当する。

希少な資料を得たことにより東日本弥生土偶考究の波は昂まった。筆者も驥尾に付して拙論を述べる。

顔面が表示されている縄文の造形の一つに土偶があり、性格・用途・変遷について今迄に幾多の考究が為されており、そのなかに前期の板状土偶が自立するのが中期だとする説がある。縄文のヴィーナスは両手を左右に延ばしている。やがて両手は斜め上に挙がって万歳（バンザイ）型をとり、中期後半に下ると肩を嚇らせて両手を垂らす。このポーズは後期・晩期にまで續く。

後期に入ると中空の大型土偶が出現、女性表徴の乳房は縮小をはじめる。

出土状態について、中期までの土偶は毀された上で廃棄されているが例外もあって縄文のヴィーナスは埋葬姿勢で発見されており、後期初頭の仮面の女神は墓壙の一隅に更にピットを穿って納められ被葬者に伴っていたことが確認できた[2]。資料は乏しいがある種の土偶は葬に係っている。

縄文晩期末に續く弥生前期から中期初頭の東海・中部高地・北関東の域内には黥面を特徴とする土偶が生起・繁衍している（第１図、第１表）[3]。黥面土偶の特徴はスカート状に広がる腰部を底とする中空の座像で両手は垂下している。愛知・古井[4]、神奈川・中屋敷[5]、山梨・坂井[5]、同・岡１・２[6]、長野・腰越１・２[7]、同・下境沢[8]、顔面を欠く長野・海戸[9]、新潟・村尻[10]、の10点が代表例として挙げられている。このうち縄文土偶からの系譜を引く部位は乳房と両手垂下の形状で、前者は頭部を欠く腰越の２点と中屋敷、後者は10例総て、又、一部の遮光器土偶や山梨・金生の異形土偶[11]を仲介にすれば黥面８例の頭部開口は縄文に繋がる。

土器の口縁に人面を付した例に茨城・女方11号土壙[12]、栃木・野沢[12]、愛知・市場[12]、福島・滝の森[13]、茨城・小野天神前[14]、神奈川・上ノ台[15]の６例を挙げた。女方の長胴甕以外は細口長頸の壺形土器で上ノ台以外の顔面特徴は両眼と口辺に三角形の隈取りが為されていることにある。これは黥面とは異なる。

甕・壺である以上土偶の範疇には入らないが中空の容器という面からすれば中空、頭部開口の黥面土偶に通ずるものがある。

腰越の２体は平石を箱状に組んだ中に並列していたとあり、岡の２体は灰・焼土の中に俯伏の呈を為して出土している。中屋敷と岡の２体の体中からは幼児骨と歯が検出されている。

女方の耳朶は三日月形の匙状で右耳朶には４ヶの小孔が穿たれている。匙状の張りは顎にも設けられていてこれは髭の表現かもしれない。鼻梁は黥面のそれよりは高い。胴部で為す甕に乳房・両腕の造形はない。

女方遺跡は20ｍ四方の小範囲に40余の土坑が穿たれ235点の土器が出土していてこれは弥生中期前半の墓址群で11号土壙からは人面付土器の他に瓢形土器１、広口壺２が出土している。

黥面ではない土偶のグループは開口部の位置によって頭頂部とそれ以外の部位にあるものとの二種に分けられる。前者例は神奈川・上の台、千葉・三嶋台[16]、長野・西一本柳[16]の３例で、三嶋台は中期後半の宮ノ台期で左腕が付されている。上の台は後期・弥生町期の壺で胴部に羽状縄文帯、頸部に小円板の貼付帯が

繞る。口頸部は埦状に膨らみ顔面表現、穿孔ある三日月形の耳朶、鼻梁高し。楕円形ピットから出土している。西一本柳は顔面部破片、中期後半の所産とされる。

後者の群馬渋川・有馬[16]、同高崎・小八木志志貝戸[17]が口腔、長野佐久、西一里塚が胸部に開口部が設けられている。有馬例は弥生後期とされる礫床墓群（sk402の南に接する）中に伏された状態で発見。土器は高さ36.5cm、頭部には１条の帯が繞る。両耳は大きい半月形で鼻梁は高く、部厚い口唇が付されている。胴部は中空で箆磨き斜めに挙げている右腕が付く。

小八木志志貝戸例は20数基の土器棺墓から成る墓域の西縁濠中より破片の状態で発見された。濠の生起・廃棄は弥生後期後半とされている。器高は27cm。頭頂はやや平坦、鼻梁は高く大きく鼻腔２孔を表現、頭部から頬にかけての半月状大耳には穿孔１ヶ、目は円く上瞼が脹れている。胴部は全面塗彩、腕は無し。西一里塚例については既述した。

女方[12]と神奈川・ひる畑例[18]は頭部破片。円頭、顔面素文の中空なので開口部は胴部にある筈、女方例は16号土坑の東寄りから出土、ひる畑遺跡は中期後半の宮の台期で住居址からの出土と推測されている。

頭頂開口の系譜をとる西一本柳例の頭部を繞る隆帯は有馬のそれと似通っている。腕が付された三嶋台例は人面付壺形土器との仲介を為す。５例に見られた馬の目隠しと表現された大きなスプーン状の耳朶は穿たれた複数の小孔と合せて女方の人面土器の特徴でもあるがかかる耳朶は既に腰越の黥面に見られており、これが片山の挙手人面土師器に至る。

挙手人面土師器は昭和22年に発見、27年に報告された。出土地は長野県上高井郡保科村上和田片山（現長野市若穂町）で崖錐の中腹に長さ１m径60cmの柱状石が聳立。引き抜いたところこれに接して地下30cmの粘土中より挙手人面土師器１、小型丸底の坩２、高坏脚部３、器台１、大型粗文の壺３が１列に並んで出土。特別な遺構は無かった。

挙手人面土師器は正面性のある長胴の鉢で全面塗彩の痕が残る。口縁の左右より把手が突出、先端には五指を表す刻みがある。顔面は鉢体部上半正面で鼻梁は高く表現、両眼は横に細く、口は小さく器内に切り込んでいる。顔面の両側には2.8×5.2cmの大きな匙状の

第１表　東日本の弥生土偶

番号	遺跡名	県名	頭部・顔面							胴部										遺跡の性格	遺構出土状態	その他
			頭頂開口	黥面	目口隈取	素面	耳朶匙状	耳朶穿孔	その他	器形	体部中空	体部開口	乳房 有	乳房 無	腕 有	腕 無	両腕垂下	脚無し	その他			
1	古井	愛知	○	○			○	○		土偶形容器	○			○							単独出土	
2	中屋敷	神奈川	○	○			○			土偶形容器	○		○		○		○	○				幼児骨収納
3	坂井	山梨	○	○			○	○		土偶形容器	○			○	○		○	○			大甕内	
4	岡（１）	山梨	○	○			○	○		土偶形容器	○			○	○		○	○			灰・焼土中	幼児骨収納
5	岡（２）	山梨	○	○				○		土偶形容器	○			○	○		○	○			灰・焼土中	幼児骨収納
6	腰越（１）	長野	○	○			○	○		土偶形容器	○			○	○		○	○			二体並列	字渕ノ上
7	腰越（２）	長野							頭部欠く	土偶形容器	○		○		○		○	○			二体並列	字渕ノ上
8	下境沢	長野	○	○						筒形	○			○		○		○			土坑	
9	海戸	長野							頭部欠く	土偶形容器	○			○	○		○	○				
10	村尻	新潟							頭部形成されず	土偶形容器	○			○	○		○	○			土坑	
11	市場	愛知			○		○	○	口頸のみ	細口壺												
12	女方	茨城			○		○	○		長胴甕	○			○		○		○		土器棺墓群	１１号土坑	
13	小野天神前	茨城			○		○	○		壺	○			○		○		○				
14	上の台	茨城				○	○	○		壺	○			○		○		○			楕円形ピット	
15	野沢	栃木			○				口頸のみ	細口壺												
16	滝の森	福島			○		○			壺	○			○		○		○				
17	ひる畑	神奈川				○	○	○	頭部のみ										塗彩		竪穴住居内	
18	三嶋台	千葉	○			○	○	○	顔面塗彩	壺	○			○	○			○	塗彩	環状集落		
19	西一本柳	長野	○			○	○	○	頭部のみ										塗彩			
20	西一里塚	長野				○	○	○	顔面塗彩	人形土器	○	○		○	○			○		墓域	墓域西縁の濠	
21	女方	茨城				○	○	○	頭部のみ												土坑に接す	
22	有馬	群馬				○	○	○	顔面塗彩	人形土器	○	○		○	○			○		墓域	礫床墓に接す	
23	小八木志志貝戸	群馬				○	○	○	顔面塗彩	人形土器	○	○		○		○		○	塗彩	墓域	土器捨て場	
24	片山	長野				○	○	○		鉢形土師器	○			○	○			○			立柱石	

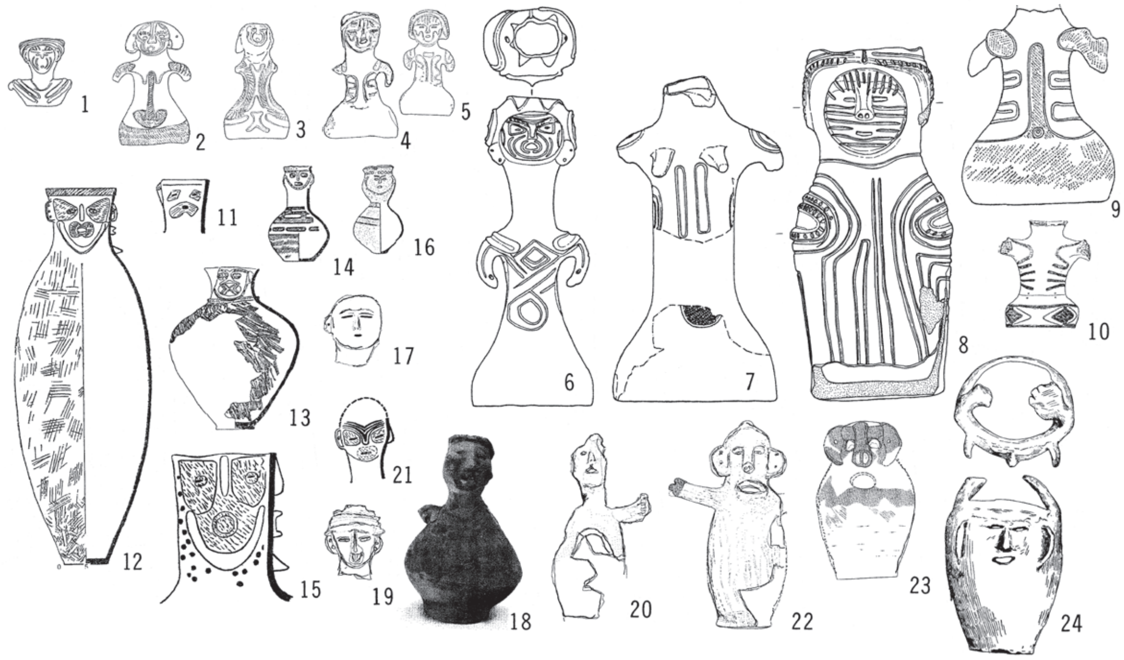


図１　東日本の弥生土偶

耳朶が付く。器高は前面が18、背部は低く9.2、口径は14×12cm。

小型丸底の１点は球形の体部に漏斗状の口頸が付く。全面塗彩、器高15.2、口径12cm。もう１点は球形の体部に口縁立ち上りの直立した頭部が付く。全面塗彩、器高・腹径12、口径8.8cm [19]。坩から窺える年代は４世紀を下らない。

縄文から弥生にかけて、中部高地の葬制だが縄文中期後半の長野明科・北村遺跡Ｅ地区での所見は１土壙に１遺体が仰臥屈葬の姿勢で葬られている。副葬品は無く、土壙上に特別な施設は設けられていない [20]。

後期になると墓壙の被葬者顔面を鉢で覆うケースが現れる [21]。長野埴科・円光房遺跡 [22] では土壙上縁に配石を施し、標石を立てる等の行為が窺える。

後期後半から晩期に下る。希少例に過ぎないが土器棺の存在と土坑よりの火葬骨検出で再葬が行われていた。

再葬は死者の霊（タマ）は骨に宿るとする観念により遺体の霊肉が分離した後、骨のみを改めて祀る葬法で霊肉分離を促進し清浄な骨を得る作業が火葬で、かかる葬制は後期後半の東海域で盛行している。

霊肉分離後の骨の扱いだが土器棺の容量、殊にも口頸径の狭さによる限り総ては拾骨されず再葬される骨は限られている。骨は死者の霊（タマ）の憑代と観じた場合、再葬に当って骨の多寡は係りないだろう。それに、さして時間差の認められない土器棺墓群から拾骨、再葬の機会は多くなく、拾骨の対象は数代に亙っていたものと考える。骨に憑く霊は個人のそれではなく祖霊であって祖霊を祀る観念は縄文後期後半の数体の骨を組んだ盤状集積 [23] までに溯ぼる。

長い時間を推移してきた縄文土偶とは異なり時空の限られている弥生土偶は再葬・骨への異常な執心と係っている。筆者は骨は祖霊の憑代、弥生土偶は祖霊の表現と観る。その土偶の一部形状は縄文晩期･後期･中期後半の縄文土偶に辿り着く。

東日本の再葬墓は中期後半に消失し代って周溝墓が波及する。弥生土偶の消長も同じだが例外もある。坩や高坏、器台と共に柱状石の傍らに置かれた挙手人面土師器がそれに当る。

註１ａ　長野県埋蔵文化財センター『濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群』2012
註１ｂ　桜井秀雄「人形土器の研究」金沢大学考古学紀要36　2015
註２　土偶についての定義付は未だ定まっていない。ここではアバウトに縄文時代に人形・顔面を表現した土製品を縄文土偶、同じく弥生時代の人体・顔面を表わした土器・土製品を弥生土偶と規定する。
註３ａ　荒巻実・設楽博己「有髯土偶小考」考古学雑誌71-1. 1985
註３ｂ　設楽博己「黥面の系譜」『氷遺跡発掘資料図譜』所収　1998
註４　岩野見司「三河国出土の土偶」考古学雑誌49-3　1963
註５　甲野勇「容器的特徴を有する特殊土偶」人類学雑誌54-12　1939
註６　山梨県八代町誌編纂室『八代町誌』　1917
註７　和田千吉「信濃国腰越発掘土偶」考古学雑誌8-3　1917
註８　設楽博己「下境沢遺跡出土の黥面付土器」『下境沢遺跡』所収　1998
註９　大野雲外「信濃国諏訪郡平野村小字小屋口発見石器時代土偶」東京人類学会雑誌20-226　1967
註10　石川日出志「村尻遺跡出土のヒト形土器」『村尻遺跡１』所収　1982
註11　新津健・八巻与志夫・山下孝司・奈良泰夫「八ヶ岳南麓・金生遺跡と縄文晩期の地域的諸問題」どるめん29　1981
註12　田中国男『縄文式・弥生式接触文化の研究』　1944
註13　亀井正道「人面付土器の新例」考古学雑誌43-1　1957
註14　石川日出志「人面土器」季刊考古学19　1987
註15　坂詰秀一・関俊彦「弥生後期の人面土器について」考古学雑誌48-11962
註16　群馬県埋蔵文化財調査事業団『有馬遺跡Ⅱ』　1990
註17　群馬県埋蔵文化財調査事業団『小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ』1999
註18　神沢勇一「神奈川県ひる畑遺跡出土の人面土器」考古学集刊3-3　1967
註19ａ　永峯光一「保科村片山発見異形土師器の出土状態に就いて」信濃5-1　1953
註19ｂ　大場磐雄「挙手人面土師器覚書」信濃5-1　1953
註20　長野県埋蔵文化財センター『北村遺跡』　1993
註21　茅野市教育委員会『中ッ原遺跡』　2003
註22　戸倉町教育委員会『円光房遺跡』　1990
註23ａ　清野謙次『日本民族生成論』　1946
註23ｂ　久永春男・斉藤嘉彦「盤状集積葬の新例」どるめん５　1975

♪　編集後記　♪

次男が弓道をやっていることがきっかけで、鉄鏃に興味を持ち始めた。最近はネットオークションで古いものではなさそうだが、定角式、雁股式等の鉄鏃３個を1500円で落札し、悦に入っている。

古代の鉄鏃についても少しずつではあるが勉強を始め、その面白さに引き込まれ始めている。長野県の限定された時代・地域の弥生土器にしか興味のなかった私が大きく変わりつつある。

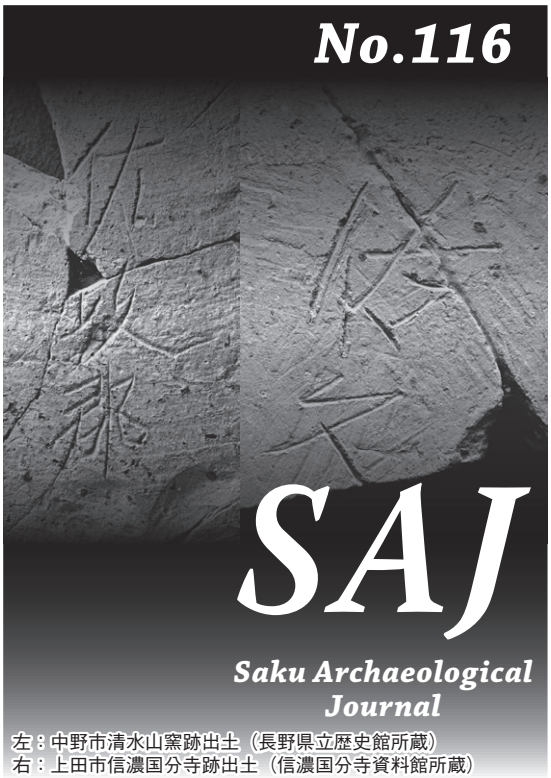
本号では、関東はじめ広い知見をもつ執筆陣から多角的な視野で考察する重要性を教えていただいた。今後、更なる研鑽あるのみ。　（小　山）

佐久考古通信　No.115

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0091 小諸市御影新田1945-6
桜　井　秀　雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2016年６月18日
発行者　桜　井　秀　雄
編集者　小　山　岳　夫
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク



左：中野市清水山窯跡出土（長野県立歴史館所蔵）
右：上田市信濃国分寺跡出土（信濃国分寺資料館所蔵）

佐久考古通信

■遺跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌■

2018. 1. 1　佐久考古学会

集成 佐久の墨書・刻書土器

古代国家は、律令という法律による文書主義が大きな特徴であった。そのため文字資料が飛躍的に増えるのもこの頃からである。そのなかでも土器に文字を記した墨書土器・刻書土器は、文献史料での記述が少ない佐久において貴重な文字資料となる。

本号では古代佐久の土器、墨書土器・刻書土器を集成する。今回集成したものは、佐久地域全体で約2900点を超える。ここでは研究の第一段階として、土器に記された文字を出来る限り紹介することに努めた。

集成作業は、御代田町を堤　隆、小諸市を高橋陽一、佐久市を冨沢一明、佐久市のうちの旧望月町・旧臼田町・旧浅科村・県埋文調査遺跡を桜井秀雄、南佐久郡を藤森英二が、それぞれ分担して行った。

①佐久の墨書土器・刻書土器概要

市町村別の集成内訳では佐久市が約2650点と圧倒的に多く、次いで小諸市約200点、御代田町約40点、南佐久郡約30点である。佐久市のなかでも聖原遺跡（以下、「遺跡」は基本的に略する）の約950点を筆頭に宮の前約290点、西近津約230点、栗毛坂約200点と佐久平北部の長土呂・岩村田地籍所在の４遺跡だけで佐久地域の６割近くを占める。この他、瀬戸地籍の深堀で約150点、岩村田地籍の上の城約90点、根々井地籍の根々井芝宮約70点、小田井地籍の下曽根60点、岩村田地籍の西八日町約60点、平塚地籍の濁り・久保田で約55点、岩村田地籍の西一本柳と円正坊がともに約50点、横和地籍の宮の上と小田井地籍の芝宮でそれぞれ約30点と続いている。小諸市でも佐久平北部の御影新田に所在する大塚原と竹花とで約160点と２遺跡だけで８割を占める。御代田町では６割近くの約20点が小田井地籍の鋳物屋遺跡群の４遺跡からの出土である。出土数の多寡は発掘調査の頻度・規模にもよるだろうが、墨書・刻書土器を多く保有する遺跡が存在するということは指摘できるだろう。

集成したうちの半数強が判読不明であるが、本号では主な文字・記号等を紹介する。なお刻書については焼成前のヘラ描きも含めたものとして扱っていく。

墨書と刻書との内訳をみると、刻書土器は約160点にとどまり、墨書土器が大半を占める。またこの他、刻印されたものが１点（１）、暗文の手法で文字が記されたものが１点ある（75）。墨書のなかでも朱書されたものが下曽根で釈文不明ながらも１点ある。

土器の種類は土師器が大半を占め、他は須恵器約430点、灰釉陶器約15点、羽釜約５点である。

出土遺構の時期をみれば不明なものを除くと、９世紀が1500点（約67％）、10世紀が約500点（約20％）とこの時期に集中する。土器の器種は、坏・埦・皿等の食膳具が中心であり、それ以外は甕、壺・平瓶・横瓶・瓻・羽釜などが約30点あるに過ぎない。

②国名・郡名・郷名をあらわす文字

古代の佐久は、信濃国佐久郡として律令国家に組み入れられた。「信濃国」と記された事例はない。「信」という文字が佐久市の田端（２）で１点、深堀で２点（３）みられるが、これらが「信濃」を表すものかどうかは断言できない。国名では「美濃国」と刻印された土器（１）の出土をみる。８世紀前葉に限り生産されたもので、県内では他に６例を数えるに過ぎない。

郡名に関しては、中野市清水山窯跡からは「佐玖郡」と刻まれた須恵器が出土し、上田市の信濃国分寺跡からも「佐久」の刻書須恵器が出土している（表紙写真）。佐久地域からは「佐久」と記された資料はみられないが、「佐」と記したものは出土する（４～７）。図示し

た以外にも佐久市犬飼で刻書１点がみられる。西近津では「郡」刻書土器が出土する（８）。また「小郡」が下曽根、聖原、芝宮で６点あり、うち４点を掲載した（９～12）。12は３文字だが「小郡」の下の文字は読み取れない。この「小郡」が何を表すかは不明だが佐久郡に関連するものである可能性もあろう。

佐久郡には８つの郷が置かれた。このうち「大井」と「刑部」の２郷の名がみられる。「刑部」(13)の他、「刑」のみが記されたものが２点ある（14）。「大井」の出土例は30点を超える（15～20）。なかでも西近津や宮の前、大豆田など大井郷に比定される佐久市長土呂地籍の遺跡からの出土数の多さが目を引く。「井」も約25点みられる。破片資料で「大井」の「井」のみが残ったものの他、「井」とのみ記されたものもある（21・22）。「井」には井戸を表すものもあろうが、道教思想による悪霊を払い願意成就のための符号の略号であるものも少なくないだろう（平川南『墨書土器の研究』）。集成者の冨沢氏は、「大井」は大井郷を指す以外に「大きな井」を示すものもあるのではないかと推測する。

③氏族名・人名・職名に関係する文字

古代氏族の「大伴」「伴」がみられる（24・25）。「大伴氏」もしくは「大伴部」の存在が浮上する。『万葉集』には小県郡に大伴連忍勝の名が知られ、筆者もかつて古墳時代の佐久での大伴氏との深い関係を指摘したことがある。また「物」は26と同じ住居跡からもう１点出土している。物部氏に関係するものとみてよいだろうか。佐久市（旧臼田町）では「物部楮丸」の銅印が出土しており、物部氏に関係する人物が佐久にいたことは間違いない。27は「氏」と読めるか。23は「刑部仁丸」が２箇所、正位に「仁丸　十」が１箇所と計３箇所に名前が記されている。

人名とみられる「金」、「全」の出土も少なくない。「金」か「全」あるいは「舎」かの判読は難しいが、あわせると聖原が14、深堀遺跡１、栗毛坂２、小諸市石神１の計18点の出土をみる（28～32）。聖原では「金手」「全手」「舎手」と「手」が付くものも10点あり、「手」のみも３点みられる。聖原では「金」の焼印も出土しており、「金」という渡来系集団の存在が想定できそうである。「金　木」（259）もある。

『続日本後記』には武蔵国の国司（少目）に「大丘秋主」という人物の存在が知られるため、275の「大丘」も人名の可能性がある。また354の「主寸」も奈良県薩摩遺跡で「檜前主寸」との名を記した木簡が出土しており、人名とみてもよいかもしれない。なお「寸」のみも聖原と竹花で出土する。

「仁」が人名にも使用された文字であることは前述の「刑部仁丸」の事例でわかるが、儒教で最も重要視される語である。「仁」の出土は16点あり、他に「前仁」が３点ある。深堀と下聖端で各１点みられる他は聖原の出土である。９軒の竪穴住居跡と１棟の掘立柱建物跡から出土するが、なかでもH253住では「前仁」３点を含む４点が、H517住で３点、H703住で３点みられる。「貞」「忠」も中国思想に由来する文字と思われ、人名に用いた可能性もあろう。「貞」は聖原から32点が出土する。H193住で５点、H244住で17点、H256住で５点と特定の住居跡からの出土数の多さが目を引く。「忠」は聖原と栗毛坂で各１点みられる。

「人」は御代田町根岸で６点、聖原で６点、宮の前で１点の出土をみる。西八日町では「林人」３点、栗毛坂の「男」は特殊文字であるとも考えられるが、「田人」とも読み取れる。可能性のあるものも含めると36点みられる。「人」の文字は大化前代の官人制度「人制」に由来する可能性もあるだろうか。

④施設や官職等に関係する文字

佐久郡衙の発見はいまだなされていないが、佐久平北部の長土呂地籍周辺が最有力比定地である。官衙等の施設に関係する文字では「西家」が２点出土する（42・43）。竹花では44の「□家」が、若宮Ⅳでも「家」がみられる（45）。「倉」は46の他、御代田町前田で１点ある。47の「司」は何らかの官司をあらわすものであろう。151の「室」も施設に関係するか。上久保田向でもう１点、聖原で２点の出土をみる。

また律令国家では官職は四等官制であり、国司は「守」（長官）、「介」（次官）、「掾」（判官）、「目」（主典）であった。三等官の「掾」はみられないが、「守」、「介」、「目」の文字は確認できる。「目」は258にもあるが意味合いは異なるのかもしれない。52の「大工」は工人の長を表すとみられる。「工」は236にもある。53・348の「中伯」は何らかの官職名もしくは聖原で石印「伯万私印」が出土しているため、人名の可能性が考えられる。55「庄」、56「里」は土地制度に関連するものか。円正坊では「里玉」とも読める文字がみられる（359）。

⑤農業に関連する文字

「大田」（57・58・347）、「田」（59・60）がある。この他、深堀、上の城、馬瀬口、西近津、南上北原、儘田（以上佐久市）、根岸、川原田（以上御代田町）で「田」が14点みられる。また64「□田」、67「上□田」、68「田□□」、のように田を含む２字以上の文字もみられる。栗毛坂でも「□□田」がある。「苗」（61）は同一遺構からもう１点が出土する。62は「稲」と読み取れるか。63の「米」は西八日町でこの他に３点、聖原H309住で３点が出土する。65・356は「禾」はアワであろう。66は「植」と読めるか。69の「段」や70・71の「尺」は土地などの単位・尺度を表すか。また、349は「豆」とは読めないか。

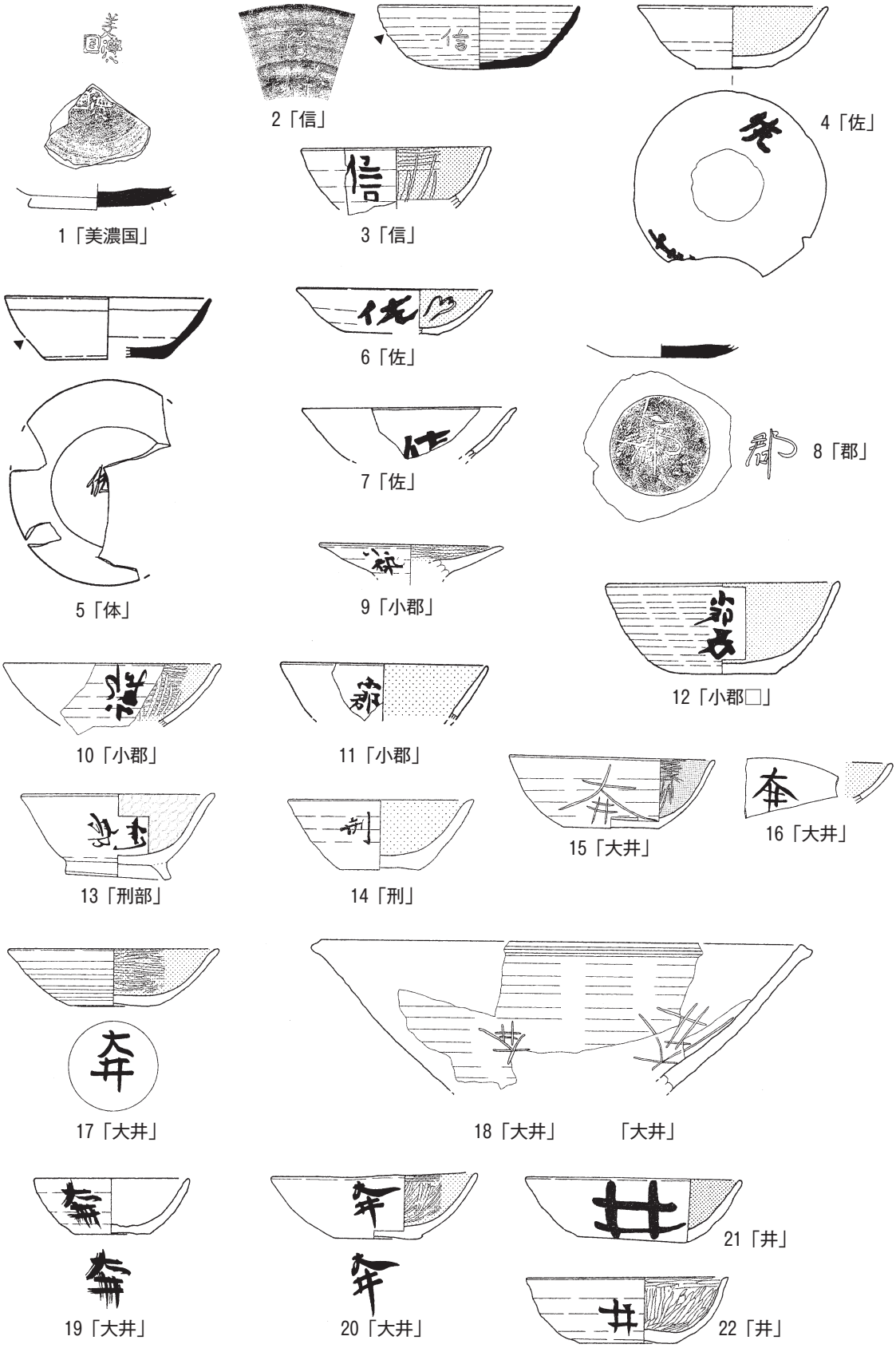


図1　国名・郡名・郷名等に関係する文字（1/4）

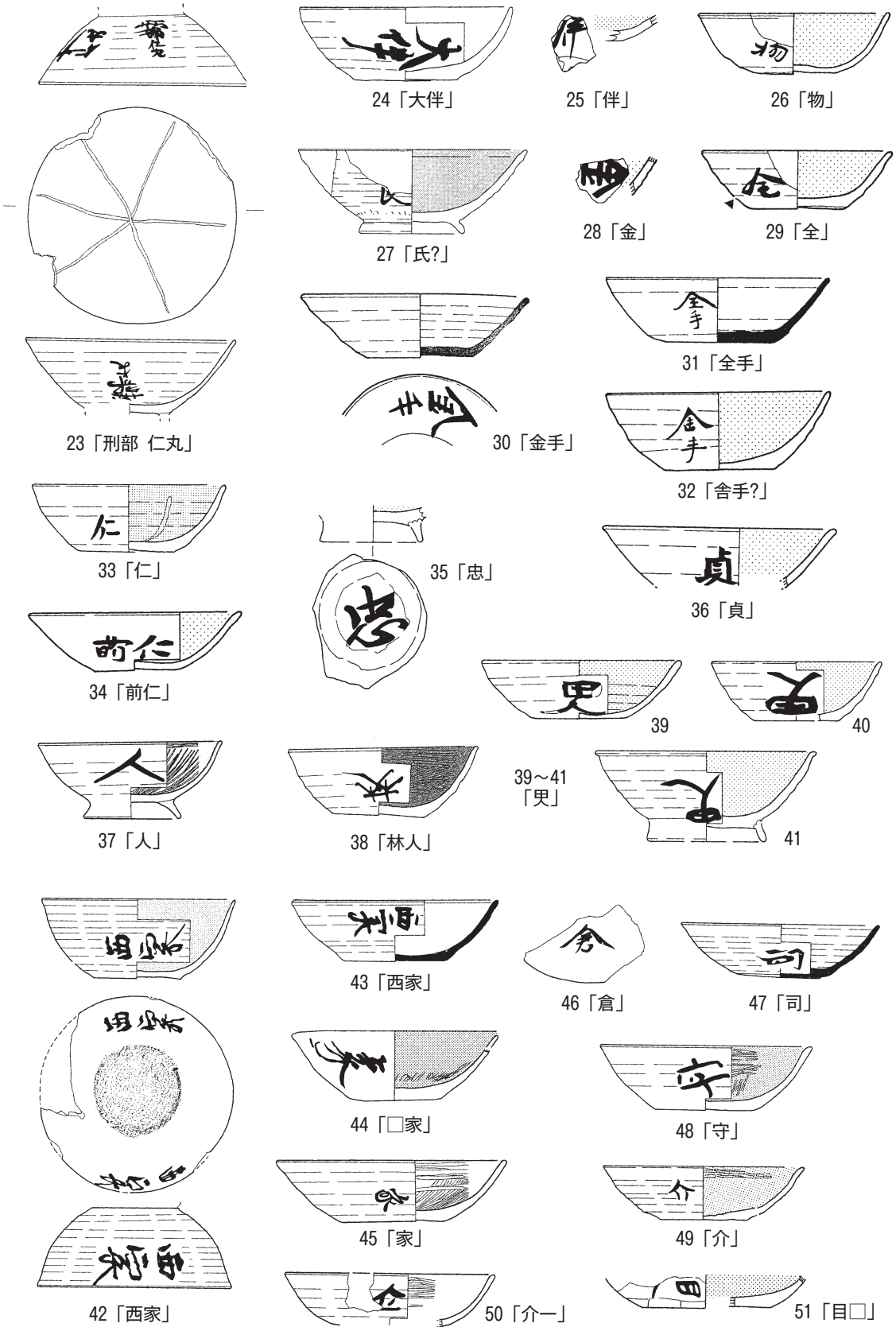


図２　氏族・人名・施設・官職等に関係する文字（1/4）

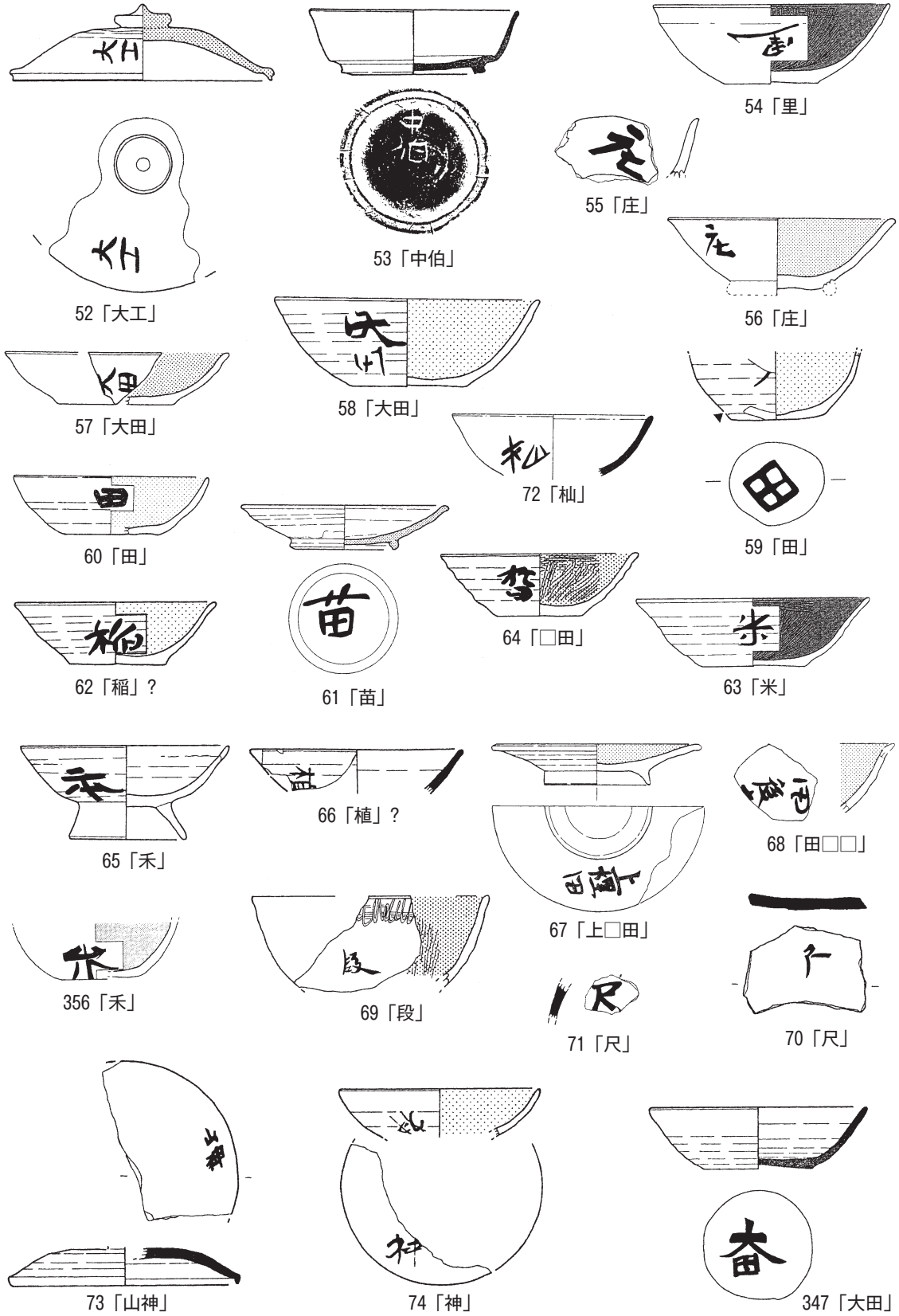


図３　職名・農業・神祇信仰等に関係する文字（1/4）

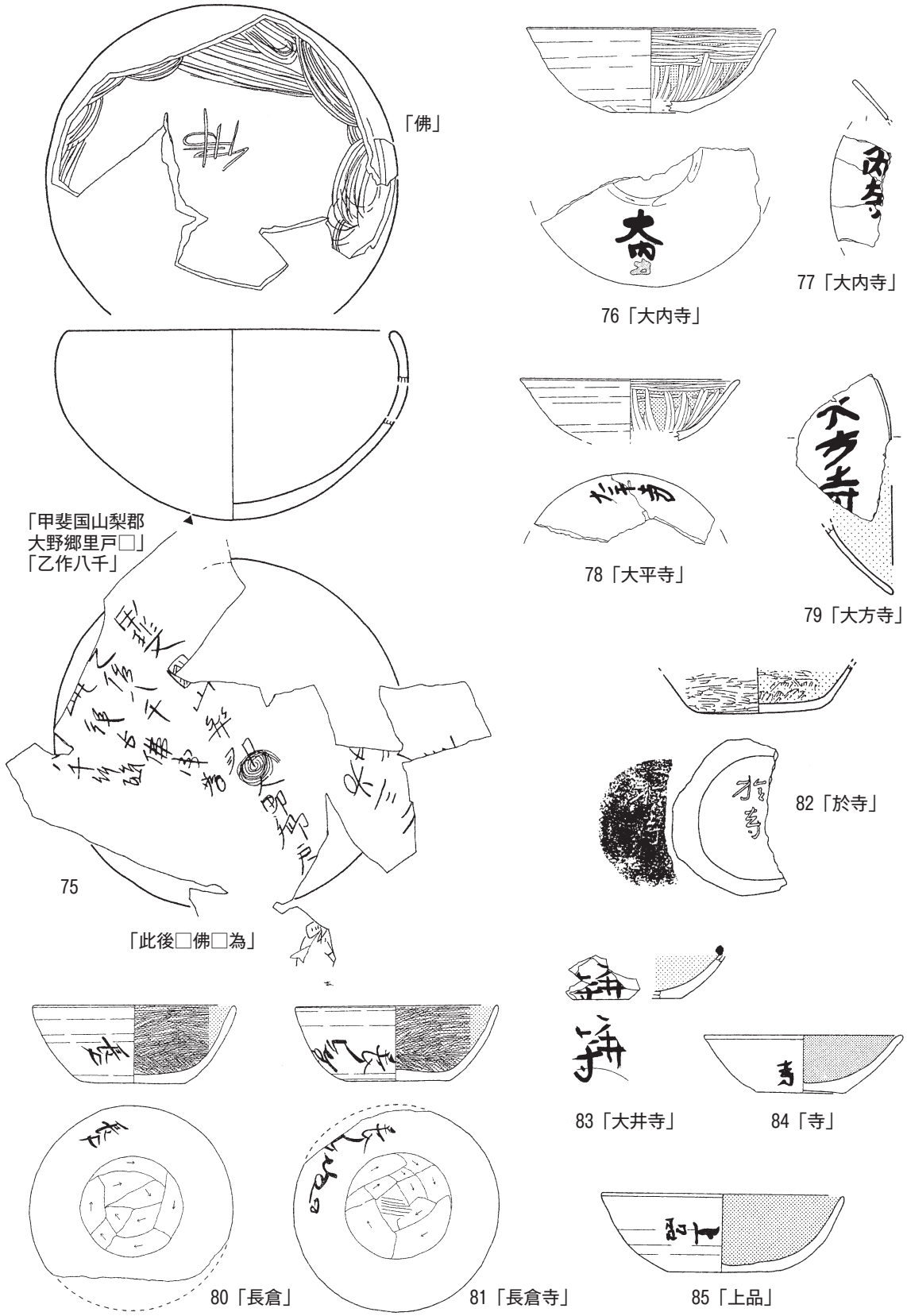


図４　仏教に関係する文字（1/4）

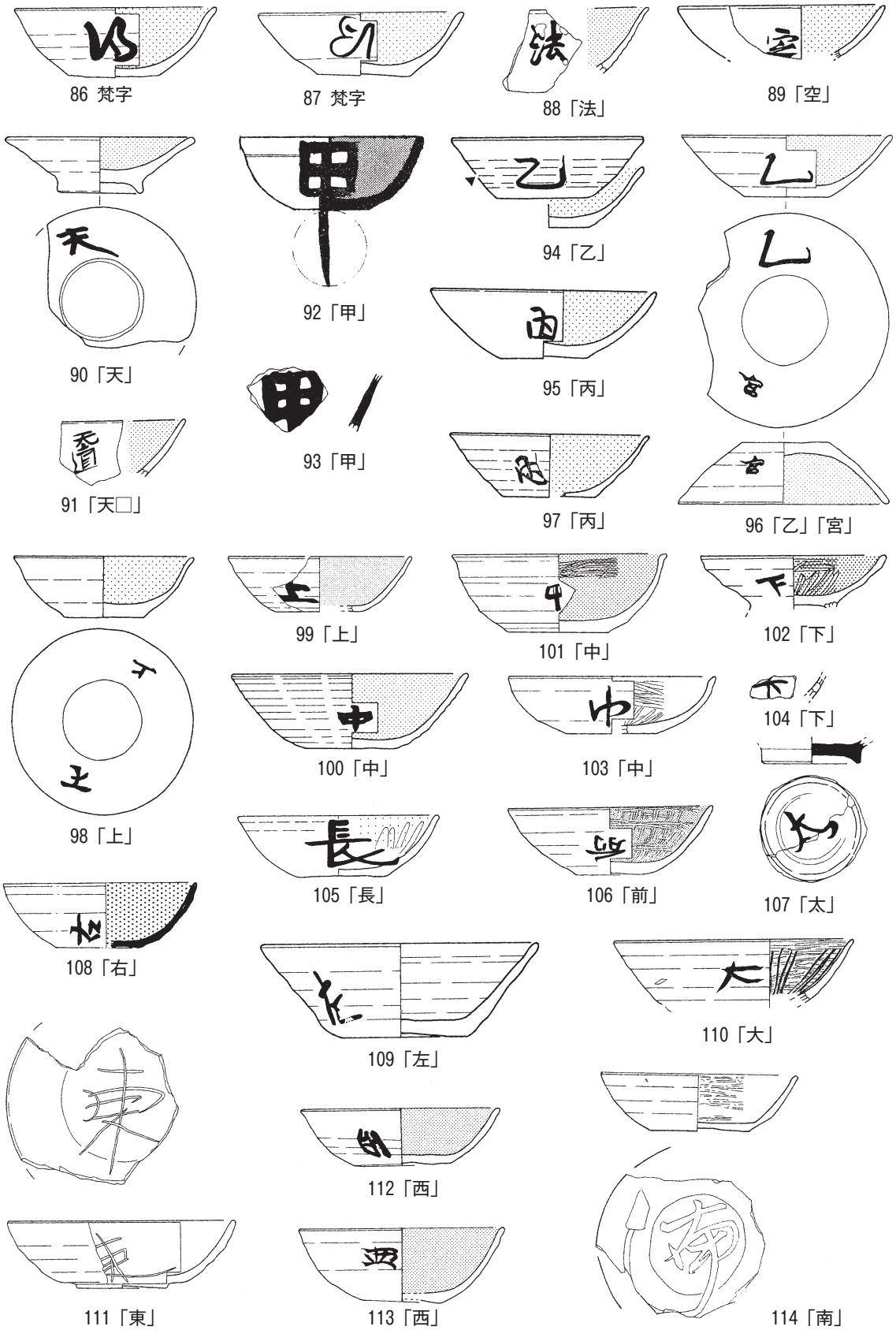


図５　仏教・順番・方角等に関係する文字（1/4）

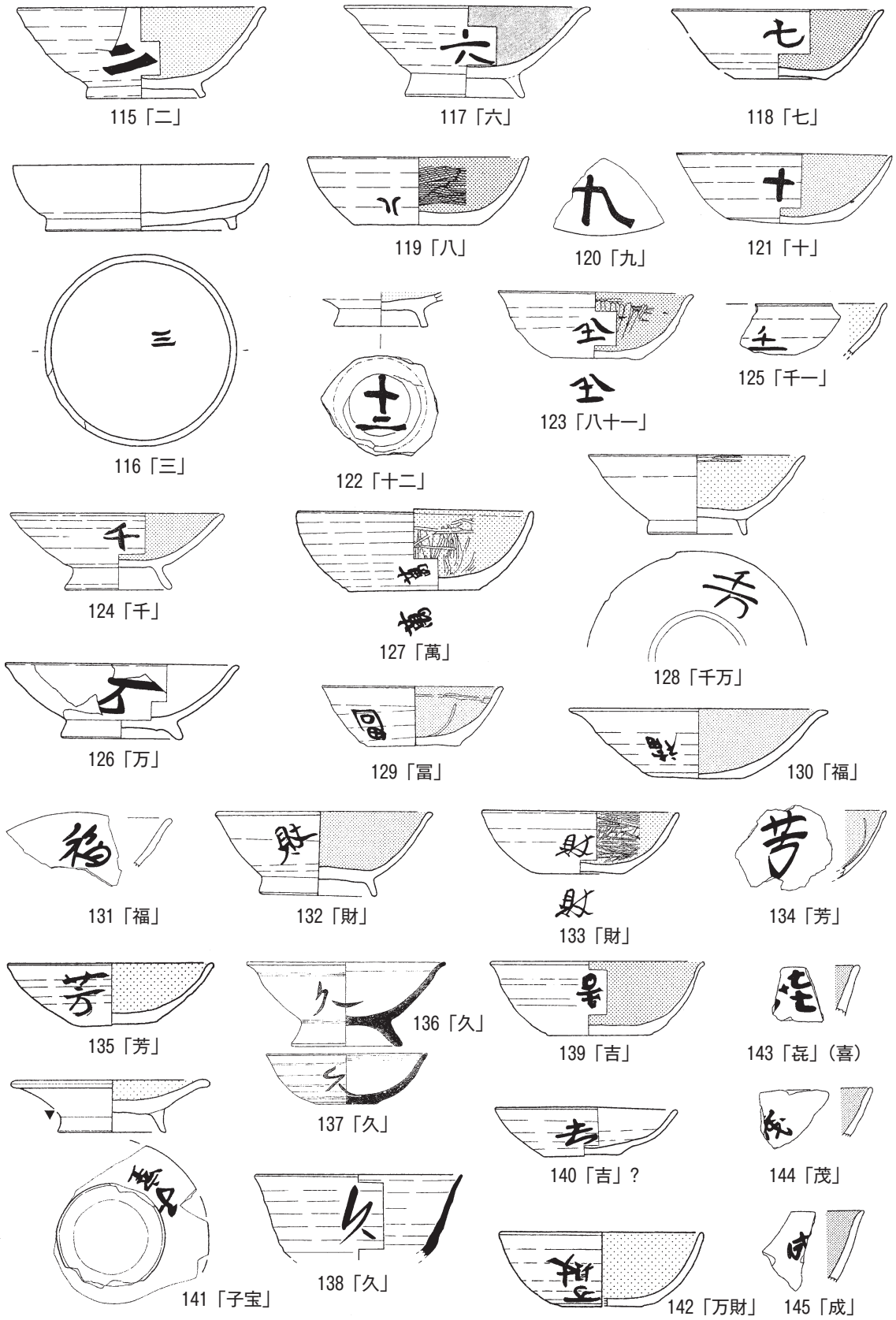


図６　数字・数量・吉祥等に関係する文字（1/4）

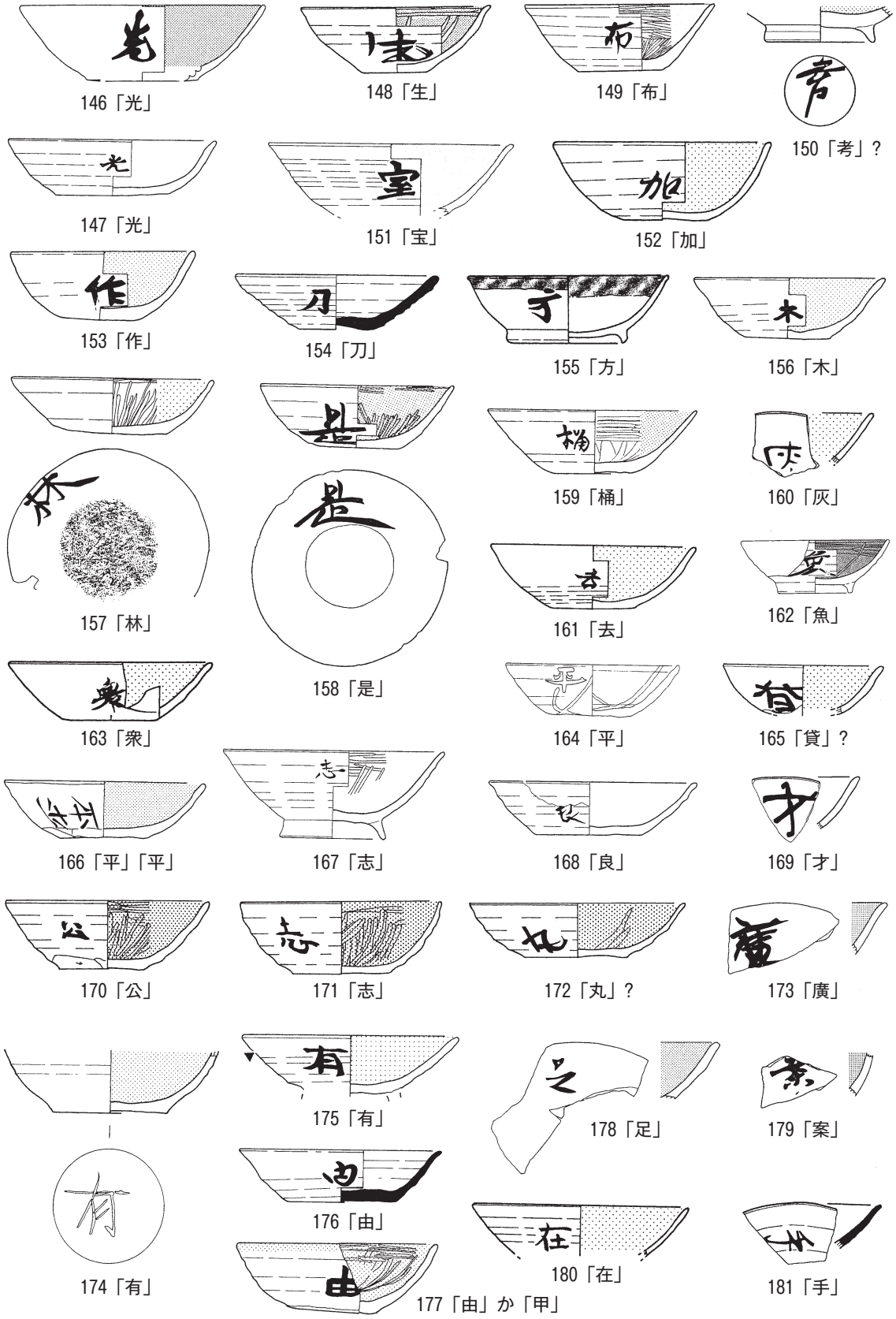

146「光」
148「生」
149「布」
150「考」？
147「光」
151「宝」
152「加」
153「作」
154「刀」
155「方」
156「木」
159「桶」
160「灰」
157「林」
158「是」
161「去」
162「魚」
163「衆」
164「平」
165「貸」？
166「平」「平」
167「志」
168「良」
169「才」
170「公」
171「志」
172「丸」？
173「廣」
175「有」
178「足」
179「案」
176「由」
174「有」
180「在」
181「手」
177「由」か「甲」

図７　その他の文字（1/4）

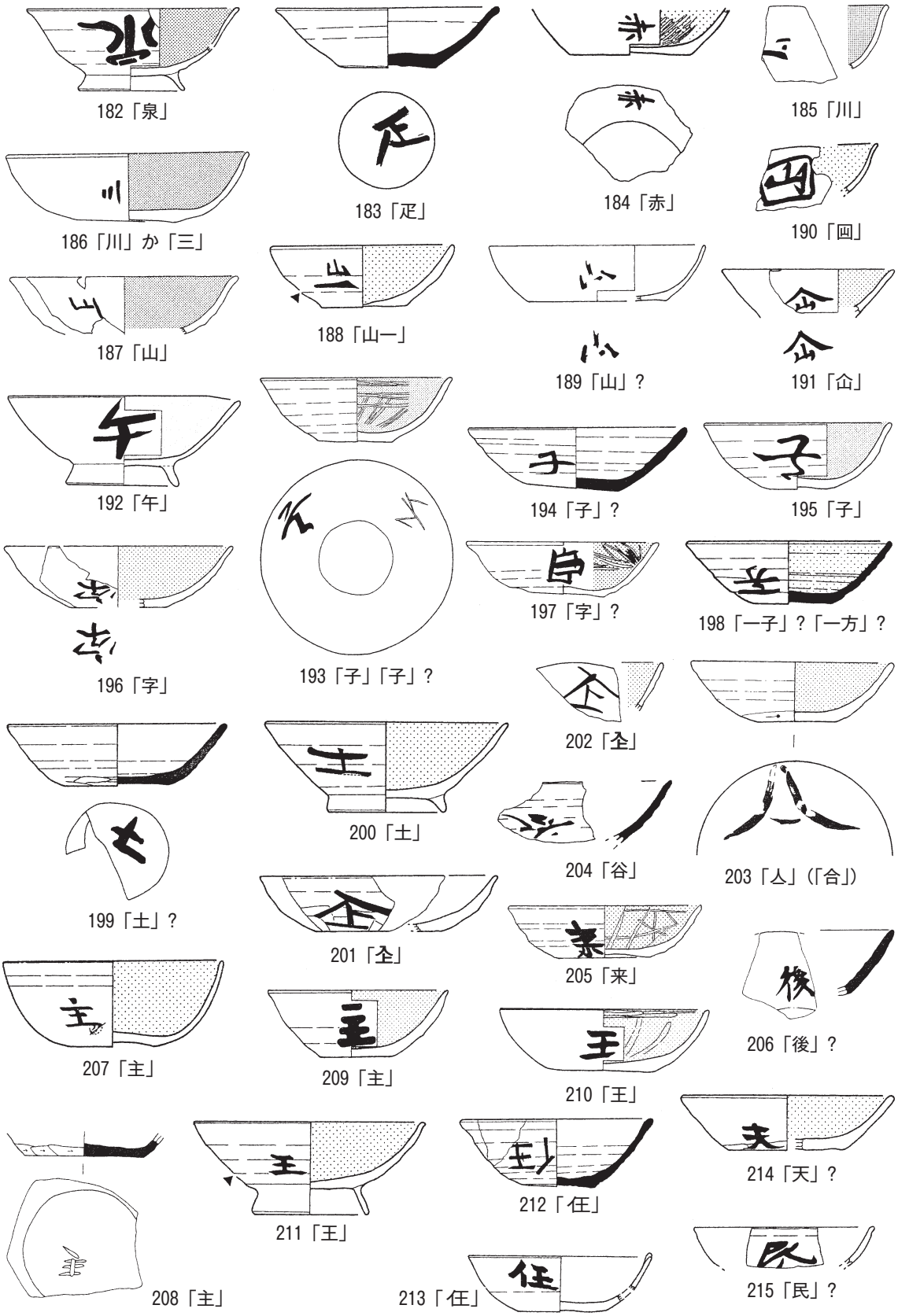

182「泉」
183「疋」
184「赤」
185「川」
186「川」か「三」
187「山」
188「山一」
189「山」？
190「回」
191「仝」
192「午」
193「子」「子」？
194「子」？
195「子」
196「字」
197「字」？
198「一子」？「一方」？
199「土」？
200「土」
201「仝」
202「仝」
203「人」（「合」）
204「谷」
205「来」
206「後」？
207「主」
208「主」
209「主」
210「王」
211「王」
212「任」
213「任」
214「天」？
215「民」？

図８　その他の文字（1/4）

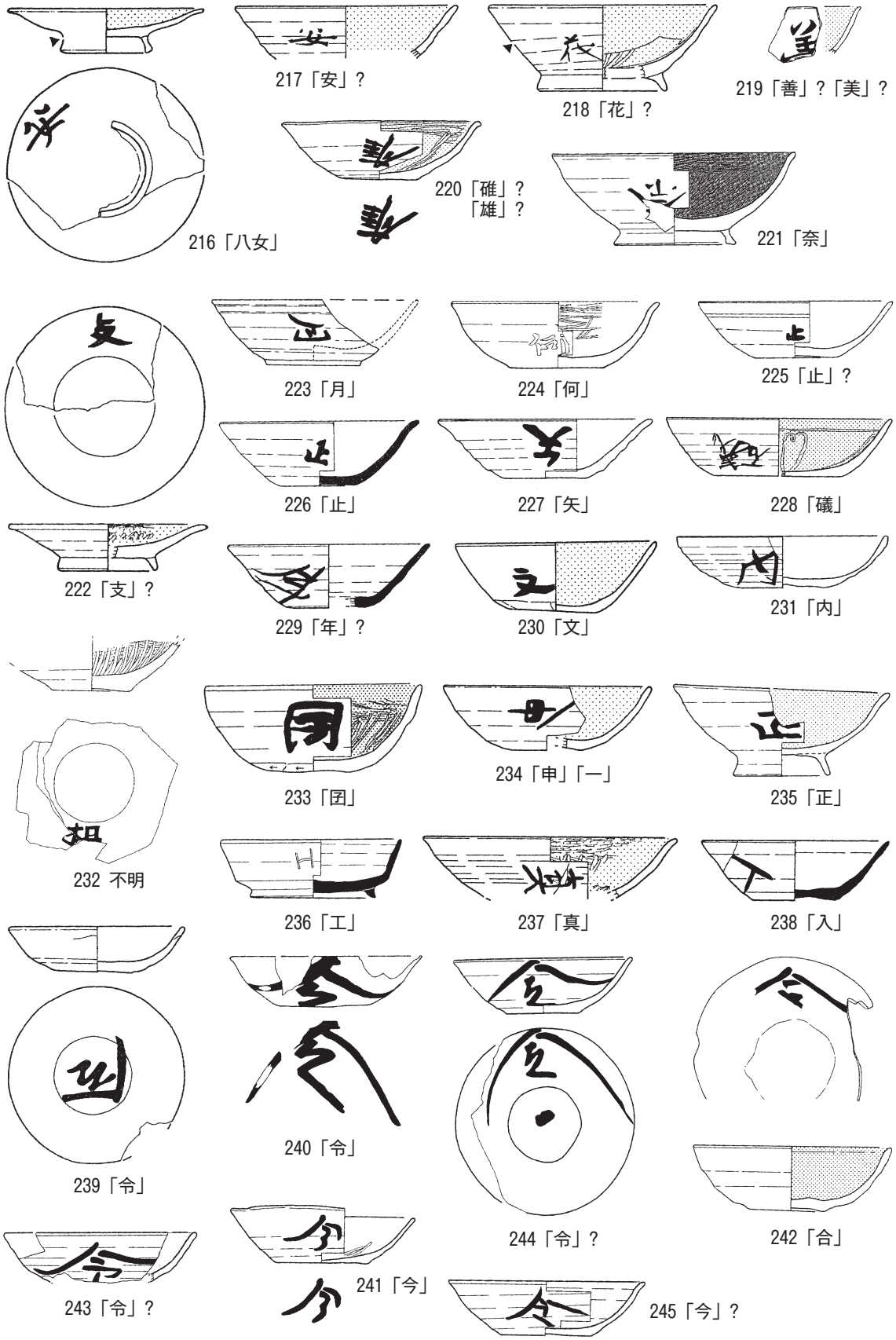

217「安」？
218「花」？
219「善」？「美」？
216「八女」
220「碓」？
「雄」？
221「奈」
223「月」
224「何」
225「止」？
226「止」
227「矢」
228「礒」
222「支」？
229「年」？
230「文」
231「内」
232 不明
233「団」
234「申」「一」
235「正」
236「工」
237「真」
238「入」
239「令」
240「令」
244「令」？
242「合」
243「令」？
241「今」
245「今」？

図９　その他の文字（1/4）

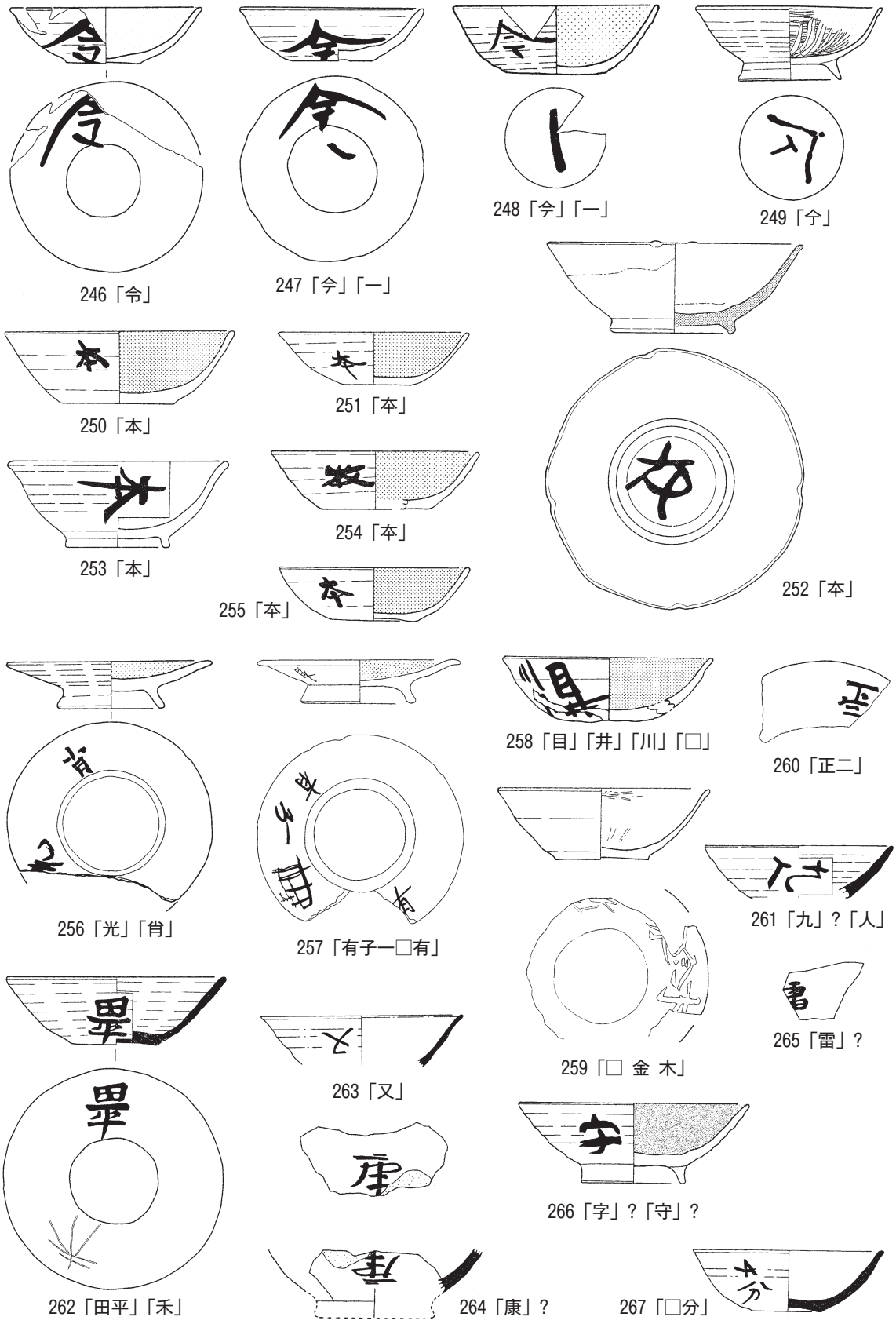


図10　その他の文字（1/4）

図11　その他の文字（1/4）

図12　その他の文字（1/4）

図13　記号・その他の文字補遺（1/4）

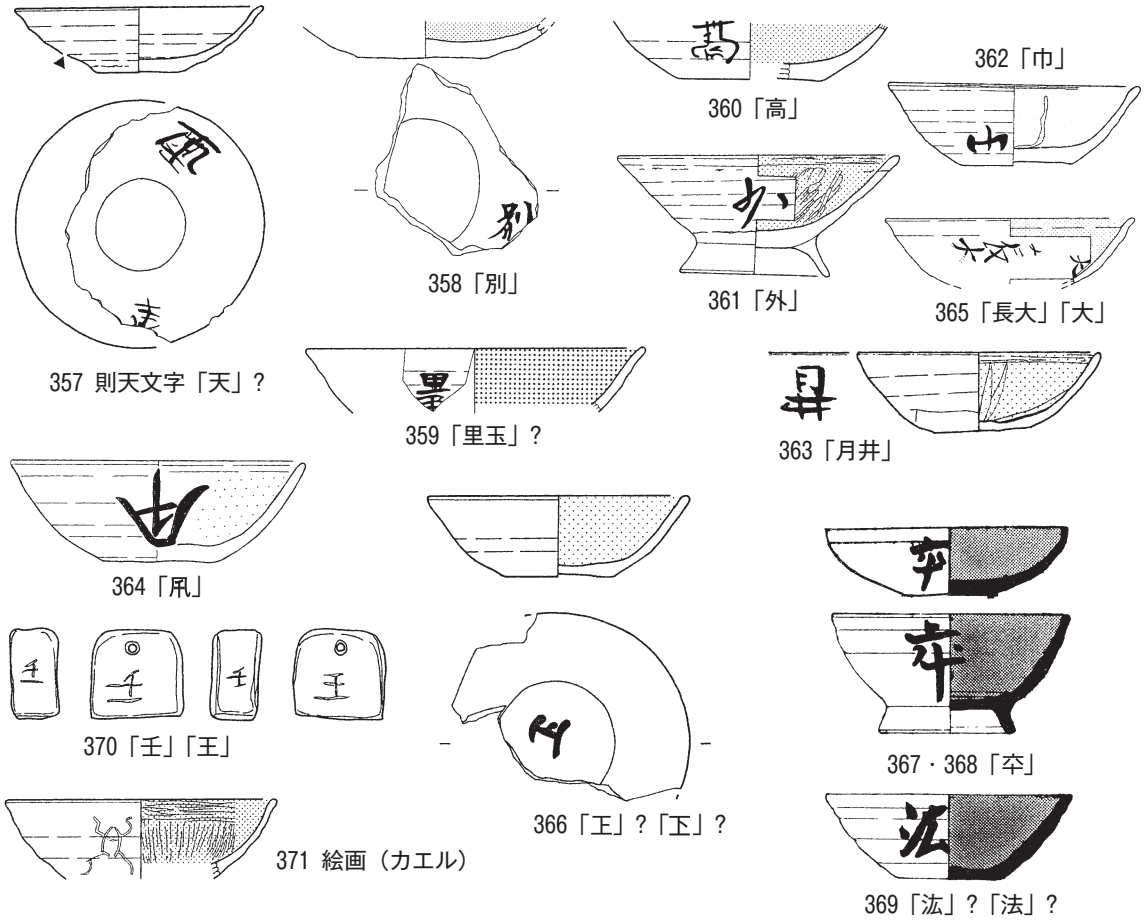


図14　その他の文字補遺・絵画他（1/4）

⑥神祇信仰・仏教に関係する文字

神祇信仰では「山神」(73) と「神」(74) がみられる。また96には「宮」の文字がある。仏教関係では、75は仏鉢形の甲斐型土器で、暗文の手法で内面に「佛」、外面に「甲斐国山梨郡大野郷戸□」「乙作八千」「此後□佛□為」と書かれている。聖原に甲斐とつながり、僧や寺と関係した人物の存在がうかがわれる。寺名が記されたものとしては、「大内寺」「大平寺」「大方寺」「大井寺」「長倉寺」があり、80も「長倉寺」であろうか。82は「於寺」。聖原では「□寺」の文字がみられ、84のような「寺」のみの文字も深堀（H29住．H54住）、宮の前、佐久市仲田、小諸市舟窪で計５点ある。85の「上品」も仏教に関連する文字とみたい。86・87は梵字である。353も梵字の可能性があろう。88の「法」、89の「空」も仏教思想に関連するものではないか。「天」は31点が出土する。栗毛坂の29点（90）の他、聖原と小諸市中原で各１点ある。「天」は後述する則天文字にもみられる。91は「天道」と読みたい。

⑦順番、方角、上下などをあらわす文字

甲乙丙は、「甲」が、佐久市の戸坂１点（92）、濁り・久保田４点（93）、聖原１点ある。「乙」は聖原で35点の他は深堀と宮の前で各１点の出土である（94）。96で「宮」とともに記されているのは「乙」とみたい。「丙」も聖原で８点みられる（95・97）。上中下はすべてみられる。「上」は99を含めて13点あり、99は２文字が記される。「中」は、聖原13点、佐久市周防畑Ｈ２住で３点など約20点ある。「巾」で報告されたもののなかにも「中」があるかもしれない。「下」は深堀でH54住の９点を含めて10点の他にも、竹花、聖原、西近津Ⅲ、戸坂での出土をみる（102・104）。また「下□」と２字からなる274もある。「長」は105を含めた５点の出土をみる。365は「長大　大」と「大」と組み合わせている。「前」は聖原H253住の７点、南相木村の大師Ｈ３住の２点など10点みられる（106）。「太」は６点（107）。「大」は10点。他に「大一」２点（285）、「大山」（286）などもある。285は「太」をあらわす可能性もある。「右」は、108の他に聖原で１点ある。「左」は109を含めて５点ある（寄塚、聖原、上の城）。

方角については、「東」「西」「南」がみられる。「東」は14点（111）、「西」は８点（112・113）、「南」は５点（114）

図番号	遺跡	出土遺構	市町村名	地区	器種	墨書・刻書	時期	調査機関	文献
1	西近津	検出面	佐久市	長土呂	須恵器坏	刻印	８Ｃ	県埋文	県104集
2	田端Ⅰ	H2住	佐久市	新子田	須恵器坏	刻書	８Ｃ前	市教委	市220集
3	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H61住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市98集
4	芝宮	153住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県39集
5	聖原	D187坑	佐久市	長土呂	須恵器坏	刻書	不明	市教委	市107集
6	芝宮	87住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	10Ｃ中	県埋文	県39集
7	深堀Ⅳ	H27住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市101集
8	西近津	ST6014	佐久市	長土呂	須恵器坏	刻書	古代	県埋文	県104集
9	下曽根Ⅱ～Ⅶ	H92住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市88集
10	下曽根Ⅱ～Ⅶ	H92住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市88集
11	聖原	H873住	佐久市	長土呂	須恵器坏	刻書	不明	市教委	市103集
12	芝宮	30住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ	県埋文	県39集
13	上久保田向	H6住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ中	市教委	市41集
14	西一本柳	H127住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市73集
15	大豆田Ⅰ・Ⅱ	H19住	佐久市	長土呂	土師器坏	刻書	９Ｃ前	市教委	市156集
16	西近津	検出面	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	県埋文	県104集
17	西近津	SB7041	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ中	県埋文	県104集
18	大豆田Ⅰ・Ⅱ	H19住	佐久市	長土呂	土師器坏	刻書	９Ｃ前	市教委	市156集
20	西近津	SB7041	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ中	県埋文	県104集
21	高師町	1特殊	佐久市	新子田	土師器坏	墨書	平安前葉	市埋文	市セ7集
22	竹花Ⅲ	13住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市33
23	南下北原	H7住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市193集
24	中原	108住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県39集
25	西近津	SB0014	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ後	県埋文	県104集
26	聖原	H419住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
27	聖原Ⅱ	M2溝	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	不明	市教委	市10集
28	聖原	H439住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市107集
29	聖原	H405住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市107集
30	聖原	H439住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市107集
31	聖原	H444住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	８Ｃ末～９Ｃ初	市教委	市107集
32	聖原	H398住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
33	下聖端Ⅰ・Ⅱ	H45住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市9集
34	聖原	H253住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
35	栗毛坂	B-24住	佐久市	岩村田	土師器埦	墨書	９Ｃ後	県埋文	県12集
36	聖原	H256住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
37	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H101住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
38	西八日町Ⅲ	H20住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ	市教委	市175集
39	栗毛坂	B-12住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県12集
40	栗毛坂	B-12住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県12集
41	栗毛坂	B-30住	佐久市	岩村田	土師器埦	墨書	10Ｃ前	県埋文	県12集
42	西一本柳ⅩⅧ	H3住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市190集
43	西八日町Ⅲ	遺構外	佐久市	岩村田	須恵器坏	墨書	不明	市教委	市175集
44	竹花	47住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集
45	若宮Ⅳ	H1住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	市教委	市198集
46	大塚原Ⅱ	5住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市20集
47	西一本柳Ⅷ	H28住	佐久市	岩村田	須恵器坏	墨書	平安前葉	市教委	市109集
48	大豆田Ⅰ・Ⅱ	H19住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市156集
49	下聖端Ⅰ・Ⅱ	H45住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市9集
50	下聖端Ⅴ	H3住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後～10Ｃ前	市教委	市237集
51	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H56住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市98集
52	野火付	H13住	御代田町	御代田	須恵器蓋	墨書	９Ｃ前	町教委	町2集
53	聖原	H105住	佐久市	長土呂	須恵器高台坏	刻書	８Ｃ後	市教委	市103集
54	西八日町Ⅲ	H20住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ	市教委	市175集
55	野馬窪Ⅳ	H8住	佐久市	猿久保	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市230集
56	野馬窪Ⅳ	H12住	佐久市	猿久保	土師器埦	墨書	９Ｃ後～10Ｃ前	市教委	市230集
57	野火付	H14住	御代田町	御代田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	町教委	町2集
58	聖原	D297坑	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	市教委	市115集
59	聖原	H678住	佐久市	長土呂	土師器甕	墨書	８Ｃ後	市教委	市115集
60	芝宮	97住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ中	県埋文	県39集
61	西近津	SK7782	佐久市	長土呂	灰釉陶器Ⅲ	墨書	平安	県埋文	県104集
62	聖原	H725住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
63	西八日町Ⅲ	H49住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ	市教委	市175集

表１　掲載土器一覧(1)

図番号	遺跡	出土遺構	市町村名	地区	器種	墨書・刻書	時期	調査機関	文献
64	深堀Ⅳ	H52住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市101集
65	聖原	H822住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	10Ｃ前	市教委	市122集
66	聖原	H380住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市107集
67	栗毛坂	3住	佐久市	岩村田	土師器皿	墨書	９世紀後	県埋文	県30集
68	栗毛坂	1住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	県埋文	県38集
69	深堀Ⅳ	H31住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市101集
70	聖原	F609掘建	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	市教委	市115集
71	円正坊Ⅵ	19住	佐久市	岩村田	須恵器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市年報15
72	岩清水	8住	佐久市	旧望月町	土師器坏	墨書	９～10Ｃ	旧町教委	町16集
73	聖原	H290住	佐久市	長土呂	須恵器蓋	墨書	８Ｃ末～９Ｃ初	市教委	市107集
74	聖原	H169住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	６Ｃ中～７Ｃ初	市教委	市103集
75	聖原	H380住	佐久市	長土呂	土師器鉢	墨書	９Ｃ前	市教委	市107集
76	川原田	H8住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
77	川原田	H1住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
78	川原田	H16住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
79	聖原	H161住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市103集
80	前田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	H149住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	８Ｃ後	市教委	市1989
81	前田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	H149住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	８Ｃ後	市教委	市1989
82	聖原	H63住	佐久市	長土呂	土師器坏	刻書	８Ｃ前	市教委	市103集
83	西近津	検出面	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	県埋文	県104集
84	舟窪	4住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	８Ｃ後	市教委	市20集
85	芝間	4住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	平安前葉	市埋文	市セ3集
86	円正坊Ⅵ	H32住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市年報15
87	円正坊Ⅵ	H32住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市年報15
88	西近津	SK5298	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安	県埋文	県104集
89	聖原	H517住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
90	栗毛坂	B-24住	佐久市	岩村田	土師器皿	墨書	９Ｃ後	県埋文	県12集
91	西近津	SB8012	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	県埋文	県104集
92	戸坂	K-1住	佐久市	新子田	土師器坏	墨書	９～10Ｃ	市教委	市1972
93	濁り・久保田	SD01	佐久市	平塚	須恵器坏	墨書	９Ｃ後	県埋文	県106集
94	聖原	H702住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
95	聖原	H239住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市103集
96	中原	41住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	８Ｃ中	県埋文	県39集
97	聖原	H231住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
98	聖原	H974住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市122集
99	西一本柳ⅩⅧ	H15住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市190集
100	栗毛坂	B-11住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ	県埋文	県12集
101	上桜井北	H1住	佐久市	上桜井	土師器坏	墨書	不明	市教委	市1978
102	深堀Ⅳ	H54住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市101集
103	西一本柳Ⅹ	H37住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	平安	市教委	市年報13
104	西近津Ⅲ	H9住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	７Ｃ	市教委	市208集
105	周防畑	H3住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	国分期	市教委	市1980
106	大師	H3住	南相木村	和田	土師器坏	墨書	10Ｃ初	村教委	村1集
107	野馬窪Ⅳ	H8住	佐久市	猿久保	須恵器高台坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市230集
108	竹之城原	4住	佐久市	旧望月町	土師器坏	墨書	平安	旧町教委	町13集
109	曽根城	5住	小諸市	御影新田	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市7集
110	竹花Ⅱ	13住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市33集
111	川原田	H3住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
112	野馬窪Ⅳ	H8住	佐久市	猿久保	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市230集
113	野馬窪Ⅳ	H9住	佐久市	猿久保	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市230集
114	馬瀬口	H4住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市182集
115	栗毛坂	C-9住	佐久市	岩村田	須恵器坏	墨書	９Ｃ	県埋文	県12集
116	聖原	H774住	佐久市	長土呂	土師器高台坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市122集
117	上久保田向	H6住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ中	市教委	市41集
118	芝間	3住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	平安前葉	市教委	市セ3集
119	前田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	H5住	佐久市	小田井	須恵器坏	刻書	８Ｃ後	市教委	市1989
120	大塚原Ⅱ	11住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市20集
121	長土呂	25住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	８Ｃ後	県埋文	県38集
122	中原	9住	小諸市	御影新田	土師器高台皿	墨書	９Ｃ後	県埋文	県39集
123	聖原Ⅹ	H1住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市56集
124	中平・田中島	2住	佐久市	旧浅科村	土師器高台坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県30集
125	根々井芝宮	H12住	佐久市	根々井	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市49集

表１　掲載土器一覧(2)

図番号	遺跡	出土遺構	市町村名	地区	器種	墨書・刻書	時期	調査機関	文献
126	西近津	SB4037	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	10Ｃ中	県埋文	県104集
127	西近津	SB0301	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	８Ｃ中	県埋文	県104集
128	根々井芝宮	H12住	佐久市	根々井	土師器埦	墨書	平安中期	市教委	市49集
129	西八日町Ⅶ	H7住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市227集
130	西八日町Ⅵ	H95住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市173集
131	川原田	D7坑	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
132	野馬窪Ⅳ	H8住	佐久市	猿久保	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市230集
133	西近津	SB7034	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ中	県埋文	県104集
134	西八日町Ⅶ	H7住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市227集
135	聖原	H546住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
136	東一本柳古墳	石室内	佐久市	岩村田	土師器埦	墨書	９Ｃ	市教委	市1972
137	東一本柳古墳	石室内	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ	市教委	市1972
138	若宮Ⅳ	H1住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	市教委	市198集
139	上桜井北	H1住	佐久市	上桜井	土師器坏	墨書	不明	市教委	市1978
140	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H101住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
141	円正坊Ⅵ	H19住	佐久市	岩村田	土師器皿	墨書	10Ｃ前	市教委	市年報15
142	聖原	H845住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市122集
143	竹花	遺構外	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	不明	市教委	市17集
144	竹花	41住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集
145	竹花	62住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集
146	竹花	4住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集
147	中原	SX1	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	不明	県埋文	県39集
148	下荒田	H3住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町20集
149	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H43住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市198集
150	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	D63坑	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	不明	市教委	市98集
151	上久保田向	H6住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ中	市教委	市41集
152	聖原	H256住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
153	栗毛坂	B-44住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９段階	県埋文	県12集
154	下曽根Ⅱ～Ⅶ	H109住	佐久市	小田井	須恵器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市88集
155	聖原	H246住	佐久市	長土呂	灰釉陶器埦	墨書	10Ｃ前	市教委	市103集
156	栗毛坂	B-44住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９段階	県埋文	県12集
157	根々井芝宮	H2住	佐久市	根々井	土師器坏	墨書	平安前期	市教委	市49集
158	下聖端Ⅰ・Ⅱ	H46住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市9集
159	下聖端Ⅰ・Ⅱ	H45住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市9集
160	聖原	H634住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
161	聖原	H660住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
162	五ケ城	3住	小諸市	耳取	土師器埦	墨書	９Ｃ前	市教委	市5集
163	聖原	H178住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
164	犬飼	4住	佐久市	旧望月町	須恵器坏	墨書	９～10Ｃ	旧町教委	町1978
165	聖原	H901住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市122集
166	西八日町Ⅵ	H96住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市173集
167	宮ノ上Ⅴ	H2住	佐久市	横和	土師器埦	墨書	９Ｃ後	市教委	市214集
168	宮ノ上Ⅴ	H2住	佐久市	横和	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市214集
169	下聖端Ⅴ	H3住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後～10Ｃ前	市教委	市237集
170	深堀Ⅳ	H6住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市101集
171	深堀Ⅳ	H50住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市101集
172	深堀Ⅳ	H34住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市101集
173	竹花	106住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集
174	濁り・久保田	遺構外	佐久市	平塚	土師器坏	刻書	９Ｃ後	県埋文	県106集
175	円正坊Ⅵ	H3住	佐久市	岩村田	土師器埦	墨書	10Ｃ前	市教委	市年報15
176	長土呂	44住	佐久市	長土呂	須恵器坏	刻書	９Ｃ前	県埋文	県38集
177	西近津	SB0001	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ後	県埋文	県104集
178	竹花	106住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集
179	大塚原	33住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	８Ｃ後	市教委	市17集
180	聖原	H231住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
181	聖原	H413住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	８Ｃ末～９Ｃ初	市教委	市107集
182	西近津Ⅶ	H4住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市162集
183	聖原	H838住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
184	聖原	H109住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	８Ｃ末～９Ｃ初	市教委	市107集
185	竹花	106住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集
186	竹花	64住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市17集
187	大塚原	6住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市17集

表１　掲載土器一覧(3)

図番号	遺跡	出土遺構	市町村名	地区	器種	墨書・刻書	時期	調査機関	文献
188	聖原	遺構外	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	市教委	市122集
189	西近津	SB4004	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県104集
190	聖原	H228住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市103集
191	西近津	SB0309	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県104集
192	上の城	H45住	佐久市	岩村田	土師器埦	墨書	10Ｃ	市教委	市238集
193	野馬窪Ⅴ	D1号坑	佐久市	猿久保	土師器坏	墨書・刻書	９Ｃ後	市教委	市204集
194	下曽根Ⅱ～Ⅶ	H88住	佐久市	小田井	須恵器坏	墨書	８Ｃ後	市教委	市88集
195	野馬窪Ⅴ	D1坑	佐久市	猿久保	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市204集
196	西近津	SB8004	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	県埋文	県104集
197	川原田	H1住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
198	聖原	H354住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市107集
199	聖原	H508住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	８Ｃ前	市教委	市115集
200	聖原	H502住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
201	聖原	H506住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
202	西近津	SD3004	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安	県埋文	県104集
203	濁り・久保田	SD01	佐久市	平塚	土師器坏	墨書	９Ｃ後	県埋文	県106集
204	深堀Ⅳ	H57住	佐久市	瀬戸	須恵器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市101集
205	周防畑	29住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	県埋文	県105集
206	長土呂	畑跡	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	県埋文	県38集
207	聖原	H244住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
208	長土呂	畑跡	佐久市	長土呂	須恵器坏	刻書	不明	県埋文	県38集
209	芝宮	SB220	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ後	県埋文	県39集
210	芝宮	SB78	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ末	県埋文	県39集
211	聖原	H811住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	10Ｃ前	市教委	市122集
212	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H7住	佐久市	瀬戸	須恵器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市98集
213	円正坊Ⅵ	H3住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市年報15
214	聖原	F473掘建	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	市教委	市107集
215	深堀Ⅳ	H53住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市101集
216	聖原	H137住	佐久市	長土呂	土師器皿	墨書	９Ｃ前	市教委	市103集
217	聖原	H678住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	８Ｃ後	市教委	市115集
218	聖原	H515住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
219	西近津	SB0050	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	８Ｃ後	県埋文	県104集
220	西近津	SB4007	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県104集
221	西八日町Ⅲ	H34住	佐久市	岩村田	土師器埦	墨書	９Ｃ	市教委	市175集
222	聖原	H142住	佐久市	長土呂	土師器皿	墨書	９Ｃ前	市教委	市103集
223	上桜井北	H6住	佐久市	上桜井	須恵器坏	墨書	国分期	市教委	市1978
224	馬瀬口	H5住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９～10Ｃ	市教委	市182集
225	芝宮	SB32	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	８Ｃ末～９Ｃ初	県埋文	県39集
226	芝宮	SB32	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	８Ｃ末～９Ｃ初	県埋文	県39集
227	芝宮	SB179	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ前	県埋文	県39集
228	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H48住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市98集
229	聖原	H535住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
230	聖原	H244住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
231	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H48住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市98集
232	川原田	H12住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
233	深堀Ⅳ	H52住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市101集
234	聖原	H562住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
235	西近津	SK4051	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安	県埋文	県104集
236	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H81住	佐久市	長土呂	須恵器高台坏	刻書	８Ｃ前	市教委	市198集
237	聖原	H197住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市103集
238	聖原	H215住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	８Ｃ後	市教委	市103集
239	聖原	H498住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市107集
240	西近津	SB4010	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10ｃ前	県埋文	県104集
241	西近津	SB4027	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10ｃ前	県埋文	県104集
242	川原田	H1住	御代田町	塩野	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	町13集
243	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H101住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
244	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H101住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
245	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H47住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
246	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H101住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
247	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H50住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
248	聖原	H409住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
249	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H49住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集

表１　掲載土器一覧(4)

図番号	遺跡	出土遺構	市町村名	地区	器種	墨書・刻書	時期	調査機関	文献
250	大塚原Ⅱ	19住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市20集
251	大塚原Ⅱ	6住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市20集
252	周防畑	59坑	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	10Ｃ後	県埋文	県105集
253	中原	SB47	小諸市	御影新田	土師器埦	墨書	９Ｃ後	県埋文	県39集
254	周防畑	SK246	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	県埋文	県105集
255	大塚原Ⅱ	6住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市20集
256	栗毛坂	B-31住	佐久市	岩村田	土師器皿	墨書	10Ｃ前	県埋文	県12集
257	南近津	H9住	佐久市	長土呂	土師器皿	墨書	９Ｃ後	市教委	市76集
258	野馬窪Ⅳ	H8住	佐久市	猿久保	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市230集
259	馬瀬口	H4住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市182集
260	大塚原Ⅱ	6住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市20集
261	中原	SX11	小諸市	御影新田	須恵器坏	墨書	不明	県埋文	県39集
262	下芝宮Ⅴ	H1住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書・刻書	９Ｃ前	市教委	市231集
263	岩清水	19住	佐久市	旧望月町	土師器坏	墨書	９～10Ｃ	旧町教委	町16集
264	雨堤	H1住	小海町	小海原	土師器台付	墨書	９Ｃ中	町教委	町1986
265	雨堤	H1住	小海町	小海原	土師器皿形	墨書	９Ｃ中	町教委	町1986
266	南近津Ⅱ	H2住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ前	市教委	市177集
267	岩清水	3住	佐久市	旧望月町	土師器坏	墨書	９～10Ｃ	旧町教委	町16集
268	聖原	H330住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市107集
269	聖原	H408住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
270	聖原	H408住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
271	下聖端Ⅰ・Ⅱ	H46住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	平安中期	市教委	市9集
272	聖原	H634住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
273	聖原	H493住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	７Ｃ	市教委	市107集
274	聖原	F236掘建	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	市教委	市103
275	聖原	H666住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
276	竹花	11住	小諸市	御影新田	土師器皿	墨書	９Ｃ前	市教委	市17集
277	下曽根Ⅱ～Ⅶ	H69住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市88集
278	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	遺構外	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	不明	市教委	市98集
279	野火付	H10住	御代田町	御代田	土師器坏	墨書	９Ｃ前	町教委	町2集
280	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H56住	佐久市	瀬戸	土師器皿	墨書	９Ｃ後	市教委	市98集
281	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H56住	佐久市	瀬戸	須恵器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市98集
282	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H56住	佐久市	瀬戸	土師器皿	墨書	９Ｃ後	市教委	市98集
283	大塚原Ⅱ	16住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市20集
284	聖原	H272住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市107集
285	聖原	H881住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	８Ｃ末～９Ｃ初	市教委	市122集
286	根々井芝宮	H2住	佐久市	根々井	須恵器坏	墨書	平安前期	市教委	市49集
287	弥左衛門屋敷	H1住	小海町	親沢	不明	墨書	10Ｃ？	町教委	町1989
288	西近津	SB0165	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県104集
289	西近津	SB0165	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県104集
290	西近津	SB0001	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県104集
291	西近津	SB0050	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	10Ｃ前	県埋文	県104集
292	栗毛坂	C-9住	佐久市	岩村田	土師器埦	墨書	９Ｃ	県埋文	県12集
293	栗毛坂	B-105住	佐久市	岩村田	土師器埦 or 坏	墨書	９Ｃ後	県埋文	県12集
294	栗毛坂	B-133住	佐久市	岩村田	土師器皿	墨書	９Ｃ後	県埋文	県12集
295	栗毛坂	B-149住	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	11Ｃ	県埋文	県12集
296	栗毛坂	B-119住	佐久市	岩村田	須恵器坏	墨書	９Ｃ	県埋文	県12集
297	南近津Ⅱ	H1住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市177集
298	根々井芝宮	H6住	佐久市	根々井	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市49集
299	西近津	SK4051	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安	県埋文	県104集
300	西近津	SK4051	佐久市	長土呂	灰釉陶器埦	墨書	平安	県埋文	県104集
301	西近津	SB0311	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前～中	県埋文	県104集
302	周防畑	SB39	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県105集
303	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H47住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
304	西近津	SB0014	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10ｃ後	県埋文	県104集
305	西近津	1区・2区	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	県埋文	県104集
306	西近津	1区・2区	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	県埋文	県104集
307	弥左衛門屋敷	H1住	小海町	親沢	不明	墨書	10Ｃ？	町教委	町1989
308	聖原	H507住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
309	聖原	D275坑	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	市教委	市107集
310	西近津	SB5014	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	７Ｃ後	県埋文	県104集
311	西近津	SB7017	佐久市	長土呂	須恵器平瓶	墨書	７Ｃ末～８Ｃ初	県埋文	県104集

表１　掲載土器一覧(5)

図番号	遺跡	出土遺構	市町村名	地区	器種	墨書・刻書	時期	調査機関	文献
312	芝宮	SB138	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	県埋文	県39集
313	西近津	SK0200	佐久市	長土呂	灰釉陶器埦	墨書	平安	県埋文	県104集
314	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H45住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
315	芝宮	SB138	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	県埋文	県39集
316	西近津	SB0003	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10ｃ前	県埋文	県104集
317	西近津	SB3045	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10ｃ前	県埋文	県104集
318	西近津	SB0039	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10ｃ前	県埋文	県104集
319	西近津	SB3081	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	８Ｃ	県埋文	県104集
320	聖原	H974住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市122集
321	西近津	SB4005	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10ｃ前	県埋文	県104集
322	雨堤	H1住	小海町	小海原	須恵器坏	墨書	９Ｃ中	町教委	町1986
323	聖原	H417住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
324	芝宮	86住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	８Ｃ	県埋文	県39集
325	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H144住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市198集
326	下芝宮Ⅴ	H1住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９ｃ後	市教委	市231集
327	聖原	H178住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
328	深堀Ⅳ	H31住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市101集
329	岩清水	9住	佐久市	旧望月町	土師器坏	墨書	９～10Ｃ	旧町教委	町16集
330	西近津	SB7036	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	県埋文	県104集
331	西近津	SB7026	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	９Ｃ前	県埋文	県104集
332	西近津	ST0002	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	平安	県埋文	県104集
333	久保田	H2住	小諸市	耳取	土師器坏	墨書	11Ｃ	市教委	市8集
334	砂原	33住	佐久市	旧浅科村	土師器坏	墨書	９Ｃ後	県埋文	県30集
335	西近津	検出面	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	県埋文	県104集
336	宮の前Ⅰ・Ⅱ	H25住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ後	市教委	市198集
337	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	H56住	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市98集
338	深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ	D45坑	佐久市	瀬戸	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市98集
339	西近津	6区	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	不明	県埋文	県104集
340	下曽根	H92住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市88集
341	岩清水	18住	佐久市	旧望月町	土師器坏	墨書	９～10Ｃ	旧町教委	町16集
342	中平・田中島	2住	佐久市	旧浅科村	土師器坏	墨書	10Ｃ前	県埋文	県30集
343	聖原	H239住	佐久市	長土呂	土師器皿	墨書	10Ｃ前	市教委	市103
344	竹花Ⅱ	13住	小諸市	御影新田	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市33集
345	聖原	H731住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
346	長土呂	25住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	８Ｃ後	県埋文	県38集
347	聖原	遺構外	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	市教委	市122集
348	聖原	VYP219	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	不明	市教委	市122集
349	聖原	H535住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市115集
350	聖原	H178住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ後	市教委	市103集
351	聖原	H167住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	６Ｃ中～７Ｃ初	市教委	市103集
352	聖原	H398住	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
353	聖原	H492住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市107集
354	聖原	H677住	佐久市	長土呂	須恵器坏	墨書	８ｃ前	市教委	市115集
355	西近津	H20住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ	市教委	市162集
356	蛇塚Ｂ	H5住	佐久市	新子田	土師器坏	墨書	９Ｃ末	市教委	市36集
357	聖原	H882住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ後	市教委	市122集
358	南下北原	H98住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市193集
359	円正坊Ⅶ	D70坑	佐久市	岩村田	土師器坏	墨書	不明	市教委	市年報18
360	下曽根Ⅱ～Ⅶ	H38住	佐久市	小田井	土師器坏	墨書	９Ｃ前	市教委	市88集
361	西近津	SK4246	佐久市	長土呂	土師器埦	墨書	不明	県埋文	県101集
362	南下北原	H7住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市193集
363	聖原	H460住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	10Ｃ前	市教委	市107集
364	幸神４号墳	石室内	佐久市	旧臼田町	土師器坏	墨書	平安前期	町教委	町11集
365	下聖端Ⅰ・Ⅱ	H41住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市9集
366	聖原	H673住	佐久市	長土呂	土師器坏	墨書	９Ｃ後	市教委	市115集
367	戸坂	K-1住	佐久市	新子田	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市1972
368	戸坂	K-1住	佐久市	新子田	土師器高台坏	墨書	平安中期	市教委	市1972
369	戸坂	K-1住	佐久市	新子田	土師器坏	墨書	平安中期	市教委	市1972
370	深堀Ⅳ	H3住	佐久市	瀬戸	砥石	線刻	９Ｃ後	市教委	市101集
371	深堀Ⅳ	H33住	佐久市	瀬戸	土師器坏	線刻	10Ｃ前	市教委	市101集
372	面替小谷ケ沢	4住	御代田町	面替	土師器坏	墨書	９Ｃ末～10Ｃ初	町教委	未報告
373	関口Ｂ	採集品	小諸市	東山区	土師器坏	墨書	10Ｃ初	個人蔵	未報告

表１　掲載土器一覧(6)

であり、「北」は出土していない。

⑧数字、数量をあらわす文字

数字を並べていくと、「二」（115の他に２点）、「三」（116の他に３点）、「六」（117の他、10点）、「七」（118の他に６点）、「八」（119の他に２点）、「九」（120）、「十」（121の他に聖原・茂内口・宮の前等で32点）、「十二」（122の他に４点）、「八十」（１点）、「八十一」（123の他に３点）、「千」（124の他に８点）、「千一」（125）、「万（萬）」、「千万」がある。「万」（126の他に17点）は「萬」の表記も１点ある（127）。この他、「一」は248のように底部に記すものもあり、記号との区別が難しい。また前述した「大一」「千一」や「千上」（272）のように他の文字と組み合うものも少なくない。125の「千一」は「壬」の可能性もあるか。「三」は「川」との区別が難しい。「八十一」は聖原Ｈ１住のみで４点、「千万」は根々井芝宮のみで18点出土する。

⑨吉祥文字

「福」（130・131）、「財」（132・133の他に聖原で３点）、「万財」（142）、「芳」（134・135の他に栗毛坂等で４点）、「久」（136・137・138の他に聖原等で９点・「久・主」も北西の久保で１点）、「吉」（139・140の他に聖原・上桜井北等で10点）、「子宝」（141）、「𡚬」（「喜」・143）、「茂」（144）、「成」（145の他に１点）、「光」（146・147の他に中原、根々井芝宮で２点）の他に２字からなる「光　肖」もある（256）。

⑩その他の文字

「生」（148の他、聖原・深堀等で10点）、「布」（149の他に聖原・宮の前で３点）、「考」（150）、「加」（聖原のみで152を含めた４点）、「作」（153）、「刀」（154他、下曽根・聖原・芝宮で５点。うち下曽根Ｈ109住から３点）、「方」（155）、「木」（156の他に深堀・宮の上・聖原・栗毛坂で17点、うち宮の上Ｈ１住から３点）、「林」（157）、「是」（158の他、宮の前・西近津で３点）、「桶」（159）、「灰」（160）、「去」（161）、「魚」（162）、「衆」（163）、「平」（164の他、円正坊等で７点。166は「平平」）、「貸」（165）、「志」（167・171）、「良」（168）、「才」（169）、「公」（170）、「丸」（172）、「廣」（173の他、西近津・大塚原・聖原で４点）、「有」（174・175の他、南近津・西八日町で１点）、「由」（176・177。177は「甲」の可能性もあり。）、「足」（178）、「案」（179）、「在」（180）、「手」（180）、「泉」（182）、「疋」（183を含めて聖原Ｈ838住で２点出土）、「赤」（184）がみられる。「川」（185の他に３点、186は「三」の可能性もあり。）、「山」は187・189の他に２点が出土し、他に188の「山一」や190や191の類のものもある。

「午」（192）、「子」（193～195）は干支と関係するか。193は墨書と刻書で２字の「子」を記している。198は「一子」あるいは「一方」か。１文字の可能性もある。深堀Ⅳ Ｈ52住では「子」をくにがまえで囲むものが３点出土する（233）。197・266は「字」でよいか。199・200は「土」、201・202は「入上」とある。203は「入」か「人」とみることもできるが、「合」と読む方がよいであろう。濁り・久保田では同様なもの34点の出土をみる。204は「谷」、205は「来」とみられようか。206は「後」とは読めないか。207～209の「主」は27点みられ、うち聖原で15点、芝宮で６点が出土する。210・211の「王」は５点ある。「任」（212・213）も含めたこの３字は関連するものとみたい。214の「夫」は、本来は「天」を意識したものではないか。他には「民」（215）、「安」（217）、「花」（218）、「奈」（221）、「支」（222）、月（223）、「何」（224）、「止」（225・226）、「矢」（227）、「礒」（228）、「年」（229）、「文」（230）、「内」（231）、「正」（235）、「真」（237）、「入」（238）、「又」（263）、「康」（264）、「雷」（265）、「名」（292）、玉（297）、「好」（355）、「別」（358）、「高」（360）、「外」（361）、「巾」（362）、「利」（372）とみられる文字が確認される。216は「八女」であるが、217と同じく「安」の可能性もあろう。219は「善」か「美」、220は「雄」か「碓」とみられる。232は「柦」「桿」「椙」などの類であろうか。234は「申」に棒線がはいる。296は「史」とも読めそうだが、特殊文字の可能性が高いと思われる。「好」は西近津Ⅶで355を含めて４点ある。

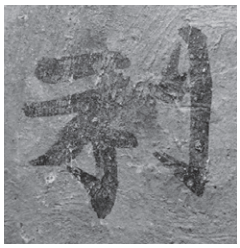
239～249は「今」（241）「合」（242）以外は、「令」を表したものとみてよいか。宮の前Ｈ101住では「令」が５点出土する。373も「令」と読み取れるか。これは小諸市関口Ｂ遺跡にあたる妻の実家の水田でかつて発見された筆者所蔵の資料であり、今回初めて報告するものである。10世紀初頭の土師器坏である。

250～254は「本」「本」と読めるが、「奉」の省略形であるとみたい。大塚原の25点をはじめ35点以上の出土をみる。367・368も「奉」を表すものとみる。295は「本」と「古」の２字を刻む。

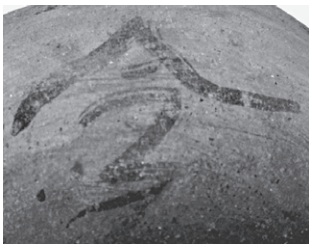
290は不明、281は「内」の可能性もあるか。この他、掲載はしなかったが、「丈」、「之」、「我」、「告？」、「心？」、「盛？」などの文字も認められている。

２字以上のものでは、257で「有子一□有」と多文字が記される。258は「目」「井」「川」であるか。260は「正二」、261は「九人」と読み取れそうだが「九」でよいか疑問は残る。262は「田平」または１字の特殊文字であろうか。267は「□分」であるが前の文字は不明である。

「山」がはいる２字のものでは、「山大」（268）、「義山」（269）、「□山」（270）、「山本」（271）、「大山」（286）、「山辺」（288）がある。「上」「下」が付くものでは「千上」（272）、「下□」（274）がある。273と366は１文字の特殊文字とも考えられるが、「上上」や「一上」「下一」



372「利」



373「令」

の可能性もあろう。276は「久郷久久伴□荊久□」と８文字あり、習書とみられる。277は体部外面全面に人面と思われる表現や文字・記号が認められる。文字は「八」「寺」とも読み取れそうなものもみられるが判読は難しい。278は「□本」と読めるか。279は「八科」とあり、地名であろうか。280～282は深堀Ｈ56住から出土したもので、「卸大十午」(280)、「午□」(281)、「卸」(282) とあるがどのような意味かは不明である。「御」の略語とみるべきか。283「加□」、284「□大見」、287の意味は読み取りがたい。293は「上木」、294は「上林」である。特定の林あるいは地名であろうか。

⑪特殊文字、則天文字

「几」や「八」（かぜかんむり、かぜがまえ）が組み込まれた特殊文字については、則天文字や篆書体、道教思想の呪符の影響などが指摘されている。平川南氏は則天文字や呪符の符籙が人々に強烈な印象を与えたため「几」や「八」自体に穢れを祓う呪術的な意味合いを持ち、そのなかに別の漢字を入れて一種の吉祥・呪術的な意味を含めた特殊な字形として使用していたのではないかと推定する。299は「家」、300・301・303は「吉」、306は「去」あるいは「吉」を「八」で囲っている。同じく304は「主」、309・364は「千」を囲む。310・311は「几」のみである。299には前述のとおり「禾」の字も記される。なお、西近津では「几」と印字された焼印も出土している。

則天文字とは則天武后が制定した文字で17字あるが異体字もありバリエーションは広い。289は「月」の、325は「星」、289・329は「月」の則天文字とみてよいであろう。233も「月」ではないか。他には302を報告者は「君」の則天文字とみている。300も「君」でよいか。298・357は「天」であろう。則天文字は特殊文字や古体漢字との区別が難しいところもある。

⑫記号

322～345・351・352は何らかの記号と思われる。322を報告者は陰陽道に係わるものとみる。343と同じ「サ」は聖原でもう１点ある。「○」のついたものが多いが則天文字の「星」をあらわすのかもしれない。

⑬その他

参考として、砥石に刻まれた370と土器に絵画が描かれた371を掲載した。370は「壬」と「王」とみられる。371はカエルを描いたものとみられる。

⑭おわりに

ある遺跡に特徴的にみられる文字がある。聖原では、「乙」・「大」・「貞」・「仁」・「金（全）」等の出土が目立ち、本遺跡に特徴的な文字とみることができる。同様な文字には、栗毛坂の「臾」、西近津の「八」と組み合わされた特殊文字や「大井」、深堀の「下」・「子」、宮の前の「令」、根々井芝宮の「千万」、濁り・久保田の「入」（あるいは「合」）、大塚原の「本」「本」などがあげられる。また遺跡の中でもひとつの遺構から同一文字が出土する事例も前述したようにみられ、遺構ごとに特徴的な文字の存在も指摘できよう。

※図及び一覧表について

註１　図はすべて報告書から引用した。
註２　一覧表の「住」「SB」は竪穴住居跡、「掘建」は掘立柱建物跡、「坑」「SK」は土坑、「特殊」は特殊遺構、「SX」は性格不明遺構を示す。
註３　時期については報告書の記載によった。
註４　一覧表の「県埋文」は県埋蔵文化財センター、「市埋文」は佐久埋蔵文化財調査センターを示す。
註５　一覧表の文献「県○集」は県埋文センターの、「市セ埋」は市埋文センターの、「市○集」等は当該市町村教委等の報告書通巻番号を示す。「市年報○」は年報番号を示す。
註６　その他の文献は紙面の都合上、報告書の刊行年度のみを記した。

♪　編集後記　♪

本号の刊行が大幅に遅れてしまったことをおわび申し上げる。それほど時間はかからないだろうと軽い気持ちで取りかかったものの、作業を開始してすぐに自分の見通しの甘さを痛感させられた。とにかく出土数が多いのである。集成リストの作成を担当してくれた４名の会員のご苦労も並大抵のことではなかったと推察する。そしてそのリストから文字を選び出し、図版を作っていくという作業も予想以上に難航してしまった。三千点近い大波にのまれながらも、ようやく佐久の土器に記された文字の主だったものをまとめることができた。興味深い文字も少なくない。文字資料から古代佐久の実像を探る糸口になれば幸いである。

（桜井）

佐久考古通信　№116

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-0808 小諸市御影新田1945-6
桜井　秀雄　方
郵便振替　00570-9-2842
☎ 0267（32）8922

発行日　2018年１月１日
発行者　桜　井　秀　雄
編集者　桜　井　秀　雄
印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会
シンボルマーク